
D.C.? &なのは ～時を越えし者の物語～

毬藻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D・C・?&なのは ～時を越えし者の物語～

【Nコード】

N3239P

【作者名】

毬藻

【あらすじ】

D・C・?の【i f】の物語……ある日、眠りがら覚めると一冊の【本】と出会う。
それが、この物語の主人公【桜内さくらい流ながれ】の人生を大きく変えていくことになった。

別世界の話も混ぜていますので気軽に見て下さい

第1話：始まり（前書き）

オリジナル小説を書いています、今回は二次小説を掲載していきます。

ちゃんとオリジナル小説も書きますから心配しないで下さい（心配する人はいないか（汗））

第1話：始まり

俺は、欠伸を噛み締めながいつもの通学路を歩いていく

「音姫姉達は先に向かうし」

一人ぼやきながら足早に学校に向かった

「準備の方が出来ました」

「シャリオがそう言ってきた

「本当に宜しいんですか？」

そばにいた男の人が小さく呟いてきた

「いいんや。これで運命の歯車が動き始めるはずや」

「あの子の中に眠る…対の力が」

なのはが画面のほうを見ていた

「リイン、準備のほうはええか？」

「バッチリです」画面には、本を持った女の子がいた

「最終ロック解除します」

「空間同調開始！！」

すると、部屋の中が重低音が響いた

「空間転送」

虹色の光が部屋を包み込んだ

その光が消えると、その中心にいた女の子が消えていた

「転送……無事に完了しました」

「はやてちゃん」

「これからは、逃走生活やな」

チャイムが鳴り響いた

「流、今日はどうするか？」

斜め後ろにいた義之が俺の席に来た

「全然決めてない…… 購買は、地獄と化してるだろうな」
苦笑いしながら答えた

時計を見ると昼休みが始まって五分が経過していた
この時間だと殆ど良いパンは消えてることだろう

「あれ、義之達はお昼は？」

「出遅れ気味……少し空いてから食堂で食おうかなって」

俺は、小さくため息を吐いた

「なら…一緒に食べる？」 「俺も流と同じく時間が空いてから食堂
で食べるよ」

杏たちの誘いを断った

その時、

ピンポンピンポン

『分校三年の桜内義之君、桜内流君は至急校長室に来るように… 繰
り返します……』

俺は、苦笑した

「こんな方法で呼び出す人って……」

「一人しか居ないな」

教室を出るとき、杏の顔がにやけていたのは気のせいではないだろ
うな…… 絶対

俺たちは足早に校長室に向かった

校長室に着くと軽くノックをした

しかし中から返事が無かった

もう一回、軽くノックすると

『わんわん』

その声と同時に入ると

「はりまおがお留守番していたのか？」

義之がはりまおの頭を撫でるとはちきれんばかりに尻尾を振っていた

「何か食べるか？」

右手を軽く握った

頭の中で、どら焼きをイメージした

そして、握っていた右手を開くと掌サイズのどら焼きが出てきた
「流、和菓子が出せるようになったのか？」

「義之並ではないけどね……」

小さく苦笑いして、はりまおを頭を撫でた

「あつ、二人とももう着てたんだね」

扉のほうから声が聞こえ振り返ると……

「放送であんな呼び出しですよ……来ないほうが不思議ですよ」

「全くですよ。さくらさん」

「にやはは、ごめんごめん」

悪気があつてやったってないと言う事は俺達も知ってる

「今日はお鍋だから一緒に食べようか？」

曆的には12月だが……

学園長室にお鍋があるのはどうなんだろうか？

さくらさん曰く

『この屋上でお鍋食べていた姉妹だつて居るんだよ』
とのこと

お鍋が似合う学園長室つてここだけだとは思う

「丁度良い具合だね」

そしてお昼は、学園長室で昼食を取った

放課後、俺はある場所に向かった

そこは、一本の桜の木がたっていた

「……母さん」

その言葉にすると、一人の女性が木から出てきた

「もう、終わったの？」

女性は、優しい笑を浮かべながら俺を見ていた

「さっきだよ」

「さくらは頑張ってる？」

「それなりにだけだね」そういつて、二人とも笑っていた
目の前に居る女性は『朝倉音夢』さんで俺の母さん

音姫姉と由夢のお婆ちゃんになる

そして、俺はその二人の叔父になるわけなんだけど……
由夢曰く

『そんな風には見えませんから』

そして、音姫姉は……

『流くんは流くんだし』

簡単に言えば、叔父さんではなく兄さんと弟という訳だ
由夢は『流兄さん』で音姫姉は『流くん』と呼んでいる
ついでに言っと、まゆき先輩は『弟くん二号』だしな
小さくため息をついた

ドクン…

「えっ？」

心臓が一瞬、大きく跳ねた

あの『魔法』使っていないのに……

心臓を鷲づかみした

その痛みに覆わず膝をついた

「流!!」

「へ、平気……もう、治まったから……」

母さんに笑顔を向けたが心配そうに見ていた

「あの『魔法』…使ってないんでしょ？」

「使っていたら、今頃は俺はここに居ないから」

「ベッドの上だったわね」

母さんの病弱を貰ったのではないかといっていたがそれが原因では
ない

義之に無くって俺が持っている『魔法』が原因になっていた
時を越える魔法……

時間を飛ぶことが出来、歴史を変えることが出来る魔法

ただし欠点があり、使用后、三日間は身体能力の低下してしまう

「少し横になった方がいいわ」

木陰に連れて行ってもらった

「膝枕してあげようか？」

「さすがにそこまでは……………」

「流に母親らしいことは出来なかったから……………これぐらいはさせて」
俺は、それ以上なにも答えなかった

母さんの横に座り、頭を膝の上に乗つけた

音夢は優しく流の頭をすいていた

その行動が眠気を強く引き出しいつの間にか夢の中へ飛んでいった

????

チリン…

小さく鈴の音が辺りに響いた

視界が徐々に明るさを取り戻すと桜の木があった

場所は公園の桜の木だけど何か違和感があった

チリン…

また、鈴の音が聞こえてきた

『一体……………誰の夢なんだ？』

魔法使いしか入れない場所の風景ではないのは確かだ

すると、一人の男の子が走ってきた

『…あの姿、何となく純一さんに見えなくもないんだけど』

すると、桜の木のところに駆け寄った

反対の方に行くとき小さな女の子が泣いていた

あどけない姿だけど見間違えるはずがない

『母さん……………』

次の瞬間、周りが白くなった

微かに歌声みたいなのが一瞬だけ聞こえたが今は何も聞こえなかった

「うつ……………確か、気分悪くなって、それから……………」

母さんに膝枕してもらったんだっけ？

辺りを見渡すと夕焼け空になっていた

携帯を取り出して確認すると

六時を回っていた

「やべえ〜今夜の支度の手伝いするんだった」

また由夢に言われるの確定だな……

立ち上がり周りを見渡すと……

一冊の本が落ちていた

楔に捲かれた古っばい本だった

流は、目を離すことが出来なかった

『たす……け……』

「えっ?!」

声が聞こえ辺りを見渡すが俺以外は誰もいなかった

『たすけて……』

もう一度声が聞こえ、ふと、本を見るとうっすらと光っていた

「しゃべってるのは……本なのか?!」

確かにこの初音島には不思議な現象（自分の魔法も含む）は起こるけど……

本がしゃべるなんて聞いたこと無いぞ!!

俺は、恐る恐るその本を手にとった

次の瞬間、本から強い光が生まれ、二人を包み込んだ

『契約者の名は?』

「え、ええ!?!」

『もう一度問う、汝の名は?』

「……桜内 流」

『契約者【桜内 流】よ我が書の名前は【夜天の書】……我がマスターよ』

「マスター?!」今日で何回目の驚きだろう……

あんまり考えたくないな……

『契約終了……』

その言葉と同時に一人の女の子が出てきた

『あれ?…え〜っと……』

女の子は何かを考えながら周りを見渡していた

『名前…解らないです』

その言葉に俺は呆れるしかできなかった

『マスターが付けて下さいです』

『君の名前を俺が？』

『はいです』

満面の笑みで頷いてくれた

少しだけ、考えた……そして

『芙蓉……はどうか？』

芙蓉……ハスの花

もう一つは、アオイ科の落葉低木だ

俺的には、前者なんだけどな

そしてこれは、さくらさんから聞いたやつなんだけどね

『ありがとうございます。マスター流』

嬉しそうに小さく自分の名前を口ずさんでいた

『…とりあえず、これから宜しく』

『よろしくです』

そして、これが後々の事件に深く繋がっていくのだった

第1話：始まり（後書き）

駄作にお付き合い下さりありがとうございます。

これからも頑張って書いていきたいと思いますので応援（？）や指
摘をどんどんください。

第2話：二人の管理局者

芙蓉と出会い、そして一週間が経過した

初音島は不思議現象が多い島だが本格的な魔法はそんなに存在しない
攻撃・防御・移動の基本魔法から……

時間などの跳躍する特殊魔法が存在する

「芙蓉、ご飯の用意が出来たから運ぶの手伝って」

「ハイです」

空を飛びながら一人の女の子がこっちにきた

「溢さないように運んでね」

「了解なのです」

浮遊魔法を使いながら器用に持つていく

今日は、さくらさんは用事で義之は朝倉家の方に行ってる

だから今は、芙蓉と二人つきりなのだ

「それじゃ、食べようか」

「いただきますです」

今日は、和食で魚の煮物にお吸い物、ご飯、ワカメといりこの酢漬
けを作った

「美味しいです」

「そっか、良かったよ」

二人はお喋りをしながら食べていると

『流くん!!』

頭の中に声が響いた

「母さん!?!」

『初音島の周りの空気が変なの!!』

その言葉で、少し集中すると……

「……何かが転移する兆しがある……」

「えっ!?!」

芙蓉は少し驚いたように俺を見ていた

「私には何も感じないですけど……」

同じように芙蓉が精神集中してるみた……すると

「本当に微量の魔力が転移性の魔法粒子になってる」

長年時間魔法に慣れ親しんでいる為、時間・転移関係の魔法は敏感になってるのだ

「大丈夫なのですか？」

「これぐらいの魔力なら人間は転送できないし……それに、もう少し密度が濃くないと転移は不可能」

この濃さなら本とかの物質が小さくないと送る事は不可能だ

母さんに一応は警戒をしておくように頼んだ

心余儀なく、後日晚御飯と引き換えに受けてくれた

夕食を食べ終わり、茶碗を洗っているとき

「えっ!?!」

芙蓉と俺の声が重なった

「空間粒子が一気に増えた!?!」

俺は、夜天の書とパーカーを羽織って外に出た

芙蓉は、待機状態になってもらった

『母さん、場所は分からない?』

『ちよつと待つてね!?!』

そして数秒後

『工場地帯に転移されたのがあるみたい』

「芙蓉!?!」

「はいです!?!」

「ユニゾン……イン!」

次の瞬間、空に舞い上がった

そのまま工場地帯に全速力で向かった

『一体、工場地帯には何があるのでしょうか?』

不安そうに芙蓉が聞いて来た

「あの魔法粒子なら……人一人分なら簡単に転送出来る大きさだね」

『人を一人……』

『魔と出るか』

「獣と出るか……」

そして、目的地に到着すると……

二人の女の人が獣とたたかっていた

『あれは……【三頭獣】です』

東洋神話か何かに出てくるやつだったか？

そんな事考えてる時間は無いな

「芙蓉、制御をお願い!!」

俺は杖を握り返した

『いつでも良いです!!』

小さく深呼吸をした

「聖なる光、他の者を捕らえる光の楔とならん!!」

すると、三頭獣の足元から魔法陣が展開した

『聖なる鎖 (Der Kette, der Hiligems

teht)』

魔法陣から無数の鎖が絡み付き三頭獣を伏せさせた

「間に合いました……」

「貴方は……」

黒い服の女の人が聞いて来た

「……この世界の魔法使いです」

その時

『フェイトさんなのはさん』

ユニゾンしている俺にははっきりと聞こえた

「……ユニゾン解除」

芙蓉と俺は二人に分かれた

「リインちゃん!？」

「……お久しぶりです。なのはさん、フェイトさん」

そう言っつて小さくお辞儀をした

「自己紹介が遅れましたね…桜内 流と言います」

「時空管理局 古代遺跡管理課 フェイト・T・ハラウオンと言い

ます」

「同じく、時空管理局 古代遺失物管理部 高町なのはです」
時空管理局？古代遺失物管理部？？」

俺には始めて聞くような名前ばかりだった

それに、この世界ではそんなのは存在しないし

「立ち話はなんなので俺の家に来ませんか？」

「そうですね。その前に、この子をどうにかしないと」

「そうだね」

鎖に繋がれた【その子】を二人が転送すると俺は二人を案内した

俺は、居間の方に案内して、台所から粗茶と茶菓子を出した

「粗茶ですが……」

「ありがとうございます」

フェイトさんとなのはさんはお茶を啜り、芙蓉は羊羹を食べていた

一息ついたところで本題に入った

「芙蓉：リインとはこの子の事ですか？」

「そっか、思い出したのは私達の事だけだったね」

「この子の名前は『リイン・フォース』：蒼天の書の使い手です」

本来は『夜天の書』なのだが切り離して独自に動く事が出来るようになったただそうだ

「ちょっと待つてください！！だったら、本来は俺がユニゾンが出来ないはずでは……」

その言葉で、二人は顔を見合わせて……

「貴方は、ユニゾンが出来るには理由があるんです」

「理由？」

「そう。あなたの中に眠ってる魔導書：『晴天の書』が関係があります」

「晴天の……書？」

俺の中に眠ってる……

「今は眠っている状態ですけど、一端は出てきているはずですよ……

…ユニゾンが出来るって事は」

「起動方法は分からないですけど……本来は『夜天の書』と『晴天の書』は相殺関係の物だったんですが」

「今は相互関係になってるみたいですが」

話は終わり、芙蓉の方を見ると畳の上で健やかな寝息をたてていた

「本当の契約者が来るまでは俺が契約者か」

優しく髪を撫でた

芙蓉を抱き上げて自分の部屋に戻った

専用の布団に寝かせた

「ふにゅ〜」

「どんな夢を見てるのかな？」

俺の使命がこの子の本当の契約者が来るまでは面倒見ないとな
そう思いながら俺もそこについた

第3話・部隊長降臨？（前書き）

A・Sの主人公達が出ました。

とりあえず、頑張つて書いていきたいと思ひます（汗）

第3話：部隊長降臨？

それからまた一週間が経過した

あの日から、戦技教官であるのはさんやフェイトさんに魔法のイロハを教えてもらったりしている

これを朝と夕食後にみっちり仕込まれている

授業中は、勉強はしているが二つ以上の思考を進行させるマルチタスクというものを行っている

これも、魔導師には必要って聞いた

複数の同時行動……移動・回避しながらの攻撃・防御、そして、次の魔法の詠唱

それらを、芙蓉が転送する仮想空間データで出来るだけ時間を使ってイメージトレーニングを行っている

『次はPattern-N320をクリアー、次は高速機体20機の探索して撃破が目標です。制限時間は10分です』

『了解』

これも毎日欠かさず行っていた

流石に寝不足になる事は無かった

桜並木公園 PM10:20

「今日はこれまでだね」

「あ…ありがとうございます」

息も整えないまま答えた

「重力関係の魔法や次元関係の魔法はもう少しかな？」

「そうだね。今の砲撃戦が慣れたらかな」

「なら、もう少しだね」

そう言いながら、笑顔で答えていた

二人は、近くのアパートで一緒に暮らしているそうだ

「流くんはマルチタイプだね」

「砲撃戦も接近戦も申し分ないし……防御も硬いしね」

「それに、移動力や回避の方もだね」

流石に褒めすぎだとは思うんですけど……

苦笑いしながらそう思った

キイイン

すると、いきなり高い音が聞こえた気がした

俺は周りを見渡した

「高度な広域結界!？」

周りの景色が変わった

それはなのはさん達も同じだった

それにこの空気は……

「何かが転移してきます!！」

二人は、デバイスを握りなおした

次元の穴が開いた瞬間

「「はやてちゃん!！」」

二人の声が重なった瞬間、網一つ大きな影があった

「ド……ドラゴン!？」

俺は驚きを隠せなかった

しかもデカイし……

「二人ともお待たせや……」

柔らかな笑でそう言って来た

「挨拶は後や。あの子をどうにかするで!！」

あの子は、今にでも息吹ブレスを吐く寸前だった

間に合わない!!

俺は、次の瞬間に印を結んだ

「我が名、『桜内 流』の名の下に命ずる!！」

ユニゾンしていない状態で発動できる魔法は一つしかない!!

「彼の者の時間を止めよ!！」

次の瞬間、ドラゴンは石のように止まった

「次元の扉を開きて、他の者を元いた時間に誘わん!！」

するとゆっくりと地面に出来た魔法陣に引き込まれていった
完全に消え、広域結界も消えていた

「リイン、リカバリーを！」

「はいです!!」

はやての声と同時に回復魔法をかけたが俺は意識を失った

そして、意識が回復したのは自分の部屋だった

三人の女性も一緒だった

「時間魔法使ったのに目覚めが早い……」

布団から起き上がり、改めて自己紹介した

「時空管理局 古代遺失物管理部…通称『機動六課』の部隊長の八

神 はやてです」

「それじゃ……」

「リインの本当のマスターです」

そう言つてリインははやての横にいた

「記憶…ちゃんと戻ったんだな」

「はいです」

何かホツとしたような……何か寂しいようなそんな感じがした

けど、気になる事があつた

「何で部隊長さんがこんな所に？」

「それは、貴方の保護です……」

「正確には『ある人物からの護衛』が任務なんです」

「ある人物？」

「ギーアス・レヴィエス」

聞いた事がない名前だな

「この人は時空転移に関しての有名な方なんです」

「そして、この人が目指しているのは『時間の遡行』」

遡行……時間の行き来

「私達は平行時間から何とかここに来る事が出来ましたが」

「彼がしたい事は完全な時間の切り替え」

確かに、この世界にはそんな事出来るのは俺しかいないだろう

「確かに時間の逆行は出来るけど……俺は不完全だし」

時間関係や移転魔法を使ったらさっきみたいになぶつ倒れるし

「それでも、超が付くほどの高度魔法や」

改めて俺が使ってる時間魔法は凄い魔法って言うのを知った

その後、二人が住んでる場所にはやてさんも泊まる事になった

リインは、俺に家に居る

「はやてさんと一緒に行けば良かったじゃないの？」

「今は、マスターが芙蓉の主です……リインであり芙蓉ですから」

そう言っつて微笑んでくれた

柔らかな笑で……

何となく似てるな……はやてさんと芙蓉の笑顔は

「それじゃ、寝ようか」

「はいです」

そして、眠りについた

1000アクセス突破記念

桜内 流「1000アクセス突破記念して雑談会を開きたいと思
います」

芙蓉「わっ……って、ちょっと待って下さい!!!」

流「どうしたの？」

芙蓉「どうしたもこうしたも……2人しか居ないですけど(汗)」

流「いや……まあ、こんなに早く1000アクセス突破するとは
思わなかったよ(汗)」

芙蓉「……流石にビッグタイトルをいくつも使ってるのですからア
クセスが多くなるのを考えて下さいですよ」

流「確かにそうなんだけどね……(汗)」

??「本当に何も考えてないダメダメなマスターですね」

流「…………って、君が出てきたら拙いと言うのは考えなかった
のかいな」

??「そんな酷いですよ、除け者するなんて……」

流「除け者って……まだ、この本編にも名前すら挙がってないのだ
から(汗)」

芙蓉「えっと……名前は挙がってないですけど、概要だけなら上が

ってるはずですよ…はやてちゃんの話の中ですけど」

流「あゝ、確かに名前だけはまだ出してはいないけどね」

【D・C・？を渡りし者の物語】の誕生秘話

流「……何か堅いタイトルが出てきたな（汗）」

芙蓉「そこまで堅い話はないですよ……これを書く切っ掛けを話すだけですし」

??「確か、これを書く切っ掛けは……初期のD・C・？をプレイしていた時に書き始めたんですよ？」

流「確かに合ってるんだけど、これの前期と言うかプロトタイプが存在するんだよね」

芙蓉「プロトタイプですか？」

流「一番はじめは【まとも】にD・C・？の二次小説を書いてはいただけど……」

??「その後から【お姉ちゃん】や【最悪の魔導書】とかを書いていって」

芙蓉「他の作品に飛来していったんですよ？」

流「うう、言い訳が出来ないのがきついな(汗)」

芙蓉「確か、【メモオフ】とか【なのはstS】とか【らぶドル】とか？」

流「あ……あはは(グサグサ)」

流は見えないダメージを食らった。

流「けど、一番記憶にないのが【オリジナル魔導書】の出所と【大型戦艦】の出所の二つなんだけど」

音姫「それって、今回の出し方と同じじゃなかったっけ？」

ななか「うんうん、確かそんな感じだったよ」

流「そうだったかな……って、音姉さんにななか!？」

ななか「そうだよ、最初から居たのに飛ばされるんだもん!！」

流「いやいや…最初に居なかったって(汗)」

芙蓉「居なかったはずですよ(汗)」

流「うん、影も形も無かったはず(汗)」

音姫「まあ、話の続きだけど、【オリジナル魔導書】と【大型戦艦】が生まれたのは同時だよ」

流「あれ、そうだったっけ？」

音姫「うん、確か【二章】の時に同時に生まれたはずだよ」

流「ああ、思い出した。確かに【初音島オンライン】で記載していて……日記上で生まれたんだった（笑）」

??「あれは、凄い反響ありましたよね……今思えばですが（汗）」

流「……【オリジナル魔導書】の生まれ方が一番突発的だったのが印象的だったよ（汗）」

芙蓉「そう言えば、奇跡的に一つだけ奇跡的に残ってる以前の小説が残ってますよね？」

流「残ってるな……まあ、あれはいわゆる【黒歴史】の一角なんだよね……声が合れば載せようとは考えてるけどね（笑）」

【これからのことについて】

流「特に考えていないかな……気のままにゆっくりと執筆していきます」

芙蓉「と言うか、ほとんどストックが在るですけどね（笑）」

流「それはそうなんだけど……そこを言ったら終わりな気もしなくないし（汗）」

芙蓉「まだ、書く気はあるんですよね？」

流「だから、そんな事は言わない……まだまだ進展はして行くし、
外伝も書ければ書いて行きたいと思うしな」

芙蓉「では今回はこの辺で」

流「パーソナリティは桜内 流と」

芙蓉「芙蓉がお送りしましたです」

第4話：晴天の書とグライビィー前編―（前書き）

今回は前後編に別れます。

最後に使った技が判った方（使い手）は凄いです

技の名前自体知ってる方はあまりいらっしやらないと思いますが
汗）

とりあえず、最後迄ゆっくりしていって下されは幸いです

第4話：晴天の書とグライビーー前編

今までと同じように朝と晩は魔法訓練を続けてる

最初の頃は、由夢や音姫は心配はしていたが、今は当たり前のように馴染んでくれている

今は、はやてさんの指導も入り、次元魔法や空間魔法についても教えてもらってる

「小さい頃から、魔法に慣れているから覚える方も良いのかな？」

純一さんに魔法（和菓子を出す魔法）を教えてもらってるから応用をと思えばいくらかは楽なのだが……

根本的な構造・発生関係が違うからそこまで簡単ではない

「今はグライビーがあるからそこまで難しくはないですね」

グライビー……俺の専用のデバイスだ

時間魔法以外（次元魔法と空間魔法は扱える）の魔法は扱う事が出来るようになった

仮想訓練は、現在はグライビーが行ってる

それに加えて、魔力負荷も同時に行ってる

なのはさんは『魔術師養成ギブス』と言ってるが初期はちよつときつかったけど現在は生活には殆ど支障はない

確かに、始めの時は小恋や音姫姉が心配していたけど……

そして、この生活も芙蓉リボンと出会って一ヶ月が経過した

「流兄さん、起きてくださいー!!」

遠くから声が聞こえたよな感じがしてる

「流兄さん!!!」

ゆっくりと目を開けると、由夢がいた

「もう朝？」

「七時半ですよ。早く降りてくださいね」

そう伝えると、部屋を出て行った

「……さて準備をするか」

洗面所に行き、顔を洗って、制服とグライビィ（指輪形態）を身に
着けて居間の方に行った

食事が終わり、久々に四人で登校した

「今日は珍しかったな。流が今の時間まで寝てると言うのは」
「そうか？」

昨日、なのはさんが今日一日はお休みをくれたのだ
根を詰めるのも体に悪いと言う事で

「久々にゆっくりしたい時もあるよ」

3人も今日は用事で出来ないと言っていたからだ

リインは、魔導書の形態になって鞆の中で待機状態になっている

風見学園：学食

久々に学食で食事をとることにした

いつもは、購買のパンで揉みくちやされながら買いに行っていたか
らだ

食券売り場でカレー（大盛）を買って、良い場所が空いていたので
そこに座った

「久々に学食のカレー食いたかったんだよな」

スプーンでカレーをすった時

「あれ、流くん、今日は学食なんだ」

「珍しい事があるのね……」

そこには、お盆を持った杏と茜が立っていた

「そういうお前らも珍しいな……学食なんて」

「そうかな、小恋ちゃんもお弁当忘れたから、今日は学食だよ」
「そういえば……」

「その小恋は？」

「まだ迷ってるんじゃないかな？」

「待ってる気はなかったのかよ？」

小さくため息を吐いて、カレーを口に入れた

「茜、杏、お待たせ」

小恋がトレイを持ってきた

「遅かったな」

「あれ？流……珍しいね」

俺の横の席に座った

「久々に食堂で食べたい時があるって」

暫く、小恋達と話をしながらお昼を過ごした

暗い部屋に女性三人に男性が一人、テーブルに腰をかけながら食事をしていた

「覚醒はもう少しなんだな？」

ローブを着込んだ男が呟きながら聞いて来た

「…第二段階までは覚醒はしている」

「後は、覚醒だけや」

「覚醒方法を聞いてないけど…どんな方法なの？」

一人の女性が疑問をぶつけてきた

「……覚醒：契約方法は無意識空間での契約」

「どう言う意味や？」

男は食器をお盆に全員分の乗せて、流しにもってきた

「無意識空間：仮死状態や深い眠りに入ったときに起きる場所…無意識の空間」

「眠るだけならもう契約してもいいはずや」

「危機じゃないと契約発動しないんだ…困った事にね」

小さくため息をついて紅茶を三人の前に置いた

「…仮死状態じゃないと覚醒はしないってこと！？」

「現状を見る限りそう考えるのが妥当かな……」

その言葉で三人は沈黙した

「俺が出るしかない……」

そう言うと、手の中からルビー色のキーホルダーみたいなのを取り出した

「汝、契約の元、その力その姿を我が前に現せ、契約者『三上智也』の名の下に!!」
その形が指輪になった
「『時間の輪』」
「三人とも、今回は手出しは駄目だよ」
男は漆黒の闇の消えた

風見学園：屋上

「涼しいです」

もうそろそろ2月に入る

「俺は少し肌寒いかな……」

暦上ではまだ冬の季節だ

「今日は、お鍋でもするかな…白菜とか一杯入れて…後でちゃんと持ってくるからな」

「はいです」

俺は、鞆を持ち中に入ろうとしたとき

「君が…桜内流くんだね？」

その声に振り返ると男が立っていた

いや、浮いていたって言うほうが正しい

「そうだが…あんたは？」

「……死に行く者に名乗る名前は無い!!」

手を翳した瞬間、無数の光が浮かび上がった

「笑!!」

ユニゾンを行おうとしたとき、芙蓉の体に光の魔法陣が浮かんでいた

「ユニゾンは出来ないようにさせてもらった」

「グライビィ、セットアップ!!」

双剣を手の中に収めた

「こちらから行く!!」

魔法の光が一斉に襲ってきた

その光を防御と薙ぎ払いなをしながら耐えた

「…なかなかやるな」

男は地面に立つと剣を二本召喚した
俺は、その剣を見て驚いた

「このデバイスの名前は『グライビィ』」

そう言つて、右腰の所に剣を添えた

「一瞬で終わらせてあげるよ」

小さく呟いた瞬間

男は視界から消えた

「はああああああ!!!」

一瞬に間合いを詰められていた

フェイトさんが使う高速移動系じゃなく、魔力も感じられなかった

「小太刀二刀御神流・『射抜』」

構えに入った瞬間、動きが見えなくなり気がついたときには後ろの壁に叩きつけられていた

「そのまま、深い闇に沈むがよい……」

「マスター!!!」

俺の意識はそのまま闇に閉ざされた

第4話：晴天の書とグライビィー前編―（後書き）

前半はこれで終了……

携帯での投稿が主なので5000文字以下に抑える癖があるのでそこは心広く見て下されば幸いです

感想や誤字・脱字が合った場合、また表現が微妙な物があった場合はどしどし言って下さい。

それを励みに頑張っていきたいと思えます

これからも宜しくお願いします

第4話：晴天の書とグライヒイー後編―（前書き）

前回の後編部分になります。

やっと、二割の役者が揃いました（汗）

第4話：晴天の書とグライヒイー後編

暗い……

何も聞こえない

何も見えない……

静寂が映った

俺はこのまま終わるのだろうか……

風見学園：屋上

「マスター！！マスター！！」

バインドが解けて、芙蓉は急いで駆け寄った

「……………」

「えっ！？」

男が小さく呟いた言葉に驚きを隠せなかった

『君のマスターは死んでいない』

この男が放った技は射抜いて後ろまで吹き飛ばす程の威力……

致命傷にならないはずがない

「…………さて、そろそろ動きだすはずだな」

次の瞬間、空気が震えた

「あれは……」

機械人形！？

大量の物質召喚で芙蓉は驚きを隠せなかった

「あのジジイ…感づいたか」

100体は軽く超えていた

「これぐらいなら…セリオ！！」

次の瞬間、光の雨が機械人形に降り注いだ

上空には何も見えなかった

いや、『視界』で捉えられないのだ

「衛星上からの魔導砲！？」

「正解や」

その声が聞こえ振り返ると

「はやてちゃん!？」

はやて、なのは、フェイトがいた

「智也さん、第二波が来るで!!」

「…魔術師協会『ラクト』朱雀支部管理者『三上智也』……行きま
す!!」

空気が震えたと思うと

「風雅乱舞!!」

横に降った瞬間、

自動人形はバラバラになった

「一体なんですか…」

マスターを傷つけたのに何で守ろうとしているんですか？

深層世界

暖かい光……

「ここは一体……」

『ここは、貴方の心の奥の世界……』

声が聞こえ、声が聞こえたほうを向くと

女性が俺の方を見ていた

『契約者…桜内流様』

「君は一体…誰？」

そういうと首を横に振った

『私にはまだ名前はありません』

「名前は無い？」

『魔導書自体の名前はあります…【晴天の書】』

晴天の書？

『かつて、暴走した魔導書【夜天の書】を破壊する為に作られた魔
導書です』

芙蓉を破壊する為に作られた魔導書

『今は…そんな事はないみたいですね』

光が小さくなつて女の子になつた

その姿はまるで……

「芙蓉……」

『破壊する事は無いですね…相互の関係を築いていける事を』

手を差し伸べてきた

「あつ……」

差し伸べた手は暖かかった

『…三上さんを攻めないでくださいね。私と流様を合わせるために
行つたことですから』

そう言つて、微笑んでくれた

『我が主…【桜内流】新たな契約を』

俺は、ジツと少女の目を見た

「新たな契約をするもの…我が名は『桜内流』」

すると、少女の体が光が波打つた

「『晴天の書』…『シャイン・フォー』と契約実行する者なり！
！」

世界は真つ白な光に包まれた

風見学園：屋上

「セリオー!!」

『チャージ完了まで残り30秒かかります!!』

対空砲は頼れない

なのはちゃん達も限界がきてるし……

「……そろそろ、手伝つてくれないかな？」

智也は、小さく呟いた

「解つてますよ…グライビィ、セツトアップ!!」

その声に三人は振り返つた

「…流くん!!」

「お待たせしました…智也さん」

「覚醒完了だな…」

俺は答えず、軽く頷いた

「シャイン！！」

「はいです」

魔導書と供に一人の女の子が出てきた

「リイン！？」

流石に、三人は驚いていた

「違います。晴天の書の制御人格プログラム…シャイン・フォー
スと言います」

三人と芙蓉にお辞儀して再度前を向いた

「マスター、全広域魔法展開します！！」

「タイム3、展開開始！！」

すると、魔法陣が浮かび上がり

「重力崩壊！！」

次の瞬間、自動人形が次々に爆散していった

「す、すごい…」

「機械人形が一気に消えたです」

「30秒で広域結界は消えますから離脱してください」

流の言葉で全員が散開した

桜並木公園：PM10:00

そこには、人払いの魔法をかけていた

ある人物達が来るように

「お待たせしました」

なのはさん、フェイトさん、はやてさん、そして…

「お待たせ」

三上智也さん

「この魔法はあんまり持ちませんから…音姫姉さんに察知されそう
ですからね」

音姫姉さんもなんかと言っても魔法使いだからね

「遠回し無しで質問します。貴方は何者ですか！？」

「それについては、もう【晴天の書】で答えは知っていると思うが

「？」

「…三上智也ジランス祭司…：魔術師協会『ラクト』朱雀支部最高責任者…ですよね？」

「そこまで知っているんだったら、何も知る事がないはずだが？」

「何で、シャインの覚醒の方法を知っているんですか？」

その言葉に三人は少し驚いていた

確かに、覚醒方法を知っているのは、契約した本人しか解らない事だ

「…俺も時間能力者だ…：ただし、今はその能力は使えない」

「使えない？」

「数年前の事故でね…：時間を越える事は出来ない…：けど、今から起きる事は知っていた」

「さて、本題に入ろうか…：あのジジイが本腰を入れてきそうだ」

あのジジイとは、俺を捕まえようとしている人だとわかった

「そこで…：だ。君に渡したい物と逢わせたい人がいる」

逢わせたい人？

「ついて来れば解るよ…：そろそろ音姫さんが着そうだからな」

次の瞬間、一人の少女が現れた

「セリオ、ポイント396の通路開放と転移をお願い」

『解りました。2秒後に展開、転送』

その瞬間、俺達はその場から消え去った

第4話：晴天の書とグライヒイー後編―（後書き）

話は次の話まで少し尾を引く形になってますが。

ある程度は予想できるかたはいるかもしれないですね（笑）

感想など待ってます。

第5話：戦艦と少女達（前書き）

書き方や表現の仕方を試行錯誤中です（汗）

指摘がありましたらどんどんください。

第5話：戦艦と少女達

そこは広い壁につつまれた広い通路だった

「ここは？」

「君に渡す物の内部だよ」

「一体渡す物って何だ？」

「智也さんの後ろをついて行くと

着いたよ」

「ここは…一体？」

「アニメとかでよく見たことあるけど……」

「艦橋……？」

「正解：第二特別艦『紫月』」

「特別艦？」

「驚きながら俺は辺りを見渡した

「協会が保有する技能を終結させた第二戦艦…他の世界とかでは『天使艦』と言われたりするけど」

「エンジン艦……」

「一つは攻撃主体の『攻撃天使』そして、この艦…攻守バランスとスピードを重視した『俊足天使』」

「艦橋とかは管理局の巡行艦をベースで作ってるんや」

「まだ完成はしてないけど…運行は可能だよ」その時

「お話のほうは終わりましたか？」

「後ろの扉から一人の女性が立っていた

「着たね」

「お久しぶりです…流様」

「そういつて、抱きついてきた

「えっ！えっ！？」

「俺は、その行動でパニックになりそうだった

「フィーナ…そこら辺にしないと流くん沸騰するぞ？」

『あわわ、申し訳ありません…』

真っ赤になりながら離れた

フィーナ？

俺は、その言葉に引っ掛かりがあった

「時の巫女…」

『覚えてくださったんですね…はい、私は時間の神【タイム】様の第一直轄の巫女…フィーナ・インシエルと申します』 小さい頃、男の人が代価を軽減する為に会わせて契約した名前と同じ…

「フィーナさん、説明の方を願っていていいか？」

そう言つて、智也さんに言われるとパネルを叩いた

『先ほど三上さんが言つた通りこの艦は戦艦になります』

次のパネルを開いた

『エンジンは真空をエネルギーに変える【相転移エンジン】と【魔力炉】がメインエンジンになります』

そして、もう一つの艦が現れた

『これは、また調整段階でここにはないですがクロノストリングエンジンが付いた一般移住区です。エンジンはドッキング時は補助動力になります』

次は武器の説明になった

『武装の殆どはエネルギー関係の武器になります』 画面には戦闘機が出てきた

『無線型のファンネルです…半径十八光年までの無人操縦が可能になります』

「十八光年って…」

地球から太陽までの光が届く距離だったような……

『これが副管理武器です…これが主力武器です』

CGでアニメーションになった映像が流れた

『主力武装は主に二つです…魔法リングを直角に繋いだ魔導砲【アルカンシエル】です』

「これは、本局の巡行艦に装備されている魔導砲や」

「空間と空間を反発させて消滅させる魔導砲…これは艦長じゃないと発動が出来ない物だね」 『紫月の場合は私が制御しますから認証はしなくても大丈夫です』

次の動画が流れた

『これは先ほどとは逆で平行に魔法リンクを展開したやつです…広範囲型の魔導砲【エンジェル・アロー】』

天使の矢

確かに、無数の光が矢のように追尾して艦を爆散していった

『そして、これがこの艦に最大の魔導砲です』

CGが流れた時、俺は啞然とした

『時間の魔法を使った特殊魔法…【時空歪曲砲】です』

時空歪曲砲…

『威力はアルカンシエルの数百倍です…これは、空間ではなく次元と次元を捻じ曲げる魔導砲です』

本局の三人も啞然としていた

『確かに攻撃としても使えますけど本当の使用目的は指定転移です』

『指定転移？』 『簡単に申し上げれば、協会ラクトのほうに宇宙海賊を転移する装置です』

「なるほど……」

そして、ラウンジのほうに移動してお茶会が始まった

「…ホントの目的は君にこのラクトの方に入って欲しいんだ」

「本音は何か見えてましたしね…けど、学校がありますよ」

「そこは、君の能力があるだろう？」

なるほど…時間逆行か

「それに、君に魔法を教えるもいい…俺の持てる技能や能力を全て

……」

そこまで、ごり押しされて断れるわけないだろう

「解りました…けど…」

「この件が終わってから…だろ」

その言葉に頷いた

「智也さん…私たちの紹介もお願いしたいんだけど…」　すると、
ティールラウンジにふたりの女の子が入ってきた

「ゴメンゴメン…フィーナともうふたりいるんだ…自己紹介を」

「初めまして、鳳　杏です」

「同じく、鳳李といえます。宜しくね、流お兄ちゃん」

「李ちゃんは、通信オペレーターと医療スタッフとして…杏ちゃん
は攻撃管制と整備スタッフだ」

「マスター、そろそろ私も自己紹介したいです」

寂びそうな声で魔導書を持った一人の女の子が出てきた

「そうだね。シャイン自己紹介を」

魔導書が出てきて一人の女の子が現れた

「晴天の書の制御人格プログラムのシャイン・フォースです」
軽くお辞儀をした

「…元々シャインは闇の書の破壊の為に生まれた魔導書なんだけど
ホントか？」

はやては、少し緊張した表情で聞いて来た

「それは本当です。暴走した闇の書を破壊として作られました」

「現在も？」

その答えにシャインは首を横に振った

「暴走した力は見当たらないし…破壊する事はありません…今は」
そう言うと、ラインの近くに言った

「ラインちゃんと姉妹として過ごせたら良いなと思います」

笑いながら抱きついた

「あわわ!!」　ラインは驚きながらあたふたしていた

それが何だか微笑ましかった

その後、解散して俺は紫月に残った

俺も一日も早くここに慣れたかったって事もあるが

『明日ぐらいに一般区の方が完成しますので取りに伺いますね』

「お願いするよ、フィーナさん」

馴れない端末に苦勞しながらフィーナと会話した

『それから、私の事は呼び捨てで構いません』

「いや、だけど……」

『そうになると、私はずっと流様にしますよ』
小さく笑っていた

「それじゃ、こちらこそ宜しく……フィー」

『はい、宜しくお願ひします……流さん』

『シャインもです』

「ああ」

『こちらこそ宜しくね。シャイちゃん』

『はいです』

「ああ、私たちも!!」

杏と李が寄ってきた

「……これから宜しくな……皆」

「『はい!!』」

これから、この四人とこの艦で始まる物語が俺には微笑ましく見えてしまった

第6話：天使達（前書き）

少し書き方を試行錯誤中です（汗）

何かありましたら御連絡を（汗）

第6話：天使達

ABSOLUTEに着いて二日は過ぎた。

「結構、暇だな…」

『しょうがないですよ…一般区画の取り付けとエンジン調整で時間掛かってるんですから』

「それはそうなんだけどな…」

画面を見ながら、作業を見ていた。

「そう言えば、マスター専用の戦闘機ってありましたよね？」

『ありますよ。GA 008D【リフレクトシューター】です』

機体が映りだされていた。

『長距離の変化型フェアリーが三機…ミサイルが二基です』

「変化型？」

『はい、修復機能・攻撃機能・防御機能の三種類に変化できます』

「万能型なのだな」

『試運転をなさってみますか？』

微笑みながら、そう言ってきた。

「出来るのか？」

『使用許可を取りますので少々お待ちください』

フィーナはABSOLUTEに連絡を入れた。

数分後…

『許可が下りました…ABSOLUTEの方のエンジェル隊がお手
伝いしてくださるそうです』

「ムーンエンジェル隊か？」

今では、『元』が付いてるが

『現役のムーンエンジェル隊の皆様が対応してくださるみたいです』

…って待てい…!

「六機とやり合えというのか!？」

『大丈夫です、流さんは』

格納庫の方に着くと一機だけ置いてあった。

「これが…リフレクトシューター」

俺は、コックピットに乗り込んだ。

中に入った瞬間、何か懐かしい空気に包まれた。

操縦席に座ると、自動的にエンジンが回った。

『初めまして、我がマスター』

掌サイズの女の子が操縦桿の横に立っていた。

「君は？」

『この戦闘機の人格サポート【アリア Aria】と言います。マスター』

人格サポート？

『超高性能なAIで攻撃と守護のサポート知能です。簡単に申し上げるなら、手の回らない攻撃とか防御に使う機能と考えればいいです』

自分を高性能AIと普通は言うか？

と、突っ込みたかったが敢えて言わないことにした。

「サブ機関という事か？」

『そうです。魔導書をセットしてください』

本が一冊置けるぐらいの窪みを指した。

『正式なマスター登録を行います』

俺は、晴天の書を召喚して、窪みにはめ込んだ。

『マスター登録開始：魔導書名【晴天の書】、人格者名【シャイン・フォース】、マスター名【桜内流】……操縦桿を握ってください』

言われるままに操縦桿を握った。

「っ!？」

静電気が流れたような感覚が一瞬した。

『マスター登録完了です……呼び方はどうしますか？』

「流でいいよ」

『流様ですね…全ての登録は完了しました…操縦方法はいらな
い
すね』

「ああ、全て頭の中と体が覚えてるみたいだな」

そう、登録中に扱い方が完全に把握したのだ。

『発進準備に入ります…今回は、試運転という事で装備は三重合体
装備……【アタッカー】【リフレクト】【リカバリー】を展開』

「了解…重力制御システム展開」

『クロノストリングエンジン加速します』
モニターにフィーナの顔が現れた。

『滑走路を展開します……』

「リフレクトシューター……出ます…!!」

『射出します…!!』

光となりABSOLUTEの外に出た。

『今回の任務は相手の紋章機の耐久度を30%まで落としてください』

「紋章機は何機？」

『六機です。クロスキャリバーが合体機になってます』

「…開始まで3…」

『2…』

『「1…」』

最後の秒読みは一緒になった。

GOと言う表示と共に一斉に紋章機が動き出した。

「目標設定！！」

『ファーストエイダー設定しました！！』

「牽制でレリックレイダーに攻撃開始！！」

『気力最高潮です！！』

「舞いなさい…妖精の舞踏会」
フェアリーダンス

誘導して上手く誘い込んでいたので全員が餌食なった。

『ミッションクリアです』

全機体帰還して、ABSOLUTEで合つことになった。

数分後…とりあえず、ロビー（見たいな所）で立っていると

「貴方が、『桜内流』さんですか？」

女性が六人と男性が一人立っていた。

さっきの戦闘に出ていた人数と丁度在っていた。

「そうだけど…君達は？」

「私たちがムーンエンジェル隊です」

ここで話しは何だからということになりルクシオールの方のティ
ーラウンジに向かった。

注文してから、簡潔な自己紹介をした

「あれが初めての操縦なんですか!？」

驚いた表情の男の子…この子がリーダーの『カズヤ・シラナミ』階級は『少尉』

ここに居る子達は『少尉』の階級みたいだ。

「桜内艦長は『紫月』と『リフレクトシューター』の管理者みたいな者なんですね」

「そうなるかな…それと、『艦長』付けなくっていいよ」

俺は、艦長と言う器では無い様な気がする。

前線で動いていた方が気が楽でいい。

「では、流さんでいいですか？」

「うん。好きなように呼んで構わないから」

「タクトさんと感覚が同じみたいですな」

おっとりとした感覚で話している人が『スペルキャスター』のパイロット『カルーア・マジヨラム』でもう一つの人格が『テキーラ・マジヨラム』と言っらしい。

さっきの戦闘はテキーラさんが行っていたらしい。

尻尾の子が『ナノナノ・プディング』で『ファーストエイダー』のパイロット。

勝気の強い女の子でナノナノが親分と呼んでる子が『レリックレイダー』のパイロットの『アニス・アジート』

お姫様の格好をしているのが『ナツメ』と呼ばれている子。

最後にリボンを付けたシヨートの子が『アプリコット・桜葉』で紋章機『クロスキャリバー』の操縦者

「目の前で浮かんでる黒い猫の顔をした子は…誰？」

「ミモレットちゃんです」

「ミモちゃんは使い魔さんなんですよ」

「使い魔と言う事は……魔法使いが居るの？」

「カルーアさんがA級魔女さんです」魔法使いは居るんだね。

『マスター私も紹介してくださいです』

ポンと音がした瞬間、シャインが俺の方に立っていた。

「え？」

「いきなり現れたぞ!？」

「初めまして、魔導書『晴天の書』の人格コア『シャイン・フォー』と言います」

一礼する。

全員は固まっていた。

「魔女ではないけど、魔法が使えるからね」

空になったカップが宙に舞った。

「カルーアさん？」

「私は、何もしていませんよ。」

驚いた様子で再び俺を見た。

「と言うわけで、改めて宜しくね。」

笑いながら答えた。

丁度その時、通信が入った。

『流様、今大丈夫でしょうか？』

「フィーか…どうした？」

『タクト様の提案でこちらで魔導砲の試し撃ちを行うことになりました』

「解った…戻った方がいいか？」

『こちらで発進は可能です……砲撃指示はそちらで行えます』

「了解…発進準備をお願いします。」

『了解しました。艦長』

通信を切った。

丁度、通信がルーンエンジェル隊の方にも入ったみたいだった。

「今回は、ルクシオール・エルシオールが同行するみたいですよ」

「それに、ムーンエンジェル隊の方々も同行するみたいです」

全員は、ブリッジの方に上がった。

ルクシオールのブリッジに行くと、既に陣形が出来上がり、中心とした展開になっていた。

「出発の準備が出来ました」

「と……」

俺は、疑問に思うことが一つあった。

「試し撃ちと言っても……どこでやるんだ？」

ちょうどその時、通信が入った。

「『紫月』から、通信が入りました」

「繋いで」

モニターからフィーナが映し出された。

『今回は、空間に影響が無い空間で砲撃を行うようになりました』

「空間座標は？」

『ポイントFTR - 1088です』

「ちょっと待ってください。私たちの艦にはそんな機能ありませんよ!？」

『今、吸引型のワイヤーで艦を繋げました…後は詠唱は流様が行いますから』

最初からわかって残したな…

「…フィー、コンソールにデータを送って」

つぎの瞬間、流の周りにコントロールパネルが展開していた。

素早く打ち合わせた。

「魔力炉及び相転移エンジンフル稼働!！」

『転移可能領域到達!!!』

艦が白い色で覆われた。

『「時の名の基に命じる!!」』

次の瞬間、三つ艦は姿を消した。

『転移完了です』

「って、ここは!?!」

「無限……」

「…回廊」

ルーンエンジェル隊の皆は目を疑っていた。

「もしかして、ここで何かあったの」

その声掛けには誰もが反応はしなかった。

『流様、仮想標的を出現させます』

そこに現れたのは、大きな船だった。

大きさからして紫月の四倍ぐらいありそうだった。

『敵艦はAI艦になります』

それぞれ三隻いた。

『アルカンシエル、発射します』

魔法陣が展開して、一瞬にしてチャージが完了した直後……

魔導砲発射され、二つが爆散した。

「デュアル・クロノブレイク・キャノンと同じ威力に見える」

「確かに、目で見えるものですけど……」

そう、目で見えてる限りでは……しかし

「デュアル・クロノブレイク・キャノンの20倍の威力ときたか」

苦笑いしながら、計測器とフィーナから送られてきたデータで見
ていた。

『次はメインイベントです』

メインイベントにされても、絶対困るものだと思うんだけど。

『流様、準備をお願いします』

小さく頷き、小さく呼吸をした。

「時空シールド展開しなさい。第一次対ショックシークエンスを発動しなさい!!」

『了解。全職員に伝達開始……職員に伝達完了しました』

「空間防御壁を味方艦に展開し、クリスタルゲージで敵艦を完全移動状態で包囲!!」

すると、目の前の艦が透明のクリスタルに包まれた。

『エネルギーを主砲に集中します!!』

晴天の書が出てきた。

『全エネルギーチャージ完了です』

「我らの声と同時に」　すると、フィーナの目と流の目が真紅の色の目変わった。

『「時の覇者（巫女）の名の基に命じます!!我が鉄槌によりその光を示せ…時空歪曲砲発射!!」』

小さい光が射出された。

『エネルギー余波が来ます。しっかり捕まってください!!』

光が弾けた瞬間、三隻が縦に揺れて、10秒後に治まった。

「…影響は？」

『艦負担率無しです。それと、時空間内は安定しています』

『魔力炉及び全エンジンに負担の誤差マイナス3…誤差の範囲内で
す』

『医療班…けが人は無しですよ』

李の言葉で、息を吐いた。

「砲撃試運転…無事に完了だ。皆お疲れ様」

ルクシオールのスタッフも安堵のため息を吐いた。

「もう、戻られるんですか？」

「ああ、向こうでもやる事は山積みだし…ありがとつね」

『流艦長、紫月に戻ってください』

フィーナの通信が入ってきた。

「では!!」

敬礼した。

「皆さんに、御武運を」

船に乗り込み、消えた。

「消えちゃいましたね」

「そうだね…けど」

また逢えそうな気がする。

そんな気がした。

第7話：暴走システム（前書き）

私、戦闘シーンの表現あまり得意ではありませんがリリカル・マジカル・頑張ります

第7話：暴走システム

「ううー、久々になのはさんの訓練受けると体が痛い……」

初音島に戻って最初にした事は……

「うん、私達が居なくてもちゃんと訓練していたみたいだね」

なのはさんたちの合同模擬戦だった。

「紫月のほうでも休んでないと聞いたし、流くんは立派なストライカーだね」

ストライカー？

「エースより上の人を言うんだよ……今日の訓練は終わり」

「ありがとうございました」

一礼した時

急に地面が揺れた。

「うわっ!?!?」

数秒間だけ揺れて次第に治まって来た。

「地震?」

「ここら辺は、地震プレートが存在しなかったはず

それに、微かに感じ取った物があった。

『魔力も感じる、しかも時空粒子交じりって』

木々のざわめきも何となくおかしい。

「今日は、ゆっくり休んでね」

「はい、お疲れ様です!!」

魔法形態を解除して、高台のほうに行くと、その光景に声が出なくなっ

た。高台の登り切った場所から直線に黒い球体が見えた。

「あれって何だ」

空中に、黒い球体が浮かんで見えた。

『あれは、晴天の書の暴走コアです』

「暴走……コア」

『長い年月を持って私はマスターと出会いました。そして、蓄積した魔力が今になって露出してきたんです』

「あれが、展開したらどうなるんだ？」

『この島自体……時空消滅します。簡単に言えば、全空間から無かった事になります』

震えた声でシャインが語ってくれた。

「……シャイン、あれ壊すよ」

流の声で、シャインは驚いたような表情で顔を上げた。

『マスターは、この世界でも魔法は!?!』

「大切な仲間の為なら平気だよ……それに」
空を見た。

シャインは判ってるはずだ。

俺が見ている先に、何を見てるのかを。

「時の巫女と覇者だって居るんだ…絶対に成功させる」

シャインの髪を優しく梳かした。

『……はいです』

恥ずかしそうに返事をしてくれた

次の日、学校に行くと球体の話で持ちきりだった。

突然出てきたのだから当たり前だろう。

「流はあの球体はなんだと思う？」

「俺に聞かれても……なんと答えた方が良いのか分かんない」

そして、昨日の黒い球体は、時間が経つにすれ色がはっきり他の人にも見えてきた。

「流…機動六課って聞いたこと無い？」

杏が聞いてきた言葉で、一瞬驚いた。

「どう言う事？」

「魔法が存在する世界…そんな世界があると思う？」

ある意味、初音島も魔法の世界だと思うけど

「その、機動六課が球体の破壊をするって話は？」

「聞いてないけど…指揮者は？」

「たしか〜八神はやてって言う人みたいだよ」

俺の知っている人か……

その問いに答えようとした。

すると突然に、携帯が震えた。

携帯を開いて中身を確認すると

『0000より行動開始、その前に桜並木のほうに集合』

送信者ははやてさんだった。

携帯で時間を確認した。

後、15時間を切っていた。

「どうしたの？」

小恋が心配そうに顔を覗かせた。

「お、八神はやて送信者に書いてあるぞ!？」

「知り合いだったのか？」

「あはは…ちょっとね」

タイミングよくチャイムが鳴り響いて、全員席に着いた。

順調よく、授業が進んだに見えた。

四時間目の授業のとき異変が起きた。

突然、空気が揺れた。

「な、なに!?!」

小恋の声に全員驚いていた。

因みに、俺は違う意味で驚いた。

一点に魔力が集中しているのが判った。

しかし、どこから!?!

「おい…あれ……」

窓の外を見ると、黒い球体から赤い光が見えた。

「収束魔法!?!」

外を見ると光の収束が見えた。

『着弾地点…風見学園!?!』

フィーナの声が頭に響いた。

『着弾タイム…15秒です!?!』

駄目だ!!

なのはさんたちでは間に合わない!!

「くっ!?!」

俺は席を立ち窓際に立った。

「流、ヤメロ!!!」

義之の制止を聞かないままデバイスを展開した。

『収束魔導砲来ます!!!』

「フィールド展開」

4層の魔防壁を展開した。

『第一層防壁が崩壊、第二層に接触』

「Aタイプの魔法使用許可発令!!!」

『使用許可出します!!!』

グライビィを杖形態に変化させた。

「ブラスターシステム起動：Level 2」

魔力龍が流の周りに飛んだ。

「収束魔法【重力魔導砲】^{グラビティ・バスター}!!!」

最後の壁が崩壊した瞬間、流が放った収束魔法で押し戻した。

「いつけええええええ!!!」

中間時点まで力を押し戻した瞬間、爆散した。

相殺させたのだ。

振り返ると学校の生徒は寝ていた。

『睡眠魔法で眠らせました。離脱をお願いします』

「義之兄さん……ゴメン」

俺は、転移魔法でそこから居なくなっていた。

紫月内

「ごめん。二人とも、あれに気が付かなくて」

「本当なら私達が気が付かない事なのに」

なのはさんとフェイトさんが頭を下げてきた。

「なった事は仕方ありません。この後のことを考えましょう」

あの事に記憶については、俺とフィーナが記憶消去の魔法で消し

去った。

本来は、使用してはならない魔法だが使った。

「俺に関わった人や関わり深い人は効果は低いと思います」

由夢と音姫姉さんは効果薄いし。

ましてや、義之やななか達もあんまり効果は期待出来ないな。

「それでは、今回の作戦に関してなんですけどいいですか？」

フィーナの言葉で、気を引き締め、全員は頷いた。

「解放後は、打撃・魔法の4構造の壁で保護されています。流様の物理攻撃魔法となのはさん達による魔法攻撃でアタックしてください」

モニターを見ながら確認していった。

「最後は紫月のアルカンシエルで一気にコアを叩きます。意見のある方は？」

「今回の攻撃は個々の能力もあるが流くんの打撃魔法も負担が掛かるんみたいだけど大丈夫？」

「その部分に関しては紫月の魔法供給でどうにかするから平気です」

後は、細かい作戦内容を聞いて一度家に戻った。

「転移魔法を使った。」

俺は、家の玄関の前に着いた。

まだ、誰も帰宅していなく、急いで荷物の整理を開始した。

パソコンに入っているデータは紫月の方に転送させた。

「荷物はこれで全部かな？」

カバン一つだけになった部屋を見た。

「色々あつたな……」

一つ一つの思い出が浮んでは消えていった。

俺は、一例をした後、外に出た。

11:45 高台

最終の打ち合わせが終了した。

「俺の初任務だね…少し緊張するよ」

準備運動をしながら体を慣らして行った。

「今回は、初音島内だけの民間放送が来るみたいだから、宜しくね」

それ、何で呼んだんですか？

聞いてもなんかはぐらかせそうな気がしたから聞かないようにした。

「時間決行までのこり10分……」

「流くん!!」

聞き慣れた声が聞こえて、振り返った。俺はあり得ない光景を見た。

「…えっ!?!」

そこには義之、ななか、杏、小恋、茜、涉、音姫、由夢、杉並が高台に来ていた。

「……なんで？」

皆がこんな場所に来るの？

「良かった間に合った……」

音姫が、息を切らしながらつぶやいた

「此処は危険なんだよ!!!？」

それに……」

記憶消去が施されているはずなんだよ!?

『記憶消去は親しい人ほど効果が薄いんですよ』

『時間魔法使いさんがそんな事を忘れたらダメです』

横にシャインとリインが立っていた。

正確には浮いていたが一番正しい。

「何であんな居なくなり方をしたの!!」

「俺は魔法使い…住む世界が違ったんだよ」

「だったら俺は…!!」

「義之……これは、俺がつけないといけない事…この落とし前が付いたら皆の前から消える」

振り返り、一歩踏み出そうとした瞬間。

「私の事も忘れるの?」

一人の女性が立っていた。

そして、音姫と由夢は驚いていた。

「…かあ…さん」

「私の事は忘れるの?」

そして、ゆっくりと歩み寄ってきた。

「ここは、貴方が生まれた世界…戻って来てはいけない事は無いのよ」

ゆっくりと頭を撫でてきた。

「これで終わりじゃない……始まりなんだから」

「そうだ」

この仕事が終わったら御飯食べよう」

「もちろん、義之と流の二人の手料理で」

「俺もか!?!」

「しょうがない、お姉ちゃんも手伝ってあげるから」

わいわい話が弾んできた。

「…流」

母さんが横に立っていた。

「こんなに優しい友達を手放すの?」

「……しないでですよ。大切な俺の友達なんですから」

その答えで皆、笑顔だった。

「流くん、開始3分前だよ」

なのはさんが、心配して呼びにきてくれた。

「流くん、私達はここで待ってる。だから」

「ちゃんと帰って来い!!」

涉が親指を立てて激励してくれた。

その言葉に頷き、左ポケットから携帯を取り出した。

そう、携帯のストラップこそが流のデバイスの【グライビィ】の待機状態なのである。

「グライビィ…セットアップ……シャイン」

『はいです……ユニゾンイン!!』

バリアジャケットを着込んだ。

「それでは」

小さく深呼吸して…

「行って来ます!!」

背中を羽を飛ばたかせて、大空に舞い上がった。

「…行きましたね」

「そうね…」

音姫と音夢が流が飛び立った方向見ながら答えた。

「……流くんのが心配？」

「大切な家族なんです。心配しない方がおかしいですよ」

「私は心配してないわよ」

音夢の言葉に音姫は驚いた顔をした。

「私は、ちゃんと帰ってくるって思ってる……それに」

手を組み、音夢が祈ると……

高台の桜が咲き始めた。

それは、全土に広がっていた。

「私も出来る限り手伝って決めてますから」

ニツコリと笑い、もう一回前向いた。

「選定者『朝倉音夢』が流を守るって決めてるんだから」

「私も、全力で流くんを支援します……だって」

昔、私を支えてくれた男の子なんだから。

5000アクセス突破記念

シャイ『かなり遅くなりましたが5000アクセス突破記念をしたいと思いますです』

はやて「わ」

流「……矢神さんのみですか？」

はやて「ん、今回の物語と新作品の伏線や」

流「伏線ですか？ また、かなり後の話になりませんか？」

シャイ「しかも、伏線……ですよね？ 今ここで話しても大丈夫なんでしょうか？」

はやて「その辺は大丈夫や そっちは話さんから」

シャイ「結局、話さないんですか!？」

流「話さないというか……話せないが現状かな（汗） 今の話数からでは到底、話す事が出来ないのですから……」

くオリジナルのキャラ紹介く

シャイ「以前にも、同じ事をしませんでしたか？」

流「それは、『初音島モバイル』での話になるんだが……今回は『小説家になるう』版のニューバージョンだよ」

フェイト「内容はあまり変わらないんじゃないの？」

流「それはそう……って、何でフェイトさんが居るの!？」

フェイト「私は仕事が終わってから来たんだけど？」

はやて「なあ、すごい大変な事をゆうんだけど……D・C・のキヤラは出さないの？」

流「この状況でそれを言いますか……その小狸様は……」

はやて「……流くん、ちよいと隊長室まで顔を出してくれんかなあゝ 大切な話があるんや」

流「え〜っと、いや、その……って、腕を引きずらないでください!」

そのまま、流とはやては退場された。

シャイ「自業自得ですよ(汗)」

空「なら、進行役は私がするね？」

シャイ「……誰ですか!？」

空「うーん、じゃ、名前だけね。私は、『東儀トウギ空ソウ』です。今の所はここしか登場場所は無いけどね。」

シャイ「……とりあえず、どうしますか？」

空「見出し通りに自己紹介をしましょう。今の内容にそった方向でね。そうしないと、色々と大変になるからね」

シャイ「分かりました。まずはシャイからですね」

名前：シャイン・フォース

性別区分：女性

能力：融合騎・『晴天の書』の人格プログラム

デバイス：魔導書『朱天の書』

記載：桜内 流の所持する魔導書『晴天の書』の人格プログラム。

本来、夜天の書（闇の書）の破壊をするために生まれてきた魔導書なのだが、夜天の書はなくなり、暴走も無くなったため、今は破壊行動はなくなっている。

また、『晴天の書』の覚醒条件は、無意識かでの契約になる為になかなか契約が出来ず、覚醒する事は出来なかった。

基本的な性格は『甘えん坊』ではあるが公私は区別をしている。
また、容姿に関してはリン・フォース？（ツヴァイ）と瓜二つである。

シャイ「別の異名とかあるけど？」

空「えっと、『時の書』だよな？ それについては後に話した方が
良いかもしれないかな？」

フェイト「そうだね。次は……」

フィーナ「私がいきましょうか？」

空「では、お願いしますね」

フィーナ「承知しました」

名前：フィーナ・インシエル

性別区分：女性

ホームクルス

能力：時の巫女・『紫月』の制御プログラム（高性能人格）

デバイス：第貳戦艦『紫月』

記載：第貳戦艦『紫月』の制御プログラムで時の巫女として流と契約を行っている。

また、本来は器はなく、目には見えないのだが、上司（三上智也さん）が急遽に体を作り上げ、活動をしているが動ける場所は『紫月』の中のみと制限を受けているが本人は気にしていない。

容姿は……『夜明け前』のフィーナ姫を想像して頂くと有り難いです（汗）

フィーナ『皆様、宜しくお願い致します』

空「……禁句もあるけど……へ……」

ドン！

空の前（数ミリ前）に閃光が落ちた。

フィーナ『……………（ニッコリ）』

空「……………（滝汗）」

シャイ「…………えっと、次の自己紹介者は？」

杏&李『ボク（私）だね』

シャイ「では、お願いします」

杏『はい』

李『うん』

名前：鳳おおしづめ 杏あんず or アルメニカ

性別区分：女性

能力：融合騎・『鳳凰の書』の人格プログラム

所持デバイス：刀型デバイス『風雅』

記載：炎を司る等身大型デバイスである。

刀型デバイス『風雅』は無条件ですべての防御を切り裂く能力を備えてあり、接近戦は敵無しである。

本来なら主が居るのが当たり前だが、紫月の魔力供給により主なしでも本来の能力を使うことが出来る。

紫月内の任務は『砲撃手』と『白兵戦』を行っている。

名前：鳳 おおとりすもも 李 り オープラム

性別区分：女性

能力：融合騎・『朱雀の書』の人格コア

所持デバイス：ストレージデバイス『月読』記載：杏と同じ融合騎であり、主なしでも大丈夫なように『紫月』より魔力供給を行っている。

戦闘スタイルは【SG】や【FB】を勤め、紫月内の任務は杏と同じく砲撃手や医療班の役割を補っている。

杏と双子であり、杏は活発な方であるが李は大人しい方である。

……カタが外れたときは凄いことになるだけ言っておく（笑）

杏&李『宜しくお願い致します』

空「まだ先の話になるけど、この子達も特殊能力が存在するから」

杏『それは、物語を読むにつれて解明するから楽しみにね』

空「とりあえず、自己紹介は終わり……かな？」

シャイ「はい。今の段階で自己紹介出来る方は全員終わったですよ」

空「ふう〜、長かった（汗）」

はやて「お疲れさんや」

シャイ「はやてさん、お帰り……って、何かお肌がテカテカしてるです（汗）」

はやて「気のせいや」

はやて以外「……（絶対に気のせいでは無い気がする）です（よ）（よ）」

流「……てか、俺の自己紹介は!？」

はやて「ほんじゃ、次のお題は」

流「軽く受け流すな!！」

シャイ「……自己紹介してくださいです（汗）」

名前：桜内 流 さくらい ながれ

性別区分：男性

デバイス：晴天の書&時の杖『シャルティエ』・アームドデバイス

『グラビティ』

ポジション：All position

記載：この物語の主人公である。

母親は『朝倉 音夢』だが、胎児として産まれていない。桜の願により、初音島に生を受けた。

ただし、桜の力の範囲外でも、普通に行動は可能である。

戦闘スタイルは接近戦を使用しており、『小太刀二刀御神流』を取り込んだりしている。

使用魔法1：時間逆行（代価あり）

（D・C・より）お菓子を出す魔法（代価あり）

使用魔法2：グラビティ・バスター

魔力許容範囲型『アルカンシエル』（規制あり）

操作魔法

エターナル・ブレイカー

流「……こんなものかな？」

はやて「いろんな意味で、チートを使ってるなあ」

流「……まだこれは序の口と言うか、まだ序盤の話だしな（汗）」

シャイ「以上、キャラ紹介の序編でした」

空「次から、本編に戻ります」

第8話：最終戦…（前書き）

序盤戦の最終です。

簡単な書き方で不完全燃焼な気もしなくはないですが。

……とりあえず、始まります（汗）

第8話：最終戦…

『暴走開始まで残り30秒!!』

そこにいた全員が頷いた。

「全員、限定能力解除!!」

「ドライブ!!」

次の瞬間、黒い球体の殻が破れた。

「流くん!!」

「……行きます!!」

水面ギリギリに降りた瞬間

姿が一瞬にして消えて…

ドン!!!

もの凄い水飛沫が飛んだ瞬間。

音と同時に防御壁が一枚吹き飛んだ。

「小太刀二刀御神流奥義『虎乱』」

「カートリッジ無しで吹き飛ばした!？」

「凄い……」

「お喋りしている場合じゃなかった……二番手高町なのは行きます!
! デイバイン・バスター!！」

魔力波が一気に襲い、第二防壁を一瞬で崩壊させた。

「もう一回流くん!！」

「グライビィ、ファースト・カートリッジロード」

『Yes, My master』

風が旋風のように流の体に吹き荒れた。

「小太刀二刀御神流奥義……」

空気が重くなり、体にゼリー状に空気がはり付いてきた。

「『薙旋』」

次の瞬間、四連撃が入り、防御壁が一瞬にして最初と同じように吹き飛ばした。

「なのは…御神流って確か……」

「お父さん、お兄ちゃんやお姉ちゃんが使う剣術と同じだよ」

「それに、あの加速は……何なんや!？」

「あれは…『神速』だよ」

「神速？」

「普通の人が到達できない速さが神速……流くんはそこまで極めてると思うよ」

「次、フェイトさんお願いします!!」

その言葉に頷いた。

「バルディッシュ、セカンドロード……雷光一閃!!」

巨大な雷刃が壁にぶつかり、強い光が放たれた。

そして、壁が一気に吹き飛んだ。

「次はうちの出番やな」

杖をかかげた瞬間、無数の光がコアに突き刺さり石に変えていった。

「このまま畳み掛けるよ!!」

「待って!!」

なのはさんの制止声と同時に、淀みに凄い勢いで魔力が収束していった。

『目標地点予測!! 初音島の高台です!!』

「マズイ!! あそこには、母さんや音姫姉さん達が!!」

その声と同時に流は高台に神速と加速魔法で向かった。

『到達タイム…4秒です!!』

一瞬にして高台見舞い戻った。

「流!?!」

『残り2秒です』

「タイムキーパー能力起動!!アウトタイム3秒」

周りが凍り付いたように景色が固まった。

迫ってきた、魔法もすべてだ。

『起動許可……時間能力起動』

一陣の風が吹き荒れた。

「防壁4層展開!!」

『タイムアウトします!!』

次の瞬間、空気が割れて、防壁に当たった。

「流?!」

『治療魔法展開完了…回復させました』

「友達を危険に合わせた埋め合わせ…きっちり取っていただきましようか」

デバイスが杖状に変化させた瞬間。

「ブラスター3!!」

『魔法壁一層崩壊、第二層と接触』

周囲の魔力が一点に集まってきた。

『周囲の魔力臨界点突破したですよ!?!』

「シャイン、魔導砲バレッジ展開できるか?」

『出来ますけど……って、まさか!!』

「打ち込んでやる…俺の全力全開の力を」

『目に物を見せるです!!』

流の前に魔導砲のバレッジが展開した。

「これが、俺の今の全力全開に魔法……」

杖を握り返した。

「魔力許量範囲型『アルカンシエル』!!」

『いくです!!』

防御壁の展開を解除して砲撃を開放した瞬間、球体の砲撃を押し返した。

そして、そのまま敵に当たった。

「最高度のクリスタルゲージ展開」

瞬間的にクリスタルゲージが展開した。

『衝撃波が来ます!!皆さん、ある程度の距離をとってってください』

フィーナの指示で全員が散開した。

次の瞬間、突風が吹き荒れた。

そして、黒い球体の敵は消えていた。

『敵のコア、完全に破壊を確認しました…ミッションコンプリートです』

「……終わったのか？」

流は少し唾然とした感覚で見ている。

「うん…終わったよ。全部」

なのはさん、フェイトさん、はやてさん達と一緒に艦に戻った。

報告とそして……

「アルカンシエルの認証の封印……ですか？」

「そや、流くんの撃った魔導砲は管理局の方にある魔導砲と同じ威力なんや」

『確かにアルカンシエルは人体の負担も大きいですから』

確かに体がだるい感じがする。

魔導砲の負担なんだろうか？

「流くんの場合は、収縮魔法と外部吸収魔法の二つからの負担が大
きいはずよ」

「な、なるほどです」

しかし、半分ほどしか理解は出来なかった。

「この部分はもう少し先になってからかな？」

「さて…私達はもとの世界に帰ろうか」

「そつやな…今回の任務の残りはこつちの世界の『私達』に任せれ
ば良いと思うから」

こつちの世界？

『なのはさん達は、元々は違う時間の人なんです』

「この世界とは？」

「あんまり、関係なくなるのは確かやな」

そんな……

「だけど、今度はこつちの私たちと繋がりを築いて欲しい」

「流くんは、きっと力のなってくれてるって信じてるから……」

少しだけ考えて……

「解りました。自分が出れる範囲で頑張ってみたいと思います」

その言葉に三人は頷いてくれた。

数日後、三人は静かに居なくなった。

存在がそのまま消えてしまったかの様に…

「だけど、皆が覚えてるのは確かだね」

そう言いながらテレビを見るとあの戦いの映像が映っていた。

この映像は、初音島のみだけしか放送していない。

初音島の中でしか再生をすることが出来ないようにしたのだ。

そして、新たな物語が始まるのだった。

第8話・最終戦…（後書き）

次からは、なのはS t Sに場面を動かします。

頑張って修正しながら投稿します（汗）

第9話：思いがある者（前書き）

D・Cの世界から離れてなのはS t t Sに入りたいと思います。

因みに、主人公は単体で『アルカンシエル』を撃てますがバグ程度
とと思ってください。

内容に『チート』と書いてはありますけど。

それでは、どうぞ

第9話：思いがある者

俺は、時空管理局の方に出頭という形になった。

一つは、魔法使用が許されない場所での使用ともう一つはSSS魔導砲の限定封印を施す為である。

『けど、何で時空管理局の方で魔導砲の限定封印なんですか？』

「それは、魔法関係の封印は時空管理局の方がよいだろうと言う三上さんからの伝達なんだ」

ミッドガルドに向かう為、俺とシャインは新幹線（見たいな物）に乗り目的地に向かっていた。

「向こうではなのはちゃん達が待ってるしな」

『リンちゃんにも久しぶりに会えます』

あの事件で、この世界のなのはさんたちと会うことになった。

それはまだあどけなさが少し残っていたけど、俺の知ってるなのはさんだった。

その後も少しゴタゴタがあって、仲良くなったと言うわけだ。

「さ〜と、次は飛行機の方に乗換えだね」

『先は長いですね……』

「休暇の三人だからあんまり会えないけど、合えるだけ良いと思いなさい」

『はあ〜いです』

俺は、空港に向かう為に駅の降りた。

そして、感動の再会是最悪の再会と化してしまった。

「こちらラクト魔導師01……要救援者二名確保しました。転移魔法でそちらに送ります!!」

『解りました。引き続き搜索の方をお願いします』

通信の声と同時に転移魔法陣を展開させて要救助者を転移させた。

『流くん大丈夫?』

通信からなのはさんの声が聞こえてきた。

「俺は平気です。なのはさんこそ大丈夫ですか?」

『平気だよ……増援が来るまで頑張ろう』

「了解!!」

通信を切り意識を無にした。

「次の生命反応……あっちか!!」

水系の魔法で辺りの火を消し去った。

「……け……て」

微かだけど小さな声が聞こえた。

「聞こえた!! シャイン!」

『長距離型防御壁展開します』

「キミ、聞こえるか!!」

出来るだけ大きな声を上げた。

「誰か居るの!?!」

「今から助ける!!」

『マスター、壁と壁の間に居て、身動きが取れない状態です!!』

なら!!

俺は剣を抜いた。

「はあああつ！！！！」

壁を切り刻んだ。

「シャイ、壁強度は？」

『レベル3です！！』

「なら！！」

俺は、一つの型を取った

「小太刀二刀流御神流・奥義『射抜』」

攻撃を入れた瞬間、奥の壁と手前の壁を一気に吹き飛ばした。

「きゃっ！？」

しかし、瓦礫は女の子には当たらずに吹き飛んだ。

「無事か！？」

年齢は10歳くらいだろうか。シールドの中に女の子がいた。

「あ……………」

頬に何かが伝ってるのがわかった。

「こっちおいで……………ここから出よう」

そつと手を差し伸べるとその手を取った。

引き寄せると、グライビィを砲撃モードに変えた。

「この区域はキミで最後……………一緒に出ようか？」

「……………どうやって？」

「お空まで一直線の道を空ける。行くよ!!」

女の子はギュッと流の服を掴んだ。

「フレイメル・バスター!!」

直線状の砲撃が天井に穴を開けた。

次の瞬間、流は女の子を抱いたまま高く飛んでいた。

「もう、大丈夫だよ」

「わあ〜」

空の景色に感心したのか、または、空を飛んでいることに感心したのかは解らないが、感心の声を上げていた。

「安全な場所に行くから……一応、名前教えてくれる？」

「ヒイナ……ヒイナ・オキナ！」

「こちらラクト魔導師01から地上魔導師へ第3区画の人名保護完了しました。凍結魔法で沈静化を行います」

地上におりて、近くにいた地上魔導師にヒイナを渡した。

「お兄ちゃん！！ 名前教えて……」

「……ナガレ・サクライだよ」

その後、俺は近くの転送ポットで地上の本局に行き無事に認証魔法の処置を行い、近くのホテルの方に入った。

シャワーを浴びて浴室から出ようとした時、携帯の着信があった。

表示は『フェイト・T・ハラウオン』となっていた。

「はい、もしもし?」

「流くん? 処置の方お疲れ様…後は救援の方も」

通信画面を切り替えた。

そこには、三人とラインがいた。

「後処理を任せてゴメンね」

『そっちの方はいいんや…それで今後の事で相談なんだが』

「今後?」

はやては、地上部隊の設立を考えていた事。

そして、その部隊へのお誘いだった。

『お願いできないかな?』

小さく俺はため息を吐いた。

「てはや!」

『はい!?!』

ビックリした表情で俺を見ていた

「確かに2人よりかは仕事の経験も付き合いもそんなに長くないよ」

もう一回、小さく息を吐いた

「俺だけ仲間外れは酷くない？」

『それじゃ……………』

「もちろん協力するよ」

『ありがとな……………』

そして、年月が経ち…………

「流くん、おはよう」

「おはようございます。高町二等空尉」

「そんな硬くなくって良いよ。なら、桜内二等空尉って言った方が
良いかな？」

「何か不自然ですね。なのはさん、おはようございます」

「うん、おはよう」

「だいぶ形になってきましたね」

「後はフォワードの子を迎え入れるだけかな……部隊が四体制だけらね」

『ロングアーチ・スターズ・ライトニング・フォースですね』

「ロングアーチは八神部隊長を筆頭した部隊でライトニングがフェイトさんとシグナムさんそんなでもってスターズがなのはさんとデイトさんですよね」

「そして、一番の最強人がフォース……隊長が流くん、副隊長がシヤインちゃん」

「はいです」

小さな体で元気よく答えた。

「今回昇格テスト受ける子がいるんだよね？」

「双剣タイプの子と大鉄扇を使う子が居たから……何かね」

小さく笑った。

「双剣の子って確か……」

「その子ですよ……剣さばきは我流ですけど鍛錬はかなり研ぎ澄まされていますよ」

「それに楽しみ？」

「です」

とある廃ビルの屋上で二人の女性がいた。

一人は、白生地の上着にジーンズを着て、腰には二本の刀を掛けていた。

もう一人は、巫女服みたいな服で、大きな扇を背中に担いでいた。

「ううゝ緊張してきた」

「大丈夫？」

「うん、昇格試験だしね。頑張らないといけないから」

「今回は新設の部隊の方が見に来てるから頑張らないとね」

「緊張を煽らないでよ」

『2人とも試験説明しても良いですか？』

画面が浮かび上がり、二人の女性が映し出されていた。

「はい！」

二人は、元気よく返事を返した。

『ヒイナ・オキナさんとレチイナ・O・レビィティさんですね……これから、魔導師ランクBの試験に入りたいと思います。教官は【シャイン・フォース】と』

『リイン・フォース？（ツヴァイ）です』

映像でルートの説明に入った。

『コース上には様々なガードロボが存在します。また、攻撃をしてはいけないものも存在しますのでそれを掻い潜りつつ、攻撃対象の全滅させて、目的地に来てくださいです』

「はい！！！」

『では、準備してくださいです』

モニターには1分間のタイマーが表示されカウントダウンが始まった。

「ヒイナ、落ち着いた？」

「うん、平気。憧れの人に合えるチャンスだし。それに、自分の夢の架け橋でもあるんだもん」

その言葉に、ヒイナは刀を持ち直した。

「行こう!!! レチィ!!!」

「ミッション……」

「スタート!!!」

二人の姿が一瞬にして見えなくなった。

カメラで見ていたはやてとフェイトは驚いていた。

「えっ!? 消えた??」

『通常の魔法移動術じゃないよ』

はやてが驚いて話している横で流が普通に話した。

『あれは、瞬動術と言って…直線ならソニックでも引けを取らないスピードを持ってるよ』

二人は次々とガードロボを壊していった。

「さて、ここから難関だね」

「Bクラスの魔導師でも倒せるかどうかの品物や」

『ちよつと可哀相な気もするけど、この位しないとうちの部署ではやっていけないからな』

「確かにな……」

その場所に二人は到着したが、苦戦を強いられていた。

「嘘……かなり堅いよ」

「けど、ここを突破しないと……流さんに会えない……」

「ヒイナ！ボーっとしないで……！」

巨大なガードロボの攻撃がヒイナに向かわれた。

ヒイナは何とかその攻撃をかわした。

「ヒイナ……！」

「平気………だけど」

「けど、あんな堅いやつどうやって倒すの……？」

「一か八かやってみる……レチィすこし時間稼いで……！」

「あんだ、あれやるの……？」

その言葉に頷いた。

目も真剣だった。

「……解った。成功しないするは関係なく思いつきりしなさい!」

レチイは鉄扇を大きく広げた。

「絶対の防壁!」

ガードロボの攻撃が全てレチイに向いていた。

ヒイナは腰にあった二本の小太刀を鞘から抜いた。

「『崩煉』セカンドロード……」

一瞬にして瞬動術を発動させた。

「はあああつ! ! ! ! !」

『小太刀二刀翁流・奥義【射抜】』

ガードロボの防御を抜に叩きつけたがいて後ろの壁に叩きつけだがそれでも止まらず空に飛んでから爆発した。

「はぁ……はぁ……」

「なんと言うか、破壊力なんだろう」
「はう〜」

「つて、ヒイナ!? 大丈夫!？」

力なく倒れたヒイナをレチエは支え起こした。

「あはは、魔力使い果たしたみたい……」

力なく笑いながらそう答えた。

「後、10分。レチエ一人なら十分間に合うよ」

「そんな事したくないよ!! この試験は2人でクリアするって決めたじゃない!!」

「今のわたしじゃただのお荷物だよ」

ヒイナは、困った顔をした。

「……ヒイナが力を使ったから次は私がヒイナを助ける番だよ」

「試験ゴール地点」

二人の試験官……シャインとリインが待っていた。

その上空のヘリにはフェイトとはやて、空中には流となのはが待っていた。

『そろそろ……ですね』

『今回の試験は【フォース】試験と合わせてるんですよ？』

「まあ、部隊隊員としては合格なんだけどね……」

「なんか、語尾を濁らせてるね？」

「って来たよ」

『つて、何ですか！？ この速さは！！！？』

リインとシャインは迫り来るスピードの者に驚いていた。

「二人が来たよ……安全ネット用意！！」

流は、持っていた双剣を杖に変換させた。

そして、一斉に安全対策したのは言うまでもなかった。

『危険行為で減点です！！！！』

「小さい……」

シャインを見て言うのは当たり前だと思つ。

「2人との怪我が無くてよかった。立てるかい？」

流が手を差し伸べると、ヒイナは目を丸くしていた。

「それとも一人で立てるかな？」

「あ……」

言葉が出ないまま流を見ていた。

「流……さん」

「久しぶりだね……5年ぶりだね」

「はい、はい……」

二人を治療して、試験結果は後日になった。

その後の二人も同じ結果になったのはここだけの話……

番外編：コラボ作品です。（前書き）

今回は、コラボ作品を試してみました。

水橋先生の【ライト・T・テスタロッサ】さんと【高町流々】のお二人です。

まだ、拙^{つた}い文ですが読んでくださると幸いです。

番外編：コラボ作品です。

今回は、会話形式に近い形で、展開をいたします。

シャイン『マスター、お茶を持ってきたですよ』

芳乃家の縁側に座っていた流は、シャインが持ってきたお茶を啜っていた。

流『サンキュー』

シャイン『けど、珍しいですね。マスターが、直行で家に帰ってくるなんて』

流『いや、まあ、ちょっと家にいないと……大変な事になるから』

シャイン『それって……!!』

シャインが、言葉を紡ごうとした瞬間、空を見つめだした。

シャイン『次元跳躍の反応粒子増大！ 質量粒子からして人間が二人分と未確認が一つ!!』

流「……シャイン、来るよ。転移内に広域結界を展開しなさい!!」

シャイン『転移場所を特定しました。場所はここです!!』

流「（ライトくと流々さんが来るのは解っていたけど、ウィザードキラーが混ざるなんて聞いてないぞ!!）」

流は、携帯を取りだした。

流「グライビィ、行けるな?」

グライビィ『Yes, my master』もちろんです

俺は、携帯を握り返した。

グライビィ『stand by ready』

流「セットアップ!」

流は、バリアジャケットを着込んだ。

服装は、はやてのバリアジャケットの色を反転させて、男性用に変えた物になっている。

流「転移粒子がさらに増大。来るぞ!!」

次の瞬間、頭の上に穴が開いた。

流々「きゃあああ!!!!」

ライト「ぐっ！……！！！」

流「シャイン！！！」

シャイン『はい、【風のクッション】を発動』

二人が落ちた場所に上昇気流発生して、地面ギリギリで浮遊していた。

流「（あつちは、なんとかかなりそうだな）」

俺は、睨みつけた。

流「楽しいお茶会をぶち壊した穴埋め……してくださりますよね？」

そこには、落ちてきたもう一つの【物質】に笑顔で答えた。

確か、二人が居た世界では【ウィザードキラー】と名前があったけど。

流「あんたは、【異形】で充分だ！！！」

流のデバイスは籠手に変形した。

ライト「ちょいま……！！？」

次の瞬間、ライトが息をのんだ。

流「気鋼術『崩連掌・迅』」

流が体を崩し、相手の懐に一瞬に入り込み……そして。

流「はあああああつ!!!!!!!!!!」

凄い勢いで、パンチの連打を叩き込んだ。

最後の一撃で、空中に大きく叩き上げた。

グライビィ『twin braid』

籠手が一瞬にして、双剣へと形を返した。

流「小太刀二刀御神流・裏 奥義ノ参『射抜』」

神速状態に入り込み、ウィザードキラーを結界の場所まで吹き飛ばした。

流「フィー、殺りなさい」

フィー『はい、空間強制固定！』

すると、ウィザードキラーは落下することなくその場に止まった。

流々「な、何がどうなってるの!？」

シャイン『フィーお姉ちゃんが、敵の時間を止めたのです』

ライト「時間を……止めた？」

シャイン『森羅万象、物物には時間という概念があります。その概念を壊して物体……ん、簡単に言えば、進んでいる未来を止めたと考えた方が良いでしょう』

流々「で、出来るの。そんなことを!？」

シャイン『マスターとフィーお姉ちゃんなら可能ですね……時の女

神【タイム】様の直下だった人と神子ですから……」

流「はいはい、お話は終わりだよ。シャイン」

振り返ると、流が地上に降りてきた。

流「シャイン、結界解除してね」

シャイン「はい、結界解除します」

すると、結界が解除されて、外の音が戻りだした。

ライト「あなたは一体……」

流「魔法が使える、ただの【学生】ですよ」

小さく笑い、改めて二人をみた。

流「自己紹介がまだだったね……桜内さくらい 流ながれです」

シャイン「シャイン・フォースです」

流々「高町流々と言います」

ライト「ライト・T・テストロッサだ」

高町？

テストロッサ？

流「名前だけ知っていたけど、フェイトさんとなのはさんの家族の方だと思わなかった」

ライト「知っているのか？」

流「ああ、知っている。魔法を教えてくれた人で、俺にとっては基礎を教えてくれた【師】だよ」

流々「そう言えば、私達どうやって帰ればよいのでしょうか？」

ライト「そうだな、俺でも次元を超える事は出来ないし」

流「……俺でよければ、君達が居た場所までは送ることが出来るよ。強制転移した場所の時間から、五分後に送れるし」

その言葉に、二人は驚いていた。

ライト「あいつ等と同じチートか……」

流「ちやうちやう、俺はバグ程度だし……俺だって、君の暴走状態に対応できるか疑問だし」

ライト「……なら、お願いがある」

流「うん、なに？」

ライト「俺の本気状態と、流さんの本気状態で手合わせをしてくれないか？」

流々「ライトさま!？」

その言葉に、流々は驚いた。

流「……………本気、なんだね？」

その言葉に、ライトは真剣な目で頷いた。

流「なら、その挑戦を受けるよ。けど、ここだと周りに被害が出るので……………フィー、外部との関係が薄い次元に強制転送と他の邪魔が入らないように広域結界を展開してくれ」

フィー【分かりました。皆さんを転送します】

次の瞬間、浮遊感覚があったがすぐに消えて、別の場所に経っていた。

流「到着。では、始めようか……………シャイン！」

シャイン『はいです。ユニゾン・イン！！』

ユニゾンして、先ほどと同じ服装だが、髪の色が黒から白銀に変わった。

流「フィー、魔力供給システムを開始……………供給者設定は桜内 流！」

フィー【魔力供給システムを開始します】

次の瞬間、流の瞳が黒から朱に変化した。

流「……………杏、【風雅】を借りるな」

杏【了解だよ】

準備が出来たとき、相手も準備が出来ていた。

ライト「……………」

うん、凄い気迫だ。

本気の本気で行かないと勝ち目ないかな。

俺は、小太刀二刀に変化した【風雅】を握り替えた。

流々「はじめ!!」

流「ごめん、攻撃の隙を与える訳には行きません!!」

【瞬動術】

地脈の魔力を使い、一気に間合いを詰まった。

この時の相手の行動は一つしかない。

ライト「くっ!? 地橋流奥義・四ノ型『異楓臙腫』」

予想通り、防壁を展開した。

流「歯を食いしばってください!!」

ライトが作った防壁を柔らかいバターを斬るようになっさりとり抜け吹き飛ばした。

流々「ライトさま!?!」

流々の声で立ち上がろうとしたが次の瞬間、肢体の自由を奪われ

た。

流「そのバインドは解除プロテクトが特別でね……200個のプロテクトを解除しないとそれは外れないよ。因みに、強制的な解除も無効というおまけ付きだ!!」

流は風雅をしまい、グライビィを起動した。

そして、グライビィをバスターモードに変化した。

ライト「なっ!?!」

流「晴天の書を提示……【スリーブレイカー】」

すると、三つの異なる魔法陣が形成された。

その中には、見たことがあるピンク色の魔法陣もあった。

ライト「なのはさんの……スターライト・ブレイカー!?!」

流「プラズマザンバー・ブレイカー、ラグナロク・ブレイカーを発射固定!」

シャイン『統一魔法展開し、バレッジを展開!』

流々「あ、あれって……まさか!?!」

流「これが、俺の今の収束魔法……魔力解放!!」

周囲の魔力が更に凝縮していく。

流「魔力許容範囲型【アルカンシエル】」

ライト「うわああああ！！！！！」

流「次元のズレ！ 三ミリ！！」

ライトの直前で攻撃は防がれた。

流「……………バインド解除」

四肢の拘束が解け、地面に腰を下ろした。

俺も、ユニゾンを解除した。

流々「大丈夫ですか。怪我はないですか？」

流々は、ライトに近づいて……………いや、抱きついてきた。

ライト「なぜ、最後に？」

流「理由はいろいろ……………まあ、最大の理由は、友達になりたい人を傷つけないがそこになるかな」

ライト「そうか……………」

流「俺で良ければ何かあったら手伝う。何かあったら言ってくれ」

俺は手をさしのべ、ライトはその手を掴んだ。

流「さて、そろそろ帰らないと、華琳達が心配するしな?。」

ライト「色々、世話になったな」

流「俺も楽しかった……そのお詫びにこれをやる」

俺は、二人に見えないように手を後ろにやり、手のひらをグーにした。

流「二人とも、手を出して」

ライト「なんだ?」

流「良いから、良いから」

訳の分からずま手を出した。

その手に小さな紅白饅頭を置いた。

因みに、流々には紅を、ライトには白を渡した。

ライト「おい!？」

流「頑張れ、二人とも 空間と次元を固定……跳躍！」

二人を見送り、俺は倒れた。

その表情は安らかな表情だったという。

番外編：コラボ作品です。（後書き）

うん、私なりに頑張りました（汗）

私の感想……気の強い子は書きにくいです（汗）特に女の子……

感想お待ちしてます。

第10話：機動六課始動（前書き）

オープニング雑談

フィー【私の出番ここだけですか？】

杏『たぶん、私も暫くは同じですから（汗）』

李『この三名は紫月に残りましたからね（汗）』

フィー『暇つぶし無いかな……』

杏『うん、無いですよ（汗）』

フィー『そうだねえ、流様に核弾頭を……』

李『それはやめてください！』

第10話：機動六課始動

不合格なつた二組……ヒイナたちと後半受けた二人は別の所で訓練を受けて再度試験をして合格なつた。

「ちょっと疑問になつたけど……」

時間が出来たので久々に全部隊の隊長と副隊長とが集まって食事をした。

「未だに【さん】付けだよね……流くん」

「流石にさん付けはしないといけないような……」

「うちらには、普通に抜いていって欲しいぞ」

「そつだな……【主流】」
あつしながれ

そう、ヴォルケンリッターは晴天の書を【主】と認識してしまつたらしい。

何か微妙に複雑化しそうな気がしてきたのは気のせいだろうか？

……気のせいではないな。

「言い慣れるようにはするからさんだけは見逃してくれ」

「まっ、仕方ないな……」

「何かあったら言ってくださいね。力になりますから」

「流は、普通に単独で突っ込んでいきそうだな」

『今回、時空管理局に手続きする時……試験を受けた時は凄かったですよ』

苦笑いをしながらシャインは答えた。

「何かあったのか？」

「御飯と睡眠とお風呂以外はずっと勉強していただけだから」

『だったら、睡眠時間はもう少しとってください』

「いや、ちゃんと取っていたから」

『毎日の睡眠時間が3時間って言うのは寝てたの方に入ってますか？』

シャインの言葉でそこにいた全員が固まった。

「はやてでも普通に睡眠取らせていたのに……」

「いや、もう済んだ話だし……」

『あの時は、音姫お姉ちゃんや音夢お母さんとかも心配していましたがからね』

小さなため息が聞こえた。

「話を戻して……流は今回の事件に関してどう思う?」

「現在、未来予知は出来ない状態だけどある程度は先見はしてきたよ……この事は、ここだけの事と思って口外しないでね」

その言葉に、全員は頷いた。

「次元犯罪者の可能性が高いのと……後は、『聖王協会』が一番事を絡んできそうだと思う」

「やっぱり、そうなってくるのかな?」

「後は、時空管理局の地上の方が何かあるとは出たけど……それ以降の事は出来なかったよ」

「そっか、ありがとう……」

「そうだった、後一つあったよ」

「もう一つ?」

流は、言い難そうな顔をしたが一回深呼吸をしてから全員を見た。

「一個だけ物質を見たんだ……」

「物質?」

その答えに頷いた。

「青色のクリスタルみたいで……英語の数字が浮かび上がってたか

な

その言葉になのはとフェイトは驚いた顔をしていた。

「どんな形だったか覚えてる!？」

紙に簡単に見た形のクリスタルを描いた。

描き終わると二人に見せた。

二人の顔は、見る見るうちに強張っていた。

「JS……」

「うん、間違いない……ジュエルシードだ」

確かこれって……なのはさんとフェイトさんが出会うきっかけになったやつじゃなかったっけ？

聞き覚えがあったけど、やっぱりそうなのかな？

「俺でも詳しい情報は解りませんでしたから」

「情報としては、十分すぎるよ……ありがとう」

食事が終わり、スーって立ち上がった。

「明日からうちの部署の出発や……気を引き締めてい」

「その言葉で、全員頷いた。

次の日、【古代遺失物管理部】が発足した。

それぞれのエキスパート……

新しく入った【フォワード】の六人が緊張の趣で立っていた。

そして、無事に発足式も済んで溜め込んだ資料を整理しようとした瞬間なのはさんが呼び止めた。

隊長及び副隊長とフォワードの顔合わせと言う事だ。

海辺の方に行くとき既に他の人たちが来ていた。

「自己紹介とかはもう終わったの？」

「はい！ー！」

元気はいいな。

「今日は、ちょっとした試験をしようかな」

なのはさんが、シャリオを連れてきて島を町に変えた。

擬似的に町や森を作り出す事が可能だと言う。

ガジェットドローンを六体作り出した。

「デモンストレーションと言う事で……流くん、お願いね」

「流だったら、多少の参考になるだろうしな」

グライビィを双剣に変えた。

「タイムは10分……スタート」

俺が使えるのはランクBの魔法と特殊能力……

ガジェットドローンが一斉に散らばった。

瞬間に、一体を瞬時に捕捉して一体を撃破した。

「残り五体!!」

残り五体は集団で逃げていた。

「逃がすか!!」

一瞬にして加速した。

「消えた!？」

「…ヒイナ、あの加速ってまさか……」

その言葉でヒイナは頷いた。

「うん、間違いないよ。私達が使う移動方法【瞬動術】だよ」

その間に流はガジェットドローンの合間を詰めて一閃で全機を撃破していた。

「うん、上出来」

剣を鞘に戻して、解除した。

「以上で俺の戦闘方法でした」

「一応言っておくが、流のランクはお前らと同じ、ランクBだ」

ヴィータの言った事にフォワードの六人は驚いていた。

「その分は、経験と特殊能力でカバーしてるからね」

そして、六人は特別試験に入った。

なのはさんの号令で試験が始まった。

「AMFにどう対処するかがポイントだな」

「ヒイナ……こいつらって」

「間違いない…AMF効果があると見て」

「AMF？」

横にいたスバルが聞いて来た。

「アンチ・マジリング・フィールドの略です……魔法効果のものなら全てキャンセルする…AAAの効力です」

「それでも、何とかするしかないね」

「フィールド外からの天候攻撃や物質攻撃で攻撃すれば魔法は当たります……手本を見せます…レティー!!」

二人は一気に加速した。

「き、消えた!？」

「違う。さっきの、流さんの移動方法と同じ」

ガジェットドローンを抜いて先に出ていた。

「カマイタチ!!!」

「小太刀二刀翁流【弧線】」

先頭を走っていた二体のガジェットドローンは爆散した。

そして、他の四人も要領と自分の能力を活用しながら個々に倒していった。

また、隊長たちの前に戻ってきた。

「二人は、分かっていたみたいだね」

「ちょっと、だけですけど……」

その後は解散になった。

俺は、部屋に戻ると服を着たままベッドにダイブした。

「はう？」

やはり、魔力セーブはなかなか慣れないな……

『マスター、大丈夫ですか？』

心配そうな表情でシャインが顔を覗かせていた。

「うん、平気だ。けど、魔力セーブしながらのランクB魔法はキツイってね」

『マスターは六段階以上は魔力を下げています……負担が大きいのは当たり前だと思いますよ』

しかもまだ初日だと言う事だし……音を上げるのはまだ早いかな。

『しかも、封印が強力すぎますからね』

「騎士カリム、クロノ・ハラウオン、高町なのは、フェイト・T・ハラウオン、八神はやて……だからな」

段階解除が可能だけ良としようかな。

これから、この部署で生活するんだ。

「見届けないとな……ちゃんと」

『サポートもするの忘れないでくださいね』

「俺は、裏切らない……何があつたとしても」

その言葉にシャインも頷いた。

「しかし、フィーナが使えないって言うのはちょっと痛いな」

『そうですね…改装と完全な整備で休業に入るって言いましたからね』

「軽く汗流してくるっかな」

そして、一日が過ぎていった。

第10話：機動六課始動（後書き）

流「なんか書くことあるのか？」

近辺状況とかいう？

流「俺に聞くか（汗）」

とりあえず、『恋色空模様』を全力で終わらせました。
妹様のツンデレっぷりはもう大好きです

流「ここで書いて云いゲームのタイトルか!？」

中身を伝えてないから大丈夫、大丈夫

流「……………誰かこの作者の根性を叩き直して欲しいぞ（汗）」

感想お待ちしてます

第11話：初戦闘（前書き）

タイトル雑談

ファイ『今回も始まりましたねえ』

杏『今回もここしか出番がないんですから（汗）』

李『まあまあ、抑えて抑えて（汗）』

ファイ『紫月から出れないのは……まあ、解ってますし、苦ではありませんからね』

李『その分、お兄ちゃんから艦内のアレンジを自由にして良いと言われてるからね』

ファイ『ストレス解消になってますから構わないですよ』

杏『では、今回は第11話【初戦闘】です』

李『この話はオリジナルに少しだけ平行した形で書いています』

ファイ『分からない方は【なのはStS】を見直すのも良いかもしれませんね』

李『では、来々です』

第11話：初戦闘

順調……ゆっくりではあるが成長して行った。

今日は、なのはさんが模擬戦闘をしていた。

そして、エリオが見事になのはさんの防御を抜いて攻撃を当ててから朝の訓練が終わった。

「大部デバイスも不調が出てきたね」

「なら、新しいデバイスに切り替える時期かもね」

俺達は、なのはさんの案内である場所に向かった。

案内された場所は六人のデバイスが置いてあった。

「これが、新しい皆のデバイスだよ」

「今の段階では、リミットはレベル1だけど、慣れていけば徐々に解除していくつもりだから」

「そう言えば、なのはさん達にもリミッターは掛かってるんですよね？」

「デバイスと別に自分自身にも掛かってるからね」

「えっ!?!」

「部署での適性レベルがあつてね……俺はランクBで

「私がランクA A……元々はSプラスだから」

「二階級ほど落としている事になる。」

「はやて部隊長がSSからAランクに落としてるからね」

『流さんの方が魔力を一番落としてるんですから』

「リインの言葉に皆は驚いていた。」

「元々ははやて部隊長とは一つ上ランクだよ」

「ち、ちょっと待ってください……どうことば？」

『ランクを六段階は落としてるですよ』

「シャインがリインの横に立ちながらそう言った。」

「魔力を削った分は経験と能力でカバーするからね」

「その時、基地全体にアラーム音が聞こえた。」

「なのはちゃん、流くん、そこに居る？」

「フォース、スターズとライトニングのフォワードは揃っているよ」

『大丈夫、私は単独でいけるよ』

その言葉に、はやては頷いて、状況の説明をした。

「なのは隊長と流隊長はフォワードと一緒にヘリで現場に向かって」

「了解」

「了解した」

「流隊長は能力一段階解除しておいて」

なんかの為だろうな。

「解りました」

「そんじゃ、機動六課出撃や!!」

「はい!!」

俺達は急いでヘリポートに向かった。

ヘリの中では作戦会議が行われたいた。

「今回の任務はこの列車の中央車両まで行く事だ。敵よりか先に」

「ガジェットドローンが妨害に入るかもしれないけど何とか倒してそこに向かってくれ」

「了解!!」

「俺達がカバーって言いたかったけど」

『敵さんの増援が来ちゃいましたね』

シャインと俺は、前方を見ると飛行型のガジェットドローンが空を埋め尽くさんばかりの量で飛んでいた。

『簡単に部隊編成を言います』

『スターズは先頭車両から列車のコントロールが奪えたらと考えて』

『ライティングは後方車両から一気に向かいます。ヒイナは後方に回ってレチイは前衛の方を』

『そしてサポートは、スターズはリイン・フォースと……』

『ライティングはシャイン・フォースが付くです』

『二人ともお願いね。流くん、いくよ』

『はい！！ ヒイナ、レチイ、ファイト』

ヘリの後ろのハッチが開放した。

『スターズ1高町なのは』

『フォース1桜内流』

同時にジャンプした。

『』 Standby ready 『』

「セツトアップ!!」

空中で魔導服に変換して2人は舞い上がった。

直ぐに、フェイトも合流した。

「三人でこうするのって初めてだね」

「確かに……」

「私となのはが多いかな？」

笑いながらそう答えた。

「先輩たちに負けないように頑張ります」

そして、散開しながら攻撃に入った。

「そろそろアタック時点だ。新人ども覚悟はいいか？」

「はい……」

「ライトニング3、エリオ・モンディアル」

「ライトニング4、キャロル・ル・ルシエとフリード」

「「行きます!!!」」

二人は同時に飛び降りた。

「次!!!」

「スターズ3、スバル・ナカジマ」

「スターズ4、ティアナ・ランスター」

「「ゴー!!!」」

同じように二人も飛び降りた。

「最後だ!!!」

「フォース3、ヒイナ・オキナ」

「フォース4、レチイナ・O・レビーティ」

「「突貫します!!!」」

空中でバリアジャケットに着替えた。

六人は無事に列車の上に降り立った。

「あれ？この服って……」

『隊長の魔導服を参考にして作ったのですよ』

『それぞれの機動性にも考えて考慮したです』

そして、前を向いた。

『行きます』

『Ready Go!!』

その言葉で、全員が動き出した。

「ライジング・ノヴァー!!」

近くに居たガジェットドローンを呑み込み爆散していった。

「こちら、フォース1、西方面のガジェット全機破壊!!」

『ライトニング1とスターズ1も全機撃破』

『了解、三人はその場で待機しててください』

「解りました」

そして、列車の方を見た瞬間、ガジェットが誰かを投げ飛ばした。

それを助けるかのようにもう一人飛び降りた。

「あれって」

「エリオとキャロ!?」

「助けないと!!」

「待つて、大丈夫だよ。離ればAMFは弱くなる」

もしかして!!

その瞬間、光が2人を包んで一匹の竜が翼を大きく広げた。

『意識も正常、龍魂召喚成功です!!』

その後、列車は無事に止まり、レリックを守る事が出来た。

「初任務は……」

「成功だな」

俺は、久しぶりに剣稽古がしたくて訓練場に来た。

フィールドを作り、中に入った。

「グライビィ、仮想メモリーから展開」

すると一人の男の人が浮んできた。

御神静馬さん。

俺のしている剣術『小太刀二刀御神流』の継承者でなのはさんの叔父になる人かな？

俺はゆっくり練習刀を抜いた。

流石に今の時間に魔法を使うのもどうかと思うが。

それでも何人かが起きてきそうな気がするが。

そこから連続の攻防戦に発展した。

何回か静馬さんの攻撃を防いでいくと思いつきり吹き飛ばされる。

それも相手と同じと事をして静馬さんを吹き飛ばした。

刃を交わしながら攻撃と防御に入った。

すると、一瞬だけ静馬さんが消えた。

その行動と同時に、俺も姿を消した。

神の速さ領域……『神速』

魔法使いではない人間が起こせる最速の領域……

そして結果は……

静馬さんの攻撃が見事クリティカルヒットして俺は倒れこんだ。

精神の高まりもあって、体からは出血が何箇所かはあった。

その場に倒れこんで荒く呼吸をした。

一回だけ深呼吸をした。

「まだまだ静馬さんには勝てないって事かな……」

呼吸が落ち着いて練習場を片付けて寮に戻ろうとして時

「ボロボロだな」

そこには、シグナムとシャマルがいた。

「2人ともなんでこんな時間に？」

「それはこっちの台詞だ……久々の剣術の練習か？」

「その解れを見るとそうなんですと言ってますけどね」

クラールミントで俺の怪我を治していった。

「うん、ありがとう」

「無茶って訳でもないですね」

「基本は練習しないと体が鈍るからね」

軽く体を伸ばした。

「朝のフォワードの訓練と夜間の個人練習はきつくないですか？」

心配そうな表情でシャマルが聞いて来た。

「そんな事は無いよ……魔力制御されてるから体はきついけど、何か慣れてきたからね」

心配掛けないように笑顔でいった。

そして俺たちは、寮の中に入っていった。

第11話：初戦闘（後書き）

犀龍「オープニングを花にして、終わりをムサイ男でやるっでどうよ？」

流「どうよ、と言われても……かなり返答に困るんだが（汗）」

犀龍「因みに、男のオリジナル……お前だけだから宜しく」

流「……………はい!？」

犀龍「ハーレムエンド一直線」

流「と、言われても、貴男が書いたシナリオだからそれを願ったのは貴男では？」

犀龍「（グサツ）くっ……………見えない心のナイフで抉られた感覚が（汗）」

流「次回は何ですか？」

犀龍「次回の花と乙m……」

流「それは違う作品だ!！」

犀龍「チツ……………次回は、流の過去を少しだけ見えちゃうかもよ」

シャイン「お楽しみにです」

第12話：過去

やっぱりだよな……

訓練の映像を見ながら俺は呟いた。

「ティアナの動き。個人でもチームでも同じ動き出し」

それに、何か硬い感じがするのは気のせいかな？

映像を消して、溜まっていた仕事を一気に片付けた。

そう言えば、午後の訓練はもう少し経ってからだから……俺は席から立った。

「なのはさん、少し訓練施設を使いますね」

「どうしたの？」

「少し体を動かそうかなって」

「ってか、午前中も教導に参加していたよな？」

確かにそうなんだけど

ヴィータに鋭いツツコミが返ってきた。

「ちょっと自分の技の再確認……かな？」

「いいよ。その代わり無茶はしないでね」

俺は、その言葉に頷いて出て行った。

「良いのか？」

「流くんは無茶は絶対しないからね」

俺とシャインは六課のモニター室にいた。

今回は新人と主力の三人のオークションはやて・なのは・フエイトの警備だと言う事だ。

「今回の弾かれは何となく予想は出来たけどね」

端末の調整とかしているとアラームが鳴り響いた。

場所はなのはさん達が警備している所だった。

「何とかなって欲しいものだけど……」

俺とシャインの出撃はなく全員が戻ってきたのはかなり日が暮れてからのものだった。

「……何かあったの？」

近くにいたヴィータに話しかけたが不機嫌だった。

「触らぬに神に祟りなしだな……」

その言葉をしたものの絶対に無理だなと確信してしまった。

何か確信してしまった。

俺は夜間にいつものように体を動かそうとした時

「ん？」

林の中から人の気配があり覗いてみると……

「っ……ハッ!!」

精密の練習かな？

時間を見るとかなり遅い時間だ。

俺は気配を消してその光景を眺めていた。

すると、一段落したのか動きを止めた。

「今日はそれぐらいにしないと明日の早朝練習に支障が出るぞ」

「えっ!？」

ティアナが驚いた様に俺を見ていた。

「いつから居たんですか!？」

「15分位かな……ほれ」

缶ジュースをティアナに投げて受け取った。

「今日は遅いしそろそろそこら辺にしたら？」

「私は強くなりたいんです……」

「強く……ねえ……」

まだ駆け出したから、なのはさんがはまだ原石に近い状態だといっていたし。

「早く強くなりたいと？」

「誰も傷つけないから……」

だから力を付けたいか。

確かに合ってるが……

「俺からの一言……力を付けるのも良いが、基本もしっかり見に付けた方が良いよ」

俺はその場を後にした。

数日が過ぎて、コンビの訓練があった。

基本的には隊長に攻撃が通れば合格という事だった。

「ヒイナとレチエは俺とだな」

「勝てる気がしないんですけど」

「勝つんじゃないかってバリアジャケットに攻撃が通ればいいんだけど」

苦笑いしながら言った。

「それに、ランクBで2人なんだからかなりきついんだよ」

そんな話をしているとスターズの模擬訓練が始まった。

「ねえ……流くん」

「ティアナの精密射撃精度が落ちてる」

フェイトと流の会話で四人は驚いていた。

「流くんは【見えて】いるんだよね……」

その答えに小さく頷いた。

「ティアナのその選択肢は間違いではないけど、今使うのはまだ早いな……」

そう、ティアナの使ったのは射撃ではなく接近戦だった。

「少し頭を冷やそうか」

なのはさんの精密射撃でティアナを撃墜して訓練は終了した。

「温厚な人ほど怒らせると怖いね……痛感したよ」

スバルとキヤロの方も無事に模擬戦闘が終わって……

「「お願いします」」

フォースの模擬戦闘が始まった。

次の瞬間3人は一気に消えた。

「き、消えた!？」

「2人は瞬動術だけど……流くんは」

「うん……神速に入ったね」

「神速ってなんですか？」

キヤロが不思議そうに聞いて来た。

「神が居る領域……空間を動く事が出来る移動術かな」

「私達が使ってる移動方法は直線状に速いけど」

「あれは、小回りも利いて……使ってるのは流くん」

その答えのように2人を吹き飛んだ。

煙が晴れると、二つの鎌を持った流が立っていた。

「流くんが使えるのは小太刀だけではないんだよ」

「流くんが使ってるデバイスはオールチェンジ……どんな武器にも変形が利くの」

「砲撃・接近戦も使い分けが出来て……」

「防御も硬い」

そして、フォースの2人もボロ負けの結果で終わった。

その夜、隊長たちだけが呼ばれた。

モニターには飛行型のガジェットが何体か隊列を組みながら飛行していた。

「執務官はどう見る？」

「相手がスカルエツティならこっちの戦力を測るといつて所かな」
「教官は？」

「私も同じかな？」

「流艦長ならどうみる？」

「……こっちの戦力を見た行動と取るかな？ 後は新しい情報を引き出したいかのどちらかだと思っよ」

「長距離砲で殲滅させるという方法もあるけど」

「それは得策ではないかな」

俺の言葉で2人は頷いた。

「ここは正攻法で行こうか」

次の瞬間、全員は頷いた。

ヘリポートにはフォワードと隊長と副隊長が揃っていた。

「今回はなのはとフェイト、ヴィータの三人が現地に行く……流くんとシグナムとフォワードは待機」

なのははティアナの方を向いて。

「ティアナは今回の作戦から外れてもらうよ」

その言葉でティアナは驚いた顔をしていた。

「これは隊長と副隊長で話し合ったことだ」

「私が役に立たないから言ってるんですか!!」

その後、シグナムが放ったパンチが当たり吹き飛ばした。

これ以上、止まらせるのは得策ではないな。

「ヴァイスさん、乗せるから緊急で離陸してください」

その言葉で、ヴィータがなのはをへりに乗せて浮上した。

「ティアナ、今日は部屋に戻りなさい。お願いだ」

「流さんはティアが役に立たないから早く部屋に帰っていつてるんですか!!」

「違う!! 俺は……」

「じゃ、なんでそういうことを言うんですか!!」

「今日の精密射撃の精度の落ちた理由は睡眠不足だからと踏んだんだ!! だから部屋に休んで貰おうと思っただけだ」

「……………」

ティアナが言葉を小さく呟いた。

「私にそんな言葉をかけないで!!」

睨みつけて俺を見た。

「あんなにか居なくなればいいんだ!!」

その言葉で俺は目を見開いた。

「……そっか、ごめんね」

その言葉を言つと消えた。

その後、シャリオが出てきた。

全員をロビーに集めた。

「昔ね、ある街に小さな女の子がいました。その子は普通のどっこに居る子」

映像を流しながらポツリと話し始めてくれた。

「なのはさんの教導は地味だけどね……立派な魔道士になって欲し

いから」

なのはさんの過去を聞いてしょんぼりしていた。

「もう一つの話……小さな離島がありました。そこは、四季が過ぎても咲いてる桜が存在しました」

「永遠に咲いてる桜!？」

「うん……流くんはね、人として生まれてないの」

「人として?」

「流くんは、桜の魔力によって生まれてきた子」

その言葉に四人は驚きを隠せなかった。

「その時に二つの小さな魔法と一つの大きな魔法が使えたの」

画面が切り替わった。

「小さな魔法は手から和菓子……お菓子を作り出す魔法と他人の夢を勝手に見る魔法」「大きな魔法というのは?」

「時間転移魔法……時間を自由に行き来する魔法の事よ」

その言葉に全員が息を呑んだ。

この世界……ミッドやベルガの魔法にはそんな魔法は存在しない。

存在するかもしれないが、使える人はいないだろう。

「あの人は単独でどこにでも行ける」

「だが代価というのでも存在する」

「三日間は身体の低下、体の免疫力が低下しちゃうの」

もし重い菌でもついた場合は死にいたる可能性がある。

「話は戻るけど……その離島で、一つの魔導書と出会いました」

「それが夜天の書……はやてちゃんが以前に使っていた魔導書なの」

「この世界とは別の場所の夜天の書と機動六課の隊長たちと」

「そこで、魔法と基本スキルを短期間で覚えていった……」

画面が切り替わり。

「そして、もう一つの魔導書と出合った」

「それが【晴天の書】シャイン・フォース」

「元々は暴走した【夜天の書】を破壊する為に作られた存在だからシャインちゃんが言うてくれたの」

『もう、暴走する事は無いです。破壊される存在ではなく相互の存在でありたいとシャインは思っています』

後ろからシャインが出てきた。

『マスターの願いは笑顔で皆と一緒に居られる事ですから』
そう言って、シャインはみんなに笑いかけていた。

「私の過去と流くんの昔の事を話したの!？」

「けど……」

「私の事は良いとして、流くんの事はトッピークレットって言う事は知ってるんだよね？」

シャリオは小さくなっていた。

「流くんの事は後にして……ティアナはどこにいるかな？」

「多分あそこだと思う」

練習場に入り口に行くとティアナがそこにいた。

「私と流くんの事は聞いた？」

「……………」

「流くんのトップシークレットの話となのはさんの失敗談？」

「ちが……………」

「自分以上の力を使うと危ないって話だね」

その後、ティアナは泣いた。

憚ることなく……………」

「さて、次は流くんのところに行こうか？」

「けど、どこにいるか解らないです」

「シャイちゃん、居る？」

『「ここに居ますですよ」』

シャインはなのはの前に出てきた。

「流くんは今どこにいるか解る？」

『もう少ししたらここに来ますよ』

そう言つと、雇気楼みたいに現れた。

そのままコンソールを開いた。

「皆して何か用なの？」

「えっ!？」

その言葉に草影に隠れていた四人が出てきた。

最後にキーを押し終わると練習場が森林になった。

「俺はまだまだ弱いよ。人として……魔法使いとして」

「そんな事は!？」

「モニターで見れば解るよ」

そう言って、中に入った。

なのはがモニターを映すと流が立っていた。

『グライビィ、いつもの能力起動』

すると、一人の男性が立体映像で出てきた。

それに対峙するかのように刀を構えた。

その殺気で、シャインとなのはは以外は後ろに一歩引いた。

「この殺気は一体?？」

『マスターの独特の殺気です。御神の剣士が持つ独特のです』

「うん、この殺気こそが流くんの現在の實力だよ」

『今の魔導師ランクです』

二人は超加速の中で刀を交えていった。

しかし、次の瞬間に流は後ろに飛ばされ木々を薙ぎ倒して行った。

何とか体勢を立て直して立ち上がるうとしたが相手の攻撃範囲だった為同じように後ろに弾き飛ばされた。

『Limit out』

立体映像の男は消えた。

「はぁ……はぁ……」

何とか立ち上がるうとしたが仰向けになりながら息を整えた。

「これが……俺の今のち……から……だよ」

少し使ったから気分が悪いよ。

「シャイン……リカバリー宜しく頼む」

『は、はいです！！』

これで少しだけ楽になるかな。

「もしかして、【力】使ったの!？」

その言葉に頷いた。

「シャイ、後の事はお願い……」

意識を闇の中に呑み込まれた。

目が覚めるとそこは白い天井が見える場所だった。

「やっと起きましたか？」

そこに居たのは白衣を着たシャマルだった。

「俺は何日ぐらい気を失っていたの？」

「三日よ……力のリカバリーとシャイちゃんの回復魔法で三日に収まったみたいだね」

ベッドに腰掛けようとして上半身を起こした。

足元に違和感があり見ると……

「すう〜…………すう…………」

ティアナが寝息をたてながら寝ていた。

壁の隅には、スバルやキャロ、エリオ達が寝ていた。

「私が居ない時はこの子供達が見ていてくれましたからね」

そっか…………

優しくティアナの髪を撫でた。

「ん…………」

くすぐったそうな表情になったが、起きる気配はなかった。

「本当にありがとう」

そして今日もまた一日が始まっていく。

第13話：小さな女の子（前書き）

今回でやっとおチビ様（娘）を出すことが出来ました（オリジナルキャラクターではありません）

今回も、宜しくお願いします。

第13話：小さな女の子

「今日の訓練はここまで」

そう言うとフォワードの全員は尻餅をついて倒れこんだ。

「六人ともお疲れ様だな」

「それで今回は、デバイスの解除試験だったんだけど……」

その言葉に6人は驚いていた。

「問題なし」

「即決!？」

「これで合格しなかったら問題ありだぞ」

「フェイトちゃんは？」

「私もだよ」

「流くんは？」

「……………」

「流くん？」

なのはの声で我に返った。

「あつ、右に同じ問題ないよ。全員合格だ」

その後、デバイスのリミット解除と休息という事で午後の訓練はお休みという事になった。

「今回は流くんもお休みだよ」

「俺も？」

「疲労が結構溜まってるじゃないかな？」

軽く背伸びをしたら背骨がボキボキと音を立てた。

「結構きてるな……」

そういう事で、俺も午後は街で買い物に行く事になった。

「俺の車に乗るのがヒイナとレチエの二人だね」

「本当に良いんですか？ 同行して？」

「今回はのんびりと観光だよ」

そうしたかったのはやまやまだったのだが…

とりあえずは、二人にはそう返事した。

本当のところは、『紫月』の進行状態を確認と少ししたお手伝い
だな。

街で二人を降ろして紫月が停泊している場所に向かった。

「何で俺が…」

「まあまあ、品物の買出しなんだからしょうがないよ」

「お兄さんはお休みなんだからどっか連れて行ってくださいよ」

車の後ろには、杏と李が乗り込んでいた。

「それは良いとして……艦の手伝いは良いのか？」

「後は調整だけ…フィーナお姉ちゃんしか出来ない仕事だから」

確かに今は、フィーナに全権を委ねているしな。

「体の調子は大丈夫なの？」

「制限が掛かってるから負担が大きんじゃない？」

「うん」

暫く考えて。

「そんな事無いよ……頼れる仲間が居るからね」

丁度その時、デバイスが全体通信モードになった。

「エリオとキャロの声」

それは、レリックと小さな女の子を見つけたという事だ。

「処置が必要になるな……杏、李二人とも頼めるか？」

「了解」

「解ったよ。お兄ちゃん」

俺は、急いで急行した。

現場に着くとフォワードの全員がいた。

「杏、李、この子の容態を見てくれ」

「……」

李が軽く手を翳した。

「バイタルと呼吸は安定してるけど、衰弱が激しい……病院に搬送したほうが良いかな」

「君たちは一体……」

「自己紹介が遅くなりました。魔術師協会【ラクト】朱雀支部、戦艦【紫月】医療班及びフィールド担当の鳳李です」

「同じく、医療班及びアタッカー担当の鳳杏だよ」

そう言って軽くお辞儀した。

その後、隊長達が来た。

「杏ちゃんに李ちゃん!？」

「久しぶりです。なのはさん」

「どうして二人が?」

「買出しついでに……今回の事件は紫月サイドでも追跡してます……この件だけはお手伝いします」

その言葉になのはとフェイトが頷いた。

「お兄ちゃん、命令をお願いします」

やっぱりしないとイケないのか。

「命令って?」

「見ていれば解るよ」

なのはの言葉に全員が俺の方を向いた。

「艦長命令です。機動六課のフォワード6名とレリックの探索に加わる事を許可します。デバイスレベル2までの使用を許可します」

「了解です、艦長」

「了解しました。流艦長」

そう言って、二人はデバイスを召喚した。

「流さんって」

「一体……待って、流艦長って」

「そう、紫月の艦長だよ」

全員が驚いていた。

「今は、機動六課のフォースの隊長だよ」

その言葉に二人は安心していた。

「杏と李は残りのレリック回収の方にフォワードの全員もそれに当たってくれ」

「了解」

散開して、俺はへりの方に付いた。

何か嫌な予感がするから……

へりに乗り込み女の子を椅子に横にさせた。

上空にも敵がいたがなのはとフェイトが担当してくれてる。

「多分、敵の狙いはこの子とレリックだと思うから俺はこっち担当だ」

「護衛宜しくお願いします」

「了解」

離陸して聖王病院に向かおうとした瞬間、魔力の収縮感があった。

「推定魔力………オーバーSクラス!？」

横から光が見えた。

「間に合え!!!!!!」

次の瞬間、光が爆発した。

「空間の断裂……………2ミリ……………」

何とか魔法が間に合った。

「シャマル……………後の事はお願ひ」

その言葉に頷いた。

「空間跳躍」

その瞬間、その場から消えた。

「見つけました」

俺は犯人の後ろに立っていた。

「危険魔法及び傷害諸々で逮捕します！！」

その後二人も合流した

その言葉をかけた瞬間、敵二人は逃げ去ろうとした。

そう思った瞬間、上を見た瞬間。

はやてが詠唱に入っていた。

「空間攻撃魔法！？」

ならやる事は一つだな。

はやての攻撃範囲から素早く離脱した。

しかし、敵も空間攻撃から逃げ切った。

その外では、砲撃呪文を展開していた。

そして攻撃は……敵がもう一人入って三人の攻撃を回避した。

「……逃げられてたか」

その範囲から敵の魔力反応は消えていた。

その時通信が入った。

『お兄ちゃん……ゴメン、こっちも逃げられた』

俺は聞こえないように小さくため息を吐いた。

「レリックの方は？」

『うん、そっちはちゃんと封印してあるから大丈夫』

「なら良しでしょうか」

そういつて通信を切った。

「杏ちゃん達は何て？」

「敵には逃げられたけど、ちゃんと保護はしたみたいだ」

その言葉に安殿声を漏らしていた。

その事件から数週間が経過した。

保護した女の子は順調に回復して行った。

俺は聖王協会でその子のお見舞いに来ていた。

「……なのはさん、懐かれちゃいましたね」

「うん、そうみたい」

なのはさんの後ろに隠れている女の子と同じ高さの目線に合わせた。

「初めまして……だね」

そう言った瞬間、さらに後ろに隠れた。

「思いつきり隠れちゃいましたね」

シャツハの言葉に俺は心が折れそうになった。

「まあ、慣れるませ時間が掛かるんじゃないかな？」

「そうだね……」

俺は、右手をグーにした。

「お饅頭上げる」

開くと小さなお饅頭が右手の掌に乗っていった。

掌にいきなり饅頭が出てきたのでシャツハと女の子は驚いていた。

「毒なんて入ってないし、そんな器用な事も出来ない……大丈夫だから食べてみて」

おどおどしながら饅頭をもらい一口食べた。

「あ……」

「どう、かな？」

「おいしい……」

その行為になのはと流はハイタッチをしていた。

少ししてから慣れたのか、流の方にも来てくれた。

「泣きっ面が笑いつ面になった……か」

「その言葉って、確か……」

「俺の父さんの言葉。和菓子しか出せないけど、お菓子一つで笑い顔に出来るからって教えてもらった」

その後検査でも以上が無いと診断され機動六課で保護という形になった。

部屋に戻ろうとしたとき、はやてからメールが来ていた。

『会いたい人合が居るから一緒に着てくれないか』

俺は二つ折りで返事をした。

とりあえず、制服に着替えてロビーに行こうとしたとき。

ヴィヴィオの泣き声が聞こえた。

ヴィヴィオ……それがあの子の名前だ。

それ以外の事は覚えていなかった。

「何しているんだか」

部屋に入るとフォワードの全員となのはとヴィヴィオがいた。

「流……さん」

離れたくないんだな……きつと。

「ヴィヴィオ」

俺はヴィヴィオを抱きかかえた。

「行っちゃヤダー!!」

「居なくならないよ……」

優しく髪の毛を撫でた。

「ヴィヴィオが泣いちゃうとなのはさんが大事な話しに行けなくなっちゃうんだよ」

「おはなし?」

「うん、少しだけ離れ離れになっちゃうけど、帰ってきてからずっとくと甘えちゃいなさい」

「……いいの?」

「ちゃんと待って居られたらね」

「..」

「流くん、本当に子供あやすのが上手いよね」

「私が出る幕が無かったね」

「本音を言つと、流くんは私たちとはかなり年は上だからね」

「外見年齢とは見分けがつかないからね」

「悪かったですね、外見と中身が一致しないで」

不貞腐れたい様に言った。

「まあ、それは置いといて。騎士カリムって俺の限定封印に参堂してくれた人だよね？」

その言葉にはやては頷いてくれた。

俺の最大魔法の限定封印を施している。

「そつや、この前あったシャツハも同じ聖王協会の人や」

「あの人もか」

車を数時間走らせると目的地に着いた。

部屋に案内されると、クロノが居た。

四人はクロノに対して敬礼した。

「今回は個人的な用事での出頭だ」

「クロノくん、久しぶり」

「久しぶりだね、お兄ちゃん」

この言葉を聞くと音姫姉と由夢を思い出すな。

ちよつと肩身が狭いかな？

「お待ちしておりました」

一人の女性が現れた。

「始めましてですね。聖王協会の最高責任者の騎士カリムと申します」

俺達は一人ずつ挨拶していった。

カリムは順序良く話してくれた。

機動六課の設立とその裏で動いている人たち。

「カリムさんのレアスキルが関係しているんですか？」

「予言はピンからキリまで存在する」

結構当たる占いと思った方がいいかな？

「記入は旧ベルカ文字を使っていて解読や解釈が間違っていたりします」

俺の前に来た紙を見た。

「……聖なる時の時間、時の箱舟と揺り籠が揃いしとき新しい時代が訪れる」

その言葉にカリムが驚いていた。

「読めるん……ですか？」

「……何か不味い事をした？」

苦笑いしながら三人が見ていた。

「貴方は一体……」

「……一人だけ知らないというのは失礼だと思つぞ」

俺は小さくため息をついた。

「魔術師協会『ラクト』 朱雀支部所属戦艦『紫月』 艦長の桜内流と言います」

「別名が『時の魔術師』とも言われてるし」

「ましてや、時の戦艦をも操ってる」

操ってるのは俺だけではないけどな。

「因みに流くんはうちらより上や」

「上と言うとお幾つなんですか？」

「そこは聞かない方が良さそう思うぞ」

「どついうことですか？」

「推定年齢は既に数十万年は過ぎているかな」

その言葉にカリムは驚きを隠せなかった。

「大抵の旧文字は理解とかは出来ますからね」

話は戻り、預言書について語ってもらった。

それは、時空管理局の地上本部の襲撃に関する事だった。

「犯行に移すのは絶対にあいつだな」

モニターにはジェイルス・スカルエツデイが映りだしていた。

流の言葉で全員が頷いた。

「今回の護衛は地上しか出来ない……だから、四人にお願いする」

その時、流に通信が入った。

『ゴメンね。お兄ちゃん』

通信は李だった。

「どうした？」

『あの子の関する情報なんだけど……話して大丈夫かな？』

「平気だ、それに関する人たちだから。それで？」

『あの子のDNAだけど、聖王の事に関しての情報がびっしり……あの子は聖王の器のレプリカだと思う』

やっぱり、過去の清算が行わないといけないと言う事か。

「フィーナに伝達して、整備は精度SSで新装備も徹底に行う様にと伝えて」

『解った。清算しないといけないね、色々』

その言葉に俺は頷いた。

通信を切った。

「今の方は？」

「紫月の乗務員で医療班の方です」

その後は、他愛ない話をしてから俺達は宿舎に戻った。

「……会議まで後少しか……」

ベッドの上でぼんやりと考えながらそう考えた。

「多分狙う時はその時かな」

その時、扉が叩く音が聞こえた。

入ってきたのはなのはとヴィヴィオだった。

「流。パパ」

……はい???

なのはのほうを見ると同じように苦笑いしていた。

簡単に言つと一時預かりと言つ事だ。

本当の里親……つまり、良い所が見つかるまでの間と言つ事だ。

「親……つまり、優しい人が親と思つてると言つ事か」

その言葉になのはは頷いた。

「俺は構わないよ、ヴィヴィオの父親でも」

「流くん……」

「俺もちゃんとした父親は居なかったからな……小さい子には親は必要だしね」

ヴィヴィオを抱き上げると優しく髪を撫でた。

その言葉に向日葵のような笑顔を返してくれた。

第13話：小さな女の子（後書き）

うん、合体出来たから満足満足

杏『そういえば、もう一つあるんですよね？』

あるよ。

『ヴァルキリー戦乙女』と対を成す姿、『プリースト聖女』が存在するんだよね

李『名前も存在します。プリーストの時は【りあん李杏】です』

杏『反対にヴァルキリーの時は【あんり杏李】だよ』

ただ単に、特性が表に出て魔力が二乗したと考えればよいです。
では、この辺で……感想をお待ちします。

第14話：一時の平和（前書き）

今年最後の投稿……ほぼ毎日投稿していたのは気のせいかな（汗）

何かを出した方が良いのかな？

……とりあえず、考えておきます。

第14話：一時の平和

前回の共同で事件に参加していたスバルの姉『ギンガ・ナカジマ』が機動六課に参加してくれた。

「ギンガ、スバルと対戦後に悪いんだけど……」

なのはがギンガの所にやってきた。

「何ですか？」

「流くんと一戦してれないかな？」

「はい!？」

俺は、きよとんとした声を上げた。

「あれの能力の試運転したいんですよ」

「それは……」

「私でよければ相手しますよ」

俺は、小さくため息を吐いた。

「では、相手をお願いします……なのはさん」

そう言いつと、何かを投げた。

「カートリッジ？」

『擬似能力使用許可発令………』

カートリッジをグライビイにつけた。

「カートリッジロード……！」

流は光に包まれて光がはれると隊長格以外は啞然としていた。

バリアジャケットがなのはと同じになったのだ。

流石に、男性服だが。

「能力誤差はほぼ無し………と言う事でお相手宜しくお願いしますね、ギンガさん」

その後……

「やっぱり慣れない事はしない様にしないと」

「ギンガ、やってみてどうだった？」

「………どうって、本当にあの人はランクBなんですか？」

やっぱりと思いながら地面に座り込んだ。

「うん、ランクBで間違いないよ」

「流くん、もしかして手加減した？」

「してない、してない。擬似能力であれだけ出来た事が凄いと思ってる」

その後、隊長対フォワードで模擬戦になったのは言うまでもない。

練習が終わろうとしたと同時に足音が聞こえた。

「ヴィヴィオ」

なのはとフェイトが手を振りながらヴィヴィオを出迎えていた。

「慌てると転ぶぞ」

そう言った瞬間、見事に転んだ。

俺とフェイトが起こしに行こうとした瞬間、なのはに止められた。

「ここは土が軟らかいし、怪我してないはず」

そう言って、ヴィヴィオを見た。

「ヴィヴィオ、頑張って立ってごらん」

その場でヴィヴィオはぐずっていた。

痺れを切らしてフェイトが抱き起こしに行った。

その後を追うように俺となのはが二人の前に行った。

「フェイトママは甘やかしすぎです」

「なのはママは厳しすぎです」

「はいはい、喧嘩するとヴィヴィオに影響しちゃっぞ」

苦笑いしながら俺はヴィヴィオを抱きかかえた。

その後、全員で食堂に向かった。

「流さんはお父さんになってしまいましたね」

「この年でお父さんって言われるのもおかしいよな」

それは無いと後ろの二人……フェイトとなのはに小さく言われた。

テーブルを囲んで食事を取った。

「ヴィヴィオ、ピーマン嫌いなの？」

「駄目だよ、ちゃんと食べないと」

「なのはママやフェイトママみたいに綺麗になれないよ」

その言葉に、キャラがエリオに人参を上げようとしていた。

そのまま、口に運んだのだが。

「……ところで流くんは何食べてるの？」

「豆大福だけど？」

昼食にそんな料理はのっていない。

頼んだら出てくるかもしれないが。

「一体何所から……」

右手をグーにしてから開くと大福が乗っかっていた。

そのテーブルに居たなのはとフェイトとはやて以外は歓声に声を上げた。

「これが流さんの魔法……」

「そんな上等な事じゃないけどね」

「そんな事が出来る事自体凄い事だと思っよ」

「その分カロリーが削られているからね」

「何でも出せるんですか？」

好奇心を抑えながらスバルが聞いてきた。

「味を覚えたら大抵は出来ると思うよ」

食べ終わると席を立った。

「何所に行くんですか？」

「秘密と言っておこうかな…なのはさん」

「うん、了解したよ」

その言葉を聞いてから出口に向かった。

「……………」

俺は、瞑想していた。

練習場で水の上で立っていた。

『浮歩』

この力は、魔法でもない。

ましてや御神流の力でもない。

『九頭龍』

気の流れを司り、それを操る古武術……格闘

戦術と言う事だ。

この技は心を無にして行う技法。

水辺から陸に上がると型の方に入った。

右龍と左龍の二つ存在する。

右龍は攻撃主体の拳。

左龍はカウンター主体の拳。

それを使い分けながらの拳術だ。

終わり、小さく深呼吸をした。

「さて、午後も教導だし頑張るか」

「って言うか始まる前だよ、流くん」

声に気がつき振り返るとなのはが立っていた。

その後ろにはフォワードの面子も居た。

「ゴメンゴメン、気がつかなかった」

「今の技って？」

「九頭龍と言って、古武術といった方が良いかな？」

「流くんは少し休憩して、午後の教導にはいるつか」

俺は、輪の外の方に出た。

次の瞬間、携帯が大きく鳴り響いた。

「って、このメロディは!!」

急いで通信をオンにした。

『通信が繋がりました』

「フィーナ!？」

『はい、久しぶりです。流さん』

「状況を教えてもらっていいか？」

『現在、全ての機関及びエンジンの支障なし、追加武装もトラブル無しで使用可能です』

「順調に行ってるか」

『機関の最終調整が完了次第そちらに合流可能になります』

「了解した」

携帯の通信を切った。

「フィーナさんから？」

その言葉に頷いた。

「もう少ししたら合流が可能みたいだよ」

話が終わり教導に行こうとした時。

「流さん」

ギンガが声をかけてきた。

「もう一回、模擬戦をお願いしていいですか？」

「えっ？」

「今回は流さんの実力でお願いしたいんです」

真剣な瞳で俺を見ていた。

「……なのはさん、許可してくれますか？」

「解った。無理と怪我はしないでね」

その言葉に頷き、バリアジャケットを着た。

御神の剣士の構えを取った。

「はぁっ！...！」

ギンガが間合いを詰めてパンチを仕掛けたが最低限の動作で攻撃をかわした。

「はぁあっ!」

同じようにパンチが飛んで来たがかわした。

そして攻撃のラッシュが飛んで来たがそれも簡単に回避した。

ギンガは息を上げながら構えを取った。

「何で攻撃しないんですか？」

「えっと……攻撃はしてるよ」

指を刺すとバリアジャケットが無数に裂けていた。

ただし、本人には無傷で。

「い、いつの間に!？」

「攻撃が来た時にかな……怪我させないようにって言われたし」

「忠実に守りすぎだよ」

呆れながらなのは答えた。

「やっぱり凄いです。複合の能力が使えるのは」

「基本的に使っている流派は『小太刀二刀御神流』だからね」

基本的な動きは御神流だから…

現代は、殆どが御神流でしているけど。

他の型もしないと錆付いてしますからな。

その後、順調に訓練を消化した。

訓練が終わり、全員がストレッチに入った。

しかし俺はしなかった。

「どうしたの流さん？」

心配してヒイナが聞いてきた。

「変な空気がこの辺りから感じたんだけど……」

「変な空気……ですか？」

と言うか、懐かしい魔力なんだけど……。

「本当に流くんはカンがいいと言うか何と言うか」

苦笑いしながら草叢から出てきたのは……

「音姫姉さんに……さくらさん!？」

「久し振りだね。流くん」

「……一体、何なんですか？」

部屋に戻り、二人ともう一人にお茶を出した。

「流兄さん、私はついでなんですか？」

不機嫌な顔をしながら由夢が言ってきた。

「って言うか、三人が来るなんて思いもよらなかったから」

「もう、5年は経ってるんだよね……あの時間から」

「そうだね……時間の暴走事件から約5年ですからね」

「色々あったね」

「なのはさん達も遭ったし……その他にも色々」

苦笑いしながらそう答えた。

「流くんは元気そうだね」

「俺は元気が取り柄だしね。お母さんの健康を継いでなくて良かったよ」

「それを言つと、お婆ちゃん泣いちゃうよ？」

「それはそれで嫌かも……」

四人は笑って居た。

「それに、久々に流くんの『アレ』も見たかったしね」

「そつちが本命？」

パブロフの犬じゃないんだから。

苦笑いしながら手から饅頭と作り出した。

三人は饅頭をパクついた。

「味、変わったないね」

「俺にとつての思い出の味、変えるわけ無いですよ」

その後、暫くの間他愛の無い話した後三人は帰って行った。

「送らないでいいの？」

「うん、フィーナさんが送ってくれるから」

なら安心かな？

「じゃあね、流くん」

「バイバイ、流兄さん」

「またね」

三人は手を振ると光の粒子になって消えた。

『フィーナお姉ちゃん、ちゃんと送ってくれたみたいですよ』

「そっか……」

『大丈夫ですか？』

「すこーし、ホームシックになりそうかな？」

その時、シャインの小さな手が俺の頭を撫でていた。

「今はシャインちゃん達と機動六課が流さん達の家族ですよ」

後ろから声がかかけられ振り返るとフォワードの全員となのはさん達が居た。

「そうだね、ありがとう」

そして、一日が過ぎていった。

第14話：一時の平和（後書き）

さて、最後の投稿にしては中途半端な気もしないではないですが（汗）

では、来年も宜しくお願いします

第15話・紫月（前書き）

ちよつと、間隔あきました（汗）

第15話：紫月

今日は、地上本部で大規模な会議がおこなわれると言う事だ。

フォワード全員とライトニング・スターズの隊長と副隊長そして、部隊長が向かう事になった。

因みに、流とシャインは本部待機になって居た。

これは俺が志願した事なんだけど。

俺の事は、地上本部の皆はいい目では見てくれないからな。

『時間』を操る能力はこの世界でも俺ぐらいが使う事が出来ないだろう。

機械で出来たとしても、身体の負荷で無理だろうしな。

新しく入れたコーヒーをコップに注いだ。

「しかし……暇すぎるんだが」

仕事は全て午前中に終わらした。

『やる事が無いからって、仕事を全部終わらすなんて
「やる事が無かったからな……」』

「あっ……」

「流さん、どうしたんですか？」

正面からアイナとヴィヴィオが洗濯物を持ちながら宿舎の方に歩いてきた。

「こんにちわ、流さん」

「アイナさんに、ヴィヴィオ。こんにちわ」

流はヴィヴィオを抱きかかえた。

「今回、ここに残ったのは、ちょっと訳ありなんだけどね。何かあったら守ってあげるから」

そう言いながら、ヴィヴィオの頭を撫でた。

「宜しく願いますね、隊長さん」

「頑張ります」

「ぶっ……はっ……！」

練習を午後から始めた。

やる事が無かったからなんだけど……

『今頃は、内部警備の方に入ってる頃ですね』 人型モードになったシャインと手合わせそしてた。

一応、シャインも剣術関係は使える。

ただ、御神流剣術ではないけど。

「そつだな。何も無い事を祈るしかないけどね……」

『けど……もう見ちゃいましたからね。この後起きる事を……』
それを言ったら終わりなんだけどね。

けど、防衛だけは手を抜かないようにしないと。

夕方になり、ストレッチに入った。

「ディスクの上よりかこつちの方が気が楽だよ」

『マスターは頭脳よりか体を動かす方が良いと言いますからね』

「はいはい、悪かったな」

『そう言えば、フィーナお姉ちゃんから連絡がありました』

真面目な表情で俺を見ていた。

『忘れ遺産は私達で破壊しないといけないみたい……って言ってました』

忘れ遺産……ロストテクノロジーの破壊。

「時効になってるよな、流石に……」

『時効は無くなると思いますよ。今回の事件で』

溜息交じりでそう答えた。

『それと、整備は完了ですから今夜頃にそちらに着きます……って言いましたよ』

「了解。とりあえず、戻るか」

その答えに頷いて宿舎に戻った。

突然地面が揺れた。

「……って何だ!？」

『緊急強襲ですー!!』

通信が入った。

現在は、はやてが向こうにいる今は、グリフィスが指揮権を持つてる。

ジャケットを着て、外に出た。

『正面、魔導砲…ランクオーバーS!!』

「魔導障壁3重層!!」

正面に立って、正面から受け止めた。

何とか受け止める事が出来た。

「……敵数が3でそれぞれがオーバーSクラス魔導師と来たか」

俺のランクは今現在はクラスB……

はやて達が向こうにいる今、能力の引き上げは不可能に近い状態。

「負け試合としても構わない。シャイン、行けるか？」

『無理と言ったら一人だけ突っ込もうとするんですよね？ その覚悟は出来てますよ、時詠みの魔導書として、マスター流の魔導書としても覚悟は出来ていますですよ』

その言葉で、俺は頷いた。

「出来るだけ止める。レディ……」

『スタートです!!』

シャインと俺は散開した。

しかし、敵に押されていく一方だった。

「フレイメル・バスター!!」

拡散型の砲撃をガジェットドローンに命中させるが、当てた分の倍になって増えていく。

宿舎の方にも被害が出てき始めた。

「くっ……!!」

AAランクの魔導砲を連発し続けて撃っているため体の方にも負担が増えてきている。

その油断がいけなかった。

光が一直線に流に向かってきた。

高速詠唱で防ごうとした瞬間、光から物体が構成されてボディにヒットしてそのまま後ろに吹き飛んだ。

「がはっ！！」

口から大量の血液が噴出した。

「召喚獣と……女の子！？」

それは、エリオやキャロとは変わらないぐらいの年の女の子だった。

「ガリユー……」

女の子の指示で攻撃は来なくそのまま宿舎の中に入った。

「あなたの相手は私達よ」

盾を持った女の子と双剣見たいのを持った女の子が居た。

流は立ち上がり、交戦の構えを取った。

「そんな状態で戦うのかい？」

「なら消えてしまえ！！」

「くっ!!」

防壁を4重まで張ったが簡単に貫かれ再度後ろの壁に叩きつけられた。

「これで最後だ!!」

魔導砲の収縮を確認した瞬間……。

敵二人の目の前を光が落ちた。

「なっ!!」

『……次は当てる』

高高度からの魔導砲が放たれた。

そして、一人の女性が砲撃型のデバイスを二人に向けて静かに言い放った。

「ヴァルキリーモード……着たのか、紫月」

杏と李の融合モードがありその一方がヴァルキリーモードである。

その上空を埋め尽くすほどの大型の船が浮いていた。

『もう一度、言います。ここから離脱しなければ、貴方たちをこの砲撃で塵を残さずに、消し飛ばします』

その答えと同時にガジェットドローンが撤退し始めた。

もしかしたら、目当ての物が見つかって居なくなっただかもしれないが。

そんな考えをしながら俺は暗い闇に意識を引きずり込まれた。

俺が気が着いたのは、襲撃から数時間後だった。

右手は骨折で内臓にもダメージを食らっていたが何とか生きていた。

『このくらいの怪我なら私達が治療しなくても数日で完治しちゃうね』

何気なく酷いことを言われている気がするのはいは気のせいだろうか？

『話を変えるけど、お兄さんはヴィヴィオちゃんを見てないよね？』

『応急処置だけしていたんだけど、ヴィヴィオちゃんだけ見当たらないの』

「……ヴィヴィオが行方不明？」

その言葉に二人は頷いた。

それに、今の機動六課を見た。

半壊状態でもとも住める状態じゃない。

そして、機動六課の敷地内の海には『紫月』が停泊していた。

あの大きさでは何だから縮小魔法にてL級航行船と同じ大きさにした。

外見の大きさのみだけで、船内は変わっていない。

そして、通信で軽い説明を聞いていた。

「多分、あの女の子かな……」

目の前に現れた女の子を思い浮かんだ。

実行犯ならその可能性が頷ける。

「助けないと……約束破ったし。本当に助けないと」

流は、もう一つの通信を入れた。

『……この通信を入れたって事は何となく解ってますよ』

「流石だね、フィーナ」

『かなり長い年月を一緒に居るんですから解ります。機動六課の作戦関係と移住ををこの艦で行いたいということですよ？』

その言葉に頷いた。

『その答えは出来ていません。承認します。たった今、はやて様にも通信入れました』

その言葉を聞いて、次の指示を促した。

「人員が搭乗次第出港準備をしなさい。最優先事項で」

『解りました。艦長』

そして数日が経過した。

この前の宣言通り、流の傷は完治した。

「ギンガ陸曹とヴィヴィオが行方不明か……」

艦橋で今回の時間に関しての事とギンガとスバルに関してのこと

を通信で聞いていた。

「そして、機人モードか……魔道ではなく他に關してのエネルギーか……」

『それ關しては在りといえは在りですね』

「自然の氣……作り出したエネルギー……確かにありな方だな」

キーボードを打ちながら話していると……

『ただいまです』

『戻りましたです』

入り口からシャインとリインが入ってきた。

その後をフォワードの面子と隊長と副隊長やロングアーチの面々が入ってきた。

『皆様、お久しぶりですね』

「フィーナさん、久しぶりです」

「ここに集まるとは思いませんでしたけどね」

『そうですね。今回の作戦關係は個人的なものもありますけどね』

「個人的って何かあるんですか？」

『犯人の犯行声明時に解ります』

その答えかと同時にスカリエッティの犯行声明そして……

「巨大な箱舟が…浮上しました」

「聖王のゆりか…」

そして、その起動キーがヴィヴィオだった。

「あいつら……」

俺は、奥歯を食いしばって画面を睨んでいた。

『……本気で頭に血が上ってますね』

暫く、落ち着いてから話す事になり一時解散した。

その後、作戦会議室に、機動班の全員が呼び出された。

「流くん、さっきの意味教えてもらっていいかな？」

『それは私から教えます』

そこに現れたのはフィーナだった。

『聖王のゆりかごの製作者は私と流さんです』

その言葉で、フォワードの全員が驚いていた。

「流さんは一体何歳なんですか？」

「もう、ウン十万年は生きているよ。アレは、依頼で作った運搬形の箱舟。色々改造されているみたいだけど」

『あの機体の本当の恐ろしさは二つの月が交わる場所に到着した時に起こります』

そう、カリムが予言したあの話の道理になるということだ。

『こんな所で掘り返されるとは思いませんでしたけど』

そのこの部分に関してはフィーナと同じ考えだ。

「今回の作戦に関しては、たまたま時空犯罪者やナンバーズが居るだけの話や。目的はレリックの回収……まだ、あの子達を助けるチャンスがあるということやな」

はやての言葉に全員は頷いた。

そして解散した。

自室で休んでいると、ドアがノックした。

「今、大丈夫ですか？」

外から聞こえたのはヒイナの声だった。

「大丈夫だ」

少し元気が無かった。

「……不安か？」

そう言葉に小さく頷いた。

「確かに不安かもしれない……けど、これは成功しないといけない事だ」

「それは解ってます」

「俺も不安だよ。この作戦が成功するかどうか」

聖王のゆりかごのためにクロノの艦体も出てくると思うし。

けど、壊れ無いと思う。

強化自体していれば。

「けど……」

「逆転の発想」

その言葉にヒイナは少し驚いていた。

「無理と思わないで『必ず成功する』そう考えればいいんだよ」

「成功する？」

「言葉には言霊っていうのがあるんだ。不の言葉を悪い事になっ
てします。なら、反対の発想ならどうだろうか？」

その言葉にヒイナは驚いていた。

「そう言う事だ……そしてヒイナは強くなってる、それは俺が保障
する。だから全力で立ち向かっていけ！」

「はい……」

そして部屋から出て行った。

そして、最終戦と舞台が変わっていく……

第15話：紫月（後書き）

流「やっと、出てきましたね……」

確かに、杏と李の特殊能力の一つがね。

流「ヴァルキリーモード……」

ヴァルキリーモードは杏の意識が全面的に表に出てきている状態だな。

流「もう一つは？」

プリーストモードは反対に李の意識が全面的に表に出てきている状態だ。

第16話：揺り籠（前書き）

更新遅くなりました（汗）

第16話：揺り籠

「さっきの通信で地上にもナンバーズが確認できたみたい」

その言葉でスバルの顔が引き締まった。

「……取り戻さないと必ず」

「はい!!」

『こっちは流様に関しての情報です』

はやての横からフィーナが入ってきた。

『あかつき紅月及びかつき華月は最終段階に参加は可能だそうです』

それだけでも充分だな。

「了解、智也さんと朱雀じいさんに感謝しないとな」

出勤の時間まで全員に待機を言った。

俺はいつもの通り技の練習を入ろうとしたとき、念話が入った。

「流くん、今時間いいかな？」

それは、なのはだった。

「別に構わないけど……カフェテリアで待ち逢おうか？」

その言葉を二つ返事で帰ってきた。

俺は急いで、カフェテリアに向かった。

自分の船なんだけど……やっぱり道に迷うよ。

カフェテリアの前に行くとなのはが立って待っていた。

「間に合ってる？」

「少し遅刻だけど……大丈夫だよ」

中に入ると、真須美さんが応対していた。

他の人達の憩いの場になっている。

「何が宜しいでしょうか？」

「カフェオレで」

「俺は……」

「流さんは何を頼むか知ってますから大丈夫です」

「……流石は、ここのカフェテリアの店長さん」

「何十年以上の付き合い……というか艦内のパートナーなんですか」
「ら」

苦笑いしながらそう言ってきた。

そのまま奥の方に入っていった。

数分後、紅茶のセッティングした後、他の席に走っていった。

「話はやっぱり……ヴィヴィオのこと？」

その言葉に頷いた。

やっぱり、保護責任者もあると思うけど……一番強いのは。

「母親としての思いかな」

「本当に大丈夫なのか？」

「それに約束したから」

約束。

俺もヴィヴィオと『約束』した。

ちゃんと守るって……

「ちゃんと取り戻そう。機動六課の大切な仲間と家族を」

その言葉に頷いた。

「今回の件で『海』の方も本腰でゆりかごを破壊に参加するって言うってきた」

「と言う事は……」

「今回は俺も本気の本気で出撃をするし解除もする」

解除……能力限定解除と砲撃の解除『アルカンシエル』だ。

その言葉になのはは驚いていた。

「だから……時の覇者『桜内流』は全力で今回の任務に入るよ」

作戦時間の少し前になり再度フォワードと隊長と副隊長を呼んだ。

『先読みしました』

その間にフィーナが入りそう呟いた。

『困難な任務かもしれませんが必ず成功します』

「フィーナがそういうなら絶対に大丈夫だな」

「時の御巫様ですから」

『先に隊長さんたちが先陣した後フォワードの皆さんは地上の方を
願います』

その言葉に全員が頷いた。

「今回はデバイスと能力の解除をするから」 『最終的な解除は私が
行いますけどね』

「流さんは五段階プラス の解除が存在するの」

その言葉にフォワードの面々は首を傾げていた。

「プラス …… 俺の保有する魔導砲のリミット解除」

「それって一体？」

スバルが聞いて来た。

「俺の過去を聞いたよな……あの時、暴走した時の魔物はどつちっ
て倒したか？」

「たしか、戦艦並の魔導砲でしょうめ……まさか!？」

その答えに俺は頷いた。

「その魔導砲は俺が使った魔導砲『アルカンシエル』だ」

「アルカンシエルって……巡行艦が保有する魔導砲では!？」

その答えに俺は頷いた。

「本当に流さんって何者なんですか？」

「人知からかけ離れた者かな……なのはさん、リミット解除お願いします」

すると、流の周りから六つに立体魔法陣が浮き出た。

『リミットリリース!!』

次の瞬間、魔法陣が砕けた。

『完全解除まで5分はかかります……出撃準備をお願いします』

フィーナの言葉に全員が頷いた。

その後、五人は空に飛び立った。

揺り籠周囲

「これを突破しないといけないか……」

「流くん、どれくらいまで削れそうかな？」

はやてが側に来て聞いてきた。

「初期に九割……後は、皆さんの頑張り次第だな」

その言葉にはやてが頷いた。

「流くんお願いや……」

『星星の願い……我が流星となりて敵を薙ぎ払え!!』

すると、数万の魔法球が発生した。

「シュート!!」

放たれた魔法球は次々とガジェットドローンを爆破していった。

「今の内に突入口を見つけなさい!!」

その言葉と同時に、散開していった。

「とは言っても……ガジェットドローンの生産工場みたいな物だからなあ……」

中の本体を壊さないという意味が無いし。

けど、それならとことん付き合いますか。

「抜刀……はああああ!!」

ソニックと神速を同時に発動させた。

敵の間を駆け抜けけると、敵機は一瞬にして爆発していった。

「セカンドリリース!!」

音を越えた。

次に超える物は『光』

解除した瞬間、近くに居たガジェットは爆散した。

すぐさまに構え直す。

「ふう……」

小さく、深呼吸をした

『Bastard mode』

「ドラゴンバスター!!」

龍の魔法弾が一斉に打ち出した。

「……二段階解除確認」

『器、開放』

器……魔力を溜め込む器を開放した。

「風龍開放！！」

風の渦が流れの中心で起こった。

「全てを呑み込め！！」

龍の形状に鳴った瞬間、勢い良く放たれた。

『流くん、聞こえる』

はやてが通信を入れてきた。

『いま、中に入る突入口が発見！！ 突入して』

「了解」

指示された場所に行くとなのはとヴィータがいた。

目で合図すると一気に突入した。

降りてる時、急に落下した。

「AMF!!」

魔力を高めて落下を遅くした後、地面に着いた。

「これからどうするんだ？」

「聖王が居る場所と魔結晶が保管されている区画が別々にある」

そこを動かさないようしないとどうにもならない。

「俺はクドウロを止める…二人は……」

「そっちはあたしが行く…二人がヴィヴィオを助けに行った方がいい」

「それじゃ、ヴィータちゃんか!!」

「ヴィヴィオとの約束があるんだろ二人は……なら助けに行つてあげるんだな」

……全部知っていたんだな。

「ヴィータ、最後だけ約束してくれ」

流は真剣な目で言った。

「必ず再会しよう。絶対に」

そして俺達は飛び立った。

「最後の最後にちゃんと呼んでくれたな…主『流』」

「くっ……」

魔法球を作り出した。

「ショット!!」

バリアで包み込んだ魔法球を放ち敵に撃ち落していった。

「この先が聖王の座になってる」

『M a g i c a r e s p o n s e』

レイジングハートとグライビィが同時に答えた。

「レベル1発動!!!」

魔力の錠を外した。

「……捕らえた!!! シュート!!!」

魔力砲を放った。

次の瞬間、ナンバーズごと呑み込んだ。

「本当に、人間か!？」

「もう既に人間を止めた存在なんだ……」

『Bind』

拘束した。

「くっ……」

「ここで立ち止まるわけにも往かないんだ」

再び浮かび上がり猛スピードで消えた。

なのはと俺は再び飛び立った。

聖王の間に行くと……

「ヴィヴィオ!!」

「来るのが遅かったですわね」

ヴィヴィオの横に一人の女性が居た。

「……次元犯罪者『ナンバーズ4』クワットロ」

その言葉でクワットロは驚いた顔をした。

「魔術師協会ラクト、朱雀支部戦艦『紫月』艦長【桜内流】!!」

刀を構えた。

「私物無断使用とその他諸々で貴女を逮捕します!!」

その言葉でクワットロは小さく失笑していた。

「なら最初にこの子で相手してもらおうかしら……」

ヴィヴィオの周りから魔力が渦巻いた。

「俺は覚悟は出来ている……」

目の色を真紅に変えた。

なのはも同じく構えに入った。

クワットロは消えて三人だけが残った。

「貴方達は私のお父さんとお母さんじゃない……」

「……はやつ……」

次の瞬間、二人は後ろに吹き飛ばされた。

壁に打ち込めれて陥没した。

「あいつの幻覚かよ……」

これまた強力だな。

「なら、とことん付き合ってやるよ……」

同じように魔力の渦が巻き起こった。

「聖王の器……覚醒……」

『Time release』

一瞬にしてヴィヴィオに詰め寄りパンチを食らわせて後ろに吹き飛ばした。

『第3エリア搜索完了……流くん、もう少しだけ持ち応えて』

なのはの通信で頷いた。

「ヴィヴィオの今の思いすべて受けて止めてやる……来なさい!!」

「はああああ!!」

加速して詰め寄ってきた。

「龍王の籠手」

剣を籠手に変化させて攻撃を受け止めた。

ラッシュが来たがギリギリで受け止めた。

『敵の居場所特定……流くん!!』

「Bind」

二色のチェインがヴィヴィオに巻きついた。

『WAS!? 搜索型の!?!』

『クワットロ……あなたの幻想は見飽きた』

『壁抜き……そんな事出来る訳が……』

次の瞬間、声が震えていた。

「リミット完全解除……」

二つの魔力の塊が出来上がっていた。

「デイバイン」

「ドラグーン」

「バスター!!!」

放たれクワットロを呑み込んだ。

次の瞬間、ヴィヴィオが苦痛の声を上げた。

同じように魔力の渦が巻き上がった。

「!!!?」

渦が消えた瞬間、一気に流との間合を詰めて後ろに吹き飛ばした。

「ながれくつ!?!」

なのも同じように吹飛ばした。

「流パパ、なのはママ!」

「ヴィヴィオ!!!」

その声で二人は顔を上げた。

「意識だけは戻った?」

違う、あれは、聖王のゆりかごの防衛システムか！

「体が……言う事を聞かないの」

「ゆりかごの防衛システムが起動したんだ」

ゆっくりと二人が起き上がった。

「動きと喪失……どちらかを消し去れば呪縛は解き放たれるはず！」

「絶対助ける……」

「もうママ……なのはさんと流さんを傷つけたくない……だから！」

「……君の望みは何？」

真剣の目でヴィヴィオを見た。

「私は……私は……」

「ヴィヴィオが今に一番思っている事は何だ？」

「なのはママやフェイトママ……流パパと一緒に居たい!!」

悲痛の叫びが聖王の間に響いた。

「君の望み……魔術師協会『ラクト』朱雀支部の桜内流としてそして……ヴィヴィオのパパとして望みをかなえる!!」

「流パバ……」

「約束は……今度こそ守る」

三人は再度ぶつかった。

なのはと目で合図した。

「少し痛いけど……我慢できるか？」

その言葉で、ヴィヴィオは頷いた。

「タイムカウント30!!時枷の鎖……無限に絡みつけ!!」

時間魔法陣が浮き出た瞬間、鎖がヴィヴィオに絡みついた。

「なのは!!」

上空では魔導砲の発射体制になっていた。

「防御を抜いて魔力ダメージを通す……出来るよねレイジングハー
ト」

『Yes, master』

「全力全開……スターライトブレーカー!!」

『Starlight Breaker』

最大級の魔導砲撃がヴィヴィオを包んだ。

「くっ……」

砲撃の風圧で流は後ろに押された。

煙が晴れると、小さなヴィヴィオが倒れていた。

「ヴィヴィオ!!」

「来ないで!!」

ヴィヴィオが叫んだ。

「一人で……立てるから」

あの基地での約束が……

瓦礫に捕まりながらも何とか立った。

次の瞬間、なのはがヴィヴィオを抱きしめていた。

「頑張ったな、ヴィヴィオ……そしてお帰り、ヴィヴィオ」

そういつて、優しく髪をといた。

「ただいま。なのはママ、流パパ」

そして、はやてがやってきた。

「……遅いぞ」

「うう、流さん酷いです」

「ゴメン、このトンネル抜けた所に敵がいるから回収をお願い」

その言葉に、はやては頷いた。

ドクン

一瞬、心臓が大きく跳ねた。

「!!!?」

痛みに耐え切れず片膝を着いた。

「流くん!!」

「流。パパ!?」

「大丈夫……直ぐに治まる」

軽く心臓を叩いた。

「さっきの時間魔法が影響してるんじゃない!!」

「多分……大丈夫だよ。これが終わるまでは倒れたりはないから」

大丈夫という暗示をかけながら立ち上がった瞬間、警報が鳴り響いた。

はやてが戻って来た瞬間、最上級のAMFが展開された。

はやてが出てきたと同時に、入り口全て封鎖された。

「下がって!!」

構えをした。

「硬気功術……『練硬掌』」

塞がれた壁に衝掌を入れた瞬間、壁が大きく変化した。

しかし、それだけだった。

「硬すぎだし」

「何とかしないと……流くんやなのはちゃんに力使って動けへんし」

「大丈夫、援軍がもう少しで到着するみたいだ」

流がそういうと、こっちに近づいて来る音がした。

次の瞬間、壁が爆発した。

「お待ちせしました!!」

「助けにきました!!」

そこには、機人モードのスバルとバイクで駆けつけたティアナが居た。

ティアナの後ろにはやてがスバルの背中になのは前にヴィヴィオが抱きかかえられていた。

「スバル、カートリッジ貸して!!」

一つパージしたカートリッジを受け取った。

「擬人モード形成!!」

スバルのデバイスと同じ能力になった。

六人は急いで揺り籠から脱出した。

無事に外に出て、ある程度距離を取った。

『戦艦隊からの砲撃が来ます!!』

時空管理局の砲撃が揺り籠を襲った。

しかし、砲撃が揺り籠に当たる直前に消滅した。

「なっ!?!」

「戦艦砲撃吸収兵器……そんなもの付けられているのか」

並みの攻撃では弾かれるなら……

「流さん!?!」

離れようとした時にティアナにばれた。

「何所に行くんですか!?!」

「あの揺り籠を破壊しないと……」

「破壊つて……今の状態じゃ流くんの『アルカンシエル』だって無効化されちゃうよ」

「……なら、『アルカンシエル』以上の砲撃を加えて見れば良いんじゃないかな?」

「冗談交じりで答えた。」

「冗談ではないけど……」

「因みにそろそろ……」

その時、通信が入った。

『こちら【華月】、紫月のサポート要員で着たんだが指示を頼む』

『こっちは【紅月】じゃ、桜内流の坊主の参戦により参ったのじゃが……指揮を頼む』

この通信は全ての人に響き渡った。

「智也さんと朱雀さん!!」

『こちら紫月!!紫月の護衛をお願いします!!』

『了解』

そして飛び立つとした瞬間。

「待ってください!!」

一機のヘリが近づいて来た。

「大事な贈り物です…受け取ってください」

『マスター!!』

シャインが飛び出してきた。

「シャイン」

『今からやる事はシャインだって判ります……シャインは、【時の書】のリンカーコアです！！ 精神はマスターともリンクしていません！！』

その言葉は、今から何をするか分かってる口調だ。

そうだったな。

「シャイン、力を貸してくれるか？」

『はいです！！』

流が手を伸ばしシャインが手を重ねた。

「『ユニゾンイン！！』」

背中から六枚の白き羽が生まれた。

「綺麗」

「かつこいい……」

『今から通達して……半径10km以内に入らない事を全部隊に通達して』

「了解や」

『杏、李、手を貸して！！』

『云われなくつても』

『するつもり……私達はどうするの?』
通信で二人の声が聞こえた。

『紫月に帰還後、管制官室に向かって、【アレ】を撃つからフィーナの補助を頼む』

『……なるほど、確かにアレなら吸収されないけど、範囲が足りないよ?』

『足りない分は俺が撃つ!!』

その言葉で二人が大声を上げた。

『待つて!!時空歪曲砲は理論上は人間には撃てない魔導砲だよ!』

『……大丈夫だ。俺は人間を止めた存在だし……頼む!!』

暫く沈黙が訪れた。

『……チヨコパフェ!!』

『はい?』

杏の言葉ですっ呆けた声を上げた。

『この戦いが終わったら私と季にカフェの特大チヨコパフェ二つ奢』

りなさい!!--』

『あ、杏ちゃん!!--?』

『……約束、ちゃんと守るよ』

『お兄さん!!--』

李が間に入るように声をかけてきた。

『ちゃんと……ちゃんと帰ってきてくださいね!!--』

『約束だ……』

通信が切れた。

もう一回全員を見て、一回頷くと地上に急降下した。

『シャイン、砲撃ポイントに着いたよ』

廃墟のビルとビル間に降り立った。

『場所も申し分ないです』

俺は小さく深呼吸した。

『サクサクと終わらせて宴会でも開くか？』

『賛成です』

刀を遠距離型のデバイスに変換させた。

『クロノ聞こえる？』

『ちゃんと聞こえてる……何となく用件は分かってるがな』

苦笑いしながら答えた。

『…アルカンシェル解除を要請する』

『了解：リミットリリース！！』

『解除確認……感謝するよ』

『絶対に帰って来い……』

そのまま通信が切れた。

『シャイン、擬似ドライブリリース！！』

『ドライブレベルマックスリリース！！』

流は一つのマガジンを取り出した。

それをデバイスにセットした。

『ドライブ!!』

弾を全て使った。

次の瞬間、色違いや魔法陣が出来上がった。

『魔法陣……集結!!』

一つに纏まり光が収縮していった。

『エネルギー充填率40%です!!』

『うおおおおお……』

自分の中にある魔力を開放した。

『充填率80%です!!』

もう少しもう少しだけ……

ドクン

『!?!?!?』

突然膝を尽きた。

『ぐはっ』

口から血を吐いた。

『マスター!?!』

『シャイン……砲撃準備に専念しろ!』

『だ、だけど……』

『時間魔法の影響だ……ここで終わらせないとこの世界の世界が滅亡する……いいから!』

『分かったです』

絶対……絶対に撃たせない。

【……私も手伝う……だから、この星の命を救って!!】

次の瞬間、流の体から一人の女の子が出てきた。

【えへへ……初めまして、お父さん】
優しい笑で流を見ていた。

……って待て!?

『お父さん!?!』

【うん……私を拒まないで育てて人。だからお父さん】

『えっと……』

【そんな事は後……私の魔力も渡すから……この星の命を救って】

今は考えてる時間はないな。

少女が流の杖を握った瞬間。

『魔力充填一気に満タンです!!』

『紫月と流のエンカウント開始します!!』

10カウントから始まった。

『3……2……1……シュート!!』

二つの光が揺り籠に接触した瞬間。

空間が捻じ曲がり揺り籠は爆散した。

そして、流は意識を失った。

そして、意識を失ってから三日が過ぎた

「……ところで君の名前は？」

カフェテリアで今後の事を話し合うべく集まっているのだが

「私の名前？」

オレンジジュースを美味しそうに飲んでいる少女に疑問を投げかけた。

「桜内真優」

その言葉で、その場に居た全員は固まった。

「えっと……流くん？」

笑顔でたて筋立っていないでください。

笑顔が怖いです、皆さん。

「とは言っても、血は繋がってませんよ？」

「確か、あの時も言っていたよね？」

「はい、龍神の血を引きし人に宿るんです……人格発生までは至りませんけど」

女性陣の笑顔にも屈していない様子だし。

「龍神族って確かピンからキリまであったよね？」

『はい。スカルドドラゴンからフォースドラゴンの種族でしか存在していませんけど……』

「絶滅ドラゴンは何種類が存在してるよな？」

「ライトドラゴンとダークドラゴン……統括していたレインボードラゴンですね…有名どころは」

「あつ、真優絶滅してるんだ」

苦笑いしたように答えた。

「……絶滅したドラゴン？」

「うん、レインボードラゴンです」

その言葉でまたしても全員が固まった。

「宜しくね、お父さん」

右腕に寄り添いながらそう言った。

次の瞬間、左腕が引っ張られた。

「およ？」

向いてみると……

「むう」

ヴィヴィオが引っ張っていた。

「……負けないよ」

「ヴィヴィオも負けないもん！」

願いわくは……二人が喧嘩しないようにお願いします。

そう天に願うしかなかった。

第16話：揺り籠（後書き）

犀龍「雑談コーナー」

シャイ『今回は時間かかりましたね（汗）』

犀龍「あはは……携帯からの編集になるからかなり時間がかかりました（汗）」

フィー『編集が開始したのが10時前で』

シャイ『終わったのが日付が変わる10分前でしたね（汗）』

犀龍「うん、腕と精神が疲れましたorz」

シャイ『あはは……お疲れ様です』

犀龍「そう言えば、おれってキャラに殺されたりとかされてないな？」

フィー『それは……昔の事が大きいかと思いますが（汗）』

シャイ『では、コラボしたい方は募集しちゃいます』

犀龍「……………イマナント？」

フィー『作者を亡き者にしたい方はどんどん言ってください』

犀龍「までえええええええええええええええええええええええい！！」

シャイ』では、また次回です
』

第17話：最後の日（前書き）

なのはS t S編そろそろ終焉です（もう少し続きます）

第17話：最後の日

あの事件から一ヶ月が経過した。

宿舎と仕事場も無事に復旧した。

「皆、もう一流のストライカーだな」

少し離れたビルからみんなの訓練を眺めていた。

「そつだね……流くんは4月からどうするか決めてるの？」

「期間があつたね……取り合えずはまた時間内での生活が始まるかな？」

「そつか……ずっと一緒に居られないんだね」

「ヴィヴィオの成長も見たんだけどね……問屋が降ろさせてくれなかつたよ」

苦笑いしながらフェイトと話をしていた。

「……湯でも入れようかな」

流は六人の所に行った。

「えっ……午後は紫月の前戦メンバーと団体試合ですか!？」

「そう、相手はラクト艦の前衛メンバーだから全力で相手しても構わないみたいよ」

そこには、流以外の機動六課メンバーが集結していた。

因みにシャインもいない。

「紫月前線メンバーって事は……」

『流さんを筆頭にシャインちゃん、李さん、杏さんですね』

「シャインさんも出るんですか!？」

「皆知らなかつたっけ?人型になれるって事」

『いつもリインと同じモードで戦闘に参加していましたからね』

苦笑いしながらリインが答えた。

「因みに今回はフィーナさんのサポート付きだからね」

その言葉に全員が口をあけていた。

開けていたのはフォワードの全員だけだ。

「とりあえず、今日の教練は軽くしたのはそのせいだからな」

「あのお〜」

「どうした?」

スバルが手を上げてきた。

「なのはさん達は勝てる自信はありますか?」

「実は無かったりするのよね」

「自分の得意分野に持っていけば良いんだけど……」

「その隙は絶対に作らせてくれんな」

はやても苦笑いしながら答えた。

「幸いにも時間魔法使ったら負けを認めるって言っていたし」

「その分、全開で相手してくる」

「全開って……」

「現在のランクでの全開って事だから」

「流石にアルカンシエルや時空歪曲砲は撃つのにリスクが高いしな」

「時空歪曲砲も限定封印する予定だし……今回は使わないかな」

「いや、流石にそれは」

誰も受け止められないだろうな。

「そう言えば、真優って子は出て来ないんですか？」

その言葉になのはは首を横に振った。

「生まれて間もないし……訓練と経験を積ましてからじゃないかな」

「……これが経験って考えてないんですか？」

『考えたはずですよ……役不足って言うてましたけど』

苦笑いしながらリンが言っていた。

「役不足って、酷くありませんか？」

『……練習相手が本気状態の【杏さんと李さん】ですよ』

その言葉で沈黙が流れた。

「……………どれ位強いんですか？」

隊長陣が全員黙り込んだ。

『例えが出てこないですね』

「私達……ヴォルゲンリッターと主はやてのユニゾン状態で戦って勝てるかどうかだな。後、私のユニゾン状態でもだ」

「十分すぎるほど強いですよ」

だから出さなかったと思うと小さく心の中で呟く隊長陣だった。

「そうだった。言い忘れていたけど今回はユニゾン無いから安心してね」

「流石に読み手と語り手が合わさったらな」

ヴィータが溜息混じりに答えた。

「……って待ってください。杏さんと李さんが参戦するんですよ！？」

「ユニゾンが無いから安心だけど……攻撃方陣は完全に出来上がってるから」

画面に四人の顔と陣が掲載されていた。

「流くとシャインちゃんは内容は分かってるよね？」

その言葉で六人は頷いた。

「杏さんは、接近戦型です。ただし、杏さんのデバイスには注意してください」

画面には刀が映し出された。

「杏さんが使ってる刀型デバイス【風雅】これは、どんな防御の魔法でも抗魔【レジスト】して攻撃するの」

「李さんは遠距離と補助魔法が得意……強力な広範囲の攻撃魔法も無詠唱に近い状態で放つからこちらにも注意してね」

「…隙が殆ど無いんですけど」

「って言うか、流さんとシャインさんの他タッグも同じような者じゃないんですか？」

「今回はフィーナさんのサポートが入るからそれ以上になるのは間違いないかな」

「それだけ、連携が取れているチームという事になるかな？」

そして、ミーティングは進んでいった。

「さて、午後の訓練は……紫月残前線メンバーVS機動六課フォワードだな」

そこには、紫月の攻撃部隊の4人と機動メンバー6人が対峙していた。

「単なる模擬戦じゃないから気をつけてね」

『今回は俺から始める卒業訓練だ』

「卒業試験って………どういことですか!？」

ヒイナが驚いたように聞いてきた。

「緊急で次の仕事が入った……本来なら最後まで見届けるのが義務なんだけど」

『出来ないのが心残りです』

心から残念そうな表情で言っていた。

「俺を倒す勢いでかかってきなさい!!」

『今回は開始前に攻撃詠唱は使用可能とします』

全集域の音声マイクでフィーナが答えた。

『開始1分まで……位置に着いて下さい』

「カウント後一気に散開するよ」

流さんだから、絶対に砲撃が来る、そして。

「あと、キャラは一番に狙われるから全力で逃げて」

ヒイナとレチエは確信して様に答えた。

流さんのことだから确实だし。

『エンカント10秒前』

フィーナの声が響き渡った。

『3……2……1……』

「全力で散開!!」

一気に散開した瞬間

さっき居た場所が空間爆破した。

「よ、容赦ないよ」

「流石に砲撃戦はこっちが不利しかない……！！」

殺気があり構えた瞬間

刃が弾かれた。

『対応良好かな』

身長より倍ある刀がヒイナに襲い掛かった。

「くっ……」

『ちょっとは持ってくれそうかな……』

後ろに反り、杏は構え直した。

「重い斬撃………だけど負けません！！」

『来なさい。思い事、受け止めるから……！』

エリオとキャロは一緒に散開していた。

「皆さん大丈夫かな……」

「大丈夫だよ。きっと」

『皆さんの心配より自分達の心配した方がいいよ』

「魔力！！」

急速旋回した瞬間、さつき飛んで居た場所に檻が存在していた。

『空間の檻を回避しましたね』

宙に浮いていた李がいた。

『貴方達の相手は私が勤めさせていただきます』

すると、二つの書が出てきた。

鳳凰の書と朱雀の書が出てきた。

『切り裂く刃……焼き尽くす煉獄の炎』

左には渦風と右には炎が出来ていた。

「二種類の物質変換魔法展開!？」

『今回は本気で当たらせて頂きます。手心は出来ないので許してくださいね』

『スバルさんとティアさんは私が担当です』

「本当に人型になってますね、シャインさん」

『はい、今回本気で行っても良いって事ですから』

満面の笑みでそう答えていた。

「2対1だけど、シャインさんの実力は分からないし」

『行きますです!』

一回地面を蹴った時姿が消えた。

「瞬動術!？」

防御に入った瞬間、スバルは後ろに弾き飛ばされた。

『ガードが間に合いましたね』

「ぐっう……」

何とか踏ん張り、倒れるまでには行かなかった。

「スバル!」

「平気……だけど」

『紅天の書……』

すると、一冊の書が出てきた。

「赤い魔導書!」

『リンちゃんの対極にして生まれたシャイです……リンちゃんが氷属性ならシャイは炎の属性ですよ』

体に炎を身に渦巻いた。

『因みにシャイはリミット掛かってませんから宜しくです』

「本気でやらないと……」

「勝てないって事だね」

二人はぶつかった。

「……防御ばかりだと魔力が直ぐに尽きますよ？」

「……」

防御を抜いてレチエを後ろに弾き飛ばした。

しかし倒れず、踏んばった。

「強情ですね。無形の針」

再度、壁に吹き飛ばした。

壁に当たる寸前で体勢を持ち直したが。

「シュート」

次の瞬間、大の字の状態に壁に貼り付けにされた。

「えっ!？」

「目に見えない針を貴方の防護内でアタック時に侵入させました……
…後は攻撃指示すればその状態になります」

「ここまで……なの？」

「レチエナ・O・レビーティ……これで私の試験には不合格になります」

グライビィを振り落した瞬間……

『小太刀二刀翁流・龍衝撃』

刀が弾かれて流は後ろに弾け飛ばされた。

「レチエー！…」

「……ヒイナ、どうしてここ！？」

「どうしても何も……杏さんを突破してきたんだけど」

『えへへ、ゴメンね兄ちゃん…負けちゃった』

残念そうな声ではなく、生き生きしていた。

「あらら、負けたんだね」

『それから、ついでになっちゃっただけ……』

『うえ〜ん、マスター負けちゃいました〜』

『ゴメンなさいです、お兄さん』

目の前には、機動六課前衛メンバーが全員レチエの前に構えて居た。

「かなり危険な状態……だね」

「流教官……降参してください!!」

ヒイナが叫んだ。

「……俺を倒さないと試験が終わらないよ」

「なら……」

ヒイナが一步前に出た。

「私が流教官を倒します!!」

「来い!!」

次の瞬間、視界から消えた。

流は神速で入り、ヒイナの動きがスローモーションに……ならなかった。

「なっ!?!」

「うわああああ!!!!」

『小太刀二刀翁流・決戦最終奥義【無繋刃】』

無数の刃が襲い掛かってきた。

「ぐっ!!」

神速が解除されて一気に後ろに飛ばされた。

壁をいくつもぶつかった。

そして、グライビィは粉々に壊れた。

気がつけば練習場ギリギリまで吹き飛ばされていた。

「……全員、合格だよ」

そしてそのまま気を失った。

気がついたのはそれから2時間経っていた。

「……グライビィ今までありがとうな」

技術班の検査結果は修復不可能と事だった。

あそこまで壊れたんだから仕方ないかな。

あその後、俺は緊急に医務室に運ばれた。

その時、俺が倒れた時に隊長陣全員は血の気が引いたという事だ。

「あそこまで派手に吹き飛ばされたんだから仕方ないかな」

シヤマルなんか驚きを通り越して呆然となつて居たとヴィータが言っていたし。

「ヒイナがあの時に神速を発動したから俺は驚いたしな」

結果を見ながら呟いていると……

「事実上、ヒイナのあの二つの能力は封印できない状態……ってか
特技なんだから封印事態不可能だし」

トントン……

扉が開く音が聞こえた。

「パパ」

ヴィヴィオとなのはとフェイトが訪れた。

「三人ともいらっしやい……」

「今日は静かにしているんだね」

「というか、暫くの間ね……肋骨一本ヒビが入ってるみたいだし」

「流石にアレは効いたかな」

苦笑いしながら答えた。

「そつだな……みんなの状態は」

「有頂天になってないよ……皆、元気一杯だよ」

「なら良かったよ」

ヒイナが落ち込んでなかったから良かったよ。

これで心残りなく旅立つ事が出来るよ。

そして、その日は着々と近づいていった。

そして、俺は皆に無言で宿舎から居なくなった。

第17話：最後の日（後書き）

シャイ『そう言えば、真優ちゃんのキャラ説明はどうするんですか？』

犀龍「PV10000突破したときに書きますが（汗）」

フィー『とこの昔に過ぎてますよ……そろそろ20,000に差し掛かっていますよ？』

シャイ『……良かったですねえ。どなた様も殺害武器は投下されなくて』

フィー『……ただ単に面倒くさいだけではないでしょうか？』

犀龍「……強ち間違いではないな（汗）」

シャイ『……駄目ですね。この作者（汗）』

フィー『なんか裏情報なんですけど、チート物書こうとしてませんか？』

犀龍「ナンノコトヤラ？」

フィー『………転移！』

犀龍「つて、な………」 転送

フィー『……全砲門解放！ 消えて無くなりなさい』

第18話：守りたい仲間（前書き）

前振りなしで行きます

第18話：守りたい仲間

「今日の教練終了だよ……ストレッチしてから上がったね」

「はい!!」

六人の声が周りに木霊した。

「今日はきつかった……ヒイナは大丈夫？」

「私は平気……すこし、体の節々が痛いけど」

「流石に神速に入るとそうなっちゃうから仕方ないんじゃないかな」

人体にかなりの負荷が襲うのだから。

「この痛みに流さんはずっと……」

「さて、感傷に入っていないで御飯食べに行こうか？」

ティアが先導して歩き始めた。

「最後の戦いから一ヶ月……流さん元気になっているかな？」

その後を追うようにしてヒイナもついていった。

『流くんは元気してるの?』

通信画面からはやてが聞いてきた。

「デバイスが無いですけど……諸々の戦闘力がありますから任務には影響ありませんから」

『それなら良かった』

『けど、詠唱時間が長くなりますからね……慌てる時も何回かありますよ』

その言葉ではやてが笑っていた。

『何はともあれ、元気なのは良い事だね。また連絡入れるよ』

『はやてちゃんも元気で』

通信を切ってフィーナが大きく背伸びをした。

『あの時間から平行してこの時間に来ました……朱雀様、何を考えられているのでしょうか?』

「ディスク業務はだるいよ」

何とか自分のものが終わり大きく背伸びをしたとき……

全域に緊急アラームが鳴り響いた。

「緊急召集!!」

上着を着ると廊下を飛び出した。

「ヒイナ!!」

「レチエ!!」

合流後、機動六課のフォワード陣が会議室に集まった。

そこには他のメンバーも集まっていた。

「皆集まったな」

「今回の任務は……少し荷が重いかな？」

なのはさんが少し苦痛な顔をしていた。

画面には、黒い淀みが出来ていた。

「これは？」

「別次元に繋がってる『門』って言った方が良いかな？」

「門ですか？」

「時間の流れが違う空間と言った方が良いかな？」

「時間魔法の淀み……」

時間魔法というという言葉に全員驚いていた。

「ちょっと待ってください！！ 時間魔法は……」

「この世界では生まれていない魔法……うん、生まれているけど継承されていないって言うほうが正しいかな」

「その使い手はあの人だけだからですか？」

隊長陣は一瞬顔を見合わせた。

一回だけ頷くとフォワード陣を見た。

「元・『フォース』隊長の桜内流くんはその時間魔法の使い手……」

「けど、殆ど使う事はないかな……それを使えば『死』に繋がる事だから」

「確か、代価ですよね？」

「うん。話は戻るけど、今回は調査のために出勤だよ」

『時間入り口の【門】は調査の為に一般人は入れないようにします』

「今回は一般警護という事かな？」

その後の打ち合わせ後、目的地に向かった。

「半球体……の空間」

何か、変な気がする。

「これが、時間移動の空間？」

ヘリが着くと周りが騒がしかった。

「何があったの!？」

周りで走っていた魔導師を呼び止めて聞いた。

「調査団が……ミイラで出てきたんだ」

「何ですって!?!」

その場所に行くとミイラ体が並んでいた。

「これ、もしかしたら時間移動の【門】ではなく」

「亜空間のシールド……」

全員はすぐさま戦闘態勢に入った。

次の瞬間、触手が戦闘態勢に入っていないフォワード陣を全員飲み込んだ。

「ティア!スバル!!」

「エリオ!キャロ!!」

「ヒイナ!レチエ!!」

その言葉は聞こえないまま、中に呑み込まれていった。

「緊急通信!？」

回線を開くとなのはが慌てた様子で映し出された。

『流くん!!!』

いきなり、大声を出されて後ろに引いた。

「ど、どうしたの!？」

『ティアとスバル達が!!』

『時間の空間に取り込まれた』

「時間の空間……?」

『正確的には外と中の時間がズレた空間に引きずりこまれたの!!』

『外と中に時間は外に対して10倍です』

こんな場所ですれた時間の魔法使うやつが居るとは思わなかった。

「何で……この世界で」

『偶然に成功したか……または、本当に故意で起こしたかのどちらかですね』

俺の仲間を引きずり込んだか。

「やる事は一つだな……」

その言葉で側に居た2人は頷いた。

通信を切つて、二人に向き合った。

「……ここからミッドガルトまで何日掛かる？」

『約一ヶ月ですね』

『それじゃ、間に合いません！！』

「時間魔法で……」

『それはお勧めできませんね……向うに着いた途端に【代価】によつて寝込みますよ』

「なら……どうやったら？」

その言葉で、フィーナが溜息をついた。

『……流さんは新装備について忘れたのですか？』

『「あっ……」』

その言葉で、シャインと流は顔を見合わせた。

『超高速亜空間航行……ここからミッドガルトまでなら1分で到着します』

その言葉で、フィーナが笑顔でいた。

『しかし、1分という長時間はまだした事無いんで……どうなるか分かりません!!』

「それでも構わない……友達が悲しむ姿を見るよりかは挑戦したほうがまだマシだ!!」

船内放送をかけた後、全員持場に着いた。

「空間粒子撒布開始!!」

『エンジンフルドライブ開始します!!』

『亜空間ドライブ!!』

ドンという音と同時に風景が一気に変わった。

「エンジン負荷……魔力炉20%上昇」

『相転移エンジン負荷率70%行きました!!』

「クロノスドライブエンジンを推進力に回して!!」

『やっています!! 到着時間まで残り10秒!!』

『3エンジン臨界点突破しちゃうです!!』

艦が大きく揺れ始めた。

『2……1……目標地点に到着!!』

「緊急エンジン停止！！ 冷却剤を緊急撒布！！」

揺れが収まり、目の前には二つの月がある星があった。

『……状況はエンジン3エンジン共に損害率98%』

「修理を急いで……後はお願いね」

『分かりました……流さんも御武運を！！』

その言葉と同時に頷いた。

「シャイン……地上に降りるよ」

『はいなのです』

どうか御無事で……流様！！

「……！　なのは、あれって」

空を見ると二つの赤いのがこっちに落ちてきていた。

「来た!!」

降り立ってくるのを確認する。

「お待たせ……なのは、フェイト」

『本当に久しぶりです』

俺は半球体に目を向けた。

「……やるしかないかな」

俺は、一步球体に近づこうとしたその時。

『待つてください!!』

画面にシャーリーが出てきた。

「シャーリー？」

『完成しましたよ。流さんの専用のデバイス』

その言葉で驚いていた。

「俺専用のデバイス？」

『あのデバイスは智也さんの小刀をデザインして作られました……
渡すのは流さんの身体と魔力のデータによって作られたものです』

「俺の……」

フェイトが手渡した。

「流くんの新しいデバイス」

「新しい名前……付けてあげて」

暫く考えた後…

「……ビクティム…新しい名前だよ」

『Yes, master』

「基本の能力は変わってない」

すると、待機モードから小太刀が流の両手に収まっていた。

「……全力で行くよ『ビクティム』!!」

『Standby Ready』

「Set Up!!」

そして、バリアジャケットを着て戦闘態勢をとる。

「時間魔法に負担率も軽減してるはずだから!!」

その言葉で頷いて半球体に向き直った。

「魔力と物理の4層壁だけど……行けるよね!」

『出来ます』

すると、頭上に特大の剣が二本と魔法砲が左右に充填されていた。

「一本目『グラビティ・バスター』!!」

『鳳凰の矛先』

「二本目『エターナル・バスター』!!」

『霸王の宝剣』

すると一気に殻が壊れて行った。

「ヒイナ!! レチエ!!」

「流さん!？」

『ちっ……きやがったか。纏めて潰してやる!!』

六人の前に立った。

「スマンが今の俺はかなり機嫌が悪い」

ビクティムを敵に合わせた。

「手加減が出来ないからよろしく頼むよ」

その瞬間、敵の視界から消えた。

『そんな技はきか……がはっ!?!?』

次の瞬間、後ろの壁に叩きつけられていた。

『タイムアカント4秒』

いつの間にか魔導砲が4つ出来上がっていた。

『少し油断し……』

目の前の状況に敵は啞然としていた。

その後ろに居た6人も状況が把握出来なかった。

『玄武の籠手に変換』

刀が籠手になった。

『グランド・ラッシュ!!』

その魔力を双方の拳に宿した。

連打を浴びせて、再度、壁に食い込ました。

『まだ……まだ終わりじゃない!!』

雄たけびを上げた途端、龍に変身した。

『すべて……全て食い殺してやる!!』

「ユニゾン解除」

すると、シャインが出てきた。

「逃げるか、最大の防護壁を作るように全員に伝達……倒すから」
その笑顔は鮮やかだった。

『は、はいです!!』

「レチエ、絶対防御を使用して……5人を守って!!」

「は、はい!!」

防御魔法を使用した途端、流は深呼吸をした。

「黄昏よりも昏きもの 血の流れよりも紅きもの 時の流れより埋もれし 偉大な汝の名において 我ここに 闇に誓わん 我らの前に立ち塞がりし すべての愚かなるものに 我と汝の力もて 等しく滅びを与えんことを!!」

詠唱を完成すると、翳した手に紅い魔法球が出来ていた。

「『龍破斬』（ドラグ・スレイブ）」

魔法が見事敵にヒットして……消滅した。

「す、凄い」

「みんな!!」

フェイト達が走ってきた。

「怪我は無い!？」

「はい……けど何で流さんが」

「私たちが呼んだんだよ……時間魔法ならその専門家に任せるしかないってね」

「高次元魔法でも私達には対応が出来にくいて事かな。けど……」

なのはとフェイトは流を見ていた。

「短期間でまた新しい魔法を覚えてきてるし……やっぱり凄いよ」

その時。

「あれは……何だ!!」

魔砲師の人が空を見上げながら大声を上げていた。

「紫月!!」

『紫月です!?!』

その時、通信が入った。

『相転移エンジンとクロノスエンジンが稼動可能領域まで修理でき
たんですか……』

『魔力炉……完全にいかれちゃいました』

『地上で修理と部品交換しないと無理なので地上降下します』

フィーナの横から杏と李が顔を覗かせていた。

「着水場所は……」

『機動六課の海で停泊して構わないで』

はやてが通信で話しかけてきた。

「ありがたい……フィーお願い」

『了解しました』

通信が切れた。

『それともう一つ……こっちは【ラクト】の朱雀司祭と智也司祭か
らの要請や』

一呼吸してから……

『機動六課稼動時期終了まで貴官を機動六課の職員である事を命ず
る……ってことや』

それって……つまり？

「……最後まで一緒に居ても良いって事だね」

『マスター』

「それじゃ、もう暫くよろしくお願いします」

俺は、また機動六課の隊長に戻った。

第18話：守りたい仲間（後書き）

フィー『寒いですね』

私は極寒です。

フィー『寒いギャグはいりません』

シャイ『グダグダになるのでお開きにします（汗）』

フィー『感想をお待ちしております』

第19話：父親として

「踏み込みが甘い!!」

ヒイナの剣を捌いた。

「はあああ!!」

攻撃のラッシュを簡単に紙一重で回避していく。

「脇が開き始めているぞ……せい!!」

掌を鳩尾に叩き込んで後ろに吹き飛ばした。

それと同時に神速を解除した。

「……ふうー」

呼吸を整えた。

「……20点」

「あう」

ヒイナはしょんぼりしていた。

「脇は甘くなるは踏み込みは足りないは……俺を倒すのは到底は不可能だな」

「うう、精進します……」

「今日の練習はこれにて終わりだよ」

なのはさんの声で全員は隊長陣の前に整列した。

「今日は隊長達が午後から宿舎待機だし……午後はお休みしようと思っただけど良いかな？」

「この頃連戦があったからね……賛成するよ」

『右に同じくです』

「そうだね、構わないよ」

その声でフォワード皆は喜んでいた。

「ついでに流くんもね」

はい？

「フィーナさんが言ってたよ。ほぼ寝ないで紫月の整備とエンジン製作してるんでしょ？」

フィー 告げ口をしたな。

「だから、今回は仕事一切無しでお休みして貰います。そんで持つて見張りをつけます」

フェイトが言うと同時に手を引っ張ってきた。

「今日はお休みだよ」

次は反対の手が引っ張られた。

「そんでもって見張りはヴィーちゃんと私がするね」

なのはとフェイトを見ると笑顔だった。

それも満面の……。

私に死ねと言っているのですか!?

「それじゃ、解散」

「いやいや、満面の笑みで解散は無いですよ!?!」

しかし、聞く耳は持ってなかった。

という訳で、五人で街に来た。

残り二人は、ヒイナとレイチエだった。

「責任の押し付けではないですよね？」

「流石に小さい子供二人はきついんだよ」

俺の体力が何所まで持つかわからないし。

「しょうがないですね…良いですよ、ただしお金は流さん持ちですよ」

「それはしかないかな…良いよ、出してあげるから」

「やったあ〜」

二人は喜んでいた。

俺達は最初は水族館に向かった。

「またなんで水族館に？」

「この水族館は、触れ合いコーナーがあつて、魚に触れる事が出来るんだよ」

「へ〜知らなかった……」

「確か今日は…海豚に餌が出来るんじゃないかな？」

壁にあつた日程表を見て答えた。

五人は水族館の中に入った。

「『うわあ~~~~~』」

ヴィヴィオと真優は歓声を上げながら水槽を見ていた。

「二人とも水族館は始めて？」

『「うん!!」』

その答えにヒイナとレチエは俺のほうを見ていた。

「って、何で俺のほうを見るんだ？」

「そうは言っても二人のお父さんなんだし……」

「時間があれば連れては行きたいんだけどね。仕事上の問題やら色々あるしな」

他の惑星で入港してる時間帯に何かしたりとかはしているけど。

「宇宙港で何かを見ていたりとかはあるかな」

そんな生活をしているからな。

「そろそろ、海豚さんにエサやりが出来る時間帯だな……行こうか？」

「うん」

海豚ルームに行くと、まだ人がいなく先に入れた。

係員の指示に従いながら、俺達は水槽の外から見ていた。

「流さん……流さんは機動六課が解散したらどうするんですか？」

真剣の表情でヒイナが聞いてきた。

「また時間の中に入ると思うよ……それが『ラクト』の業務内容だからな」

二人が手を振ると流たちも手を振った。

「ヒイナたちは？」

「私は、学校……訓練校の教師になります」

「レチエ……なんでこっちの方に？」

「教導官の資格を取る為にですね……暫くは、なのはさんの後ろを着いていく形になります」

「ヒイナは？」

俺は、後の事は何も聞かなかった。

ヒイナが自分で語るまでは。

「レスキュー部隊に入りたいなとは思いますが……あの時の印象が私の中にありますから」

「そうか、頑張れ」

その言葉にヒイナは強く頷いた。

そう言っている内にヴィヴィオと真優が戻ってきた。

俺達は、外に出てカフェテリアに歩いていった。

「さつとと……何人付いて来てる？」

「……新人三人にベテランさんが二人かな」

その言葉に、ヒイナとレチエは驚いていた。

気づかないようにと目で合図しながら正面見ながら。

「ここを出る前……多分狙いは真優とヴィヴィオの二人だね」

『流石にここでは戦闘は出来ないよ』

「広くて……人が来れない場所に行ければ問題ないけど」

周りを見る限りそんな場所はないし。

『幸いにも敵さんからは魔力は感じないから……普通の接近戦で対応できるよ』

……なら!!

「真優は2で俺は3やるから……ヒイナ達はヴィヴィオをお願い」
その言葉に全員頷いた。

「いくよ。 1……2……3……GO!!」

真優と俺は神速状態に入った。

「!!!?」

反応が遅かったのが運の尽きだった。

「がはっ!?!」

神速状態になれば誰もが対応できない。

一般人であれば尚更だ。

「ちっ!!」

一人が拳銃を出そうとした瞬間、敵の腕を上蹴り上げた。

拳銃は高く舞い上がり、腕は上に上がった。

「はああああ！！」

硬気功『鳳凰華撃』

連打でボディに拳を打ち込んだ。

高い音と同時に後ろに吹き飛ばした。

「よし、終わり」

落ちてきた拳銃をキャッチした。

『お片づけ終わったよ』

スーツ姿の男を引きずって真優がこっちに来た。

「っ、強い……」

「これが……流さんの一般の戦闘技能……」

魔法も使わずであの威力なのだから驚くのもないと思われる。

「ヴィヴィオとヒイナとレチエは怪我は無い？」

「大丈夫です!!」

その言葉で流は安堵していた。

「ヴィヴィオ。ゴメンね、怖い思いさせて」

すると、ヴィヴィオは首を横に振った。

「流パパは強いから大丈夫だって信じてるもん」

その言葉を聞いて少し安心した。

ゆっくりとヴィヴィオの頭を撫でた。

「美味しかったです」

「流さんをいい店知ってましたね」

「あそこは昔からの顔なじみだよ……」

カフェテリアから出てきた。

「顔馴染みについて言うと……」

「なのはさん達と時々御飯と一緒に食べたりしていたな」

笑いながらそう答えた。

「本当に長い付き合いなんですね」

「俺に魔法を教えてもらった人達なんだから……ある意味俺の師でもあるんだから」

その後は、ショッピングしたりいろいろな所を回った。

「さて、そろそろ戻ろうか？」

次の瞬間、携帯が震えた。

「なんだ？」

携帯を取り出しサブ画面を見ると……

『メール着信 一件』

表示されていた。

「……はやてから？」

メール画面を開いて目を通した。

「至急の用事……四人とも急いで戻るよ」

その言葉に四人は頷いた。

「飛ばすからシートベルトと何かに捕まってね」

ギアを低速に入れた。

「いくよー!!」

ビクティムをエンジンの鍵穴に入れた。

「ドライブフルスロット!!」

一気に加速した。

「タイムドライブ30!!」

『Yes, master』

「雷光一閃!!」

次の瞬間、宿舎の前だった。

「……皆着いたよ……って、あら??」

全員はぐったりしていた。

「だ、大丈夫か?」

「あ、あはは……初めて……車酔いって……したかも」

苦笑いしながら四人を見ていた。

酔いがさめた後、急いで作戦会議室に急いだ。

「桜内流及び以下二名入ります」

そこには、各隊の隊員と隊長クラス全員がそろって居た。

そして……

「来たみたいだね」

「画面でニツコリと微笑んでいる人が居た。」

「お母さん!?!」

『うん……流も元気にしているみたいだね』

しかし、他の隊員は驚いていた。

「お母さんって……」

「俺を……桜内流をこの世に導いてくれた人だよ」

『初めまして……朝倉音夢って言います』

フォワードのメンバーが挨拶して言った。

「挨拶はこれぐらいにして……一体どうしたの?」

『そうだった……これ、なんだか分かる?』

画面に映し出されたのは、一本の杖だった。

「形状ははやてさんの杖に似ているね」

確かに似ているけど……

「何で黒いのかって事だよね？」

『その真相を知っているのは……シャインちゃん』

その言葉で、シャインは頷いた。

『時間の書の……はがれた記憶…晴天の書のページです』

「なら納得した。俺が契約した時の引継ぎが無かったのは」

『時間の暴走の闇が全て持って行ってしまったんですから』

まあ、とりあえずはページは今のところ全部埋めたけどな。

『あの杖の能力は【転移】です』

「転移？」

『本に写生しますよね？ 現段階では』

その言葉に頷いた。

『あの杖は自動的にページ変更できる物なのです』

「なっ！！？」

『今まで溜めた本も対象になりますから……気を落とさないで下さいです』

い、今までの苦勞がなくなるのか。

「とは言うものの……とりあえずはロストテクノロジー（古代遺失物）対象の物になるんだよな……」

その言葉で全員はやての方を向いた。

「今、リンディ統括と相談したら動ける人員はいないらしい……ただ一つの試験部隊を除いてはな」

その言葉で、全員頷いた。

「フィーナ、聞こえたか？」

『感度良好でしたので全部聞こえています……紫月の魔力炉完全にリンクと強化完了しています』

「はやて」

「全員、紫月に乗り込む準備を」

「了解！！」

「時間は？」

『7年前の初音島よ』

そして、場面は初音島に移り変わるのだった。

番外編：何で、こんな事になったのか考えよう（前書き）

今回はなっぺ様の小説『魔法少女リリカルなのは』The fantastic story』より吉谷 吼太君をゲストに迎えてお送りします。

番外編：何で、こんな事になったのか考えよう

何故に、ここに一人でいるんだ？

街中で、待ち惚けというか人探しをしていた。

男の人……名前までは聞いているんだけど。

今朝に出勤して、一発目にはやてから呼び出しあったしな。

フェイトやなのはは心配していたし。

心配の理由が違うしな……。

「ちよいと、上からの命令で合同調査をしてほしんや」

「合同……調査？」

「そや」

一枚の顔写真を渡された。

「名前は『吉谷 吼太』ちゃんや……今回はこの人と遺跡調査や」

「遺跡調査……俺一人じゃ、やばいんですか？」

「トランプやら何やら色々あるんや……吼太君の能力は必要かと思
うんよ」

「……そう言うことなら判ったよ」

俺は、顔写真を手に取り、隊長室から出ようとしたとき。

「後、一つ約束があるんや……」

その約束はとんでもない物だった。

「何で、変装魔法で女性にならないといけないんだ？」

理由か何かあるんだから、深くは突っ込まないでおう。
うん……

「……すまんが、『桜内 流華^{るか}』で間違いないか？」

そこには、中学生並の背丈の……女の子に見えるんだけど……やっぱし。

写真を見てきて良かったと心の中で呟いた。

「ええ、間違いないわ……」吉谷 吼太『さんで間違いないですか？』

「ああ、間違いない」

「自己紹介しておきますね。私は、機動六課の桜内 流華です。階

級は一等空尉です」

「お…ぼ……」

「『俺』で良いわよ。向こうの世界のなのはちゃん達に告げ口はないから」

一瞬だけ考えた後。

「俺は吉谷 吼太だ。通りすがりのチート魔道師だ」

そして、二人は握手をした。

「さて、今回のお手伝いなんですけど……遺跡調査の件になります
が」

「何か口ごもるな？」

「……まあ、今回は見た方が早いかもしれないですね」

「目的地の座標は分かるのか？」

「分かりますよ」

そう答えた瞬間、吼太は拳に気合いを溜めた。

「ち、ちよっと待って下さい！ 目的地までは私が送りますから」

「転送能力が有るのか!？」

「持っていると言うより所持してるが正しい表現になります……フ
イーナ」

次の瞬間、通信機能が自動で起動すると一人の女性が映し出され
た。

「はい、転送座標は登録してますのでいつでも起動可能です」

「……近くの裏路地に転送用の魔法陣をお願いします」

「分かりました。準備をしておきます」

通信画面が閉じた。

「今のは……」

「艦のホストコンピューターです」

「はぁ!？」

その表情は解らなくはないかな（汗）

私達は裏路地に入り、転送魔法陣にて目的の場所に移動した。

「一発で移動できるのかよ」

時空管理局の巡航艦でも何回か経由をしながら移動しないと着けない場所にあるのだから。

「そこが違いだと思いますよ。さて、お仕事モードに切り替えちゃいますね」

私は携帯を出した。

「ビクティム、準備は良い？」

『Yes, my master』

「なら、行くよ!!」

『stand by, ready』

「set up!」

バリアジャケットと両手には小太刀が握っていた。
因みに、変装魔法は解除はしていない。

「では、行きますよ!」

私達は、洞窟の中に入った。

最初は何もなく直ぐに広い場所に着いた。

「何もない場所だな?」

「……………それは、違うみたいだよ?」

そう答えた瞬間、地面が揺れ始めた。

そして、そこら辺に落ちていた岩が一カ所に集まりだして、そして……

『ガアアアアアア……………』

ストーンゴーレム

岩石男が立ち塞がっていた。

大きさにして三メートルは余裕で越えていた。

「つて、こんな所でこいつが暴れたら!!」「確かに、こんな場所で『普通』は暴れたら洞窟は崩壊するでしょうね」「えっ!!!」

その答えに、驚いていたが直ぐに気がついた。

「こいつと周りの材質が極端に違う……」

「うん、周りの壁は魔法を^{リフレクト}反射をするみたい……だから！」

私は、小太刀を砲撃モードに変換させた。

「フレイメル……」

『Buster』

薄い青色の砲撃の魔法陣が展開して打ち放つ。

しかし、直接にゴーレムに当たることなく横を過ぎた。

そして、壁に当たり砲撃が跳ね返り、ゴーレムの首にクリーンヒットした。

「詰めです……」

次の瞬間、私の体は『普通の人』から目では確認できないぐらいの速さまで加速した。

「……いや、この加速はまさか……『神速』を使ったのか!？」

私は加速した中で小太刀に変換して、構えに入った。

『小太刀二刀御神流・裏 奥義ノ参【射抜】』

その攻撃でゴーレムを後ろに吹き飛ばした。
それと同時にゴーレムに刻まれていた英語の『スペル』も粉々に砕けた。

「おいおい、最初の砲撃以外は魔法使つてねえし」

「あはは……あまり魔法は使わない体質だし、こんなので魔法使っていたら後々に大変になっちゃうしね」

有る意味で勘だったって言うのは伏せておこう。

ゴーレムの種類（材質は除く）は大きく分けて二つある。

一つは、外部魔法供給型のゴーレムだ。

これは、外部装置にて半永久的に稼働するタイプだが、術者の魔力により変化するためにそこまでは強くはならない。

そして、もう一つは今戦ったスペル型のゴーレムだ。

これは、術者云々ではなく、周りの鉱石で強さが変わる物である。スペルが見える限り無限に復活するやっかいな奴だ。

これの弱点としたら、ゴーレムに刻まれている『スペル』を破壊もしくは読めなくしたら機能が完全にストップする。

「今回のが一番弱かったしな（汗）」

「弱かったという？」

「ミスリル型とかリフレクト型とか半永久的に出してきて最終的には物理は効かないし、魔法もなのはちゃんねの『スターライト・ブレ

イカー+EX』すら簡単に跳ね返すゴーレムをわんさかと創り出してくれるし(汗)」

「……どんだけだよ(汗)」

その時は、むしろ夫婦が一瞬にしてタユタマにして、助かったと行っておこう。

「さて、お話はここまでにして、先に行きましょうか？」
「そうだな」

その後も度重なる戦闘が入った。
それは語り尽くすことができないほどだ。

戦闘は割愛させていただきます。 by 犀龍

「たく、何なんだよ。この洞窟は(汗)」

「……はやて、帰ってから覚えて下さいよ」

二人はある程度回復してから次の部屋に進んだ。

「吼太さんは大丈夫ですか？」

「それはこっちの台詞だ。お前こそ、さっきから前線で動いてるんだから」

「私は、平気ですよ。出来る限りの制限で戦ってますから」

笑顔を見せて、吼太を安心させる。

「嘘を吐くな。お前、『スターライト・ブレイカー+EX』を何発ぶち込んだ！」

「えーっと、三ば……」

「嘘吐け！！ 十発以上は撃ち込んでるだろうが！！」
「あ、あはは……」

吼太の怒鳴り声に一瞬肩を竦めた。

「確かに、ゴーレム以後は、敵の数が滅茶苦茶多かったのは認めるが、少しは体を労れ」

確かに、少し体が怠いのは認めるが、もう少しで目的場所だし、気を抜くのは後だな。

「さて、次は何なんだ」

「……地面が異常に柔らかいんですけど（汗）」

「……確かに壁が生き物みたいな生温かい空気が……」

ん？

生温かい空気……って、まさか！？

「吼太さん、急いで入り口まで戻ってこれは！！」

私は、吼太の体を引き寄せて勢いよく飛んだ。

口が閉じる一歩手前で逃げる事が出来た。

「きゃっ！！？」

回避したまでは良かったが、勢いで壁にぶつかった。

吼太は、私が抱えるようにしていたため、無傷で済んだ。

「おい、大丈夫か！？」

「うん、大丈夫……壁にぶつかって、背中が痛いだけ」

「けど、いったい何なんだ……あれは？」

目の前にいるのは、犬のような、白かった。

「……………あれって、まさか（汗）」

「何か知ってるのか？」

「私の記憶が確かなら……『ぬい』だったはずよ」

確かAAアートのキャラじゃなかったか？

「すべての物を飲み込み、その胃袋はまさに『ブラックホール』の異名が吐くぐらいだし」

「おいおい、有りなのかよ（汗）」

ここに来て、変なのが出てくるし。

「とりあえず、潰すしかないのは目に見えてるし」

「……………なあ、ここは俺に任してくれないか？」

吼太が立ち上がり、敵を見据えながら伝えてきた。

「うん、なら吼太さんに任せるよ」

「魔法や物質攻撃は効かないなら、『飛ばせば』良いんだよな……」

魔法以外の転送方法？

魔法以外の転送方法……

そうか！

「螺旋力の効果！」

「御名答！」

吼太は構え、気合いを溜めると拳の周りで何かが回り始める。それに気がついた『ぬい』は攻撃をしようとするが。

「させません!!」 『グラビティ・バインド』……重力値を通常の40倍!」

重力の負荷が加わり、『ぬい』の動きを制限した。

「行くぜ!!」

勢い良く、『ぬい』に突っ込んだ。

「時空断裂! バーストスピニング…パアアアアンチ!!」

攻撃を加える寸前で重力の鎖を解除した。

そして、拳に当たった直後、ぬいの姿はなくなった。

それは、高次元……どっかの空間にトバされたことを意味する。

『……流様、ぬいの転送場所が判明しました』

突然、フィーナが念話で話してきた。

『えっと、何処に?』

『マーボー様のエロトさんと言う人の所に転送されました(汗)』

……後で、作者に謝罪文を送らせないとな(汗)

「無事が、流華?」

「うん、平気平気……次は目的地だし、行きましようか?」

「そっだな……これを着ろ」

吼太が着ていたジャケットを私に着させる。

「えっと……なん……」

私は体を見て理解した。

体は傷を負ってはいないが、服が半分ボロボロに成っていて、胸やら太ももが……と言う状況だった。

「うん、ありがとう……優しいんだね」

「うるさい……」

顔を真っ赤にして、あんまり説得力はなかった。

とりあえず、再度バリアジャケットを着直して奥の部屋に向かった。

「……部屋？」

「みたい……だな？」

扉を開けたそこは、小さな子供部屋……と言えばよいのだろうか。玩具（ぬいぐるみ類）のが置いてあり、中央には小さなベッドがあった。

そのベッドで小さな……5歳前後の女の子が寝ていた。

「……何故にここに子供がいるんだ？」

小さな部屋……だけの異空間の世界？

まさか、有り得るわけがないよな（汗）

「流華……こいつの事を知ってるのか？」

「……うん、私の考えが間違っていなかったらね（汗）」

私は、ベッドに腰をかけて、女の子の頭を優しく撫でた。

その行動に目を細め、次第に意識を覚醒させて、目を開け始める。多分、この名前でも有ってるはず。

「……おはよう、プラム」

「……おはようございます。お父さん、お母さん」その笑顔は、向日葵が咲くかのような笑顔だった。

「……………」

そして、吼太は見事なまでに固まっていた。

私も困惑したいのは山々だったが、部屋の数を確認してないようが解ってしまった。

部屋の数は十一個……最初の部屋が小さい部屋でそれ以外はかなり大きな空間に作られていた。

子供を身ごもり、出産迄の過程が十月十日……小さい部屋が十日の部分に分類され、大きい部屋が一月の分類されるって事だ。

私、向こうの方々に殺されること間違いなしかな（汗）

「お母さん、お父さん……とうしたの？」

その言葉に私は我に返った。

「……なんでもないわよ。けど、何で私達が『お父さん』や『お母さん』なの？」

プラムは小さく首を傾げて

「うーと、ここのごくくつのなまえは『子宝ごくくつ』ってなまえなんだよ」

本来なら、母胎にて成長するのをこここの試練により一つの空間で1ヶ月……最初の空間で十日して、残りとして一ヶ月の次元を作り出したのか。

母胎の代わりとしてこの部屋がその役割を担うわけか。

そして、男女のみが入った時にスキャンされ、二人の子供が作り出されるという事が。

なるほど、納得……はやて、後で大切な『O H A N A S H I』をしないと埋けないみたいだね

「それは、置いといて……この子をどうするんだ？」

「ここに一人にするのは可愛そうだし私が育てますよ……吼太さんは？」

「俺も何かあったら協力する……それで、構わないか？」

「はい、ありがとうございます」

フィーナの転送魔法が使用可能になったので一度、ミッドチルダに戻った。

第20話：救難信号（前書き）

久々に初音島の話を書き書いてみました。
直ぐに違うことになりましたが……

今回も気楽に見て下さい。

第20話：救難信号

機動六課の地上部隊は初音島の一本の大きな桜の下に居た。

「母さん」

流の一言で木が光りだした。

『お帰りなさい、流』

「ただいま、母さん」

『ここでは話は何ですから……さくらの家に行きましょ』

俺達は、さくらさんの家に向かった。

「ただいま」

「あれ……流くんは音夢さん!？」

玄関から顔を出したのは音姫だった。

「とりあえず……全員中に入れたんだけど」

「全員？」

流の後ろを覗くと団体さんが後ろに居た。

「……うん、入ってください」

居間に全員が入った。

「御飯食べた後だから大丈夫だね」

「うん……さくらは？」

「荷物を取りに行ってるよ」

そう言っていると、さくらが布に包まれた物を持ってきた。

開けると、一本の杖が出てきた。

『間違いがないです……時間の書の断片のページです』

「来なさい……我が魔導書」

すると目の前に晴天の書が出てきた。

「情報蒐集開始」

本が捲れ始めた。

杖は黒い粒子となり消えた。

「情報整理開始」

本が点滅し始めた。

『これで、三時間すれば情報適応完了します』

「流くん、これって一体？」

『以前の残骸です。球体の忘れ形見と言えば良いでしょうか』

「けど何でこの世界に……」

「そこは分からないけど、後一本はこの世界にあるのは確か見たいだけ」

『どなたが所持しているのかは私達にも分からないのです』

「うにゃ？ボクは知ってるよ」

「知ってるんですか!？」

「うん、持っているのは杉並君とななかちゃんだよ」

その瞬間、空気が凍りついた。

「……杉並かよ」

ななかは何とか出来そうな気がするのだが…。

「杉並か……かったるいな」

大きく溜息をついた。

話し合いで解決できればいいのだが…無理だな。

「とりあえず、明日は学校だから状況確認をするしかないかな」

俺は後ろを向いた。

「皆はどうする？」

「暫くは紫月の方で待機しておくよ」

なのはさんの言葉に頷いた。

俺は、学校の自分の席に着くなりいつものメンバーに取り囲まれた。

「珍しい。流くんが学校に来るなんて」

「土日は本土の方に行ってるからね」

「お土産はないの？」

「ん、お饅頭でよければ家のほうに在るから後で来るか？」

「おっ、くるくる……」

ななかと杉並が見えたとき、全方位に魔力波を放った。

次の瞬間、波長が返ってきた。

『杉並とななかで間違いはないみたい』

『とりあえず、警戒はしていた方が良さな』

『そうだね』

『それから、フォワードの皆を宜しくね』

念話で話しているとはやてがそういつて来た。

『ってどう言うの……』

次の瞬間、教室の扉が開いた。

教師と共に二人の女性が入ってきた。

開いた口が塞がらなくなった。

「本土から転入してきました。翁 陽衣奈です」

「同じくレチエナ・O・レビーナと言います」

眩しい笑顔で挨拶しているかつての教え子がいた。

『俺に何の対処をしるというのか!?!』

その答えは誰も返ってはこなかった。

無事に午前中の授業が終わって、お昼御飯を食べに食堂に行こうとした時

「あ、流さん」

そこには、エリオが居た。

「エリオ、何でここにいるんだ？」

「付属の一年に転入したんですよ」

その横にはキャラも一緒に居た。

エリオもいるならキャラも居るよな。

「後からスバルさんやティアナさんも来ますから」

本当にフォワード全員転入してきたんだな。

「流くん、今日はお昼はどうする……一緒に食べる？」

茜が覗き込みながら聞いてきた。

「今日は他の子達と一緒に食べる用事があるから……ごめんな」

「うん、りょうかい」

食堂に行くとフォワード面々が席を用意していた。

それぞれ、トレイをおいていた。

自分で持ってきた弁当を出した。

「流さんはお弁当なんですか？」

「弁当は持って学校に来るから」

全員、御飯を食べ始めた。

それと同時に状況の説明を行った。

「学校はなれた？」 『結果の方を報告するよ』

「授業が早いですね」 『お願いします』

「行っていた学校とは進みは違うんだ？」 『杉並と白河なかが所持と見て良いかな』

「数学は何か着いて行けてますね」 『黒き結晶は……間違いないですね』

「全員、数学だけは得意だった見たいだしね」 『後は二人の動く次第だね』

「流さんそれは酷いです」 『分かりました。隊長たちは伝えておきます』

「ご馳走様……それじゃ、また後でね」 『了解、そっちは宜しくね』

俺は、席を立った。

「また後でね」 教室に戻り、次の授業の準備をした。

学校から戻り、台所で料理していると

「そっいえば……シャインに聞き忘れたんだけど」

『何ですか？』

「あの杖で情報変更できるようになったんだよね？」

『そうですよ……あっ！？』

その言葉であることを思い出したらしい。

「……撃てるよな？」

『撃てますね。アレが……』

限定封印した意味がなくなったような気がしてないのは気のせい
か？

「後で、試しに出来るかやってみるか？」

『そうですね……やってみましょう』

俺は、時限空間の中に居た。

「動いたら5000歳プラスってどんな空間なんだ？」

『そこは聞かない方が良くないかな？』

なのはが苦笑いしながら言った。

今回は機動六課の全員による立会いだ。

俺以外は艦の中だけだ。

『では、流さんお願いします』

フィーナの声で一回頷いた。

『情報変更開始!!』

「提示『3ブレイカー』」

すると、三つの魔法陣が浮かび上がった。

「Starlight」『Breaker』

「プラズマザンバー」『Breaker』

「ラグナロク」『Breaker』

三つの魔法陣が魔力を溜め始めた。

「魔法陣統一魔法展開!!」

三つも魔法陣が一つに合わさった。

『魔カフルスロット!!』

バレッジが展開した

「魔力許容範囲型『アルカンシエル』」

『シユート!!』

魔導砲が発射され目標物に当たった。

『緊急回収します!!』

流は艦の中に戻った。

「……………目標物完全に破壊……………」

「アルカンシエル単発式は封印したけど……………」

「私達の魔導砲が合わさったら戦艦砲になるなんて」

『その分、詠唱時間が長くなるのが難点ですね』

淡々と話す後ろで、フォワード陣は口があんぐりとなっていた。

「流石に驚いているな」

「それはそうだろうな……………主流は主はやてより長い時間生きている」

「その中で、守って行くべき物が多くなった」

「必然的に魔法を多く覚えていった」

「……………アレが本当の桜内流だよ」

すると三人がこっちにやって来た。

「どうしたの？」

「皆で集まって……雑談？」

『流石にそれは無いと思ですよ』

苦笑い気味にシャインが答えて言った。

「さて……話は戻るとして杉並をどうするかだね」

『簡単に返してくれそうでもないですけど』

「俺が本気で当たるしかないかな？」

「本気でって？」

「限定解除して本気状態の俺が勝負と言つこと」

『それは駄目でしょう……』

やっぱりか。

その時

『緊急通信です！……これは、救難信号です！……』

フィーナの声に紫月メンバーは指定席に着いた。

なのは達は、後ろの席に着いた。

「救難信号場所を特定を大至急！！」

『ポイントを割り出しました。ポイントFDN - 1068です』

「空間離脱後長距離ジャンプに入りなさい」

『通常空間に入ります！！』

星の見える空間に出た。

「時間流動シールド展開しなさい！！」

その時、一瞬だけフィーナと目をあわせた。

「時の覇者の名において命ずる」

『時の巫女の名において命じます』

艦内が赤く点り始めた。

『「時の中を翔る力を！！」』

ドンと一瞬だけ何かにつかつた感覚があつたが直ぐに解かれた。

そして、目の前には集中攻撃されている艦が在った。

「割り込み通信と有無を言わさないように艦と艦の間に閃光弾を撃つて」

『超長距離型のミサイル充填完了……三番口の射出管より撃ち出します』

『割り込み通信繋がりました』

流は小さく咳き込んだ。

「こちらラクト艦『紫月』攻撃を停止しなさい……さもなくては、全員の藻屑にさせます」

すると画面の艦隊がこっちに向き直った。

「李と杏はコアシップで攻撃されていた艦に向かって救護活動に向かう準備をして」

『了解！！』

席を離れて、テレポートで消えた。

『さて、流様……初期メンバーになったのですがどうしますか？』

『ですねえ、杏ちゃん達がない時のメンバーになりましたし』

「ある意味、時メンバーが残ったんだけどね……では、しばし防衛

戦闘にはいますか？」

その言葉にシャインとフィーナは笑顔で頷いた。

「一体何が始まるんですか？」

「敵さんが可哀相のぐらい惨めに見える戦闘かな？」

少し苦笑いしながら答えた。

『防御シールド完全解除します。続いて、ポイントシールドに切り替えます』

「シールド解除じゃ、丸裸じゃないですか!？」

すると、フィーナの横に流が立った。

「ここから時メンバーの恐ろしさが見れるよ」

『シャイちゃん、機雷の撃ち落としをお願いね』

『はいです』

三人全員が目を閉じて、ゆっくり開いた。

目の色を真紅の赤に変えて……

「未来視能力全員発動!!」

『敵艦隊レーザーと誘導ミサイル発射しました』

「機雷は撃ち落とし、レーザー砲は……」

フィーナと流の手が一斉に動き出した。

『270 - 732 - 889 - 197 - 967……』
『167 - 916 - 883 - 276 - 997……』

レーザーとミサイルは完全に防がれていた。

「う、うそ……」

「全部、防いでる……」

「人知を掛離れてますよ……」

「これって、戦艦の模擬戦でやられたもんな。リンディ提督が泣いていたし」

「けど……」

三人は流達を見た。

「本当の実力はこんな者ではあらへん……まだまだ、凄いのが隠れていると思うぞ」

すると、敵が陣形を変えてきた。

「来るよ……相殺砲撃に入るよ!!」

『マジックリング展開！！レベル2にて展開します』

艦の周りに光のリングが展開された。

『リングを前方の方へ展開します』

「晴天の書スタンバイ！！」

すると、手の中に晴天の書が納まった。

『魔法砲スタンバイ……いつでも発射可能です！！』

手を手前に翳した。

「全てを破壊する無限の射手よ。全てに裁きの槍を！！」『ブレイクランス』

すると、前に大きな槍が生成された。

「ショット！！」

敵の砲撃と中間で当たった瞬間、爆発した。

『李ちゃんからの通信。救助しこちらに向かっているってことですよ！』

その言葉でシャインを見た。

『はいです……！』

『転移砲スタンバイ!!』

「全員逃がさないよ!!」

三人は物凄いスピードでキーボードを打ち込んだ。

「転移方式完了!! フィーナ、クリスタルゲージ展開!!」

『完了しま……すつと!!』

最後の文字盤を打ち込むと敵全体がゲージによって閉じ込められた。

『魔力炉及び相転移エンジンエンジン出力上昇、使用可能領域です!!』

その後ろのフォワード陣が不思議そうに見ていた。

「これが、この艦の最高砲撃砲だよ」

『リングレベル3まで上昇させました……時空転移砲セット完了!!』

フィーナと顔を見合わせた瞬間、同時に頷いた。

「時の覇者の名において命ずる」

『時の巫女の名において命じます』

一呼吸おいて……

『「全ての者を裁きの場所へ。時空転移砲発射！！」』

小さな光が生成されその光が敵の中に入った瞬間、爆発した。

『次元衝撃が来ます！！何かに捕まってください』

次の瞬間、縦揺れが数秒間続いた。

「全艦、転移完了しました」

それを見て居たフォワード全員は開いた口が閉じなかった。

「流石にこうなるわね」

「さて、戻る前に襲って居た人たちの確認をしないとな」

俺達は、カリーク（コアシップ）に向かった。

第20話：救難信号（後書き）

あとがき雑談会

毬藻「は〜い　では、前回の番外編から……」

流「って、今回のことについては触れないのか!？」

毬藻「今回の作品……次の話は、たぶん知ってる人は極端に低いと思うよ……マイナーな作品に分類するし（汗）」

フイー『そんな事を言っただけですか?（汗）』

毬藻「最後の言葉……俺が中学時代に聞いた言葉だし……各個じやない部分は（汗）」

シャイ「投げやりな作者ですね（汗）」

毬藻「で、聞いても解らない部分を言っても解らないから、今回はこの子の話をしようと思う」

シャイ「オリジナルなら簡単に入りやすいと思いますね……確かに」

流「しょうがない……プラム、ちょっとおいで〜」

プラム「なに〜、おかあさん」

流「……お母さんじゃないんだけど（汗）」

プラム「おかあさんだもん!!」

流「俺は男だ!」

プラム「けど、おかあさんだもん!!」

毬藻「刷り込みって怖いね(汗)」

流「あんたが仕向けたんだろうが!!」

プラム「お、おかあさん……だもん……(半泣き)」

流「あゝ、ごめんね。ほら、泣かない泣かない(汗)」

フィー「………育児に専念している主夫ですね(汗)」

シャイ「そうですね(汗)」

毬藻「あゝ、うん。話は戻して、プラムのキャラクターのお話をします」

名前：プラム(名字は決まっています)

性別：女

年齢：五歳

体重や身体に関することは黙秘

魔力蓄積量：吼太と流を足した量(無限)

魔法素質：未定

身体能力：EX(成長中)

知能能力：未定(成長中)

デバイス：未所持

流「魔力蓄積量は無限って(汗)」

毬藻「……………闇の書の蒐集で全ページ埋まっても身体に影響無いぐらい?」

流「おいおい(汗)」

毬藻「そろと、プラムの名前は今回は考えたものではなく、作品から貰ってきました」

流「何の作品だ?」

毬藻「ス　フィツ　ユと言う会社から出してる　のソレイユから」

フィー『……………18R確定商品ではないですか(汗)』

毬藻「だから伏せ字だ……………因みにCVは『まきいづみ』さん」

流「そこまでとは……………俺のCVと被ってるし!?!」

毬藻「ふっ……………それと、知識についてはまだ何も無い状態」

流「真っ白な画用紙……………と考えればよいのか?」

毬藻「そっ　コラボや出した時に教えられた言葉が知識として身につく」

フィー『ある意味、魔法もこれの中に入ると言うことですか?』

毬藻「だよ。簡単に言えば、読者様や作者様たちがこの子の手本や見本になるのかな？」

流「……あんたが一番大変なことになりそうだな（汗）」

毬藻「言うな、自覚してるから（汗）」

流「今回はここまで、今回からコラボ受付を開始しちゃいます」

フィー「逆にコラボを試してみたい方も言って下さい」

毬藻「それでは」

シャイ「皆様にはびねすが降り注ぎますように」

フィー「次回もお楽しみにです」

第21話：星界（前書き）

マイナーな作品なので知ってる方は極端に少ないかも（汗）

では、始めます。

第21話：星界

「……フィーナ、何所の星系か分かったか？」

その言葉に、フィーナは首を左右に振った。

「うーん、星界軍……と言われてもうちのデータベース様がこれじゃどうしようもない気がするんだが」

俺とフィーナの目の前には、星界のお姫様と王子様が座っている。

名は……長いので【ラフィール】と【ジント】と名乗っていた。

「流さんとフィーナさんではどうしようもないですか？」

ジントが不安そうに言いながら言ってきた。

「こつちも今は仕事が終わってない状態なんですよね……現代、確認次第で動けるかどうかですね」

すると、扉を叩く音が聞こえてきた。

『シャインです』

そのまま招き入れた。

『上層部は許可を頂きました。はやてちゃん達は一度、本土に戻りたいです』

それなら、決まりだな。

「許可が出ましたのでルート開通可能みたいです」

『その前に、お仕事が一件入ってるですよ』

そう言うと、一本の杖をテーブルに置いた。

『なかなか様から託されました……必要になるということでしたので』

その杖の形はフェイトが使っている杖によく似ていた。

「後ですよ。では最後にですが、貴方の世界にしかない物って現在で用意できますか？」

そう言うと、ラフィールって女の子は髪の毛を一本抜いた。

「私の遺伝子で問題ないか？」

なかなか面白い人だ。

「確かに……カリークの修理はこちらでしておきます」

俺達は、そのまま艦橋に戻った。

「さてさて、皆よく聴いて。今から『超高度次元転移魔法』使うから艦の最終点検を急いでもらいたいんだけどいいか？」

『医療班はいつでも大丈夫』

『物資に対しても万全だけ大丈夫だよ』

『エンジンの方も絶好調です。問題ありません』

その言葉を聞いて頷いた。

「大使二人はここでいてもらうから宜しくな」

その言葉で全員は頷いた。

二人を艦の艦橋に連れてきた。

「では、向かいます……捕まってくださいね」
ベルトをした。

「魔力炉・相転移エンジン・クロノスリングエンジンをLからHに上昇」

『空間流動シールド転換』

『マジックリングフルセット完了しました』

「時の覇者の名において命じる」

『時の巫女の名において命じます』

艦の照明が赤く点った。

『「次元の門よ開け！！他の者を受け入れる力となれ」』

ドンと音が鳴った瞬間、目の前は恐ろしい事になって居た。

『機雷群……全てこっちに向かって来てますね』

戦闘内に入ったな。

無いとは言い切れなかったが。

「杏！李！！」

『私達の』

『力見せてあげます！！』

いつもの二人の柔らかい表情のまま笑顔でパネルを叩いていった。

「反陽子砲が来ます!!」

「アレは人類統合体!! 敵だ!!」

敵判別は出来た……なら!!

「丁度宇宙空間で助かったし……後ろに割り込みの通信文を【ジント閣下とラフィール閣下健在なり】」

『送信完了!!』

直ぐに返事が来た。

『機雷の識別コード来ました。展開完了!!』

星界軍の機雷が反転して人類統合体の方に行った。

『マジックリング平行展開完了……エンジェルアロー前の敵にロック完了!!』

「撃てー!!」

無数の光が展開して次々に爆散していった。

「……危機一髪って感じなんだが」

『では、カリークの射出準備の入りたいと思います』

ジント達はカリークのほうに向かった。

『射出します』

しかし、次の瞬間最悪の事態が発生した。

『人類統合体が使っていた機雷再起動!!』

『機雷目標…カリーク!!』

マジか!?

『突撃艦が応戦してます!!……お兄ちゃん!!』

『マジックボール三個スタンバイ!!』

李と杏と流はテレポートしてマジックボールの射出口に向かい乗り込んだ。

『緊急射出!!』

三人は一気に飛び出した。

『展開!!』

三人はカリークの横を飛んだ。

『フレームル・バスター!!』

『トライテント・ブラスト!!』

『ライトニング・ボルト!!』

「拡散型の魔法を連発して機雷から防御した。」

その時、上が暗くなった。

『防御壁内にカリークを入れました!!合流ポイント指定も来ましたからこのまま行きます!!』

安全地帯に合流できた。

俺は、ここの指揮官らしい人達と夕食に来た。

「力を借りたい？」

アプティック門を戦いをしているということだ。

「貴方の戦艦の力をです……製造技術関係ではなく純粋な力です」

【門】…ソードはこの世界での移動手段みたいなものだ。

それに関しての、把握争いと言うことだろう。

こんな戦いには出たくは無いのだが…

「軽い補給もさせてもらいましたし…お手伝いいたします」

食事を終わらせて、俺は戦艦に戻った。

「とりあえずですけど、この世界のシールドの技術を応用して作り
ました…平行宇宙突入は可能です」

その時、通信が入った。

『第一戦闘艦隊の受け入れをと言う事で』

「認証……艦長クラスを艦橋につれてきて話し合いをしよう……」

その時、緊急サイレンが鳴り響いた。

「いきなり実践かよ……」

「突撃艦隊は搬入後、エンジン出力最大で向うの重攻撃艦隊と艦対戦に入るよ」

『了解!!』

総員は持ち場に着いた。

俺は、突撃艦隊に通信を入れた。

「現在の状況を説明する……艦が巡察3隻と護衛艦が1隻とついでが戦列艦……かな、それが1隻出現で退治の俺の船が1隻で行うことになった」

その言葉で、ラフィール以外の6隻の艦長が驚いていた。

『死に行くんですか!?!』

「死ぬ気はさらさら無い……手腕が見たいやつは艦橋に来い!!……この艦の怖さを教えてやるから」

そう言つと通信を切った。

『流様……言い切りましたね』

「言い切らないとな……相転移エンジンをHに入れなさい」

『武器管制システム起動』

「では、初平行宇宙にダイブ!」

そこは、何も無い世界だった。

「亜空間制御も問題なし」

『敵さんは一つの空間を造っちゃってますね』

この会話の後ろで艦長や管制関係の人たちが集まっていた。

『そんで持って機雷撃ってきましたよ……数は200個は軽く超えてますね』

「やる事は決まった…ミサイル装填準備」

『アンチシールド装填完了』

『射出しなさい!』

「爆破出来なかった物はここで打壊すよ!」

『了解!』

次々とミサイルを打ち出した。

『機雷を相殺中……90%打ち消しました!』

「機雷と侵入と同時に爆破しなさい!」

そして……

「全機雷爆散完了!」

次は艦対戦……フィーの顔を見た。

『お願いします』

俺は走って、ある場所に向かった。

『敵さんはアップアップですね』

『電磁投射砲があるから気をつけて』

『はい!!』

その時

『フィーナ、着いた認証をお願い』

通信画面に流が顔をだした。

『使用タイプは重攻撃装備です……よろしいですか?』

『準備完了!!』

『WADシステム起動……バランサー起動』

『リフレクトシューター発進します!!』

射出ご換装して待機した。

『接触まで5秒前……2……1……接触!!』

大きな穴が開いた瞬間。

『電磁投射砲!?!』

敵の電磁投射砲が発射された。

『……………!!』

シールドに当たり爆散した。

「嘘……………シールド!？」

『物理シールド……………超大型艦が体当たりしても壊れないほどの強度を誇ります』

流が乗ってる戦闘機が巡察艦を爆散した。

『向うの敵さん逃げようとしていますけど……………どっするっ』

『葬るよ……………砲撃準備』

『アルカンシエル展開……………バレッジ展開します』

「転移魔法陣展開!!」

『アルカンシエル……………発射!!』

光は魔法陣の中に入った瞬間。

「敵艦爆散……………他の敵機なし」

その言葉に艦橋の全員は大きな溜息を吐いた。

『久々に艦対戦したかも』

『この頃は、陸戦とか対人戦とかだったから新鮮だったかも』

全員はベースに戻った。

そして、暫くはフォーメーションの練習をしていた。

……ここに着て一ヶ月、向うさんも展開しているな。

門を円にして艦が展開していった。

「さてさて、敵のことについてだが……休眠式の機雷が出るのは百の承知だと思うから破片とか爆散後の残骸にも気を抜かないでおい
て」

その言葉にモニターに居た艦長たちは頷いた。

『こちらで物資の補給も出来ますから無理は絶対にしないで下さい』

「対応が追いつかない時はこっちも前が出るから……君たちの戦果に期待する!!」

そして、画面が消えた。

『私達も始めます……戦列艦展開します』

小さな船が発射口から次々と出てきた。

「縮小解除……機雷装填」

すると、元の大きさに戻り花が開いた見たく発射態勢に入った。

『AI機能問題なし』

「作戦開始と同時に発射せよ!!」

『了解!』

次の瞬間、ミサイルの発射が確認できた。

それに合わせてこっちのミサイルも発射した。

そして……

『機雷全機突入!!』

数秒後……

『敵機雷、ソードを通過します』

「相殺準備!!」

『全火気管制システム起動!!』

「マジックリング2個展開……平行展開」

『全機雷に標準セット!!』

「滅ぼす光…エンジェル・アロー発射!!」

無数の光が生まれ次々に爆散していった。

突撃艦も次々に機雷を仕留めていった。

「他の部隊にはこの事は通達していなかったのか!？」

他の部隊は次々に爆散していった。

『突撃艦の損害が激しいと相手との格闘戦の時間が厳しいですよ!?!』

『本艦隊より通達です。現状で何とかしろってことです!?!』

「他人任せ過ぎだぞ……フィー俺らのシールドはこの機雷何発食らえば貫通されるか?」

暫く考えて……

『最低で156万9312発です』

ならする事は決まった。

「機雷誘導システム緊急起動!」

この世界の機雷を全部受けてやる!!

『物理シールド全方位展開……強度最高ランク10!』

「全速で中央近くまで行くよ」

『エーテル航行開始!』

次の瞬間、周りが止まった。

『中央到着……解除!』

『機雷誘導システム発動!』

すると、他の艦を追いかけていた機雷が方向変換した。

ついでに、休眠していた機雷も起動した。

そして、次々に紫月に取り付こうとしながら爆散した。

『流さん！？』

提督が通信を入れてきた。

「くっ……平気、揺れが半端なく強いけど、攻撃は通ってない……心配するな」

『は、はい！！』

「次はお楽しみみの格闘戦……期待しているよ」

機雷攻撃を全部受け止めた。

「レベル下げた後、一回後退するよ」

『はい』

艦をとりあえず安全区域まで移動後、物理シールドを解いた。

『絶対防壁の方に変更……物理シールドは5分は使えないです』

仕方ない事なんだが……

「こっちを使った方がよかったのは気のせいなのか？」

『それでも良かったのですが……エネルギー消費量が半端じゃないんです』

「そう言う事が……」

その時、警報が再度鳴り響いた。

『敵艦隊から再度、機雷が発射されました……個数19万!!』

まだまだ有ったって事がよ!!

『本体から通達!!機雷発射するとの事識別は出す』

『あと、一個突撃艦に護衛艦を1つつけるとの通達あり……』

なら……

「第一突撃艦隊に通達!物資と反物質燃料を補給に一時帰還を認める……手の空いた者はすぐさま戻るようにと」

『了解……リフレクトシューターの発進スタンバイにかかります』

その言葉に、俺は格納庫に走った。

「A r i a 起動!!」

『魔導書セットお願いします』

晴天の書を窪みにセットした。

『流様と確認：サポートシステムスタート』

クロノストリングエンジンがゆっくりとスタートした。

『システムオールグリーン……… balancer 起動』

ゆつくりと、機体が浮んだ。

『流さん、滑走路展開します』

「換装：重攻撃装備」

『認証しました…流様行きます…!!』

フルスロットルにしたと同時に機体が最大加速で飛び出た。

『換装トレースシステム』

すると、赤い光が機体に平行になった。

『!!警告、3・4・9時より休眠機雷が起動…!!』

「換装タイムと機雷到達タイムは!?!」

『換装タイム3秒、機雷到達まで4秒…!!』

1秒ある。

「換装続行!!装着次第全エネルギーをシールドに変換…!!」

『はい…!!』

換装が完了した次の瞬間、機雷が一斉に取り付いた。

爆散していった。

『流さん!!』

『リフレクトシューター……健在!!機体損傷なしです!!』

「ギリギリ……死ぬかと思った」

正面を向くと突撃艦が六隻居た。

「こっちの機動力と移動力を見せてやるよ」

スロットルを全開にして、一瞬のしてサイドを取った。

ビーム砲で二隻を一気に沈めた。

「敵機一体に6機沈められたら悲しいよな？」

一列に並んだ場所に重砲撃を食らわし一気に沈めた。

「こっちは終わった……って」

紫月を見ると敵艦に取り囲まれていた。

「……可哀想な事になってるな」

『分かってるんだったら助けてください!!』

フィーナの苦痛の悲鳴に似た言葉が聞こえてきた。

「助けるといっても……他の艦は？」

『無事に戦線から突破……突撃艦は私たちにとり付いています』

まあ、あんな事したりしたら、真つ先に破壊に来るよな？

「……破壊、もしくは突破される確率は？」

『両方とも0%上回りませんけど？』

なら、有限実行と行きますか。

スロットルを全開に入れた。

「杏・李、各自判断で迎撃しなさい……武装フル使用許可!!」

『了解!!』』

その後、無事に全艦爆破できた。

「エネルギー30%以下……補給に戻らせて」

『了解……帰還許可出します』

そして、無事に戦争が終わって帰還した。

第21話：星界（後書き）

特殊なしゃべり方があるのですか今回は省きました（てか、書けないですから（汗））

次回作も楽しみに〜

流「おい、まで……肝心なことを忘れてるぞ」

そうだった。

前前回の感想を書いてくださったのに発表するのを忘れてしまい申し訳在りません（汗）

流「煮るやり焼くなり好きな方を選択して構わないぞ？」

なっぺ様、感想ありがとうございます。

そして、名前表示を間違ってしまい申し訳在りません（汗）

流「おまえの作品にプラムは何人いるんだ？」

……三人だった（汗）

流「だめな作者だな……次回もお楽しみに」

第22話：終りの物語（前書き）

本当にグダグダですが見てください

第22話：終りの物語

無事に杉並からも杖を回収した。

方法は…あまり言いたくも無いが。

「ふう〜」

朝の鍛錬も終り、家路に着こうとしたその時、悪寒が一瞬走った。

「…今の魔力は、どっかで感じたことがある」

だがそれが思い出せない。

「…気のせいだったら良いんだけど」

俺は、急いで家に戻った。

その悪寒は現実のものになって言った。

夜間、それは起こってしまった。

「！！！？……桜が………咲き始めている！！！」

今は10月、そんな事が起こる訳が無い！！

『流様………暴走球が初音島沿岸に出現！！』

『魔力チャージ急速展開！！』

そんな馬鹿なことがあるか。

しかし、ここからじゃ島全体に魔法壁を張ることが出来ない。

今いる場所を見上げた。

「……なのはさん達が来るまで何とか出来ればいいんだよね？」

『流さん？』

そこに聳え立つ一本の木を見た。

「母さんに逢いたくてここに来たのは正解だったな」

俺は、木に手をついた。

『駄目！流様！！』

「代価は何になるか分からないけど……皆守れるんだっいたら使わない手は無いな」

一気に木がざわめき始めた。

『魔道砲……来ます！！』

「はあああああ！！！！」

『初音島に魔法壁発生……亀裂が！！』

俺が育った島……無くさせるか！！！！

さらに木がざわめきが強くなった。

『き……亀裂が修復されていく』

『砲撃……停止』

『機動六課……着きました』

自分の体を見ると、淡い光が包んでいた。

この姿が維持はあんまり持たないな。

俺は、急いで機動六課の所に向かった。

海岸線のところに全員いた。

「……遅いぞ」

「う」……流さん!？」

「以前と同じ魔法と物理の4層……自己再生能力は半端なく高い」

『今回のミッションは次元怪物の撃破です』

『コアの破壊は私たちがします……コア露出までお願いします』

「この姿もいつまで維持できるか分からない……サクサク終わらずよっ」

そして皆の声が重なった。

「行くよ……ヒイナ!!」

「はい!!」

二人は抜刀した。

『小太刀二刀翁流・射抜』
『小太刀二刀御神流裏奥義ノ参・射抜』

「はああああああ!!!!」

障壁を射抜いた瞬間、一気に崩れた。

次々に攻撃が入っていく。

四人は頷いた。

「全力全開!!」

「雷光一閃!!」

「響け終焉の笛!!」

「魔力開放!!」

魔力が一気に充填されていく。

「……Breaker!!!!」

敵に見事に入り、コアを完全露出させた。

『…空間ロック！！』

『コア完全崩壊術式展開！！』

そして、光になって消えた。

「もう限界かな？」

「流……さん」

さらに、体の色が薄くなっていた。

「ながれ……くん……」

「色々勉強になったし、良い部下にもめぐり合えたから結果オーライって所だろうな」

そういって、ヒイナとレチエの髪を優しく梳いた。

「俺の教え守って今後、頑張れよ」

二人は涙を流し、言葉無いまま、ボロボロと涙を流ながら頷いていた。

「なのはさんもフェイトさんもごめんね……ヴィヴィオを最後まで面倒が見れないで……」

その言葉で二人は首を左右に振った。

「……流君、さよならは言わないよ」

「また、逢おうね……」

頷いた瞬間、桜色の光になり消えた。

「フィーナさん、また逢えますよね？」

『ええ、流さんは転生したんですから……ちゃんと会えますよ』

その光を見ながら、天を全員が見上げていた。

第22話：終りの物語（後書き）

シャロ「こ、こんな終わり方でいいんですか!？」

シャイ「……これが普通に終わるとは思わないですが（汗）」

シャロ「ですよね〜」

フィー「実はストックがここまでしか無いので今後どうするかは未定です（汗）」

シャイ「コラボ受付をしています」

では、次回もお楽しみに〜

第23話：新しい始まり（前書き）

今回から転生編です。

フィー「あなたは何回行方不明させればいいんですか？」

何回ってまだ二回しかさせてないよ？

では、始まります

第23話：新しい始まり

「ううゝ寒いな……」

「ポケットに手を入れるとこけるぞ」

「雄樹兄さんは寒くは無いですか？」

「そこまでは寒くは無いかな？」

横に並んでる小日向雄真と小日向すももを見ながら。

「四月って言うのに……流石に気が滅入るのもあるな」

すると

「お、来た来た」

「おっはよゝ雄真にすももちゃんに雄樹」

「準さんにハチさん……おはようございます」

「おはよゝ」

今日から新学期……二月の事件で一ヶ月以上春休みが続いたのだ。このメンバーで登校は久々尚且つ、すももが始めて加わったパターンなのだ。

「記事にはガス爆発って書いていましたけど……」

「その所は当事者しか分からないと思うんだけど？」

その当事者もどこの誰かは分からない状態なんだけど……。

魔法科が関って来そうなのは正解だと思うが。

それとも、宗家が関係してたりして。

それは架空の考えでしかないのだが……。

「雄樹：なんかぼろ〜としているが大丈夫か？」

「ん？…平気：昨日は寝すぎたみたい」

「確かに一日中寝ていましたね」

半分呆れた様にすももが言ってきた。

「春眠暁を覚えずだ」

「それ、多分違いますよ」

「…寝ているんだけどね。妙に疲れが取れてないんだよな」

なんか以前：といえば良いのか変な感じだが。

「自分の夢を見るんじゃないかって…他人の夢を見ている感じがあった」

そもそも、そんな事をする事すら不可能に近い状態だし。

ってか、出来るわけでもない。

「その寝れなかった分が昼間に寝るって事になったと言っ訳」

「なんか変なことだね？」

「確かになんだけど…いちいち考えるのも疲れてきたから寝込んでたのもあった」

「……のも？」

準は後ろにあった部分を拾い上げて聞いてきた。

「プラス熱があったってこと……38.5度」

その一言で雄真とすももは大きな声が響いた。

「熱があつたのかよ」

「だ、大丈夫なんですか!？」

「夕方には、熱も引いていたし、大丈夫だ」

夕方になればなんか体の方も軽くなつたのだ。

「今日は無理はしないでくださいね」

無理だろう…。校長の話は長いのだから。

そして……

「また、すごいクラスになった様な気がするの、は気のせいかな？」

雄真の横の席を見ると魔法科のアイドルが座っていた。

神坂春姫…瑞穂坂の才媛と言われている。

そして、柊杏璃…学園の二番目と言われている。

…いろんな意味でこの教室は恵まれた環境ではないだろうか？

「エル・トラス……」

って、詠唱魔法！？

見ると、杏璃が魔法を繰り出そうかとしえていた。

「ちょ、まっ……」

そして、一人の生徒が犠牲になってくれたのは言うまでも無かった。

…八手、感謝だ。

教室に戻り、自己紹介も無事に終わった。

「雄樹、今日はどうするんだ？」

「うーん、今日はかあさんに『OASIS』に手伝いを要請されて
いて」

ちょうど朝に出る前に言われて断ることが出来なかった。

「つとことは外？」

「きゃー、雄樹の制服姿が見れるの」

「準、残念だが不正解…キッチンに入ることになった」

時々、すももの帰りが遅いときは俺が変わりに準備している。

「雄真に作らせたなら大変なことになるからな」

それで夕飯が出前になったのは言うまでも無い。

そして、三人と別れて『OASIS』の厨房に入った。

「雄樹君、上がったも良いよ」

時計を見ると7時の方になっていた。

今日は、すももが夕飯を作るって言うていたからもう少し遅くなっても良いよな？

「最後までしますよ…閉店の方の作業も手伝います」
「悪いね」

そして、仕事が終わったのが八時を回っていた。
正門を出ると真っ暗だった。

「流石にこの時間になると人は誰もいなくなるか」

鞆を持ち直し正門を出た。

「ってか、真っ暗だし」

俺は、足早で家に帰ろうとしたその時。
森の奥で明るき光が目に入った。

「!!!?…な、なんだ??」

そして、光った方をも一回見てみると同じように光った。

「って、あそこは魔法科の裏校舎じゃなかったっけか!？」

俺は、形振り構わずその場所に向かった。

後のことすら考えずに…。

「!!!？」

そこは、二つの魔法がぶつかり合っていた。

「小日向くん!？」

トランペット形の杖を持った女の子…神坂春姫さんとそして…
傘を持った女の子が対峙していた。

「虫けら一匹増えたか…:…なら!!！」

傘を持っていた女の子は一気に詠唱を唱えた。

「やばいー！」

次の瞬間、俺は考えることをやめていた。

トクン…トクン…

「!?!?」

周りの風景…すべての物がスローに見えていた。

「…魔法の攻撃、こんなに遅かったんだ……」

少女が放った攻撃は全て紙一重でかわした。

「なっ!?!?」

雄樹は手をかざした瞬間、魔方陣が生まれた。

この世界で使われる魔法ではなく、また別の世界の魔法。

『我、解き放つ……光魔法【レイ】』

俺は、魔法科の棟に来ていた。
そこで会いたい人がいるらしい。
なんとなくどなたかなのは想像できたし。
ノックすると扉が開き想像した女性がいた。

「……久しぶり、雄樹」

「やっぱりというかなんと言つか……なんとなく想像が出来たし」

「小日向君……知ってるの？」

「知ってるよ……この十数年は逢っていないのは確かなんだけどね」

小さくため息を吐きながら答えた。

「感動の再会じゃないかしら？」

「確か的那样なんだけどね……母さん」

その言葉に春姫が驚きの声を上げたのは言うまでもなかった。

第23話：新しい始まり（後書き）

転生編の舞台は「はびねす！」です。

中身はかなり端折ってるし、あんまり覚えてないかったWWW

フィー「良くこの作品が覚えてあったですね」

パソコン版を急遽買ってプレイしましたからWWW

空「なんていう行動力（；；）」

・・・だから、何で君がいるのかな？

空「流くんの別の意識体だし・・・貴女の事でもあるんだよ？」

・・・そうでしたね（；；）」

知らない人は、ほんとうに解らない作品だしね（；；）」

それでは、感想を・・・

フィー「無いですから」

・・・いいもん、くれるもん。

フィー「じ、次回作もお楽しみにして下さい」

第24話・本当の自分（前書き）

ではでは、さういふ

第24話：本当の自分

次の日……ベッドで臥せっていた。

「雄樹兄さん……本当に大丈夫ですか？」

制服を着たすももが心配なって覗かせていた。

「心配するな……一日過ぎればすぐに良くなるから」

「分かりました。雑炊作ってますから……お腹空いたら温めて食べてくださいね」

家の中が静かになったのを確認しながら俺はベッドから起きた。

そして、引き出しの中に入ってるアクセサリーを取り出した。

「セットアップ」

そつと呟くとアクセサリが双剣に変換させた。

「……この世界の魔法ではないか」

俺は、庭に出た。

「エル・アムダルト・リ・エルス・デイ・ルテ・エル・アダフアル
スー!!」

次の瞬間、イメージ通りの魔法が生まれ宙を浮いていた。

「……この世界の人間でも在るか……」

変な中立地帯の人間だね。
光を消滅させて部屋に戻った。

「さて、あんまり魔法を使うとやばいからな……」

今日は、学校休んだ理由は風邪になってるけど魔力の反動で体が動かないのが本当の理由だし。

慣れれば普通に大丈夫なんだしね。

本当は、体を動かしたいのが理由だし。

「音羽さんも一日安静と念押されてしまったし」

外に出歩くのはもっと駄目だし。

しょうがなく、もう一眠りするか。

そうして、深い眠りについた。

『…さま……れさま!!』

その声にゆっくりと目を覚ました。

「きみ……だれ？」

『お久しぶりです。我が主様』

ブロンズ髪の子が目尻に涙を溜ながら答えていた。

「我が主？」

『あなたは、一つの島を守るために自分の犠牲にしました』

一つの島？

『初音島……前世のあなたが居た島です』

初音島？

次の瞬間、頭痛がした。

「ぐう……があああ!!!!」

見たこともない映像がどんどん流れ込んできた。

「音姫ねえ、由夢……義之……さくらさん、音夢……母さん!!!!」

地べたに倒れこんで肩から息をしていた。

『…マスター?』

「……泣きそうな顔をするな…シャイン」

前世の名前は【桜内 流】

そして目の前に居る晴天の書【シャイン・フォース】のマスター。

『マスター、再契約です!!』

そして、眠りから覚めると一冊の本が頭の横にあった。

「また、よろしくな…シャイ」

その時、時計を見ると午後3時が過ぎていた。

「結構疲れていたのか？」

こんなにも寝ているとは思わなかった。

俺は、一階に降りて土鍋に火を入れた。

「さすがにすももが作った雑炊食べない訳にもいかないからな」

食べた後、部屋に戻ろうとしたとき玄関の戸が開いた。

「雄樹兄さん、起きていたんですか？」

すももが心配しながら近づいてきた。

「もう大丈夫だ、沢山寝たからな」

「そうですか、良かったです」

そういえば、もう一人が見当たらない事に気がついた。

「そう言えば…雄真は？」

「兄さんは、OASISの方を手伝っています」

がんばってウエーターしているんだな…きっと。

その光景が目には浮かんできた。

その後、すももが作ったご飯と一緒に食べた。

次の日学園に行き教室に入り席に着くと、神坂さんが来た。

「おはよう、小日向さん」

「おはよう…どうしたの？」

「昨日のプリント貰いましたか？」

……プリント？

「その表情だと貰ってないんですね」

少し。あきれた表情でプリントを渡された。

そして、それを見ると……

「……今日の日付の提出プリント………」

しかも一時間目と見た。

「残り15分……何題は、優しい……逝ける!」

「いやいや、その【逝ける】じゃないから」

雄真のツツコミを一蹴して急いで取り掛かった。

（10分後）

「……おわ……た………」

精根尽き果てました。

昼休みはほぼ死亡していた。

「雄樹…生きてる?」

「……今日もぽっくりと行かさせて頂きました」
「何を言ってるんですか…」

神坂さんも呆れながらそう言ってきた。

「今日はどうするの?」

今日は音羽さんが作ってくれるんだったよな?

「行く…」

次の瞬間、携帯が振るえた。

携帯を開けると【御雑】と書いてあった。

内容は…【弁当】

それしか書いていなかった。

「…ゴメン、用事が出来た」

すまんと答えた後、急いで御雑先生の部屋に向かった。

トントントン…

「はい〜どうぞ」

部屋に入ると、お弁当箱を二つ持った御薙先生……母さんがいた。

「あれだけで良く分かったわね」

「散々鍛えられましたから」

特に前世の母さんからと心より付け加えた。
今の音羽さんも凄いですけど……

「少しゴメン」

携帯を取り出して、音羽さんにメール急いで送った。
母さんに逢っている事は伏せてだが。

まあ、音羽さんと母さんは友達だから話しているとは思いますが。

「打ち終わり」

「それじゃ、一緒に食べましょうか」

そう言って、弁当箱を渡してもらった。

「ありがとう」

弁当箱を開けると色々なおかずと色采だった。

「いただきます」

卵焼きを手に取り、口に運んだ。

「おいしい」

しばらく他愛のない話をした。

「そういえば、雄真君には話していないんだよね……魔法のこと」

その答えに、頷いた。

「けど、もうしばらくしたらそんなことも言えなくなるような気がするけどね」

「それは予感……それとも？」

「……ノーコメントでお願いします」

近いうちに分かる気がするけどね。

軽く笑ってその指摘されたのは言うまでもなかった。

それから、数日が経過した。

雄真と春姫が学級委員長になって、魔法に関する事に深くかかわる体制になった。

何とかこそそこそとかかわってる状態が続いていた。

そんな中で悪巧みというかなんと言っか…準と杏璃が春姫と雄真をくっ付けようと企んでいるらしい。

「まあ、関係はないんだけど……」

「で、雄樹兄さんは家でゴロゴロですか？」

「まあ、宿題関係はとくに終わらせたしね……たまったDVDの消費しか考えがなかった」

この頃は、見る機会があんまりなかったと言えるし。

「今日はどうするんだ…すももは？」

「……雄樹兄さんと一緒に見ます」

「はいはい…何か飲みたいのはあるか？」

「オレンジジュースをお願いします」
「了解」

台所に行き、冷蔵庫からオレンジジュースと自分のお茶を取り出した。

リビングに戻り、オレンジジュースを出した。

「ありがとうございます」

二人は物静かにDVD鑑賞に時間を費やそうとしたとき、突然携帯が振えた。

「……誰からだ、一体？」

携帯の画面を見た。

「……母さ……」

最後まで言いかけて口をつぐんだ。
しかしその言葉はすももには確りと聞かれていた。

「……雄樹……兄さん？」

「ちよいと出掛けて来る」

携帯と財布だけをポケットに詰め込んでそそくさに出た。

外に出ると大きな溜息を吐いた。

「あ、あぶなかった」

けど、すももは気がついただろうな。

本当の母さんと会っているということに。

変なことになっていかなければ良いんだけどな。

それは絶対に無理なような気がするには気のせいだろうか？

とりあえず、母さんの合流した後、荷物持ちになったのは言っまでもなかった。

一息をつくために喫茶店に入った。

「なんか顔色が悪いけど大丈夫？」

心配そうに母さんが声をかけてきた。

「半分寝ていたから……それに、すももにもばれそうになるし」

本当はばれてもいいんだけど……なんか照れくさいし。

「そういえば、雄真君は？」

「春姫さんとデートみたいだよ」

注文していた料理がテーブルに並べられた。

「雄樹は彼女作らないの？」

「今のところは考えてはいないかな……とにかく今は作る気は全然ないってことかな？ まあ、向こうに戻ったら何かと一悶着ありそうな気がする……」

その後、学園に用事があったので私服のまま学園のほうに戻った。

「ん!？」

校門を潜ったとき強い魔力が…気配がそれもでかいのが三つもあった。

「式守に柊さんに神坂さん!？」

このでかさでほぼ間違いなく気がする。

「違うわ…四つあるわ」

母さんの言葉でもう一回探知すると。

「この魔力は…雄真!？」

こんなのに巻き込まれたら一溜りもない!!
母さんの顔を見るとうなずいた。

「ビクティム…セットアップ!!」

そう言つと、双剣が手の中に納まった。
そして大きく跳躍した。

「くうううう!!」

春姫は何とか伊吹の攻撃を耐えていた。

「春姫!!」

「ここから先は行かせません!!」

杏璃には信也が雄真には沙耶が立ちふさがっていた。

「これで最後だ!!」

空に大きな魔方陣が浮かび上がりそして…

春姫に降り注いだ。

「春姫!!!」

一面砂煙が舞った。

「はは…これでおわ……」

シュッ

次の瞬間、伊吹の頬が何かを掠った。

そして、一筋の赤い液が垂れた。

「何とか間に合った…」

春姫と一緒に半球体シールドが張られていた。

『Gravity Shield（重力の盾）』

「小日向…雄樹……」

本気でギリギリだったし。

「小日向君……」

少量の魔力開放した瞬間、再度、式守を睨んだ。

「少しだけ……頭を冷やそうか？」

手を伊吹に向けた。

すると、六つの球体が出現した。

「雷華の花よ…舞い誇れ!!」

ドン

物凄い音が聞こえた瞬間、式守に対して紫色の球体が目の止まらぬ速さで襲い掛かった。

「ふん、こんな物!!」

手を翳し、目の前に防御壁を張った瞬間。

「旋回！！」

次の瞬間、横に散らばった。

「何！？」

バックに回らせ、見事にぶつかった。

「きゃあああああ！！」

「「伊吹様！！」」

沙耶と信也は駆け寄りそのまま後退した。

「…うそ、私達でも当たらなかった攻撃を簡単に当てるなんて」

驚いたように杏璃が呟いた。

「……ふう〜」

ビクティムを待機状態に戻して一回呼吸した。

「何とか退けたけど…ギリギリってとこかな」

けどこれだけ息が上がるのはやっぱり気のせいではないな。

昔…前世より魔力が全然落ちてる。

「ランクAAぐらいの魔法までしか撃つのが厳しいではないかな」

式守との対決は何とか勝てそうではあるけど……

まあ、この世界だとCLASS：Aぐらいしか出来ないな？

「さて、どうしよっか…これ？」

さっきの魔法戦の残骸あたりが滅茶苦茶のなっていた。

「復元魔法でどこまで出来るのか心配なんだけど……」

もう一度、ビクティムを本来の大きさに戻して杖状に変換させた。

「……われ願う、元の姿を！！」

すると、森が復元していった。

「…終わり」

次の瞬間、膝をついた。

そして、母さんが俺の体を支えた。

「雄樹…無理をしすぎよ」

その言葉を最後の俺は深い眠りについた。

第24話：本当の自分（後書き）

毬藻「あとがきですよ」

真優「私の出番あんまり無い…」

毬藻「増やしたいのは山々なんだが……40話近くまで出番無いんだよね（――；）」

プラム「番外編を作っちゃえば良いんだよ」

毬藻「…個々の日常的なものでいいなら一人を二時間弱でなら可能だが」

真優「なら作ってよ」

毬藻「ただし、今の状況が終わり次第になるのだがそれで良いか？」

真優「わ〜い」

毬藻「順番は杏&李 真優 プラム……本当にあんまり登場してないキャラしかかないからな？」

プラム「うん、ありがとう」

真優「では、感想とお礼の言葉です」

プラム「水橋おにいさま、コラボありがとうございました」

毬藻「次回作もお楽しみにしていて下さい」

第25話：時間魔法（前書き）

グダグダですが観て下さい

第25話：時間魔法

俺はあの日から御薙先生の家で過ごしている。

「今日は帰ってくるの？」

「うん、今日は音羽さんの家に行ってから荷物を持ってくる予定」

俺は玄関で靴を履いて家を後にした。

昔住んで居た家なので勝手とかは何となく分かってる。

「行ってきます」

あの事件から俺は学校に行っていない。

雄真と顔を合わせるのも何とも嫌だった。

コンプレックスといえれば良いのか…そんなところだ。

ちなみに今日は金曜日…小日向家の全員は学校に行っているだろう。

家に到着して、鍵を回して家の中に入った。

自分の部屋に行く…

「久しぶりです…流様…いえ、小日向雄樹様」

そこには、ドレスを着込んだ一人の女性が立っていた。

それは、俺が良く知ってる【人】だった。

いや、人ではない【人工聖霊】だ。

「やっぱり覚えていませんか？」

「…覚えているよ、フィーナ・インシエル」

「やっと…見つけました」

目尻には、うすつらと涙が浮かんでいた。

「けど、何でフィーが居るんだ？移動認証が終わっていないけど？」
『簡単なことです。ここに雄樹様が存在している場所です』

そっか…存在認証魔法が発動したということか。

『紫月は衛生上で待機モード中です』

「杏と李は？」

『時空管理局で健在…みんな元気ですよ』

一回頷いてまた頭を上げた。

「今回、この世界以外からの外部のものが侵入する可能性がある…
警戒お願いしていいか？」

『了解しました…全員に通達しています…シャインちゃんを宜しく
お願いします』

そして、消えた。

家に戻り、シャフトを借りた。
杖なしで一瞬で組上げた。
集中を高めた。

「結構サボっていたから…キツイな」

その後、型の練習をした後、シャインと組み手をした。

『マスター…』

「……言いたいことがあったら言って良いよ」

『弱すぎます』

本当にズバッと言ってくるし。

本当のことなので言い返せないが。

『転生の影響だと思っです』

体慣らしていないからそうなるとは思っていたが。

「そろそろ、母さんが来ると思うから待機状態に入って」
『了解です』

本に戻り、それを抱えあげた。

家に入り、携帯を開くと着信があった。

着信あり：【神坂春姫】

意外な人物からの着信があった。

時間から見てもそんなに時間がたつてない。

俺は、リダイヤルをして掛け直した。

『はい、神坂です』

「…小日向です。先ほど連絡がありましたか…用件は何でしょうか？」

『学校…来てないから、先生とか準さんとか心配してるよ？』

心配…母さんも心配してるって聞いたけど。

「ゴメン…もう少し心の整理がいたら学校に来る…：…もう少し学校を休むよ」

『…分かりました。登校するのを楽しみにしていますね』

「ありがとう」

『それと、雄真君の魔法のこと聞いたから…それに御雑先生の子供っていうことも本人は知ってるから』

そして、携帯の通信ボタンをきった。

「もう、後は引けないんだな…えっ！！！！」

次の瞬間、強い魔力が体全体を包んだ。

「なんなんだ！？この馬鹿でかい魔力は！！！！」

『これは鎮守の森の封印が突破されました！！！！』

こんな事をするのは…あいつしかいないな。

俺は飛行魔法で魔力の場所まで飛んだ。

結界の場所に行くと、綺麗な裂け目が出来ていた。

「…信也のレジスト効果は伊達じゃないってことか」

急いでその中を潜った。

そこは、魔法結晶の塊だった。

「雄樹君!？」

「…着たか。小日向雄樹」
「雄樹…」

母さんは魔力結晶に包まれていた。

厳密に言くと、魔力結晶から魔力を使った結界に閉じ込められていた。

「式守伊吹に問います…あなたは、これで何をしようとしているのか簡潔に答えなさい!」

【standby ready】

「セットアップ!」

両手には双剣が握られていた。

「私はただ、なつめ姉さまに逢いたいだけなんだ」

次の瞬間、膨大な魔力が浴びせられた。

「死者の魂に逢えるのはお彼岸ぐらいにしてくれ!」

ドクン…

「くうっ」
「…」

【神速】

一気に加速して、伊吹に詰め寄ろうとしたが。

「同じ手は食わん!!」

信也が横から出てきて薙ぎ払った。

「信也、解ってるのか!!これを発動したら…」

「成熟の為…俺は伊吹様を守る!!」

すると、信也の風神雷神から雷が放ち始めた。

「…ビクティム、カートリッジは何個残ってる？」

【4nd】

「上出来…ビクティムファーストロード」

【Purrg】

双剣から砲撃モードに変化させた。

「フレイメル・バスター!!」

【Active Shot】

信也が突っ込んできたと同時に思いつきり撃ち放った。

そして、レジストされず信也は後ろにと飛ばされた。

「な、何故にレジスト出来ない!？」

「簡単なことだ…レジストするなら反対にレジスト無効化の能力を付加すれば良いだけの話」

そのまま沈んだ。

そして、再度伊吹を向いた。

「……あんた何者だ？」

その言葉に全員が驚いていた。

「……やはり気がついてたか…どこからだ？」

「その魔力結晶を維持できてる時点でだ…式守の魔力でもこんな魔力は制御は出来ない」

「……流石は【元】時空管理局の機動六課のフォースの隊長さんだよ」

「ど、どうゆうこと？」

「そのままの意味…本当の伊吹ではないって言うね」

『もしかして…マスターが弱い理由って』

「前世の引継ぎ…魔力制御がここまで尾を引くとは思ってなかったよ」

本が浮かび上がり、シャインが出てきた。

「なら、先にお前たちを時間逆行してやる!!」

黒い球体がいきなり雄樹とシャインを飲み込んだ。

「これで、あの二人はこの世界から消滅する」

そして、高笑いが聞こえた。

「……………なあ、シャイン」

『何が言いたいか解ります…姿そのままで力の開放が出来たんですか？』

「そうなんだけど…それに、時間魔法の副作用も完全に消えたみたい……………」

シャインは小さく溜息をついた。

「あの人…途轍もなく【馬鹿】です」

シャイン…それを強調したらいけないような。

「とりあえず…撃ち放つためのカートリッジ精製お願いできる?」
『はいです』

すると、三つのマガジンが作り出された。

「後、敵さんの位置は……」

雄樹は向き直り、どっちが前か分からないが向いた。

「行くよ…スターライト・ブレイカー」

次の瞬間、次元が裂け光が伊吹の偽者に当たり吹き飛ばした。

「な、何なの!?!」

『無事に帰還成功です…マスター』

「ちゃんと、敵さんのみに当たったから上出来だな」

そして、敵は驚きを隠せないで居た。

「桜内 流の前世の異名はなんか覚えてるか？」

その言葉に敵は目を白黒させ、額から冷や汗が流れていた。

「……時間の魔導師」

「正解だ…おかげで以前の魔力と技量が戻った…大いに感謝します」

「あ…あぁ……」

そのまま敵前逃亡をしようとしていた。

『逃がさないです…!』

シャインがそのままクリスタルゲージに閉じ込めた。

「……転送」

そのまま、敵は消えた。

「さて、伊吹は……」

魔力を広範囲に飛ばすと。

「見つけた……こっちか」

大きな魔力結晶の後ろに行くと、伊吹が横になっていた。
そして、母さんが見てもらった。

「このままじゃ、危険ね」

そして、雄真の魔力供給により一命を取り留めた。

その後、雄真も一緒にぶっ倒れたのだが……その話はまた後日に
出来ればしよう。

第25話：時間魔法（後書き）

今回は雑談会はお休みさせていただきます

第26話：帰還？（前書き）

今回もクダクダになっております（汗）

第26話：帰還？

「そして、時間が過ぎた。」

伊吹はお咎めも無く、学園の方に通うことになった。

俺は、また小日向家の方に戻って生活を始めた。

すももと音羽さんには散々怒られけど……

雄真は、神坂さんと付き合っていた。

まあ、あの流から考えれば当然なんだけど……

雄真は人気高いから当然だし。

そんな訳で、夏休みに突入した。

「……フィーナ、何で夏休みに入って紫月にいるのかな？」

『簡単に言えば、体慣らしと溜まった仕事の処理ですね』

喜びながら言われても嫌なんだけど。

『仕方ないですよ……桜内流の消滅してから十数年間の仕事は朱雀様と智也様がしてくださりましたし』

負担させたのは仕方ないことだと思っけど。

「とりあえず、今回の仕事は終わったんだよね？」

『溜め込んでいた仕事は全部終わりました……後は雄樹様の学園卒業まで何もありませんよ』

『まあ、魔法とかも元に戻ったのですし……戦闘経験も大丈夫みたいですね』

……十数万年仕事をさせられてそんな事いわれても嬉しくない。

「では、出発した時間から5分後に時間遡航の準備を」

そして、俺たちは時間を戻り始めた。

「ただいま」

アイスボックスを片手に帰還した。

「雄樹君、おかえり〜」

玄関から音羽さんが出てきた。

「…かあさん、ただいま」

今は、恥ずかしながらも【かあさん】と言えるようになった。
かあさんに、アイスを渡してリビングに向かった。

「雄樹兄さん、お帰りなさい」

そこには、すももと…

「早かったんだな」

伊吹が座っていた。

「式守も居たんだ…勉強会か？」

その後ろに信也と沙耶が居た。

「はい…雄樹様はもう終わられたんですか？」

「ああ、もう終わってる…何なら答え合わせしよつか？」

「いえ、私はまだ全部終わらせていませんので」

夏休みに入って3日が過ぎていた。

「ところでお主は何をしているんだ？」

「なにつて…なんだ？」

「……恋人とか居ないのか？」

まあ、双子ならそうなるわな。

「流石に雄真になりすまして神坂さんとデートはしたくもないし」

雄真が怖くなるっていうのも含まれていえるが。

「そっか…まだ居らぬのか」

俺は、台所に入って冷蔵庫を開けた。

「何かリクエストとかあるか？」

「雄樹兄さん、私が作りますよ!？」

「二人は勉強に集中しなさいって……炒飯と簡単な物になるが良いか？」

「むう、お願いします」

ちよつと膨れっ面のすもを見ながら調理を開始した。

「私もお手伝いしても良いでしょうか？」

すると、沙耶が手伝いを申し出てきた。

拒む事無くOKを出した。

数十分後……

テーブルには炒飯の他に色々な料理が出ていた。

流石にコロツケは作るのに時間がかかるので作らなかつた。

全員、テーブルに着こうとしたとき携帯が鳴った。

「…誰だ？」

ディスプレイを確認すると……

【着信：朝倉音姫】

その名前に一回時が止まった。
いや、止まらずに入られなかった。

「……ありえないだろ？」

携帯の着信を取った。

「……はい、小日向です」

『……久しぶりだね。流くん』

その声はまぎれも無く音姫姉の声だった。

「……その声、変わってないね。音姫姉さん」

その言葉で近くに居た全員は驚いていた。

『だって、流くんがいなくなって三日目から電話してるんだから』

……はい？

「すみません…事情が全然のみ込めていないんですが」
『時間逆行魔法の応用やで』

その隣に居た主から答えが聞き出せた。

「…はやて隊長！？」

流石に驚くよ。

『早速なんだけど……こっちに戻れないかな？』
「初音島に……ですか？」

話の内容はこうだった。

転生しても機動六課の在籍は外れない。

また、厄介な事件が始まるうとしていると言う事。

「隊長としての任か」

本来ならすぐに戻っても良いんだが。

すももが…ねえ。

「絶対に行つては駄目です…!!」

強い口調で言われてしまって。

とりあえず、現段階のところは保留にしてもらってるが…戻る時間は確定している。

桜内流が消滅してから三日目の時間。

「ほんと……どうしたら良いのだろうか」

『なら、簡単な事ですよ』

すると、扉からシャインが入ってきた。

シャインもこの住人として認知されている。

「簡単なこと？」

『旅行で初音島に御招待です』

……………あつ!?!?

「…その方法を忘れていたよ…フィーに許可は取れるか？」

『許可取る前に承認って言いますよ』

画面からフィーナが見ていた。

「時間遡行使うから…みんなの都合を聞いてから出発をする…出来るか？」

『『御意に』』

そして、画面から消えた。

「時間の魔法使いがこんな事を忘れてしまっなんてどう言う事なん
だろう…ねえ」

『この世界に着てから時間魔法やら色々なものに触れる機会があん
まり無かったから仕方ないと思いますから』

そして……

7 / 25

今回事件にかかわった全員が来ることになった。
ただし、音羽さんは仕事の都合上によりこれなくなった。

今回の引率で鈴莉先生が着てくれることになった。

「今回行くのが…雄真に神坂さんに式守に上条兄妹に柊にすももに御雑先生と高峰先輩…準と八子で良いんだよね？」

『はい、皆さん居ますよ』

シャインの号令で全員居ることを確認した。

「……シャイ、もしかしなくても俺が全員運べというおちは無いよな？」

『マスターじゃないとパスコードは開けないですから』

その言葉に小さく溜息をついた。

「じゃ、転送するね」

一呼吸置いて、俺は集中した。

『天より運ぶ羽衣よ、我の意思に思いて今その通路を開かん！！』
【空間長距離転送】』

そしてその場に居た全員は姿を消した。

『皆さんお疲れ様です』

そこには、フィーナが待機していた。

「……………あなたは？」

『戦艦【紫月】のメインコンピューターのフィーナ・インシエルと言います』

「そうには見えないんですけど」

不思議そうに準が答えた。

『私は人工聖霊【ホムンクルス】ですから…ちなみに体は流様が御創りしましたけど』

「ながれ……………さま？」

『前マスターとでも思ってくれば良いです』

その答えを知っているシャインは流し目になっていたのはいうま

でも無い。

そして、先生もだった。

『それでは、出発したいと思えますので後ろの座席にお座りください』

俺も行くことしたら首根っこをつかまれた。

もちろんこういう事するのは一人しか居ない。

『雄樹様は運行の手伝いをお願いします』

なんか予感としてはいたが…やっぱりか。

「…しっかりとやるから離してくれ」

そう言うと離してくれた。

そして、全員が座ったことを確認した。

「『時の力により時を跳ばん』」

そして、その時間から消えた

「はい、到着」

「…あれ？景色とか全然変わってなしですよ……」

「いえ、ちゃんと目的地に着いていますよ…皆さんを降ろします…
現地にも人の誘導をお願いしますね」

その現地に人は一体誰だろうと言うのが一番の不安材料でもある
んだけど。

フィーナが転送して大きな桜の木の前に降ろされて…

『…おかえり』

「……予想は出来ていた」

それはこの人という事も含めてだが。

そこには、俺と同じくらいの年の女性が居た。

…見た目だけが。

『今、変なこと考えませんでしたか？』

由夢の元祖…迫力あります。

『返事は？』

「…初めまして…そして、ただいまです…母さん」

『今はこの名前で言うね…お帰りなさい、流』

母さん…音夢母さんは優しく微笑んでいた。

そして、音夢さんの案内で家に戻ると。

「…帰ってきたね」

そこにはデバイスを持った三人の女性が居た。

「初めまして…ただいま、なのはさん、フェイトさん、はやてさん」

「初めまして…そしてお帰りな」

「雄樹、この人たちは？」

準が不思議そうに聞いてきた。

「自己紹介が遅れました。古代遺失物管理部…通称『機動六課』の高町なのです」

「同じくフェイト・T・ハラウオン」

「部隊長の八神はやてです」

それぞれ挨拶していった。

「ついでに言うと…前世の魔法のお師匠さん」

その言葉で御薙先生以外は驚いていた。

「そんな事無いでしょ…今は教える立場のほうが多いと思うよ」

最初はそんな事が無かったような気がするんですけど…

「それで、全員召集かけたけど…大丈夫だよな？」

その言葉と同時にドタドタと音が聞こえてきた。

「流くん!?!」

「流兄さん!!」

着たのは音姫と由夢だった。

「初めましてとただいま…音姫姉さんに由夢……」

その言葉に二人は一瞬驚いたけどそして…

「初めまして…お名前聞いても良いですか？」

「小日向…雄樹です」

俺はまたここに戻ってこれたと実感した。

第26話：帰還？（後書き）

毬藻「キャラクター雑談コーナー」

ファイ「毎回毎回……他にネタはないんですか？」

毬藻「うーん、特にない……で、何か書いてほしいネタがあるの？」

ファイ「そうですねえ……真優ちゃんの基本プロフィールを書いてくれませんか？ PV二万の番外編考えてなければ？」

毬藻「確かに忘れていたわ……なら、簡潔型でいくよ」

名前：真優

性別：なし（擬似体時は女性）

属性：龍（レインボードラゴン【虹龍】）

流の龍血の魔力によりこの世に産まれた龍。

魔力の許量はプラムと同量以上と考えて良い。

性格は、優しくて争い事を極端に嫌う。

ただ、鍛錬や技術向上の修練は毎回欠かさず行っている。

基本武器は使わず『拳』を主体の武術を駆使している。

甘いものには目がない。（流が出すお菓子は好物の一つ）

真優「これからも、よろしくお願いします」

ファイ「話は戻しまして、さっきの活動報告の前振りは一体なんですか？」

毬藻「今後の話の中間に必要なと思って載せるか読者様の意見を聞こうとしただけ」

フィー『そして、反応は全くなかったというわけですね？』

真優「遠まわしに『おまえの小説は面白くない！』と読者さんに言われてるんだ」

毬藻「……俺、もう小説書くなっていわれてるのかな（泣）」

真優「うん、そうだと思うよ（笑）」

毬藻「うわ〜ん。・（ノ、（。・。（

フィー『現実はずらいですね（汗）』

ノンフィクションです

番外編：流は死亡グラフの回避は出来ないwww（前書き）

今回はちょっと久々に水橋さんとコラボです。

頑張ったんだけど、エルザの活躍あんまり出来なかった。
その前に、何か喋ったか？^^；

では、始まります。

番外編：流は死亡グラフの回避は出来ないwww

ライト「さて・・・覚悟は出来てるか？」

流「てか、いきなりかい!!」

華琳「あんな事を言ったんですから、それなりの覚悟はしてるわよね？」

流「覚悟と言うか・・・あれは俺の信念だ!! とう言われようと変える気はしない!!」

ライト「なら、その信念・・・ぶっ壊してやる!!」

一気に加速して、流と間を詰めた。

流「くっ・・・空間認識魔法を発動しなさい」

ビクティム【Yes, my master】

次の瞬間、世界が灰色の景色に変化した。

そして、ライトの攻撃はスローモーションに・・・ならなかった。

ライト「せい!!」

剣を横に振り、その対応に反応できなかった流は思いっきり後ろに吹き飛んだ。

フィー『・・・綺麗に吹き飛びましたね(・・・)』

華琳「貴女のご主人様なんですよ・・・助けないの？」

華琳のその言葉にフィーナは首を横に振った。
隣に居たシャインも同時に首を振った。

シャイン「今回はマスターが言いました『信念』って、その言葉はシャイン達も理解してるから手を出さないんです」

フィーナ「それに、今回の騒動の切っ掛けですし・・・それに今回は手出し無用って流様・・・・・・・・雄樹様に言われましたから私達は何も出来ないですよ」

華琳「・・・忠実なのね？」

そして、エルザもその言葉に同意しながら崖の上で大人しくお茶をしていた。

- 流 side -

流「ぐっ・・・・・・・・がはっ」

口からてっつの味がしたと思った瞬間、赤い液体を吐いた。

ライト「お前の攻撃はそんな物か？」

ホント勘弁して欲しいよ。

五重封印で魔力ランクB・・・しかないのに本気で来るなんて。けど、勝負を申し込んだこといったししょうがないな？

この戦いが負け試合だとしても。

流「俺の信念は曲げない!!」

ライト「なら・・・一回死んで来い!!」

ライトが、俺をめがけて突っ込んでくる。

これで、享年の納め時かな？

？「・・・なんで、そこで諦めるのかな？」

次の瞬間、声が聞こえ閉じようとした目をあけると誰かが立っていた。

- 流 side out -

？「まったく、何をして居るかと思ったら」

髪の毛の長い人がライトの剣を受け止めた。

受け止めたという表現はおかしい、片手で突撃を受け止めたって言うのが正しい表現だ。

ライト「なっ!？」

？「・・・なぜこんな事になってる？」

その言葉に、ライトは二人から離れた。

ライト「貴女は何者なんだ？」

ライトから見たら確かに貴女と言うしかない。

身長は140?ぐらいで童顔で、服装が黒が主調のドレスを着ているのだから。

?「ああ、この服だからか……お母さんに魔法使ったのがばれて一日中この格好にさせられたら(汗)」

流「……………由姫小母さんらしいと言えればいいかな(苦笑)」

葵「つと、自己紹介がまだだったね……………私は、槻月きつき 葵あおいです。あなたは女と思ってるけど、『男』だから間違えないように！」

その言葉で、ライトは疑っていた。

流「……………吼太とかの分類と考えれば何とかなるよ(汗)」

ライト「な、なるほどな……………」

葵「何か釈然としない分かり方だけ……………」

流「仕方ないだろ、お前の髪の毛の長さで童顔で男と間違えないのは、幼なじみの俺らぐらいだし。初対面はどうがんばっても女性にしか見えないから(汗)」

葵「流、後でシバく」

やはり、流の死亡フラグは回避することは出来なかったwww

葵「こいつと同じ魔導師だが、なぜ流からは規格外と言われているんだけどな」

流「アレの効果からして規格外なのは明白だし（汗）」

葵「話は変えて、俺と勝負しないか?? 流は俺がボコるとして、流だと役不足みたいだから（笑）」

ライト「いや、あんたとやる義理が・・・」

葵「なら、その義理を作るか。俺も、こいつと同じくで甘い考えだよ・・・まあ、魔とか鬼に関しては撲滅はするがな（笑）」

ライト「・・・なら、その甘い考えを俺が消してやるよ（黒笑）」

エリオ「父上が本気になりましたね」

崖の上でお茶会を開いていた面々が下に降りてきた。

流「エリザさんは?」

シャイ『真優ちゃんがエリザさんの手合わせをしていますよ』

流「・・・真優強く生きる（汗）」了解した」

俺達は、安全を考えて【紫月】の方に転送した。

華琳「ここまで離れないといけないわけ？」

流「葵さんの攻撃は物理じゃないんだ・・・物理もあるんだけど。今回はここに居ていて・・・ライトさんに何か合ったら直ぐに転送するしてとめるか」

- 葵 side -

葵「遠慮は要らないから、さくさくと攻めてきなさい」

ライト「いや、デバイスを展開してないぞ？」

葵「あなたには必要ないから・・・」

ライト「舐めるな!!!」

葵「それに・・・攻撃は絶対通らないから・・・我に攻撃してくるものを『許可しない』」

次の瞬間にライトの体が止まり、葵の体に件が刺さ一步手前で強制的に静止したのだ。

ライト「う、動かない!!!?」

葵「言霊とか王の言葉とかいろいろあるけど、『絶対命令』(absolute instruction)とか言われてるけどね・・・

・これは耳を塞いでも不可能で絶対にそれを聞き入れないといけない」

ライト「ぐっ……」

葵「けど、これじゃ面白くないからね……」

葵は後ろに下がり。

葵「攻撃を『許可する』」

次の瞬間、ライトの体は再び動き始めた。

ライト「確かに、規格外だ……だが、それ以外の攻撃なら……！」

ライトは大きく息を吸った。

葵「……一枚で事は足りるな？」

ライト「『雷竜』の咆哮……！」

ライトがブレス攻撃を仕掛けてきた。

葵「……光鷹翼ヒトトリノトビ一枚展開」

すると、光の羽が一枚出てくると咆哮を意図も簡単に受け止めた。

ライト「お、おいおい……なんて野郎だよ（汗）」

だから言いました、このこは本当に鬼畜の規格外の野郎だと b

y 毬藻

葵「……………驚羽ちゃん、本来の威力より高いですよ（汗）」

2 驚羽ちゃんの発明品は本当に危険です。 by 榎木 天地
（解らないネタは飛ばしましょう）

輝羽『（プロフェッサー驚羽様が行ってくれたんですから・・・文句は言えないと思います）』

葵「（うちの両親が榎木の血を引いていたから本当にびっくりしたし）」

輝羽（1101）は樹雷王家の第一世代艦である。

3 小説出し次第、ちゃんと説明を入れていきたいと思えます。そして、宇宙一の天才『プロフェッサー驚羽ちゃん』の強化により（1102） 魍皇鬼以上の高出力の機動性や攻撃力を持っている。そして、葵はその第一世代艦のマスターキーである。

因みに、王家継承第四位でもあるがそれはまた別の話でしょう。

葵「ならこっちの番だね」

そういつて、掌から小さな光が出てきた。

葵「破壊と想像を司る神『フレイヤ』よ……………」

- 葵 side out -

流「つて、ちよいあの魔法は反則だろ!!」

華琳「どうして、あんな小さな光なのよ？」

フィー「凝縮量の問題です!! あの光なら宇宙の一角を消滅できるぐらいの威力です!？」

華琳「なっ!？」

流「しかも、今の詠唱は『創造魔法』の一種だぞ!!」

フィー「創造魔法は無のところから悠を作り出す魔法……世界一般では『禁則魔法』とか『崩壊魔法』とか言われてる」

流「しかも、今さり気無く、葵ちゃんが防御を『許可しない』といったし」

華琳「ら、ライト……!!!!」

エリオ「ちちうえ……!!!!!!!!」

二人の声が響いた。

流「……葵の魔法の効果を無効化します。フィー砲撃準備」

フィー「軌道修正完了。誤差0……相手打ち出しと同時にピンポイントに狙います!!」

流「撃ち出しカウント10……詠唱『時の覇者の名の下に命じる』

」

フィー「チャージ完了・・・詠唱『時の巫女の名の下に命ずる』」

流＆フィー「『時の光、汝の力を打ち消せ！！』 ディスペル付き時
空歪曲砲発射！！』」

葵「消えなさい！！！！！！！！」

葵が光球を投げた瞬間、黒い光の中に吸い込まれた。

ライト「い、今は・・・・・・・・・・」

葵「流の戦艦魔法のディスペル型の砲撃だ」

流「あんなもの使っくな！！！！」

次の瞬間、葵の頭を巨大なハリセンで叩いた。

流「ゲストを消し飛ばしてどうする！！！！」

葵「・・・・・・・・・・すまん、頭に血が上ってた」

それで、帰し飛ばそうと考えるのもどうだと思っし。

流「まさか、もう一つの魔法を使おう何て考えてないだろうな（怒）
」

葵「な、ないない。それを使えば全員から変な称号がつくから使わ

ん！！！！！」

使った瞬間、俺達は本気で葵の存在をけさないといけなしい。
いや、マジで冗談じゃないから（-_-;）

ライトの方は・・・華琳さんとエリオ君が助けに行ってるから大丈夫だし。

その後紫月の方で食事会になった。
立食パーティーだがそこは許して欲しい。

華琳「あなたって、料理は何でも出来るのね」

流「ライトとか華琳さんみたいにそこまでは出来ませんがね」

ライト「そう言えば、エリオがいないけど」

流「そう言えばプラムが見えないけど・・・フィー？」

フィー「捕捉出来てます。一緒に遊んで・・・るみたいですね？」

流「何で、言葉を濁らせる？」

フィー「えっと・・・もうこっちに戻ってきますから本人に効いて

ください／＼／」

なして、顔を真っ赤にする？

プラム「おかあさん」

扉からプラムとエリオが入ってきて、そのまま流に抱きついてきた。

華琳「・・・本当にお母さんなのね。エリオもお帰りなさい」

流「何か特殊な環境に慣れた・・・子供がもう一人欲しいなら座標教えておくが？」

華琳「取り合えず貰っておくわ」

ライト「そこで不穏な会話するな！！」

プラム「ねえねえ、おかあさん私、エリオくんとけっこんする〜」
「

その言葉に、その場に居た全員が固まったのは言うまでもなかった。

流「・・・そこはお父さん（吼太さん）に報告してから考えなさい^^」

フィー「エリオさん」

エリオ「は、はい・・・」

フィー『強く生きて下さい』

番外編：流は死亡グラフの回避は出来ないWWW（後書き）

O M A K E

別空間

真優「ふえ〜、剣が一杯だよ〜」

エルザ「なら、私の攻撃を受け止めてみる〜!」

真優「それ自体がきついです〜!〜!」

能力の95%は封印しています。

エルザ「行くぞ〜!〜!」

真優「だ〜か〜ら〜、来ないで〜!〜!〜!」

毬藻「作成時間にこんな掛かるなんて思わなかった」

葵「おい、暴れたりないぞ〜!〜!」

毬藻「五月蠅い〜!〜! しかもあんたの魔法設定をどうしようか考えたら『天地無用』やら色々使いこまわないといけなくなったし〜!」

葵「そこまで、魔法を考えなかったのか？」

毬藻「絶対命令は初期から考えていた魔法だけど・・・光鷹翼とましてやオリキヤラをとっさに一人誕生することになるとは思わなかったし」

輝羽「ふえ、そうなの!？」

毬藻「本当に焦ったし・・・しかも樹雷王家継承四位に即位させるしか思い浮かばなかったし」

葵「しかも、鷲羽ちゃんが出てくるとも思わなかったし(汗)」

毬藻「天地無用の初期知ってる人あんまりいないぞ・・・20年前のアニメの作品だしwww」

葵「ガンダムよりかは新しいんだな」

毬藻「構成陣が凄いいけどね・・・黒田洋介さんとか居るしwww」

葵「だな」

毬藻「それに、葵のもう一つの魔法と言うか・・・力は今回は使いません」

葵「・・・あれ使ったら、本当の悪魔か鬼巫女以上の何かになるし(´・`・´・´)」

毬藻「この能力は俺の作品の中限定だからコラボで出したら本当にヤバいし」

葵「宇宙の一角を崩壊する魔法もどうかと思うが」

毬藻「では、今回はこの辺で失礼します」

番外編? : チョコはチートを倒す最終武器でもある。(前書き)

D・C・シリーズを知ってる方なら解るタイトルだと思います。

今回はチートじゃ済まない から要さんを召喚します。
誤字が脱字やおかしなのが合ったら言って下さい。

では、始めます

番外編? : チョコはチートを倒す最終武器でもある。

流「ふう〜、桜餅が上手いな」

二月になり、まだまだ寒さが厳しい気もするが。

フィー『流様、会いたいつて言う方が見えているのですが?』

流「また珍しいな。こっちから行くから待っててもらって」

フィー「解りました」

俺は、今の現状、デバイスを修理にだしてるため、転送関係をフィーナが行ってくれている。

空間転送は自分で行けるのだが、平行時間移動や多重並行空間移動一（複数の空間が混ざった世界）はフィーナに送ってもらうしかないのだ。

そして、部屋に着くと一人の男性がいた。

要「桜内流!!! 俺と勝負をしろ!!!」

そして、今の現状がこれである。

要「……………なんかのんびりしてるな？」

流「仕方ないんですよ。俺のデバイスと融合騎は修理中と任務中で今は無いんですけど、どうしましょつか？」

要「……………そう言えば、ライトから聞いたんだが、お前剣術が出来るんだよな？」

流「出来ますよ。そっちでいいなら俺は構いませんけど？」

要「少しだけ頼む」

俺と要は、立ち上がった。

流「空間座標コードY358、X746、時間座標Y2694、X4669でお願いする」

フィー「空間及び時間座標を確認しました。フィーナ・インシエルはこのコードを承認いたします」

流「空間移動開始！！」

そして、現れた場所は何も無い空間だった。空気もあり、呼吸も可能だった。

要「ここは一体？」

流「氷結結界とか時間結界とか色々ある。ここは、外の時間と188697600倍の速さでここは流れている」

要「つまり、どういう事だ？」

流「簡単に言えば、ここで一日過ごしたとしても元の時間に戻れば1秒しか経っていないってこと」

俺的にはあまり使いたくないがな。

ウラシマ効果が一番怖いところなんだが。

要「つまり、修行をする時は流にこの時間魔法を使えば時間を気にしないで打ち込めると言う事が！！」

ARMを使う吼太さんでもこの能力はあるからチート同士でお願いしたんですけど。

そんな事はいえないかな。

流「杏、『風雅』を借りるね」

そう言うと、二本の小太刀が現れて、腰に挿した。

要「……………まさかお前が使う剣術というのは（汗）」

流「……………永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術」

その言葉に、要は驚いていた。

流「小太刀二刀御神流と云えばいいかな？」

要「父さんたちと同じかよ……………」

半分呆れながら答えていた。

そう言えば、要さんのお父さんは【高町士郎】さんだったよな。

こっちの攻撃予測は出来てると考えて行動した方が言いと言っことか。

要「神速が使えることを前提に動いた方が言いと言っことか・・・」

とは言っても、要も士郎さんから教えてもらってるから神速は使えると判断しておこう。

俺と要は対峙した。

そして、それぞれ武器を構えた。

流「始め!!!」

要「手始めにこいつだ『シールドスライサー』」

・・・確かに、シールドを横にして薄くしたら攻撃するものになるけど・・・

流「セイ!!!」

向かってきた、シールドを真つ二つに切った。

要「避けるとかガードじゃなく・・・切っただと!？」

流「この刀はレジストー（魔抵抗能力）効果が付いていて・・・魔法物なら何でも切って無効化する」

ORTは流石に無効は出来ないし。

近づくと俺もやばいし

要「射て、ニードルマシンガン!!」

魔法球を作り出したと思った瞬間、細くなった。

流「ヤバ!? 時間の神【クロノス】よ。時を歪ませ、他の物を拒む事を優先する」

瞬時的に半球体のシールドが出来上がる。

要「無駄だ!!」

そして、流に当たると思ったが、手前のシールドで防ぎきった。

要「うむ、貫通性がある攻撃を簡単に止めれないとな」

物凄い笑顔で次の攻撃の転用としていた。

流は一杯一杯だった。

流「時間魔法・・・時の断裂1ミリ・・・」

そう、時間魔法で認識の誤差を生んだのだ。

流「こっちの番だ!!」

【神速 + sonic move】

一気に詰め寄った。

要「ちっっっ。舐めるな!!!」

次の瞬間、剛速球のパンチが飛んできた。
その瞬間、俺は小太刀を捨てた。

流「はあああああ」

【左龍・通翼陣（つうよくじん）】

要「魔力開放50% 身体開放50% アルテメットワン発動!!!」

流「ぐっっっ」

この魔法はランクB以下は攻撃が通らない

流「!!! 我が眠る魔力【極光】よ。我が撃ちぬく光となれ・・・
光魔法【レイ】零距离砲!!!!」

次の瞬間、眩い光が放たれ、爆発した。
瞬時にバツクした。

流「今の全力魔法・・・ランクはAぐらいはあるんだけど」

要「いっっっ。今のは効いた」

ただし、服が焦げているだけだが。

流「・・・普通の【魔法使い】で良く頑張った物だと思っな・・・
・・・俺」

その後の書いた方が良いか？

だったら、この一言だけ送らせて貰おう。

O H A N A S Iは肉体言語も入ってるんだねって初めて分かった気がした。

俺達は、紫月の方に戻り、喫茶店の方に戻った。

要「そう言えば、チョコって貰ったのか？」

流「チョコ・・・何の？」

要「この時期で言ったら、バレンタインだが」

ズキツ・・・

急に胃がきしみ出した。

流「うぐっ・・・何で・・・」

要「ど、どうしたんだ!？」

流「わ、からんが・・・急に痛くなった」

要「・・・俺、何か地雷踏んだか?？」

・ 一条要 side ・

暫く、流の容態が安定するまで俺は初音島を散策することにした。
とは言っても、何も無い島と言いたいが・・・

要「この桜・・・寒桜じゃないよな・・・なんで桜が咲いてるんだ
?」

??「それは、魔法でそうなってるんですよ」

すると、一人の女性が独り言の答えを言ってくれた。

??「初めまして、流くんのお友達さんですか？」

要「そうだが・・・貴女は？」

音姫「自己紹介が遅れました。私は、朝倉音姫と言います」

要「俺は・・・」

音姫「一条 要さんですね。今、フィーナさんから事情を聴きましたから解りました」

要「そうか・・・魔法って言ったけど？」

音姫「この島は魔法の桜で一年中咲き誇ってる島なんです」

普通はありえないな。

要「・・・そうだ。流ってチョコとか嫌いなのか？」

音姫「普通に好きですよ？ どうしてですか？」

要「ヴァレンタインの話したとたん胃を抑えたんだが？」

音姫「・・・そうなんですか！？ そう言えば、今年チョコを渡して無かったね」

暫く、この島の事を案内してもらった。

一回、流の家に戻り……

音姫「流くん、まだ紫月の方にいるんですよね？」

要「そうだな。仕事が終わらないって嘆いてましたけど(汗)」

音姫「それだったら、チヨコ渡してもらっていいですか？」

要「俺で良ければ構わないが」

音姫「なら、持って来ますので待ってください」

そう言い残すと隣の家に戻っていった。

数分後、包みを持ってきた音姫が戻ってきた。

音姫「すいません、追加で三つ増えたんですけど良いですか」

要「ああ、構わない」

音姫「これが私の分です。後、さくらさんと由夢ちゃんと音夢さん
からと伝えて下さい」

一個一個誰の包みを確認しながら渡してくれた。

フィー』では、転送しますね』

ちょうど良いタイミングで俺は紫月に戻された。

「……えっ!？」

その言葉に、思考が一時停止した。

要は気にしないまま、もう一つの包みを俺の前に置いた

要「最後は音夢さんからだ」

流「……………
……………鬱だ。シノウ……………
……………」

要「死ぬ前に食べたかどうか？ 無碍に出来ないぞ」

流「つて、本当に死ねて言うのか!？」

俺は、由夢の袋からチョコを取り出し、要の口の中にネジ入れた。

そして、数秒後……

要「k@;p@:pgフォ@フェいtfvgpwrqvち@qt
きえw@いrばらkvc……………!!!……………!」

由夢の料理だ。そこら辺のまずい料理よりかはるかに上だ。

しかも故意的に作ったものではないからにはるかにたちが悪いが……

流「……………由夢、お前のチョコが要を倒す武器になると思わ
なかつた」

そして、暫くして二人は音夢のチョコで旅立つ一歩前に行ったと言
うのはまた別の話でしょう

番外編? : チョコはチートを倒す最終武器でもある。(後書き)

毬藻「……………あれで、生きていたら人間じゃないな?」

葵「……………トラウマを埋め込んでどうするんだ?」

毬藻「大丈夫、意識が復活したら安全なのを食べたはずだし」

葵「さくらさんと音姫さんのだから大丈夫なはずですよね?」

毬藻「大丈夫だろう。普通に料理は出来るはずだし……………いや、さくらさんは少し危険か?」

葵「……………あの人も冒険が好きな人でしたからね」

要「普通に大丈夫だったぞ」

毬藻「おつかえり〜〜では今回の報酬ではないが」

葵「白河ことり・ななかの手作りチョコ……………普通に上手いから大丈夫だ」

要「では、あり難く貰っておく」

毬藻「ではでは、次回もお楽しみ下さい」

第27話：三度目の戦闘

そして、昨日は馬鹿騒ぎした後、女性陣は朝倉家の泊まり男性人は芳乃家に泊まった。

俺は、寝ている二人を起こさないように台所に向かった。

しかし、そこには先客が居た。

と言うか、同時に着いたって言うのが正しいが。

「…流、寝れたか？」

「久々の布団だから少し背中が痛い」

「…なんか変な感じだな…転生した自分の双子の弟と会うのは」

「それもそうだな…今日は和風にするか？」

「…だな」

俺と義之は二手に分かれて調理を開始した。

そして、朝食が終わると同時に携帯が震えた。

「……………誰だ？」

携帯のサブディスプレイを見ると……

新着メール：高町なのは

タイトル：今から朝練開始するよ

「……………行かないと怒られるかな」

「なのはさんから？」

音姫の言葉に頷いた。

「と言うことは魔法の練習か」

「そうだけど？」

「私たちも来て良いですか？」

「あんまり面白いものじゃないよ…本当に」

それでも瑞穂坂の皆さんは行くことになった。

「…シャイ、準備は出来てるか？」

『準備は完了してるです』

「じゃ、行こうか？」

庭先に全員出た後、フィーの転移魔法で違う場所に飛ばしてもらった。

「着いたよ」

そこは海岸だった。

「ここで忠告…ここからは俺は構えないから自分のことは自分で何とかして」

ビクティムを双剣状態にして戦闘体制に入った。
もちろん御神の状態付で…

「な、なに…この殺意……」

「…ブレイカー…!!」「…」

三つの光が一気に襲い掛かってきた。

「シャイ…!!」

『ユニゾン…イン…!!』

融合して手を翳した。

『時間操作魔法：時間の断裂3ミリ』

次の瞬間、その砲撃を片手で簡単に受け止めた。

【神速】

次の瞬間、ソニックと掛け合わせではやてに間をつめた。

「させない!!」

フェイトが一瞬に間を詰め…

なのはが攻撃の手を休めない。

「連携がなかなか取れて…近付くのもキツイ状態なんだけど……」

『本気の状態の皆さんですから…切り抜けないと本当に不味いです』
『よ』

なら…

「本気ならこつちも本気で行って良いんだよな？」

次の瞬間、三人の後ろに雄樹が同時に出現した。

「『フレイメル・バスター!!!』」

同時に砲撃を入れた。
そして、勝敗が着いた。

「……雄樹君、時間魔法の副作用は出てる？」

「うんん……出てないみたいです……転生して完全に消えたみたいで
す」

「……騎士カリムの予言が当たったみたいだね」

「それにあの人も動いてきそうな気もするよ」

たぶん俺もそう思っているんだけど……

「それと……流くんにはやってもらいたい仕事があるんだけど」

「やってもらいたい仕事？」

「……初音島の南西50kmで黒い半球体が目撃された」

「……えっ？」

「その言葉に何となく嫌な予感が走った。」

「フィーナさんの解析に因れば……時間魔法の暴走のモノと判明した」

「……何となく予想できたんだけど……また全員で総攻撃しないといけないですか？」

「今回は……時間魔法者が限定になってるみたい」

「……ちよい待って下さい。」

「……もしかして、俺一人で攻撃を行うってことですか!？」

「その言葉に三人は頷いてくれた。」

「それも綺麗な笑顔で。」

「……はあ、解りました、その処理は承りました」

「それに関しては溜息が出るだけだった。」

「それじゃ今夜に決行だからよろしくお願いします」

「この三人……鬼です。」

そして、夜になり桜公園に待機していた。
外の人たちもそこに集合していた。

『孵化まで残り5分です』

「流君、始めるよ……」

そう言うと、三人の掌から魔方陣が出てきた。

「リミット・リリース限定解除！！！！」

次の瞬間、5つの魔方陣が砕けた。

「これで本当の本来の力が戻ったはずだよ」

「だから全力で行っておいで」

「解りました…シャイン」

『はいです…ユニゾン』

「イン!!」

融合して甲冑と杖を召喚した。

いつも使ってる剣ではなく…魔法使いの杖

「シャルティエ……行きます!!」

そして、大きく飛び立った。

「……行きましたね」

「大丈夫なんでしょうか？」

沙耶と春姫が不安そうに見ていた。

「大丈夫ですよ…流くんは」

「護るものがあるなら…強くなる…そんな子だから」

「前回と同じく4層の物理と魔法の障壁……シャイン、行くよ!!」

二つの魔法砲撃と物理の剣が形成されていった。
そして、異型が姿を現した。

『一つ目：エクスカリバー!!』

「二つ目：フレイメル・バスター!!」

二つの攻撃は命中して壁が崩れていった。

『三つ目：鳳凰の矛先!!』

「最後だ!!…エターナル・バスター」

次の瞬間、障壁が見事に崩れた。

「次、ファイナ!!」

『障壁が無くなったらこつちの物です!!超長距離魔道砲!!』

空から一気に光の束が異型を一気に貫いた。

「シャイン、一気に畳み掛けるよ!!」
『はい!!』

俺は、桜公園に高台に一瞬にて舞い戻った。

「雄樹兄さん!？」

全員が驚いたような顔をしていた。

「シャイン、バレッジ展開とフィーナはクリスタルゲージ強度マックス」

『了解!!』
『了解!!』

すると、巡航艦が使用しているバレッジの縮小版が展開されていた。

「転生前の俺が封印していた魔導砲…」

次の瞬間、周りの魔力素が雄樹の前に集まってきた。

「これが全力全開の最大魔導砲!!」

『許容範囲型魔導砲【アルカンシエル】』

「いつけえええええ!!」

放たれた瞬間、雄樹は後ろの方に飛ばされた。
魔導砲の反動が大きかったのだ。
そして、思いつき後ろの大本に強打した。

「がっ!？」

そのまま、動かなくなった。

『異型…消失を確認…つて、流さま!?!』

画面に出てきたフィーナは驚いた顔をしていた。

その言葉と同時に全員が慌てて近寄ってきた。

『マスター!!!』

『シャイちゃん!!流様の具合は!?!』

『木に当たる前にクツシヨンは展開していましたが…けど、反動が大きかったから…見る限りは外傷は無いはずです…』

その言葉に全員は安堵の溜息が流れていた。

「……たぶん、魔力に反動だともう」

フェイトの言葉に全員の表情は穏やかになっていた。

「溜め込んでいた疲労もあると思うし部屋で休ませた方が良いね」

雄真と義之の背中を借りて居室に戻った。

しかし、それだけじゃ問題が止まらなかった。

四日後…雄樹はいまだに目を覚まさなかった。
その異変に気がついたのはさくらさんだった。

「…おかしいよ、流くんの時間魔法の副作用は消えているんだよね
」？」

「それに付属する形なんですけど…私とシャイちゃんがセットにな
らないとその効果が無くならないのです」

「シャイは雄樹様との契約はちゃんと終らせましたですよ!？」

その言葉と同時に、視線がフィーナの方を向いた。

「私の場合は魂の連鎖で引き継ぎます…再契約は行わなくても良
い筈です!？」

「…魂の契約なら…転生後の肉体の契約…つまり、身体との契約は
終ってないってこと?」

その一言で全員は納得してしまった。

『けど、契約方法は知りませんし…契約は未来の流様が行ってくださいましたし』

そして、また全員が沈んでしまった。

「とりあえず、水越病院に搬送の準備をして…このままだとどんどん衰弱しちゃっ…」

その言葉に全員が頷いて入院の準備をした。

そして、その日に雄樹は入院をってしまった。

第27話：三度目の戦闘（後書き）

毬藻「ここまで読んで下さり、ありがとうございます」

流「かなりゆっくりペースだな」

毬藻「PV：27,000、ユニーク：5,000だし駄文を読んで下さってるから感謝感謝だよ」

葵「確かにそうだな」

流「凄いこと聞いて良いか？」

毬藻「なんだ？」

流「何でお前の作った主人公の名前は一文字なんだ？」

毬藻「簡単なことだ………簡単だから」

葵「流………使って良いか？」

流「今回だけ、良いよ」

毬藻「えっ!？」

葵「メモリードレイン!！」

毬藻「ウぎゃ—————!!!!!!」

「ファイ」感想です。雨季さん・霊亀さん、感想ありがとうございます
」

シャイ「コラボも募集しています。頑張っ書いていきますのでど
んどん言っ下さいです」

毬藻「……………（ピクピク）」

流「……………自業自得だ。では次回に会いましょう」

第28話：もう一人の時間魔法使い（前書き）

自由気ままに読んで下さい

第28話：もう一人の時間魔法使い

そして、その次の日には時空管理局から二人が派遣された。
いや、元のクルーに戻った。

『初めまして…鳳 杏です』

『同じく鳳 李です、よろしくお願いします』

「見た目はどう見ても十代ですけど、皆さんとは大先輩になるので
気をつけてください」

『と言ってもこのお二人は【魔道書】のリンカーコアの人格プロク
ラムですよ』

二人は恥ずかしそうにしていた。

そして、手を前に翳すと二つの魔道書が現れた。

『私は魔道書【不死鳥の書】です』

『わたしが【鳳凰の書】です』

そしてもう一度魔道書を開いた。

『それで…何かわかりそうですか？』

不安そうな顔でシャインは二人を見た。

『私たちもこんな症例はみたことないです…やはり、時間魔法が関
係しているのは間違いないと思いますよ』

『私も杏ちゃんの意見には同意します』

「けど、この世界には時間魔法使いなんて居ないはずよ!？」

「ボクも聞いたことはないよ…なのはちゃん達は？」

さくらの言葉になのは首を立てに振った。

「私たちの方もそんな症例も聞いたことはありませんし…ましては時間魔法使用する人は聞いたことありませんよ」

八方塞だった。

『…この世界に時波家の名が引き継がれていればもしかしたら……』

しかし、その言葉でさくらが首を左右に振った。

「この世界にはそんな名前は存在しなかったよ」

『私たちが会ったのはこの世界とはまた別次元…どうしたら……』

「ありがとうございました」

私は受付の女性から荷物を受け取った。

「また何かあったら連絡をください……いつもの番号で今年はこちらに居ますから」

「ありがとうございます」

「結城さんもがんばってください」

「日美子さんも頑張ってくださいね」

「うん、ありがとう」

そして、私は店の外に出た。

「リーファ、時間座標設定お願いね」

『もう……いつもお願いするんだから……って、あら？』

携帯の画面から碧髪の女性が驚いた声を上げていた。

「どうしたのリーファ？」

『…時間座標の設定がエラーが流れます……再度入れるんですけど同じようにエラー表示みたい』

「時間粒子の調整してみた？」

『はい……もしかして、この前の戦闘の名残なのかも知れませんが』

……日美子様、今こっちで変な物が表示が』

「表示？」

その言葉に首を上下に動かした。

『不可視モードみたいです…って、所属出ました…嘘!？』

大声を上げていた。

「何かわかったの？」

『所属…：魔術師協会【ラクト】朱雀支部所属・第壹拾参番艦【紫月】です』

その言葉に日美子も驚いた。

「待つて、紫月って確か…」

『情報が間違つてなければ時間移動艦…私たちと同型艦だね』

「いやいや…性能から考えたら向こうの船の性能の方が上に決まってるでしょうが」

その時

『『あああああ!?!?!』』

女の子も声が二つ重なったのが聞こえた。

その声に振り返ってみると。

「杏ちゃんの李ちゃん!？」

あの子達は時空管理局の囑託魔導師よね。

「なんで、二人が居るの？」

『良かったです…日美子さんがここにいて…凄い奇跡です!!』

向こうの二人も驚いている表情だった。

『日美子さん、時巫女の契約の儀は行えますか!?!』

時巫女の儀…って確か

『この世界に時間魔法者と巫女が存在しているの!?!』

『だからお願い』

『お兄ちゃんを助けて!!』

そこに行くと一人の男性が寝ていた。

『…時間魔法の代価と同じ状態ね…』

『…ホントにやるの?』

『するわよ…大切な友達の頼みだし…既にこの人は魂の方の連結は完了してるみたいだし、後は体との連結だけ』

そう言っつて自分の杖を召還した。

『なら、サポートしてあげる…けど、その人がどのランクの時間の巫女を授かるは』

『時間の女神【タイム】様の導きによるものだしね』

そう言っつて、呪文が紡がれていく。

次の瞬間、虹色の光が男の中に入っていった。

『儀式は完了…しばらくすれば意識が戻るはずよ』

『本当にありがとう!!』

「10年来の友達…気にしないでね」

その次の瞬間、地面が大きく揺れた。

「えっ、きゃっ!?!」

数十秒揺れが続いた。

「い、いったい何なの!?!」

外を見ると…

「ふっ……」

一人の男が居た。

しかも空を飛んでいた。

「嘘!?!」

何であいつが来るのよ!?!

私は、急いで病院から離れた。

広い公園に行き後ろを見ると…

「何で逃げるんだ…マイハニー」

「うげえ…気持ち悪い、それに近寄らないでこの陰湿男」

「連れないな…何で逃げるんだい？」

「何でつて…あなたとの結婚はしないって何回も言ってます!!」

正式な破棄も通達したとお父様とお母様が言っていたのはちゃんと聞いた。

「だから、あなたを殺して持ち帰るだけですよ」

その言葉に悪寒がした。

この人、陰湿通り越して亡者になってる。

『駄目!!』

『そんなことは私達がさせない!!』

すると三人の女の子達が私の前に庇い立った。

「杏ちゃんに李ちゃん!？」

「邪魔だよ…どけ、チビ!！」

『退かないです!！マスターを助けてもらった恩人です…絶対にさせないです』

あの時間魔法使いの使い魔……

けど、その人には勝てない。

「そんなに死にたいか…なら、先に殺してあげるよ!！」

次の瞬間、男が視界から消えた。

『えっ!！?』

『あっ!！?』

【神速】

「…射抜」

次の瞬間、杏と李は一気に後ろに吹き飛ばされた。

「杏ちゃん、李ちゃん!!」

『今のは…小太刀二刀御神流・裏 奥義ノ参【射抜】!?!?』

「えっ!?!?」

私は目を疑った。

「何で知ってるの…今の技の名前……」

「ほおう…この技を知ってる奴が居るとは思わなかったが…なら消えてもらおう」

「やめなさい!!那岐!!」

「キエ口!!チビ助!!」

【御神流奥義ノ参 射抜】
【御神流奥義ノ六 雑旋】

「えっ!？」

人が横を通った瞬間、那岐は後ろに吹き飛ばされた。

「だ、誰だ!？」

「……下衆に名乗る名前は生憎持ち合わせてないのでな」

「お兄ちゃん!？」

「お兄さん……」

…あつ、さっきの人だ。

「マスター…まだ、寝てないと」

「そうなんだけどね…フィーが三人が危ないから助けて欲しいって泣きながら……」

「泣いてません!! 勝手に言わないでください……」

すると、モニターから一人の女の人が映っていた。
白銀の長い髪に整った顔。

『フィーナ様！？』

突然にリーファが大きな声を上げた。

『…久しぶりですね。リーファ・エクリア』

『知ってるの…？』

『…時の神【タイム】様の第一神官の巫女…そして、タイム様の右腕だった方です…！』

その言葉で息を呑んだ。

『…そうなのか？』

『そんな昔の事は忘れました…それよりリーファちゃん、はやく
その宙域から離脱して…敵さんの攻撃をもろに食らうから』

『は、はい…！』

フィーナは正面の戦艦隊を見据えていた。

『数としては全てがAI艦とききましたか……』

そして、小さく笑った。

『時の巫女【白銀の巫女】の技量を存分に味わって頂きましょう！』

そう言って、両手を広げた。

『神服召還……来なさい我が祝福の杖！！』

すると、身長より1.5倍ほど大きい杖が手の中に納まっていた。

『ここからは全力でお相手してあげます！！』

流はビクティムを再度握りなおした。

「…今の俺は完全にキレてるので」

刃を相手に向けた。

「手加減を無用で相手してあげます」

綺麗な笑みで相手に言い放った。

その笑みとは裏腹に殺気がムンムンとしていた。

次の瞬間、同時に神速を発動した。

超高速での戦いで火花が散った。

「す、す……い……」

『あれでも、まだ一角しか出していませんから』

『本当に完全解除したときのお兄ちゃんの本気は誰に止めれないと思います』

怪我の治療した杏と李がそばに来た。

「二人とも大丈夫!？」

『怪我自体はなんとも無いよ……流石に最初の攻撃は不意打ち過ぎて手が出なかつたのは痛かつたんだけど』

それでもあの那岐と同等で対立するなんて。

…ちよつとまつて？

「いま、本気を出していないって言ったよね？」

『はい…お兄さんは魔力の殆どを封印しています』

あの那岐は本気状態。

なら、この子たちの【兄さん】はいつたい何なの？

「があっ!?!？」

次の瞬間、那岐は後ろにはるか彼方に飛ばされた。

「目が覚めたばっかりなのにこんな事させるなって言いたいよ」

『そこはそこで仕方ないと言っておきます』

スクリーンからフィーナが現れた。

「そっちはどうなった？」

『結果が分かっている事を言わないでください… AI艦は全て沈黙
させました』
「任務完了だな」

そして、病院に戻ると看護婦やら医師やらにこっ酷く怒られたのは言うまでもない。

「そこは雄樹兄さんがいけないと思いますよ」

「すいませんですな…何も考えずに突っ走って」

「次からは考えてから行動しなさいよ」

「それを柩に言われたくないな」
「何ですって!!」

杏璃をすももが宥めていると。

トントン

控えめなノックが響いた。
ある程度予想は出来ていた。

「入っていいですよ」

すると、花を持った人が入ってきた。

「時波さん、いらっしやい」

「こんにちは…お加減はどうですか？」

「怪我もないし…時間の効果が切れたら退院は出来るって」

儀式の後遺症で以前の代価が一時期出てしまったので今回は入院だが今回の騒動で代価も消えるそうだ。

「それなら良かったです」

時田さんが和んでいるのはいいんだけど…後ろの二人が睨んでいるのは気のせいだろうか？

…気のせいではないな。

「少し貴方の事を調べさせてもらいました」

「…調べた？」

「はい、前世の事とかです…魔法より生まれ、時の女神の力を受け継いだ子…時の船【紫月】と時の巫女【フィーナ・インシエル】と時の書…別名【晴天の書】を持つ魔導師…間違いありませんか？」

…時間に関する事が出てくるな。

「正解…俺自身のことや外のこととも色々調べてきたんだよね？」

「はい…今、全宇宙で欲しい頭脳と言っても過言ではありません」

それは過大評価だね。

「それで、お願いしにありがとうございました」

「…お願い？」

「…私と婚礼を結んでください！！」

そして、この日病院が騒がしい一日になったのは言うまでもなかった。

第28話：もう一人の時間魔法使い（後書き）

後書きなんだよ〜〜

流「……最後のあれを簡潔に繊細に説明していただきましょうか？」

そろそろ人肌恋しい季節で書いたからああなりました

フィー「あれが書き進んだ季節って、去年の2月でしたよね？」

頑張って書いていましたよ〜〜。

流「その頑張るところが違う気がするが……」

シャイ「感想ありがとうございました」

次は、時間が少し変わって未来に行きたいと思います

流「失敗するとあれ時間移動関係ないと思うのは気のせいかな？」

ではでは、次回も楽しみにして下さい下さい

第29話：霸王と聖王（前書き）

毬藻「やっとVividの世界まで進めることができました」

流「そろそろ、現実時間と執筆時間が同等になってくるな？」

毬藻「ういっい、頑張りますよ」

第29話：霸王と聖王

あの婚礼騒動からしばらく経過した。
何とか結婚とは行かなくなったが…

『なら友達からでもお願いします!!』

あんな事を力説でお願いされてしまったのだから断りきれなかったのだ。

『マスターは押しに弱いですからね』

シャインの一言でその場に居た全員は納得されてしまったが、それはそれで悲しい気がするが…

そして、何日かが過ぎて俺はミッドガルト地区に来ている。

「なんか不思議なんだけど…」

『何がですか？』

「俺が転生してる間に暫く来れなくなって…記憶戻ったら開通許可…まあ、数年間軸移動はしてるがね」

『…そこは朱雀様の意向なんですから…気にしたらだめなような気がするですよ』

それはそうなんだけどね。

そうJS事件（ジエイルス・スカルエツティ事件）から数年後の世界…

「今年でヴィヴィオが小学4年生になるんだね」

『時間の移り変わりは早いですね……』

「それはおいといて…こんかいは10年間は本局手伝いで協会の方は休みで良いんだよね？」

『緊急の要請でなければミッドガルトやベルガ自治区の移動でなら過ごして良いそうです…後は初音島でも構いませんが基本時間はこと言う事でした』

なんかあるからここにしたんだと思うが…。

なら、暫くはアパートかなんか借りて過ごすのが吉かな？

『なのはさんには連絡入れたんです？』

「ちゃんと入れておいたよ…」

『歓迎されませんでした?』

「…物凄く喜んでおりました」

なんか、ヴィヴィオの歓迎会ではなく俺の歓迎会になりそうな勢いがあつたのは気のせいだろうか？

『それ…気のせいではない気がするです………』

その言葉一番聞きたくなかつた気がします。

「とりあえず、プレゼントは作っては来たけど…良いのかな?」

『真心もので良いならそれで良いと思いますよ?』

「なら良いんだけど」

俺はそのままなのはがいる家に向かった。

「流パパ」

学校から直接帰ってきたのか少し息を切らせながらだったが。

「元気していたみたいだね…あと、居なくなってゴメンね」
「うん」

そして、ささやかなパーティーが始まった。

「そっか、仲の良い友達も出来たんだ」
「うん、仲良さんだよ」

そして、笑顔の耐えない食事会になった。

「なのはママ、そろそろ練習に行つて来るね」
「ちよつと待つて」

するとなのはがヴィヴィオをひきとめた。

「もうヴィヴィオも小学四年生だし、魔法の基礎もついてきたみたいだし…自分のデバイスを持たせても良いんじゃないかってフ
イトママと相談したの」

「本当は桜内君のも相談したかったんだけど…状況が状況の状態だし」

すると、白い箱をヴィヴィオに渡した。

「開けて見て」

言われるままに開けるとそこには。

「しろい…ウサギ？」

キョトンとした顔でなのはたちを見ていた。

そしている間にもウサギは箱の中から脱出していた。
自己機能プログラムが組み込まれているんだよな。

「と、飛んでる〜!？」

それを見て驚くのは無理ないな。

「基本プログラムやリサーチしてヴィヴィオのデータを入れてるけど…中身はまだ赤ちゃんと同じ…まっさらの状態」

「まだ、名前も付けてない状態だからつけてあげて」

「実はもう名前と愛称は決めてあるんだよね」

するとハツとした様に顔を上げた。

「なのはママ、リサーチしてくれたって事はアレできるよね!アレ!」

「うん、セットアップしてみて」

そうして、駆け足で中庭の方に出た。

「…アレって??」

「見ていたら分かるよ」

「マスター認証、高町ヴィヴィオ」

するとベルガ式の魔法陣が発生した。

「術式はベルガ式のミッド混合ハイブリッド」

ゆっくりと魔法陣の色が強くなっていく。

「わたしの愛機デバイスの固体名所登録…愛称マスコットネーム【クリス】…正式名称…【セ
イクリット・ハート】」

…セイクリット…なるほどね。

「いくよ、クリス」

一呼吸おいて…

「セイクリット・ハート、セットアップ!!」

数秒強い光が張られ…それが晴れた瞬間…

「なっ!?!」

そこに居たのは、大人バージョンのヴィヴィオ…つまり、聖王モ
ードだった。

なのはとヴィヴィオは喜んでいただけ、フェイトと俺は開いた口
が戻らなかった。

まあ、見る限り自我がちゃんとあるのは見えるけど…

その後、ちゃんとした説明がもたれたのは言うまでもなかった。
その後、なのはとヴィヴィオは夜間訓練に出て行き、俺は用意し
てもらった部屋で一息入っていた。

「まあどっちもどっちと言う事なんだけどね」

『…マスター、例のプレゼントは渡したんですか？』

「…あの状況でいつ渡せばいいのかな？」

『確かにそうですね』

「二人が帰ってきてからになるな」

1時間後、二人が帰ってきた。

「ヴィヴィオ、ちょっと良いかな？」

「うん、何？」

「俺からの四年生になった記念だよ」

そう言って、小さな箱を渡した。

そして開けると…

小さなペンダントが入っていた。

「ペンダント？」

『初めまして…我が主様』
マスター

すると、ペンダントが宙を浮いていた。

「う、浮いた！？喋った！！」

「作ったときのおまけ機能…その子の正式名は決まっっていて【リス
ティ・フォース】…愛称はヴィヴィオが決めて良いよ」

そして、その後愛称は【リアン】になった。

「実はその【リアン】は特殊技能が付いてるんだ」

『自己語源変換プログラムとデバイス保護プログラムです』

「…って待った、今気が付いたんだけど…わたしたちと同じ語源で話してるよね!？」

『それが自己語源変換プログラムになります。他にも色々オプションがありますがそれは後に明かしていけば良いと思います』

「…ねえリアン、あなたの開発した人って誰なの？」

『私を開発した方は二人…一人は小日向 雄樹様、もう一人は人工聖霊のフィーナ・インシエル様です』

その言葉になのはとフェイトは呆れて俺を見ていた。

『最後のシャイも少しお手伝いをさせていただきました』

「なんか、何でも出来る人だよね…本当に」

何だかんだで日が落ちていった。

そして、数日が経過した。

今でもなのはさんの家で住み込んでる。

どうやってもあそこから動けない自分が居る（理由はそれぞれだ

が)
仕事が終わりに足早に家に向かおうとすると…

「ん…魔力？」

何だろう…なんか懐かしい魔力なんだけど。

昔居たな…

「そう言えばオリヴィエにケーキ御馳走するって言っただけだからな…ヴィヴィオに今度ケーキを食べに行くか？」

そんな事してる場合ではなかった。

俺は、急いで場所に向かった。

そこには仮面の着けた女性と男が倒れていた。

あの倒れている人…ストライクアーツの有段者だよな？

確か今回の協会で聞いた事があるけど。

まだ事件にはなってる居ないし、本部自体もそんなに警戒的には強くしていないけど。

通り魔の名前が【霸王】だからねえ。

一回、確かめて見ますか。

「そろそろその辺りにしてあげたら？」

俺は物陰から体を出した。

「！！！？」

女性は驚いた顔をしていた。

「殺気を完全に消したからな…そんな事しているといつか警察に捕

まっつて補導させられるよ？」

「あなたは何者ですか？」

「ただのお節介の人…通行人Aと想つてくれると助かる」

物凄く信用ない目で見られているのは気のせいではないな。

「あなたはかなりの使い手と見ました…お手合わせをお願いします」

「まあ…晩御飯の腹ならし程度でいいならね」

俺は御神の剣の構えを取った。

次の瞬間、向こうが一気に詰めてきた。

「突撃…か!？」

しかし、それも簡単にステップで切り抜けた。

やはり、この攻撃は霸王の切り返し方…なら!!

俺は大きくバツクに飛び地面に着いた瞬間、構えた。

神速と同時に仕掛け相手の胸に入った瞬間、相手は後ろに吹き飛んだ。

「あちゃ〜… やっちゃった… かな？」

綺麗に胸撃ちが決まっていたし… けど、攻撃威力はかなり抑えては居たし。

そして考えている間に相手は逃走していた。

「… 居なくなってるし… すぐに会えそうな気がするの… 気のせいだろうかねえ」

そんな気がしたのは言うまでもなかった。

数日過ぎた朝の朝食、フェイトがそう告げて来た。

「…ノーヴェが通り魔に倒された？」

朝食を二人で齧っているとそんな事をなのはから聞かされた。

「怪我はそんなに大した事は無かったみたいだし…」

それはそれで良かった…けど

「元【ナンバーズ】がやられたとなるとやはり相当な使い手だったんだな」

「流くん…どういう事【だった】って」

「あ…っ…」

そう言えば、なのはにもまだ言って無かった。

なのはさん…その笑顔は反則です。

物凄く怖いです…

「一週間前かな…本局で仕事上がりに遭遇してそのままなし崩れに手合わせ」

「どうなったの？」

「相手に一発入れてそのまま逃走された…胸部の強打ったんだけど」

それでも気絶が入るほどだったんだけど。

「倒れていた人を病院に搬送して色々していたから…ノーヴェだからきっちりさせるんじゃないかな？」

そして、時間が流れ二人が出会うことになる。

第29話：霸王と聖王（後書き）

あとがきだよ〜

流「俺の設定って一体どうなってるんだ？」

毬藻「何でも屋さん」

流「O H A N A S Iをしようか〜」

毬藻「I Y A D A」

流「『ライトニング・ブラスター！』」

毬藻「ヒラリマント〜」

葵「……………緑の丸いものが道具を出したか」

毬藻「……………Orz」

流「……………気にしていたのね（汗）」

葵「ではでは、次回作もお楽しみに」

第30話：戦闘！？（前書き）

時間があれば読んでください

第30話：戦闘！？

「ヴィヴィオ元気ないみたいだけど…どうした？」

なんか少し元気ないみたいだけど…どうしたんだろうか？

過去の時間で見てもいいんだけど、それは何も解決には無いと思う。

「この前同じアーツの女の子になんかされた？」

「違うよ…」

「こんな事を言える俺じゃないんだが…」

ヴィヴィオの目を見た。

「言葉で交わせない事は拳で話して見なさい…まだ早いかもしれないけど自分の思い届くはずだよ」

なんか思う節があったと思う。

「流パパにお願いがあるの！！一緒に練習に付きあって」

思いを伝える拳…良いかもしれないな。

「俺の教えは少し乱暴かもしれないけど…挫けるなよ？」

「はい！！」

そして、一週間が経過した。

そこは一つの倉庫地帯だった。

「ここは救援隊が使ってる練習場なんですよ」

「へえ、確かにいい場所かもしれないな」

「お待たせしました」

すると、スバルとティアナと一人の少女が歩いてきた。

「アインハルト・ストラトス参りました」

間違いないな…霸王の血統で純血。

「「な、流隊長!?!」」

俺に気が付いたスバルとティアナは驚きを隠せなかった。

「何で流さんがここに?」

「今回は見届け人だよ…二人はアインハルトさんを連れてきたんだ」

「そうです…お願いがあるんですが後で見てもらっても良いですか?」

「だから、君たち二人相手するのは本当にきついんだけど」

真剣にお願いされたので断る事が出来なかった。

そうしている間にも、二人は武装形態に変わっていた。

「うん…二人の気がビリビリくるね…本気の証だ」

そして試合が始まった。

暫く二人の攻防戦が続いた。

一撃一撃ちゃんと思いを籠めて…

「霸王…断空拳」

アインハルトの拳とヴィヴィオの拳が同時にヒットした。

ヴィヴィオの場合は頬に掠っただけだけど。

「時間差で効いてくるな」

「えっ!?!」

そして、試合が終わった。

やはり、時間差で擦ったほどのダメージが効いてきた。

「暫く休んでると良いよ…家まではあの二人が送ってくれると思うから」

「は、はい…」

俺は二人が中央にいる場所に向かった。

「オットーやデイド達は全力で防御壁を張ってくれ!!」

その言葉に全員は防御壁を張った。

「いったい何が始まるんですか!?!」

アインハルトも驚いて見ていた。

「二人相手の模擬戦…これは本当に見物だよ」

「ええ、桜内さんは現代の魔導師ランクはBです」

その言葉にコロナヤリオやアインハルトは驚きを隠せなかった。

「そのついでにスバルさんやティアナさんはランクSプラスです」

「そんなの勝てる訳が無いですよ!?!」

「そう思いたいんだけどね…その相手が流様ですし…」

そして、バリアジャケットを着込んだ。
リボルバーに双銃ですか。

「ビクティム…セットアップ!!」

俺はバリアジャケットを着込んだ。

「時間は無制限で使用魔法はすべてOK…ただし、俺のSSS魔導
砲と擬似能力は使用不可…では行くよ」
「始め!!」

次の瞬間、俺は神速状態に入った。

「えっ!？」

スバルは一瞬の間をつかれてしまった。
その隙が致命傷になった。

思いつきり後ろに飛ばされた。

「後一人…」

俺はティアナを向いた。

「はあああっ！！！！」

カートリッジ4パージ！？

「行きます！！」

次の瞬間、身体が動かなくなった。

「しまったバインド！？」

…まさか！？

「気が付きましたね…一撃入れたときにカウンタバインドをかけさせてもらいました」

「ブレイク…シュート！！」

一斉砲火を浴びられた。

その砲火によって周りが煙に立ちこめた。

「これでどうです…か！？」

煙が晴れると双剣が十字に成っていて攻撃を防いでいた。

「何とか防御が間に合った…次は俺の番だよ」

すると、双剣が杖に変化した。

「あっ…えっ!?!」

いつの間にか二人はバインドで拘束されていた。

「行きます!!」

構えた。

「フレイメル・バスター!!」

その語の事については言わないでも解ってるだろう。

「流石に焦ったしアレは…」

二人は苦笑いしていた。

「…で、みんなは何にも無いか？」

「ああ…けど、その三人が…」

流石に驚いたかびっくりした表情で固まっていた。
とりあえず、私服に戻ってはいるが。

「この子達にはまだ早かったかもしれないですね」

それは言えてるかも。

そして、俺達は家路に着いた。

「沢山食べてね」

「は、はい」

凄くガチガチに成ってる。

「やっぱりなのはさんが有名だからね」

「それを言うなら流くんだって元機動六課の隊長だし」

「お二人は一体？」

「私は元機動六課のスターズの隊長でヴィヴィオの母親の高町なのは」

「同じく機動六課のフォース隊の隊長でヴィヴィオの父親代わりの桜内流だよ」

今回はあえて今の名前を名乗らなかった。

おいおい話せば良いかと思って思った。

「桜内流…って、聖王のゆりかごの製作者のですか!？」

やはり純血、記憶の引継ぎは出来てるみたいだな。

「そう、製作者だね：破壊したのも俺だけだ」

「もしかして、聖王の右腕とも言われていた方ですか!？」

「そんな事も言われて気がしたけど：かなり前の話だしな」

今でもあんまり思い出したくないし。

「今はヴィヴィオの所で住み込みの囑託魔導師をしているんだけどね」

「……あつ!？この前の闘った人!！？」

「やっと思い出したみたいだね：そうだよ、あの場所で野試合したのが俺だよ」

その言葉にアインハルトは言葉を失っていた。

「流くんの場合は色々しているからね：日本の古武術や剣術もしているからね」

「もしかしてあの技も!？」

「そう：小太刀二刀御神流奥義其ノ三 【射抜】」

「本来は剣技の技を拳でするのに応用したと言う訳：あの時使った歩技は【神速】といって普通の人間が神の居る領域を歩く事から付いた名前」

其言葉に感心したように見て居た。

「この【神速】は使わなくっても良いと思うよ：身体のリスクがあるしね」

俺は饅頭を口の中に入れた。

「流くん何を食べているのかな？」

「ちゃんと出してあげるから」

その言葉にアインハルトは不思議そうに見ていた。

「お饅頭とかは好きかな？」

「あ、はい」

俺は左手を握って直ぐに開くとお饅頭が掌に乗っていた。

「俺のオリジナルの魔法…毒なんかは一切入って無いしそんな器用な事も出来ない…どうぞ」

掌においてあげると小さく口に持っていった。

「あ…おいしい……」

「そっか」

そして皆にも一個ずつ渡してあげた。

これを使うときは代価が発生するからね。

そこは内緒しておくか。

その後、アインハルトを家に送って俺は戻った。

第30話：戦闘！？（後書き）

流「作者休業の為、雑談会は後日に回します」

フィー「感想お待ちしています」

第31話：春の運動会？（前書き）

久々の更新です

第31話：春の運動会？

春つららの日曜日：俺はSt、ヒルデ魔法学院に来ていたりする。
その理由は……
校門の入り口にでかでかと書かれていた。

『St、ヒルデ魔法学院・春の体育祭』

さて、今日はなのは達が午前中はこれないと言う事で俺が来たと言っことだ。

お弁当もなのはが半分、その半分が俺が作ったというものだ。

「流パパ」

「おはようございます」

「三人ともおはよう御座います」

「なのはママとフェイトママは？」

「今日は午後からこっちに来るって…はやてちゃんとヒイナとかもくるってさ」

「みんな、もう直ぐ開会式が始まるよ」

俺は聞きなれた声が聞こえ顔をあげて見ると。

「レチエ!？」

「流隊長!!お久しぶりです」

そこに居たのは俺の部隊の鉄壁の布陣の一人だった。

「教員になるのが夢って言っていたからな…叶ったな」

「はい…流さんは？」

「ヴィヴィオの応援…最後まで居るから、何かあったら参加するよ」
「解りました…では、後ほどです」

俺は、今日の朝にとつた陣に行くのと腰を降ろした。

「いたいた…流さん」

そこにはナカジマ家の殆どが集まっていた。

「どうもお久しぶりです」

「元気そうで何よりだ…他の人は？」

「二人はどうしても抜け出せない仕事が入ったみたいで…俺が午前中の撮影係になってます」

「私は開会式の方を見ってきます」

チンクとギンガが開会式の方に向かった。

俺たちも習うように開会式の会場に向かった。

開会式の前が始まっていた。

「あ、居た…!？」

次の瞬間、空間が振えた。

しかも、この空間の震え方は規模がでかい…大きな物が一つ転移するぐらいの。

「ギンガさん、管理局に連絡…でかいもんが転移の兆し…今レチエに聞いたらそんなのは開会式の中には存在しないということですよ」

小声で状況を説明した。

「解りました…時間は？」

「…19分、プログラム時間だと選手宣誓ですね…もしもの時は時間魔法使用します…最悪な状況になったら全員を校舎の中に誘導して、その間に終わらせませます…！」

その言葉に頷いた。

レチエを見ると、同じように頷いた。

『シャインもいます…ではお願いします』

そして、時間は着々と近づいた。

そして、選手宣誓しようとしたとき、空間に亀裂が入った。

「シャイン…！」

『はい、ユニゾンイン…！』

ユニゾンしてから亀裂の前に出た。

そこには、レッドドラゴンがブレスを吐く寸前だった。

「時間の断裂広範囲型…3ミリ…！」

火を吐いたと同時に防御が展開した。

「押し戻すよ…！」

『弾丸4発パージ…！』

「喰らいなさい…！エターナル・ブラスター…！」

一瞬にして、ドラゴンは奥に追いやられ、次元は元に戻った。そのまま、空間転送で気がない所で変身解除した。

『流さん、大丈夫でしたか!?!』

ギンガが通信で聴いてきた。

「無事だよ…そっちは?」

『問題なく進行中…一瞬だけ混乱になりかけましたけど、レチエさんが騒動を抑えてくださいました』

流石はレチエだな。

その後は混乱が無く競技は進行していった。

「次は200mの徒競走だな…ヴィヴィオは出るん?」

「出るよ、応援してね」

「オウ」

そして、徒競走が始まった。

次はヴィヴィオが走る番になった。

「位置に付いて」

ピストルを天に掲げた。

「スタート!!」

一斉にスタンディングで駆け出した。

「流石に早いな」

それは全員に言える事だった。

そして、一番良い場所をシャインが撮影していった。

「いつ言つ時は本当に役に立つんだよね。」

『便利屋と一緒にしないでくださいです』

膨れっ面にそう言ってきた。

「そう言えば…この体育祭は初等科と中等科と混合で体育祭しているんだな」

「そうですね…たぶん隔たり無く絆が生まれるのと競争心を仰いでいるのが混ざっているのでは無いでしょうか」

なるほどな。

そして、午前の競技の最後になった。

『午前最後の競技は生徒指定の父母障害物競走です!!』

……はい？

「どんな競技？」

「生徒が壁になっているのでそれを掻い潜りゴールする競技です…」

ギンガは半分呆れてように言ってきた。

「しかも生徒はバリアジャケットと魔導師の杖を装着可能…父母の方もバリアジャケットと魔導師の杖は使用可能ですが使用魔法ランクがB以下です…技能は普通に使えますから」

「……なあ、俺物凄く嫌な予感がしてきたんだが」

そして、始まった父母は次々に脱落。

ヴィヴィオとアインハルトは同じテントそして指定者は…

「桜内流様、いらつしゃいましたら第一ゲートまでお越しください
！」

俺が指定が来るのは言うまでも無かった。

横ではチンクやギンガは苦笑いしていた。

俺は小さな溜息を吐いて、ゲートまで行った。

『ここで紹介しておきます。桜内流さんは本局の囑託魔導師です…
気を抜くと本当にゴールされますので気をつけてください』

ヴィヴィオサイド

「本当に強いから気を抜かないで行こうね」

「本当に強いのか？」

その言葉にアインハルトは頷いた。

拳を一回交えた人なら分かる事だ。

「もう一つ言える事はなのはママと同期でママの弟子さんのの」

その言葉に皆は驚いていた。

なのはママ（エースオブエース）の事は皆もし知っていることだ。
だから、私達が全力で行くしかないって事だ。

「桜内さん、そろそろ準備してください」

俺はバリアジャケットを着ないで武器のみを着込んだ。

「流隊長!?!」

ただし武器は接近戦仕様だが。

「ここまでしないと対等にならない気がしたんだよね」

前を見ると生徒が全員臨戦態勢だった。

「流石にSSS魔導砲や擬似は禁止ですので分かってくださいね」
「解ってる...:ではお願い!!」

レチエはピストルを上に掲げた。

「よーい…スタート!!」

すると前衛の全員が砲撃チャージをした。

「では…行く!!」

【神速 + S O N I C M O O V】

砲撃を一瞬にして突破した次の瞬間

「「「はあああつ!!」「」」

砲撃隊の後ろに居た近距離攻撃の生徒が一気に襲ってきた。

「くっ!!」

前に来た生徒を風の力で後ろに吹き飛ばした。
ちなみのこれも特技の一つになる。
これを放ったとき、周りから歓声の声が上がった。

「…なんつう壁と言っかなんと言っか…」

そして、再度神速と魔法でスピードをあげた。

『ここで新たな情報が来ました…てえええええ!!!』

放送の人が驚きの声を上げた。

『なんと、あのJS事件の時の中心角に居た機動六課の隊長と言っ
ことが判明!!!』

その言葉に驚きの声を上げていた。

大人の皆さんは知ってる事件なんだけどね。

『そして、あの巨大艦を破壊した魔導砲を打った張本人でもありま
す!!!』

「あ…あはは……」

それで再度、ざわめきが強くなった。

そして、最終関門はやはりあの二人だった。

「はぁあっ!!！」

「やぁああっ!!！」

ヴィヴィオとアインハルトが一緒に突っ込んできたので半歩神速に入り、手套で首に入れて床に伏せさせた。

「この年でなら10点だね…百点満点中になるけどね」

そして、ゴールテープを切った。

そして、治療が始まった。

とは言っても、皆軽い怪我だった。

「流隊長…手加減してくださいよ」

「完全に手加減したって…魔法だって移動系しか使っていないかった
だろうが」

「確かにそうなんですけどね」

「あれで、完全な手加減って」

コロナヤリオが呆れながら言ってきた。

「本気の魔法って言ったら私達が…巨大艦を相手にしたあのときで
すか？」

「だな…」

「どついう事ですか？」

不思議そうに聴いてきた。

「昔の巡航艦の魔導砲…の劣化版かな」

その言葉に三人は驚いていた。

「許容範囲型」アルカンシエル」：俺が撃てる単独での魔導砲」

そして、お昼ご飯になると

「あ、流！！？」

ちっこいアルフがなのはとフェイトと一緒に来た。
その後ろには…

「はやて達も来ていたか」

広いシートは瞬く間に人が溢れ返った。

「ある意味ここにこんな上層部の人間がいっぱいいるとなんかの時には大変そうだね」

「それ、自分にも入ってるって解ってるのかな？」

はやては苦笑いでそう言ってきた。

「そう言えば皆は最後までいるの？」

「そのつもりやで」

その言葉にその場に居た全員が頷いた。

「けど、やっぱり悔しいよ…さっきの競技は」

「さっきの競技？」

なのはとフェイトは不思議そうな顔でヴィヴィオを見ていた。

「恒例のアレです」

苦笑いでスバルが言うと内容が分かったのか二人は苦笑いしていた。

「今回はスバルが出たの？」

「いえ、私ではなく」

「俺が指名されてしまいました…まったく」

お握りを口の中に頬張った。

「やっぱり？」

「……はい、なのはさんが考えている通りの結末になりました」

「あはは……やっぱりか」

「どうして、流くんにしたの？」

「ランクBだと思って油断しちゃったかな？」

見事にいられて小さくなった。

「私もそうくるとは思いませんでしたからね……」

「……どういう事？」

不思議そうな顔で聴いてきた。

「機動六課時代は俺のランクはBだったって事……まあ、出勤のときはランクの引き上げは時々していたけどね」

その言葉に、ヴィヴィオは口がポカンとなっていた。

「それでも、模擬戦とかした時は簡単に負かしてましたからね」

「若気に至り……気にするな」

その後総突っ込みが来たのは言うまでも無かった。

さて、午後の競技と言う事でプログラムを見てると。

「……なんですかこれ？」

最終プログラムを見て唾然となった。

「学園鬼ごっこ!？」

「ああ、それですか？」

ギンガは半分苦笑いしながら言ってきた。

「テントから初等部と中等部の各二名と父母二名で何でもありの鬼ごっこです」

「うん、すべての武装ありでユニゾンもあり…すべてありの魔法競技の鬼ごっこね」

なんか嫌な予感がしてきたんですけど…物凄く……

「友達も強制参加…場所は転移魔法で無害な場所ですから気にしないでね」

気にするなって言う方が物凄く気になるんですけど。

「たぶん流さんの呼び出しは確定だと思いますよ」

ですよ〜。

殆ど呆れるしか無かった。

「だけど、ランクSSS魔導砲は使用禁止だけは確定だからね」

流石にそんな事はしないけど…ちょっとまで。

「友達も強制参加して良いって気とだよな…元【部下】でも？」

「…いいところに目を付けたみたいだね」

「そう…人工聖霊でも人格魔道書でも職員でもなんでもOKって事だよ」

そして、運動会は佳境に入っていた。

第31話：春の運動会？（後書き）

フィー『後書きのコーナー』

シャイ『……ところで作者さんは？』

フィー『地核に埋め込んできました』

シャイ『何かいけないような気もしいですけど……とりあえず、久しぶりの更新になりました』

フィー『向こうではクロスすると言ってますが、その内容が見えてないですよね？』

シャイ『今は時間軸を合わせるために試行錯誤してるみたいですよ？』

フィー『それなら、そう言えば良さそうなの？』

シャイ『それもそうですね。さて、今回は運動会（体育祭）の話でした』

フィー『何か楽しそうですね？』

シャイ『フィーお姉ちゃんは運動会に参加できないんですか？』

フィー『出来ないというか、【紫月】から外にでたこと無いのよね……流様の従者になってからは……』

シャイ『あれ、昔は外にでるタイプが居なかったっけ？』

フィー『あれは、【愛結晶】と【李杏】が登場して出来たことだから』

シャイ『確かにその二つが揃わないと地球に降り立てないですね（汗）』

毬藻『それが出るとかなり物語が終盤にならないと出てこれないよ？』

シャイ『つて、出たです!?!』

毬藻『人を幽霊か地縛霊で見るな……あ、そうそう。流の強化案なんだが昔のアレを採用するよ?』

フィー『昔のつて……まさか!?!』

毬藻『ご推察通りのやつだ……これ自体は本当にクロスしないと始まらないので、もうしばらくお待ち下さいとしかいえな（汗）』

フィー『感想コーナー』

シャイ『悠久なる時間さん、感想ありがとうございます』

毬藻『では、失礼します』

第32話：運動会？（前書き）

毬藻「少し、話しがグダグダ過ぎますが…気にしないでください」

第32話：運動会？

「それでは、最終競技は大鬼ごっこです」

マイクから流れた声を聞いて父母や生徒関係なしで大きな声援が聞こえた。

「ルールは簡単です」

すると、運動場にいっぱいの画面が出現した。

「場所は次元エリアになります…出場者は各テントから初等部と中等部から一名ずつ…二名ずつ出場します。そして、生徒から父母を一名が強制参加されます」

強制参加ですか。

「特別として一人を誘うことは可能です」

俺は一通り説明を聴いてきた。

「青組は高町ヴィヴィオとアインハルト・ストラトス」

そして、次々と選手が発表された。

「では、今回の父母の方の参加者の名前を生徒全員で言って貰いましょう」

そして、全員が前に出てきた。

「今回の父母代表者は……」

「「「桜内流さん!!!!」」」

やっぱり思った通になったな。

俺は、グランドの中に立った。

「すみません、友達を一人呼んでも良いでしょうか？」

「構いませんか…？どなたなんですか？」

「それは…」

一瞬フィーナでも簡単だが…ここで使うのは野暮だな。

俺は一人の女性を手招きをした。

会場はその瞬間、一気にざわめきだした。

それはそうだろう…だって呼んだ相手は。

「皆よろしくな」

八神はやてなのだからだ。

「……友達なんですか!?!」

「そうですよ…機動六課からの付き合いになります」

「いや、それよりか前やで」

あれ、そうだったっけ？

『とりあえず今回は使用魔法は全部出来ませんが…桜内さんのSSS
魔導砲は流石に禁止させていただきました…その上位版もです』

「いやいや、流石に打つ気は無いし……ユニゾンは使用許可出るんだよな？」

『え…ええ、出ますよ?』

『なら大丈夫…だな』

『それでは、バリアジャケットとデバイスをお願いします』

その言葉に俺とはやては頷いた。

「シャイン・フォース」

「リン・フォース?」

『はいです!』』

「ユニゾンイン!」

次の瞬間、二人はバリアジャケットを着込んだ。

「……えっ!?!」

そこにはシュベルトクロイツと魔法剣（双剣）ビクティムを持っていた。

そして、服装は形関係は大体同じで背に付いている羽は白と黒の色だった。

「…本気モードだね…あの人たち」

『そ、それではルールの説明に入りたいと思います』

再度モニターが移された。

『時間は一週間…今回は時間魔導師がサポート出来ますので敗北時にはこの時間に戻してくださいます』

その言葉に、俺は驚いた。

それは隣に居たはやても同じだった。

「俺じゃない時間魔法使いと言うことは」

『たぶん、フィーナお姉ちゃんだと思いますよ』

やっぱりね。

そこは呆れるしかなかった。

『時間魔法の中なので影響もありません：また一日毎に食料配布がありますから気にしないで頑張ってください』

俺たちの場合は頑張って逃げ切れて気とだろつな。

流は大きく溜息を吐いた。

『今回は鬼ごっこではなく模擬戦のトライアル版になりますので、協力体制をとるのも一つの手だと思ってください』

そつだろつな：ただ逃げるだけなら二人対にならなくてもいい気がするし。

『では、空間転移を行いたいと思います』

次の瞬間、浮遊感にあいその後あたりが一変した。

「…いきなり…灼熱の砂漠ですか!？」

魔力とバリアジャケットで暑さは軽減されていると思うが…そんなに長くは出来ない。

俺は地図を開いて現状位置を確認した。

「ここから200ぐらいに行った所に洞窟があるみたいだから非難しようか」

「そのほうが賢明みたいだね」

こんな中で動いたら流石に死ぬし。

飛んで近くの洞窟に入った。

そこには誰もいなく外の暑さもしのげる場所だった。

「ここなら、大丈夫そうだね」

「…二人とも大丈夫？」

その言葉で振り返ると、ヴィヴィオとアインハルトが力無く地面に臥せていた。

「はうゝ死ぬかと思ったよ……」

「…確かに」

俺は苦笑いをしたその時、携帯の通信が入った。

「そろそろくると思った」

ここは、時間概念で通信自体は不可能。
ある方法でなら通信が使える。

「…こちら協会01…説明はもらえるんだろうな…フィーナ」

「やはり気が付きましたか…はい、残念ながらお仕事です」

「状態と話の内容によるが…」

『今学院の方に本来参加する学生が二名発見されました…状態は軽微で病院で手当を受けております』

「で、学院側の要望は？」

『ここだけりを着けて下さいと言うことでした』

またつく、無茶をさせてくださるよ。

「それじゃ、その子たちの情報を後で送信をお願いします」

『了解いたしました』

通信を切るとアインハルトは驚いた顔をしていた。

「……今の方は、フィーナ・インシエルさんですか!?!」

「そつだよ…因みにゆりかごの製作関係者の一人でもあるんだけど…ね」

まあ、今の状態では動くことは出来ないし。

「ユニゾンアウト」

俺とはやてはユニゾンを解除した。

「とりあえず、協定は紡いでるから……後ろから襲うのはなしでお願いな」

すると、メール着信があった。

その中を見ると、もう二人の参加者の顔写真があった。

「あの二人もかごの中の状態だし……俺たちと同じ直ぐには動かないだろうな」

「そつやな…動くとしたら夜か…」

『最終日って事になります』

それが一番可能性が大だろうな。

「今動いたとしても、外の気温で干乾びてしまつのが関の山だし」

それにここの洞窟は、フィーナが用意してくれて場所みただし。奥に行くと、かなり広いスペースがあった。

「ここで練習しろって事なんだろうな」

100%ありえる話だし。

ちょうど、そこではてているSt・ヒルデ学院の生徒が二名いるし…揉んでやってもいいかな？

「二人とも体力はあるか？」

「うん…動けるよ…どうしたの？」

「こつちに来て見なさい」

二人を誘って奥のトレーニングルームに来た。

奥の広い空洞を見ると二人は関心の声を上げていた。

「トレーニングルームには打って付けだね」

ヴィヴィオは目を輝かせながらあたりを見渡せていた。

「少しの間だけ俺が相手をしてあげる…時間は少ないが十分な経験になると思う」

俺は二人の前に立った。

「因みに魔力はSSSだが一切魔法は使わない…流石に特技だけは使わせてもらうがな」

俺は拳を構えた。

そして、二人も同じように拳を構えた。

ストライクアーツと旧ベルカ式の構え。

二人の闘志が少しずつ上がってゆく。

「因みに判定寸前でとめるからそこだけは頭に入れておいてくれ」

次の瞬間、二人とも突っ込んできた。

「いきなり二人とも突撃かよ!？」
チャージ

思いつきり突っ込んだ後、俺は紙一重で全てよけ切った。
いきなり二人ともくるとは思わなかった。

……この二人ならありえそうなのは言うまでも無いと思って居た
が。

いや違う…アインハルトの方法は。

「ステップ!？」

切り替えが早い!!

俺は、それでも打撃を避けた。

なるほど、アインハルトの本来の攻撃スタイルは【歩法】と言っ
ことか。

確かに、昔の霸王も同じだったな。

歩法による攻撃のコンボが上手かったのを覚えている。

「……改めて、二人の技量はからせて貰ったよ」

俺は、接近した二人の攻撃を掻い潜り、胸部に手を添えた。

「えっ!？」

「あっ……」

「せいっ!?!」

風華通射拳【ふうかついけん】

次の瞬間、二人は後ろの壁まで吹き飛んだ。

「っ、強い……」

「あれが流さんの強さ…しかも魔法なしであんな力量を見られたら
自信喪失しかないな。」

「二人はまだまだ若いんだから、俺を抜く可能性もあるだろうし」
「精進します」

「技量見極めは終わったかな？」

はやてが奥から出てきた。

「今終わった…状況は？」

「現在脱落者が4名で残りが6名やな」

ここにいる4名と…敵さんの2名って事だな。

ここで、ギリギリ観戦って言うのもなかなか乙になりそうな気が
刷るんだけど。

そんなことは、問屋がおろさないと思うけど。

「そう言えば、これって外部放送されているんですよね？」

「その前に、さっきの戦いの前に映像は届いて無いよ…フィーナ
の計らい」

その行動で敵がどう動くかは俺の方でも解らないが。

「さつとと…本気で仕込んであげましょうか」

その言葉で、地べたにへばっていた二人は苦笑いしていたのは言
うまでも無かった。

「けど、この一週間では相手と互角には出来ると思うけどね」

そういう問題で行ければ良いんだけど。

俺は改めて二人を見た。

次は、はやてから魔法の競技をしている。

……前言撤回だ。

あいつらは、良いのに恵まれていると思う。

そして、この競技の結果は本人達が知る事となったのは言っまでも無い。

第32話：運動会？（後書き）

毬藻「運動会編が終わった」

ヴィヴィオ「長かったね^^;」

毬藻「……実はまだ終わってない（汗）」

ヴィヴィオ「どういう事？」

毬藻「次回も前編と後編の二分割ww」

ヴィヴィオ「え~~~~」

毬藻「今回は、かなり古いネタを使って書いたから、意味不と言うか何と言うか」

ヴィヴィオ「そう言えば、『弓月』って何ですか？」

毬藻「……だって、なんか電波が聞こえてきたんだけど^^;」

ヴィヴィオ「電波拾ってきたんだね^^;」

毬藻「感想コーナーでし」

ヴィヴィオ「悠久なる時間さん、マーボーさん、感想ありがとうございます」
「

番外編：プラムの設定だよ（前書き）

今回は、プラムの設定を載せたいと思います。

番外編：プラムの設定だよ

毬藻「特別企画！ プリモの公開設定の時間だよ」

流「急遽決まったな（汗）」

フィー「一週間以上小説公開していなかったのを今気がついたみたいですよ？」

シャイ「……………あほです（汗）」

毬藻「はいはい、そう言わないの……………今回は『プリモ』の公開設定その？だよ」

流「今確認したら、プリモの設定公開してないぞ？」

毬藻「……………なっぺさんに出して以降、設定は何にもしてなかった（汗）」

フィー「駄目じゃないですか……………」

毬藻「ほとんど新キャラとか作る予定が無かったんだからWWW」

プリム「どんな設定なの？」

毬藻「では、基本スペックからWWW」

名前：プラム（名字はまだ考えてないです（汗））

性別：女

容姿：セミロングで髪の色は白銀色、目の色は黒（魔法を使う時のみ薄紅色に変化）

身長：103.6センチ（成長中）

体重：16kg（成長中）

基本能力（体力・視力等）：EX（成長中）

魔力：EX（成長中）

魔力光：白桜色（暴走時：金色）

追記

魔力に関しては、魔力暴走がある可能性があるため、限定封印という形でリミットを付けています（リミットを付けてる状態時はC）
B-の魔力を使える）

魔力容量は、流華×吼太の為に容量は無蓄蔵な為にリミットを外して、巡航艦の主砲を普通に撃つことも可能（汗）

デバイスはまだ所持をさせてません。

魔力制御用のデバイスを渡すか検討中であります。

基本的なスペルは流華×吼太の能力と考えて構いません。

流「基本スペックは吼太や俺を遥かに凌いでるからな^^;」

毬藻「次はレアスキルをのつけるんだけど……おかしな能力というか、何がしたかったのか言う分類に入るのだが？」

流「どういう事だ??」

毬藻「まずは一つ目『三大女神』」

流「三大女神……?」

毬藻「ミーミルの泉の女神といえば分かるか? もしくは『過去』『現在』『未来』といえば分かると思うが?」

流「ウルズ・スクルド・ヴェルザンデイか!？」

毬藻「この三名の力の加護+特殊能力が付く……ぶつちやけ、答えを出すものと同等の能力が付くわけWWW」

フィー「はい!？」

毬藻「ウルズは、運命を決める者。ヴェルザンデイは「生成する者」「現在」を司る者、スクルドは「税」「債務」「義務」または「未来」を司る者」

シャイ「過去・現在・未来を任意で見る事ができる」

流「これだけでも凄い事だと思うのだが^^;」

毬藻「では、二つ目・・・『月の女神』」

流「そのネタちよつと待った!!」

フィー「女神『フレイヤ』の能力ですか^^;」

毬藻「だって、プリモにこの能力を付けないといけないって神のお告げがあつたんだもんwww」

シャイ「フレイヤって言うのは？」

毬藻「美、愛、豊饒、戦い、そして魔法や死を守護する北欧神話の太母。また海の守護神としてマルドル(Mardol)の異名をとる。美しい女性の姿をしており女性の美徳と悪徳を全て内包した女神で、非常に美しく、自由奔放な性格で、欲望のまま行動し、性的には奔放であつた。またフレイヤは月の女神でもある。」

シャイ「・・・凄いなってる気がするです^^;」

毬藻「俺のキャラで唯一『死』を司るキャラになつたんだが・・・
・・・五歳児でwww」

フィー「魔法を司るってことは？」

毬藻「デイス関係なく魔法が撃てるし、作る事が出来るwww」

流「何処まで、恐ろしい子を作ろうとしてるんだ^^;」

毬藻「そして最後は『賢者の神』だよ」

フィー「ミーミルですか？」

毬藻「正解。オーディンの相談役としても有名だし。ミーミルの泉としても知ってる人はいると思うよ？」

フィー「ウルズの泉とミーミルの泉の能力所持ですか!？」

流「運命と知恵を受け継いだ子……………」

プラム「……………そんなにすごいのか？」

流「月の恩恵・ユクドラシルの力・全てのものを見渡す力……………」

毬藻「と言っわけで、プラムの設定でしたwwww」

番外編：プラムの設定だよ（後書き）

プラム「どうぞよろしく願いします」

毬藻「感想コーナーです」

プラム「悠久なる時間さん、かんそうありがとうございます」

毬藻「今回はここまでです」

プラム「じかいもおたのしみなのです」

第33話・小さな見学者たち（前書き）

今回は紫月の中での物語です

第33話：小さな見学者たち

「…フィーナ、もう一度説明をしてもらって良いか？」

コンソールから目を離さないままフィーナに問いかけた。

俺は紫月に戻り、紫月の調整にはいていた。

『今回は、St・ヒルデ学院の仕事の見学と言うことです』

その声は物凄く笑顔だったのは俺の方でも確認が出来るほどだった。

『今回は【艦大戦】と【訓練内容の説明】になりますけど良いでしょうか？』

「業務の説明は入れよう…流石に」

最後のキーを押した後に溜息を吐いた。

『嘘です…わかってますよ、後はメンバーの召集をかければいいんですよね？』

今回は相手が凄い人数になるのは言うまでも無いな。

「それで構わない…真優とかもこっちで声をかけるから」

『その必要は無いよ』

すると、体から光が出てきてその光がゆっくりと人体を形成して行った。

「あたしも了解したよ……」

そして、当日まで準備をしていくのだった。

「本当に今回は楽しみだね」
「うん！！」

コロナやリオが笑顔になっていた。

「はあ〜」

そして、何故かヴィヴィオは溜息を吐いていた。

「如何したのなんか元気が無いけど？」

「まあ〜何かね……懐かしい気配があるんだけど」

懐かしいと言うか……何と言うか。

「この紫月には行ってからは特になんだけど」

昔に何回か乗った事もあるし……それとも聖王のゆりかこの後継機なんだろうか。

全員が案内された場所は、天文広場だった。

そこでは三人の女性が立っていった。

『皆さん初めまして……では、無いですね？』

『この前の地上局で合いましたね』

二人の女性：見間違えたら少女でも全然通用するぐらいの魔道書だ。

「私は初めましてですね……それでは、魔術師協会【ラクト】特別第二戦艦【紫月】にいらっしやいました」

『今回案内します鳳 杏』

『同じく鳳 李』

「真優・S・インシエルがこの案内をさせていただきます」

そして、三人はお辞儀をした。
真優の姿を見た時、ヴィヴィオは納得していた。
懐かしい感じはこれだったのかと。

「今回は一泊二日の案内で良いんですね？」

真優が先生に確認に取ると頷いた。

今回の見学者はセヒルダ学院の四年生が集まった。
今回はちょうど【紫月】が停泊していたので学院側が頼み込んだらしい。

あくまで噂の範囲ではあるが。
すると、いきなりアラートが響いた。

『副長のフィーナ・インシエルです。本戦艦はただ今より作戦区域に移動します…到着時間は本時間より1300に到着予定です』
『同じくシャイン・フォースです。本艦の今回の移動方法は時間移動と空間移動を行います…本艦が戻る予定は元時間から15分後になります』

『離陸を開始しますのでもう暫くお待ちください…それから桜内流艦長は至急艦橋まで御出で下さい』

そして、放送は切れた。

「……なんか大変そうだね」
「うん、そうだね」

コロナヤリオは呆れてる顔になっていた。

「それじゃ、この艦の簡単な説明をしていこうかな？」

すると、杏が指を鳴らすとモニターが現れた。

「改めて紹介：略称して【紫月】は全長1,200m・縦が400m・横が800m・で一般区画と乗員区画が存在して三つの艦成り立ってるのです」

『乗員は七名です』

その言葉でその場に居た全員が驚いていた。

「驚くのは無理ないと思うけど……このメンバーで事が足りているのは確かなんだけどね」

『以前は機動六課を運搬していたときもあつたしね』

それはJS事件でのことだ。

『次は乗員の紹介ですね……私からですね』

李が一步前に出た。

『自立型魔導書【不死鳥の書】の人格コアになります』

李が手をかざすと魔道書が出現した。

『その同型の【鳳凰の書】を所持しています』

「私はちよつと違って……竜神族の最高位【レインボードラゴン】と言う種族の末裔になります。まあ、まだ力の方は全盛期の方ではないみたいなのですけど」

そして、画面が切り替わった。

「次は魔道書【晴天の書】シャイン・フォースさんです」
「私たちと同じインテリジェントデバイス…本体からも切り離して攻撃や色々出来る魔道書です」
「シャイン・フォースさんが待つてる魔道書が【紅天の書】という専用のデバイスになります」
「中身は晴天の書と共有できるのである意味では蒐集スキルの一部といっても良いかもしれないですね」

次のパネルが開いた。

「次はフィーナ・インシエル副艦長…人工聖霊ホムンクルスでこの艦の制御の要です」

その言葉に全員が驚きの声を上げていた。

「因みにこの人は時の女神【タイム】様の右腕をしていたって言う
凄い人ですよ」

「今もこの艦を制御しているのですから本当に凄い人なんですけどね」

そして、最後に男の人の絵が出てきた。

「そして、この艦の最後の紹介…：桜内流艦長」

「この人の事は運動会で嫌って言うほど知っているとと思うけど…簡単な説明だけね」

「晴天の書の使い手で、この世界には無い【時間移動】の魔法が使える唯一の魔導師ですね」

「後は、どう考えても成長していないんですよ…」

時間魔法の中を生きているんだから仕方ないと言えば仕方ないと

は思うが。

「役割としては全体指揮から前衛に出たり」

『時々、後衛の方に行って援護を受け持ったりとさまざまですね』

「後は、持っているデバイスは【ビクティム】と言って通常形態は双剣の形になります」

『他にも双釜・砲撃・盾・重剣などオールマイティーに変形します』

『別名が【無形双剣】と言う人もいますけど』

そして、説明は進んでいって、艦内の案内に入った。

最初はエンジンルームだった。

「この世界とはエンジンの構造は全然違い、三つのエンジンで動いています」

『相転移エンジン・クロノストリングエンジン・魔力炉の三つです』

『真空にいる時は【相転移エンジン】で地上にいる時は【魔力炉】と使い分けをしています』

『クロノストリングエンジンは主に攻撃とか供給とかの補助エンジンとして使われています』

そして、一般区画・乗員区画・トレーニングルーム・食堂など色々案内されそして……

「では、今回のメインになります」

『紫月の艦橋になります』

扉を開けると広いスペースがあった。

『皆様いらっしやいました…さっき紹介されたフィーナ・インシエルといます』

『同じくシャイン・フォースです』

「あれ、艦長は？」

見渡せばそこには艦長の姿はなかった。

「真須美さんから連絡が入ってそっちの方にいつてるわ」

『なのはさんとフェイトさん……いつこちらに？』

フィーナの後ろにはなのはとフェイトが立っていた。

「流石に教導中に戦闘が始まった場合はそっちに外さないといけな
いから」

「と言うわけで助っ人と言うわけなの」

そうなるとは予想は出来ていたので三人は驚かなかった。

「さて、今もう直ぐお昼時間になるけど…食堂に行こうか？」

時間帯を見ると12時を回っていた。

「艦長もそこにいるからね」

そして、全員は食堂に戻った。

「いらっしゃいませ」

そこには給仕姿（メイド服）の真須美さんが立っていた。

「お昼時間なのでバイキング形式に見ましたので好きなように取って下さいね」

その後ろには和洋中の料理が並んでいた。

生徒は、お皿を取り好き好きに取っていった。

「そう言えば流くんは？」

「まだ後ろでケーキを作っていますよ…因みに【本気】みたいなので」

それはつまり？

「本当の手作り？」

その答えに真須美は上下に首を振った。

「ほい、お待ちどうさま」

奥からエプロンを来た男性がケーキを持ってきた。

そのトレイを所定に位置に置き、六人のところに来た。

「なのはさんとフェイトさんも来ていたんだ」

エプロンを外してその輪に加わった

「…流くん、その格好は似合いすぎだから」

職人帽を被って殆ど別人になっていた。

「そろそろ、時間航行の時間みたいだな………どうしたら良いかな？」

「今回の任務はそこまで危険なの？」

「今回は巡回任務のみ…持って来たのは智也さんと言うことだけ」

その言葉だけど、その場に居た学生以外は冷汗をかいていた。

「無事に帰れるようにに努力はするよ」

すると、デバイスに呼び出しが来た。

呼び出しの内容は理解は出来るけど。

『流艦長、時間航行ポイントに到着しました』

画面からフィーナの立体映像ホログラムが浮き出していた。

「解った。時間のコンソールをこっちに回せるか」
『そっちに転送します』

すると、流の周りに幾つものボードが出現した。

『時間流動パルス及びタイムシールド展開完了』
「警戒態勢レベル3からレベル1までに引き上げて」
『了解！！』

すると、室内の外のガラスが閉じ始めた。
そこに居た学生たちも驚いたように見ていた。

「移動場所なんですけど……戦闘確認が出来ます」

その隣に真優が同じようにキーボードを打ち始めていた。

「真須美さん、厨房の火を落としておいて下さい」
「そっちはもうしてますよ」
「了解。フィーナ、舵をこっちに出せるか？」
『問題ありません…あちらに着いたらオートからマニュアルに変更
します！！』

では、行くか。

最後のキーを押したとき、室内が赤くなった。

『時間の巫女が願う』
「時の覇者の名の下に命じます」
『「時間の礎の下に我が願いと時間を聞きいれよ！！」』

次の瞬間、艦が一瞬だけ大きく揺れた。

「前方にミサイル軍!!」

「シールド完全移動状態、防御と撃墜はそっちで任せる!!」

「了解!!」

「10時4時8時からミサイルと敵艦を確認!!」

真優の報告で確認する。

「こんなに一杯は要らないから!!」

半分真優は呆れながら答えていた。

「フィー、超高速亜空間航行は使えるか？」

暫くの沈黙後…

「舵は流様が握ってる状況…それと私の処理演算でなら100%可能」

不適にフィーナが笑顔を見せた。

「……エンジン三つともフルドライブ」

「空間粒子散布開始」

「超高速亜空間航行開始します!!」

現状では30秒あれば抜けれる!!

次の瞬間、周りの景色が一変した。

すべての物が動かなくなったのだ。

艦はありえないスピードでミサイルと敵艦を間をすり抜けた。

『敵艦包囲網から完全離脱確認』

「航行解除！！エンジン温度60度ですべての行動に支障はありません」

『エンジン冷却はとりあえずします……エンジン出力を30%にて離脱します』

俺達は一息ついていた。

「ここからどうして帰るか？」

『とりあえず、この星系の巡視と後は食料の調達をどうにかしな

いといけませんね』

いくつかのプランがあったがとりあえず決める事は。

「俺は直ぐにでも寝たいんだけど」

「そうさせたいのはやまやまなんだけど…」

「そこは無理っぽいみたいよ」

そう、この後は学生さんの教導が待っているのだ。

今はなのはさん達の授業中だ。

なのはさんとフェイトさんも一緒に参加して下さいさるって事だ。

「ついでの報告ですがあの方の連絡が取れて補給の方は大丈夫との事です」

その報告に俺は小さく安堵の溜息をついた。

「それは良かった…じゃ、そのまま直通で行こうか？」

「そうですね。その方が一番安全だと思いますね」

俺は、進路をお願いするとトレーニングルームに向かった。

「お疲れさん」

「流くん、お疲れ様……進路は決まったの？」

その言葉に頷いた。

「今からこの世界の【地球】に向かう予定」

「そっか…で、それじゃ本日の教導を始めようか？」

その言葉におれとフェイトは頷いた。

その後、学生たちはバテバテになっていたのは言うまでもなかった。

そして、一日が経った。

二日目、全員はブリッジに集合していた。

「今回は最終日なんだけど……今日はちょうど物資搬入しないといけないので調達場所に向かおうと思う」

『今回はそこまで危険な場所には行きませんかから気長にして良いで

すよ
『』

『戦闘は私が行つから気にしないでくださいね』

俺達は、エンジンをフルドライブに持っていった後、最大加速で目的地に着いた。

すると、通信が入った。

『こちら紫月です…どちら様でしょうか』

「こちらは、地球のフィーナ・ファム・アーシュライトです」

通信は月のお姫様からだった。

「……………」

『どつなさいました？』

流星にフィーナ姫から通信が入るとは、夢にも思わなかったから。

「物資の搬入方法はどうしましょうか？」

第33話：小さな見学者たち（後書き）

プラム「あとがきだよ」

毬藻「最近、プラムが色気を覚えた事に不安になってる作者です（汗）」

プラム「え〜、何で不安になるの〜」

ぷらら「それはねえ〜、エリオくんとの関係の早さだと思っよ〜」

毬藻「……何、このチビロリ率が高いんだ!？」

プラム「そこは、作者さんの個性のせいだと思っよ?」

ぷらら「た、確かに（汗）」

毬藻「否定の言葉が見つからない（汗）」

プラム「そう言えば、プラムの主体の話はないの?」

毬藻「今のプラムを出す俺の出してるエリオは14歳になるんだけど……それで良いのか?」

プラム「そ、それは嫌だ（泣）」

ぷらら「次回は見学者の後編になります〜」

プラム&ぷらら「じかいもたのしみにしてますにゃ（びょん）」

第34話：小さな見学者たち 後編（前書き）

続きになります

良かったらみて下さい

第34話：小さな見学者たち 後編

『今回は艦が着陸出来ない状態なので、物資を入れる艦だけをこちらに持って来れないでしょうか？』

確かにそうしないとまずいかもしれないな。

「解りました…そっちに降ろせる艦を用意しておきます」
『解りました…通信を切りますね』

切れた直後。

「さて、向こうでは由々しき事態が起こってるのは明白になってるな」

『そうですね…発着が出来ない時点でおかしいのは明白になりましたね』

「どづい事なの？」

その後ろに居たなのは達は不思議そうな顔をしていた。

「もともと、この艦は艦体縮小魔法って言うのが使えて……その魔法自体は向こうさんも知っている魔法」

『それなのに艦は着陸は出来ない……さて、これはどづい事でしょう？』

その場に居た、見学者たちにも問題の様に言った。

「……何らかの事情により艦を着ける事が出来ない」

「そして、この艦の事も向こうの人は知っている」

『なのに着陸は出来ないという事を言われたんです』

「……事件に巻き込まれていると言うことですか!？」

その言葉に、流は頷いた。

「俺が地上に降りるから……リフレクトシューターの使用許可を」

『解りました…パーソナルコンピューターの計算で使用なのは【サイレント】と【スピード】換装が使えます』

暫く考えて。

「複合で使用許可を出す……出来るか？」

『出来ます……流様、お願いします』

俺は、急いで戦闘機のところに向かった。

無事に地上に降りた。

そこもいつもと代わりがなかった。

目に見える範囲では。

「治安状態も良好だし……時間読み間違えてこの世界に来たわけでもない」

とりあえず、彷徨っても仕方ない言う事で指定された場所まで行く事にした。

指定した発着場には……

「……なるほどそう言うことなのか」

そこに居たのは俺が逢いたかった人物だった。

「……達也!!」

その言葉に頷いた。

「簡単に状況を」

しかし、達也は喋らず一枚のCDを渡してくれた。

「……物品チェックのディスク確かに預かった」
「助かる」

俺は懐にCDをしまって再度リフレクトシューターに乗り込んだ。

『進路クリアー、発信できます』

もう一度、達也を見た。

そして、一回頷いてから再度大気圏に突入した。

艦に戻りディスクをフィーナに渡した。
とりあえず、変なウイルスが付いてないかも確認してだ。

「そんで持って、これが敵さんの行動と繊細に纏めた物だと」
『さすがはフィーナ様ですよ、重要な点を纏めて下さってくれてます』

同じ名前のフィーナが関心の声をあげていた。

「重力制御は月側にあってそれは無事……トランスポーターは？」
『無事ですね……流様』
「ゲリラ戦ならゲリラ戦で対抗してあげましょうかね」

紫月の戦闘員はそれに頷いた。

「それじゃ、フィーナは艦対戦準備をお願いします」
『了解しました』
「いくよ……艦内アラート……！」

すると、艦内に一気にアラートが響き渡った。

「こちら艦長、今より地球に対して強行攻撃に移る……紫月に居る一般員及びSt学生は自室に戻り待機しなさい……！」

そして、通信を切った。

『なのはさんには連絡行ってます……レチエさんも同様に先生方も連絡は行ってます』

その言葉に俺は頷いた。

「フィーナ、強制降下シークエンス……！」

『了解、シールドを下方方向に展開、大気圏内展開後にエンジンを切り替えを行います』

「解った」

大気圏を突入した後予想していた展開になった。

『艦影照合……この世界の機体ではない物です』

予想的中……！！

「戦闘準備……！ただし、人身は最優先で行え」

『イエス・サー……！』

軍人と思える掛け声が聞こえた。

「追尾レーザー全方位に展開」

『奪うのは敵の舵と攻撃……行きます……！！』

次の瞬間、青色の光が紫月から一斉に解放された。

「命中率98%……残りの艦体から魔導騎兵が突貫しました」

なら！

「俺も出る！！後は、補助に回ってくれ」

「ちよつと待って、お兄ちゃん一人では危険だよ」

「大丈夫みたいだよ李ちゃん」

フィーナの声と同時に格納庫から声が聞こえた。

「流くん聞こえる？」

その声は予想が出来ていた。

「準備は出来てます……ハッチオープンします！！」

「メインハッチオープンします」

すると、三つの光が飛び立った。

『なのはさん、フェイトさん、レチエさんが展開しました』

レチエも出たか。

「空間跳躍！」

俺は、紫月の外に出た。

「方形陣展開……打崩せ【フレイム・ボルト】」

雷炎系の魔法を展開して一気に無人艦を爆散していき沈黙させていった。

「敵艦隊の親玉らしき機影を確認したよ」

『こちらにも機影を捉えました！！座標目標をそちらのデバイスに転送します』

『coordinates・point 214・147』

「行きたいのはやまやまなんだが……敵さんの多さは厄介だな」

俺は、晴天の書を召還した。

「……光明の光、夜を照らす炎よ……全ての切り裂く烈火とならん！
」！

次の瞬間、右手に持つ剣が炎を身に纏った。

「シグナムとあの子には悪いけど……蒐集してるから悪く思わない

「でよー!!」

「薙ぎ払う体制に型を取った。」

「はあああ!!」

横に薙ぎ払った瞬間、敵のAI艦は一気に消滅した。

「一気に行く!!」

加速して、敵艦の中に入った。

『流さん、敵艦の中に入りました!!』

「了解：このままでいいんだね?」

『……そうですね。出て来るまでが今回の事ですから』

そう言いながら、モニターを確認した。

「……うん、全員こっちに来たかな……今回はギリギリ追及点でしょうね?」

真優は小さく笑っていた。

次の瞬間、デバイスを持った生徒が艦橋にやってきた。

「フィーナ副艦長!!」

ヴィヴィオが聞いて来た。

「その様子じゃ、頑張って考えてここまで来たみたいだね」

『私的には合格点をあげても良い位ですし……ね、流さん?』

すると、モニターに流の姿が見えた。
その後ろには……

「フィーナ姫に達也さん!？」

『私もそう思いますわ』

『今回はその子達がどう悩んだ行動をするかが今回の課題だったし……十分に合格していいと思う』
『ですね……私達も艦に帰還しましょうか……なのはさんにフェイトさん』

その言葉に、生徒は驚いていた。
レチエが戦闘をしていたのだ。
それと言葉にも気がついていた。

「ただ今戻りました、フィーナさん」

『久々の戦闘で緊張したんじゃないんですか?』

「そうですね……機動六課時代は何度も戦闘に出ていましたから……少

しだけ緊張しました。なのはさん達の足を引張らないかと」

そう言いながら、少し笑っていた。

「そう言えば、レチエ先生は何処の部隊に居たんですか？」

「私は機動六課の『フォース』部隊よ」

その言葉に、そばにいた全員が驚いた歓声を上げていた。

「私の場合はサポートの方に回っていたから前線にはあまり出ていないし…今回も、後方支援していましたがね」

『以前と同じ切り替えしも出来て居ましたし…大丈夫ですよ』

フェイトはなのはを見た。

同じように頷いていた。

「それじゃ、今回はありがとうな…二人とも」

艦に戻った後、二人を見てお礼を言った。

そして、二日間の実習は幕を閉じた。

第34話：小さな見学者たち 後編（後書き）

時間の都合上に付き、雑談は見送ります。

第35話：オフトレ開催?! (前書き)

真夜中に更新してすみませんです

第35話：オフトレ開催?!

この世界にも、試験って言うものが存在するんだなとつくづく思った。

俺は、仕事を終わらせて家路に着いた。

「流くん、お帰り……そう言えば、お休みはとれた？」

「大丈夫でしたよ」

「今回は流くんも一緒に行けるって事だよね」

「一緒に行く？」

その言葉に俺は大量の疑問が頭の上をよぎった。

「ヴィヴィオが試験が終わったら試験休みだからそのときを使ってオフトレーニングをしようと思うんだけど？」

「……なるほど」

確かにこんな機会じゃないと出来る事じゃないな。

「俺も参戦でいいよ」

そして、それはあれよあれよと決まるのだった。

そして移動当日

三人は優秀でした。

「そう言えば、今回は流さんも参加するんですね？」

「そうだよ…皆の足を引張らないように努力するよ」

その言葉に後ろに居た元機動六課のメンバーは手を左右に振っていた。

「今回はいつもの移動方法ではないんですね？」

「うん、今回は流くんが艦を貸してくれるって言うてるから」

その言葉にコロナとリオが驚いていた。

「……あれ、言ってなかったっけ…紫月は私艦だよ」

その言葉で二人は固まってしまった。

「今回はスターズとライトニングとフォースの全員が揃うんだよね？」

「そうなんだけど……レチエがどうなるかって事かな？」

学校教員でもあるから無理はして欲しくないってところだな。

「乗車の振り分けだけど……流くんはいつものアレで追いかけてもらって良いかな？」

乗車の事も考えていつているのだし仕方ないか。

その後、ノーヴェがアインを連れて来てヴィヴィオが興奮していたのは言うまでもなかった。

そして、準備も出来た。

外にでると一台のバンと単車が用意してあった。

ライダースーツを着込んで跨った。
とりあえずはレイジングハートと情報の連結をした。

『向こうで待ってれば良いんだよね？』
「そうだね…それじゃしゅっぱーっ」

向こうの車内では元気な声が聞こえてきた。
最初は、バンについていく形で走ったが、高速に乗ったとたん俺は加速した。
規定のスピード以内だが。

「先に入っておくね」

俺は、先に着くと見知った4人がいた。

「あ、流さん」

「流さん!？」

「ヒイナ…‥‥久しぶりだな」

他の人は時空管理局や学校の行事関係で会う事は出来るのだから。

「はい…流さんもお変わりないですね」

「レスキューの方に入ってるからスバルと一緒にしないのか」

「違いますよ…ヒイナは特レスに入ってますから…部署が違います」

暫く、話をしているとバンに乗っていたメンバーも到着した。

「どうやって行くんですか…乗船のチケットは？」

「今回は俺の艦で行くから…：…そろそろ、フィーナがシャトルを着かせるころだと思っただが」

すると通信が入り、指定されたゲートを潜り…

『皆様お待たせしましたのです』

そこに居たのは、シャインだった。

「今回はシャインが迎えか…真優は？」

『向こうで軽く流せるように準備中です』

シャトルのところに行く

「…：…シャイン、もしかしなくてもって事か？」

『リフレクトシューターのシャトルバージョンです』

「間違いなく俺が運転しないとイケないって事だな？」

『行きはシャインが出来ましたけど艦に行くときは、マスターじゃないと無理ですから』

俺は久々に大きな溜息を履いた。

ここまでできたらとことんやるか。

全員をシャトルの中に入れた。

『皆様にお願いです…紫月に着くまでシートベルトを【絶対】に外さないでください』

俺は全艦放送をした後、始動キーをセットした。
因みに放送は開きっぱなしである。

『機動キーを確認…管理者コード読み取りします…照合一致しました』

「エンジン始動…バランサーシステム起動」

『エンジン運転開始します…Gフィードを展開…重力システムオ
ールグリーン』

「現在の形態を報告」

『現在武器制限…フランクスのみ装備です…装甲形態はガード使
用です』

「了解…リフレクトシューターリフトオフ！」

すると、機体がゆっくりと浮上した。

「テイクオフ」

次の瞬間、一気に加速した。

『空間転送ポイント到着まで2秒』

次の瞬間、一気に風景が変わった。

『次元空間到着しました…紫月の合流ポイントに到着まで200で
す』

「自動マーカーセット…誘導が着次第で自動誘導に切り替え」
『了解』

そして、紫月に着いた。

「…流石にあれでも皆、タフだね」

それぞれ結構タフだった。
全員は、艦橋に向かった。

『皆様着きましたね』

そこには、フィーナが笑顔で待っていた。

「出発の準備は？」

『到着まで考えて2時間ですね』

たしか、普通の移動で考えれば4時間するのだ。
大幅な短縮になっている。

「では、移動をお願いしますよ」

『解りました…その間どういたしますか？』

「トレーニングルームを使うよ…ヒイナ、やるか？」

「お願いします!!」

その言葉に4人は不思議そうな顔をしていた。

全員はトレーニングルームに向かった。

「一体何が始まるんですか？」

「剣士の修行：本当に凄いから見ているそんはないよ」

俺は、ビクティムを双剣モードに変えた。
ヒイナも同じく、崩練を構えた。

「魔法なしの技能のみ…始め!!」

次の瞬間、二人は消えた。

「えっ!?!」

「入ったね……瞬動術」

人の動きは見えないが剣のぶつかる音と火花が確認が出来た。

「す、すごい……」

アインハルトも驚きながらみていた。

そして、姿を戻した。

「いくよ、ヒイナ!!」

「はい!!」

次の瞬間、同じように消えた。

しかし、今度は行動どころか火花も確認できなくなった。

「二人とも入ったね」

「神速……」

この行動にノーヴェすらも息を堪えながら見入っていた。

「はああああ！！！」

『小太刀二刀翁流・奥義の式【蓮花】』

「うをおおおお！！！」

『小太刀二刀御神流・裏 奥義ノ式【射抜】』

次の瞬間、二人の剣が交差した。

「そこまで!!」

なのはのその言葉で俺は大きく息を吐いた。

「剣の鋭さ……相変わらずだな」

「流さんも同じです…久々に交えられて嬉しいです」

そして、各々自分の自主トレに入った。

暫くして、目的の場所に着き、ルーテシアの案内で荷物を置いた後、俺は大人組みの方でヒイナを連れて組み手を行った。

「この後は、隊長の模擬戦ですね」

「まあ…何とかがんばるから気にするな」

因みにレチエは、子供たちの引率の方に入った。

レチエの場合は引率と軽いストレッチの意味合いが今回は強い。

「そう言えば、ここからだとか川に近いですね？」

「確かにそうだな…横が甘い」

横に勢い良く技を入れて吹き飛ばした。

因みに俺は拳で対峙していたのだが……

「うわああああ」

そのまま川に落ちた。

「あちゃ〜……ヒイナ生きてるか？」

俺は【浮歩^{うほ}】を使い水の上を歩いた。

「何とか……本当に器用に水の上を歩きますね……川の上ですけど」「
「気にするな……そろそろ戻るか？」

俺たちは何事もないように森の中に戻った。

「……ヒイナさん、怪我してないですよね？」

「大丈夫よ、水に入る前に一瞬だけ軽減するようにして居た見たいだから」

レチエがさっきの行動を器用に分析していた。

「流石、フォーエス隊のFBとCGを兼ねていた人だ」

「さて、私も向こうに行く準備しないと……午後からは向こうに行かないといけないし」

「陸戦練習だっけ？」

その言葉に、レチエは頷いた。

「流隊長が久々に稽古つけてくれるんですから……行かないと損ですよ」

「そんなに強いんですか……やっぱり？」

「そうね……強いの意味合いで言うなら暴走時代のヴィヴィオちゃんに匹敵するかも」

それは明らかに聖王のゆりかごのレリックに憑かれた時のヴィヴィオとタメをはるだろう。

「……ヴィヴィオの暴走？」

「……機密事項だった……他の例えだったらはやてさんが守護騎士連れてリインちゃんとユニゾンとアギトちゃんのユニゾンが入った状態かな？」

それは何処のフルボッコと言いたい。

確かにそれぐらいの強さと言える。

その後、ヴィヴィオとアインハルトは水斬りの練習に勤しんで居た。

お昼になたのだが……

「二人とも大丈夫か？」

「あゝ気にするな……水斬りの練習のし過ぎだ」

その言葉で、俺は納得した。

「とりあえず、お昼にしようか……」

昼は、外でバーベキューになった。

「そう言えば、今回はシャインさんは？」

「今日は紫月の仕事で来れないって……明日ならこっちに合流するってさ」

「シャインさん……ってどなたなんですか？」

コロナが不思議そうに聞いて来た。

「あれ……見ていなかったっけ？」

お握りを手に握ったまま。

「俺の横に小さいユニゾンの子が居ただろ？」

「はい…」

「あの子だよ……因みに今回も迎えに来ていただろ」

その言葉で納得していた。

「さて、ご飯を食べた後少し休憩した後は、地上模擬戦とその他諸々をしていくからね」

「はい！！」

休憩後、大人たちはトレーニングの方に向かった。

ヴィヴィオたちは勉強と後片付けに回った。

それが終わった後は、大人の訓練の見学会に来ていた。

アインハルトは目を輝かせながら訓練を見て居たが、ヴィヴィオと軽い訓練と出て行った。

俺はそれを軽く横目で見ていた。

また、意識を戦闘の方に戻した。

夕食後、男性陣が先にお風呂を頂いていた。

「ふゆ〜極楽極楽」

日本人は温泉が一番だよ。

「本当に気持ちが良いですね」

エリオもゆつくりと浸かっていた。

「久々に体動かしたな……少し間接が痛い」

「そこまで、衰えている様には見えてなかったんですが……」

「見せないようにしてるんだけど……明日の戦闘に参加できれば良かったんだけどね」

「人数問題とか色々ですし……流さんが入った場合、殆ど勝利確定の気がしますか」

そこまで褒めても何も出ないんだけど。

「それに三日目のイベントは流さんがメインに動かないといけないですよ」

その三日目は、何処の苛めかと思いたくなるような練習内容だったし。

「何とか動くしかないね」

「何でもアリの鬼ごっこ大会」

何だかんだといってもエリオも楽しそうである。

「大人は俺が対応するし…子供たちやノーヴェはシャインがするからこの所はぬかりはないしな」

笑いながらそう答えた。

俺たちは、その後お風呂から上がり、女性陣と交代した。

その女性陣は、一悶着あったみたいだし。

お風呂から上がったセインがいるのがその原因の一つになっていると思うが。

その事は、解決してみたいだし。

そして、二日目のオフトレに突入するのだった。

第35話：オフトレ開催?! (後書き)

後書きは今回は打ち止めです(汗)

第36話：流の第二のユニゾン（前書き）

毬藻「駄目文ですが評価をお願いします」

第36話：流の第二のユニゾン

俺は、外に居た。

「いたいた、パパ〜」

「あれ……真優が来たのか!？」

予定ではシャインが合流予定だったんだが。

「シャインは？」

「今【華月】の方で緊急の用事が入ったから今は私が来たんだよ」

……智也さんに呼び出されたんだな。

「愁傷さまだな。」

「今日の内容は？」

立ち止まって話すのは何だし俺はロッジの中に入った。

「今回はチーム戦だけど人数が足りているから俺は審判みたいだな」

「そっか……」

「あ〜!〜!」

大きな声が聞こえ振り返ると。

「真優ちゃん」

「わあ〜ヴィヴィオちゃんだ〜」

二人は喜びながら騒いでいた。

「何で何でここにいるの!？」

「私の方もテスト休みでね…本当は、シャインちゃんが来る予定だったんだけど、用事で私が急遽ここに行く事が決定したんだよ」

そして、近くに居たりオヤコロナ達にも挨拶していった。

「久しぶりだね…って言っても、この前の社会科見学で会ったばかりだね」

なのは朝食の準備をしていた。

その後ろでキャラオたちにも挨拶して言った。

「今回は私も審判の方に回りますね」

「お願いできるかな？」

「けど、二人だけで審判は大丈夫なのか？」

「そこは大丈夫です、従者を使いますから」

その言葉で数人が驚いていた。

「二人…黒蘭さんと真琴さんが適任ですね」

今言った二人は虹龍の従龍で漆黒龍や真琴に関しては『白龍』と崇められていたりもされている。

そして、朝食後、訓練場に向かった。

さて、俺はデバイスを展開した。

もちろんバリアジャケットも着込んだ。

「来て…我が従龍…白龍・黒龍!!」

すると、真優の体から黒と白の光が現れ、真優の左右に展開した後、人型に変化した。

『お呼びになりましたか？』

「うん、少しだけお手伝いお願いしたい」

『……了承……しました』

「後は俺か……展開」

俺は今回はいつも使っている『双剣』ではなく杖を召還した。

「今回は『シャルティエ』を使用させていただくね」

その言葉を聞いた瞬間、機動六課に居た隊長格以外は驚いていた。

「これが本来の『晴天の書』が保有している杖：時の杖『シャルティエ』だ」

「そういえば、この杖を使ってるのを見た事あるのは私たちぐらいしかなかったんだよね？」

「ビクティムは『無形双剣』で形があるけど近距離が得意で時間魔法の代償を抑えるの能力があるんだけど」

「シャルティエに関しては時間魔法を使用に特化したデバイスなんだよ」

「簡単に言えば『見る』に特化した能力が使える」

「後は精神攻撃に使えることだね」

その言葉に、フォワード陣と初等科と中等科の子たちは開いた口が塞がらなくなっていた。

そんな能力が使えるのだから仕方ないだろうか。

そして、ウォーミングアップも終わり全員が所定の位置に着いた。

「どう思う……この結果」

「いい戦いになると思うよ……本当に」

「それにしても……結果は『見えて』るんだよね？」

真優の言葉に俺は小さく頷いた。

「試合の結果に関してはいいんだけど……その後のあれはないと正直に思いたいな」

「あはは……確かにそうなんだけどね」

真優も少しだけ未来視が使えるのだ。

といっても最高が一日ぐらいなんだけど。

「さて、真優……見ながらのウォーミングをしますかな？」

「そだね……久々の『アレ』もしたいしね」

そして俺たちは、試合の経過を見ながら事態に備えてウォーミングアップを始めた。

この試合に関しては、あまり触れないで置こう。

そして試合が終わった瞬間。
サイレンが鳴り響いた。

「これも訓練のひとつと知ったら全員発狂するよな？」

「それは確かに……見た所、敵影はざっと100編成が10で構成か……フィーナお姉ちゃんは意地悪と言う称号を突っ込みたいよ」

それは言えてるな。

「訓練していた人たちは完全にはててるし……簡潔に終わらせるか」
「そうだね……」

二人は、小さく溜息を履いた。
そして……

「「フィー（お姉ちゃん）最終ロックと限定能力解除!!」」

次の瞬間、二人の体から光が溢れてきた。
そして、手を繋いだ。

「ユニゾン」
「イン!!」

二人は融合した。
流れの体は龍の装具が身に纏って居た。

「真龍具……使えるのはせいぜい20分」
『その20分で片を付けると言うことかな』

俺は、シャルティエを天高く掲げた。

「……天より舞え!!」

『烈龍』

「『豪炎斬!!』」

剣みたいに横に引いた。

次の瞬間、一揆に壊滅した。

その後ろで見ていたリオヤコロナは、啞然と見ていた。

「もういっちょ……」

そのまま、晴天の書を召喚した。

「提示【3breaker】」

すると、流の前に三つの魔法陣が展開した。

「一つ目…スターライト……」

『ブレイカー発射固定』

「二つ目、プラズマザンバー」

『同じくブレイカー発射固定』

「三つ目…響け、終焉の笛!!ラグナロク」

『ブレイカー発射固定…連結魔法陣スタンバイ』

すると、大きな魔法陣がそれぞれの形態を一つにした。

「そして、これが俺の単発式収集魔法…魔力開放『エターナル・ブ

レーカー』」

魔法陣の四つが一つに重なった。

「行きます。許容範囲型二式『アルカンシエル』発射!」

小さな光が敵の中に吸い込まれていった。

『バースト!!!』

次の瞬間、敵が一気に消滅していった。

『敵映、完全消滅確認』

そして、ユニゾンを解除した。
地上に降りるとハイタッチした。

「あ……」

「す、凄い……」

三人は目を丸くしていた。

「流石に三つの収集型を制御まで持っていった……」

「自分の収集魔法を掛け合わせて……」

「アルカンシエルを撃ちだすなんて……凄いと言う前に呆れるんだけど」

なのはやフェイト、ティアナは半ば呆れていたが。

「けど、殆どの場面の切り札が流くんのあの力に頼るんだけどね」

「うん……けど、失敗すると私の二の舞いになってしまう」

「けど、それを承知で流くんは使ってくれてる」

その後、クールダウンしてからログハウスに戻った。

「お疲れ様……無理はしていないよね？」

温泉でさっぱりした後、ラウンジで心配そうになのはが聞いて来た。
た。

「平気だよ……俺の無理した場合はなのはが良く知ってるだろ？」

その言葉になのはは頷いた。

転生しているから、その場合は当て嵌まるかは微妙なところなん
だが。

「それにしても、ヴィヴィオたちは今日は静だな？」

いつも騒いでるのだが今日は特に静だ。

「昼間のあれがよほどだったみたい」
なるほどな。

「今日は流くんは午後からゆっくり？」

「そうする…なのは達は？」

少し訓練してから今日は上がるつもりだし。

「そっか…了解」

そして、午後はゆっくりと時間が流れていった。

第36話：流の第二のユニゾン（後書き）

今回はお話は中止します。

了了承下さい > (「」) <

第37話：鬼ごっこ？（前書き）

久々の更新です。

そして、ストックも余りなくなりました（汗）
頑張って書きますよ〜

第37話：鬼じっじ？

『はふい〜間に合ったです』

小さな女の子が流の頭で一息ついていた。

「何故に俺の頭の上にいる？」

「少し休憩させて下さいです」

まったくシャインは…と悪態をつきたかったが来てくれた事に感謝だな。

「で、智也さんの方は？」

『状況確認と行動確認を終わらしたらすんなり帰って良いと言われました』

一体何も考えているのだろうか。

そこまで深く追求すると藪蛇になりそだな。

「休憩が済んで朝ごはん食べたなら会場を作るか」

『はいです』

「ヴィヴィオ、今日は何をするんだっけ？」

「ご飯食べてから、鬼ごっこをするんだよ」

「……鬼ごっこ……ですか？」

そう言いながら、不思議そうにアインハルトが聞いて来た。

「とは言っても、魔法ありで捕まったらその場でリタイアみたいだ

よ」

「……私たちの相手は桜内さん？」

『ヴィヴィオさん達の相手するにはシャインですよ』

そう言っつて、小さなユニゾンの女の子が飛んできた。

「貴女は？」

『シャイン・フォースと言います…ヨロシクです』

「何となくと言うか…リインさんとそっくりです」

「それもそのはずです。シャインは、リイン・フォース…【**夜天の書**】
と同時に作られた魔道書…【**晴天の書**】なんだから」

シャインが胸を張っていった。

「そ、そうなんですか」

「もし暴走だった場合は破壊対象になっていたんだけどね」

その後ろから、流が出てきた。

「どういうこと……ですか？」

「……闇の書の事が大きくかわるからな……さて、しっかり食べないとこの後が大変になるぞ」

そして、朝食を食べてから全員は庭の方に出た。

「さて、大人チームは俺がするけどいいのか？」

「男が女を襲う……変態さんですか？」

誰かの何気ない一言が流の考えを改めさせた。

「子供の方を参加すれば良いんだな？」

「流さんはロリコンですか？」

その言葉……リオの言葉で固まった。

ある意味本気にさせたのは言うもでもないだろう。

「……解った。大人チームは【真優】で子供チームが【シャイン】
で願います」

その言葉で最初の声……コロナとリオは安心していた。

「……そして、全力全開の本気モードで相手してやりなさい」

その言葉にシャインや真優どころか全員が驚いていた。

「えっと……流くん……」

「やっと参加できると思っていたのにこの仕打ちか……二人のバツ

クアツプは俺が引き受けるから全力で皆さんを相手してあげなさい
！！！」

…完全に怒っていた。

「あはは…藪蛇どころかドラゴンを突いた気がする……」

「桜内隊長の本気の本気のバックアップ…勝てる気がしないですよ」

キヤロは半分涙目になっていた。

「…私たちで何分ぐらいかな？」

「頑張つて5分かな？」

「しかも真優ちゃんだから…その半分ぐらいかな」

その答えを聞きながら、子供の方は顔面蒼白になっていた。

その部分は自業自得だろう。

「それじゃ、始めるぞ…100数えたらこっちも動く」

その瞬間、一斉にバラけた。

「皆は早いな…こっちも行くぞ。視界をリンク!!」

シャインと真優の左目が紅色になった。

流は両目が紅色に変化していった。

「さて、スピードブースターセット」

次の瞬間、大きく飛び立った。

「真優はP - 1587にキヤロがいて、シャインはN - 7798に

リオとコロナが潜んでいる」

『了解』』

そして、次の瞬間、光の柱が指定した場所から上がった。

「キャロとリオ、コロナの三人リタイア…っ」と

そして、簡潔に次の人が潜伏くしてる場所を教えた。

そして、5分後……

「全員見つけだしっ」と

「む…無理…シャインさんのあの速さは」

「リオのゴーレムの大群の脇をすり抜けてタッチして私に来るなんて」

「あの場面は攪乱かつ捌くことが出来るのを用意しないとイケないから」

「本当は全部行動不能にしても良かったんですけど」

その言葉に二人は呆れていた。

「アインハルトさんの場合はどうだったんですか？」

「殺気が無く簡単に近づかれて終わりました……」

小さな気はあったと思うがそれに対応が出来なかったのだろう。

「悔しいです」

そんなこんだで鬼ごっこは幕を閉じた。

その昼食後は思い思いの場所に行った。

俺は、自分のベッドで横になっていた。

「マスター、キツイですか？」

「ん…あんな全力の時間と未来視をしたんだから少しダルイ」

それは、仕方ないと言う顔で二人が見ていた。

元々、副作用を抑える方法が今まで無かったのだから、あの事件が本当に奇跡と言うしかない。

トントン…

軽いノックの後、二人の女性が顔を覗かせてきた。

「気分の方はどう？」

そこに居たのは、なのはとフェイトだった。

「気がついていたんだ」

「けど、気がついたのは私とフェイトちゃんとヴィヴィオぐらいだよ」

「ご飯食べる人があんまり食べていなかったからね」

「俺そんなに大くらいではない気がするんだけど」

いつもはご飯2杯だから。

今日に限ってあんまり食べる気がかったのだ。

「その他に気分が悪いところとか無い？」

「それは無いから心配しないで」

「けど、妙に我慢するところがあるから流くんは」

「あ、あはは……」

そこは苦笑いするしかなかった。

「なんか欲しい物とかあったら言ってね……出来る限りの事はするか」

「うん、ありがとう」

そして二人が出て行った時に携帯がなった。

携帯を取り出し、ディスプレイを覗いた。

「朱雀さんから……一体どうしたんだらう？」

そして、携帯の通信ボタンを押した。

「はい」

『流か久しいな…ちよいと急なんだがお願いがあるんだ』

朱雀さんがカンパいれずをお願いなんて珍しい事があるな。

「流にお願いしたいことなんだ…頼めるか？」

それは、物語が一気に展開していった。

第37話：鬼ごっこ？（後書き）

放送事故のため雑談は中止します。

フィー『待ちなさい！』

第38話：バカとテストは使い様？（前書き）

拙すぎる文ですが久々の更新です。

第38話：バカとテストは使い様？

「俺ってホントに待たされてる場面が多いよね」

俺は学校の門の前で立たすんでいた。

とりあえず朱雀さんの頼みだから仕方ないんだけど。

俺は溜息を吐きながら上の看板を見た。

私立”文月学園”と書かれていた。

俺の学園よりか広いよな……ここ。

「遅くなりました……桜内流君で合ってますか」

「はい、間違いないです。大柰朱雀様より藤堂力オル様に手紙と言伝をお預かりしました」

「……解りました。私の後について来て下さい」

暫く考えた後、そう言っ歩き始めた。

俺も見失わないようにその後ろを歩き始めた。

ひとつの扉の前に着いた。

軽くノックすると……

「誰だい？」

「Aクラス教科担任主任の高橋洋子です。面会の希望する方が見え
ています」

「そうかい入れてあげな」

「失礼いたします」

「し……失礼します」

俺は後に続いて中に入った。

「誰の使いだい？」

少し老けた婦人がこっちを見ていた。

「朱雀様がこれないと言う事で、代理として私、桜内流が使いとし
て参りました」

「ほう、また朱雀はどうしたんだい？」

「……ぎっくり腰で動かなくなりました」

その答えで二人は半分呆けていた。

「とりあえず、信書です」

その手紙をカオルに渡した。

そして暫くして。

「あんたが護衛と調整の手助けをしてくれるって事かい」

「調整……ですか？」

「ここは普通の進学校とは違う特殊なシステムがある……試験結果で勝敗が決まる……試験召還システムって言うのがね」

「……試験の点数が召喚獣の威力になり戦うシステムですか？」

名前からしてそんな感じなんだかど。

「それであつてる……化学とオカルトが偶然に生み出したシステム……今回、そのシステムの調整に朱雀を呼びたかつたんだが……仕方ないな」

ぎっくり腰は伊達じゃないしな。

「では、君のクラスは2-Fで良いかね？」

「構いません……護衛対象がそのクラスにいるのだから」

「本来なら振り分け試験をしてからしたいんだがな」

暫くすると、男性の教員が現れた。

「君の担任の西村宗一だ。よろしく頼む」

「桜内流です。こちらこそよろしく願います」

「まあ、癖のあるのが多いがよろしく頼む」

「は、はあ」

その言葉が何を意味しているのかいまいち理解が出来て無かった。

教室には入ったときその言葉が理解できた。

机がちゃぶ台つて……昭和初期に戻った感じがしたのは気のせいか。昭和初期よりかあるか。

「転校して来ました、桜内流と言います。宜しく願います」

「席は、吉井の後ろで良いな」

「先生、それは無いよ!!」

男が後ろに来るって言うのは嫌なもんだろっな。

「つべこべ言うな以上だ!!」

西川先生のHRが終わると数名が俺の席に来た。

「それより災難だな…このクラスに来るなんて」

「確かにここに来る時にAクラスの中を見てきたけど…凄い豪華だったな」

あれは勉強する設備と言うか娯楽に近い物があるような気がする。

「けど、確か交換する方法があるんだっけ？」

「……召喚試験戦争」

カメラを持った男子がぼそりと呟いた。

「えっと、自己紹介してもらっても良いかな？」

「僕は吉井明久」

「木下秀吉じゃ」

「島田美波よ。宜しく」

「姫路瑞希です。宜しくお願いします」

「…土屋康太」

全員、時計回りに自己紹介していった。

「今日の放課後に召喚戦争をするんだが、回復試験を受けてもらっていいか？」

つその後ろから赤髪の男子が出てきた。

「そっか…編入試験してないから点数がないんだっけ……了解した。君は？」

「2・Fクラスの代表の坂本雄二だ。宜しく頼むな」

「了解」

放課後、回復試験の教室には入った。

「教科はどうします？」

俺は一瞬考えて。

「全課目をお願いします」

回復試験の先生が驚きの顔をしていたが直ぐにプリントを用意した。数学・英語・科学・古典・国語・歴史など全ての教科の解答を解いていった。

その行動に、先生は丸くしていった。

解答には15分も掛からない時間だった。

そして、テストの点数は直ぐに召喚獣に反映した。

それを確認すると急いで戦闘場所に向かった。

「今の状況は？」

「少しおされ気味…打開策無いか？」

今は古典の先生がエリアを展開している。

「ここは俺が抑えるから今のうちに数学の先生を連れてきて」

その言葉に、頷いて何人かの生徒は下がった。

「強気が出てきたか本当のバカだな」

「残念ですが…それが負け犬の遠吠えになりますよ」

その言葉に、廊下に対峙していた生徒を睨んだ。

「行きます…試験召喚【サモン】!!!」

すると、杖を持った魔術師の服を着た召喚獣が立っていた。

特別製と学園長が行っていたけど…何処なんだ。

「いけー!!!」

一人の生徒が攻撃を仕掛けてきた。

「くっ!?!」

召喚獣が攻撃をブロックした瞬間、痛みがダイレクトに伝わってきた。

「なっ…痛みがダイレクトに伝わってくる!?!」

まさかこれが特別製って事か。

「お前、【観察処分者】ってことか…なら消えろ!!!」

痛みが来るって事なら、動きがシンク口出来るって言うこと。

次の瞬間、相手の攻撃を簡単に避けて杖で大打撃を与えた。

「て、点数が500点オーバーだと!?!」

「腕輪の効果発動…空間雷撃!!!」

頭上に空間が開いた瞬間、敵の召喚獣にヒットしていった。

そして、0点になった生徒は西村先生によって補習室に連れて行かれた。

「す、凄い……」

「遅くなりました」

次の瞬間、姫路さんが参戦して召喚獣を召喚した。

「400点オーバーが二人!？」

そして、最後は二人がとどめをしてFクラスが勝利した。

「本当に二人には助かったよ」

今回は設備の交換なしでEクラスに勝利の余韻を噛み締めていた。

「けど、【観察処分者】って何の事だ？」

その言葉にその場に居た全員が驚いていた。

「…観察処分者って言うのは簡単に言えば先生の雑用係と考えれば良いと思う」

「……何となく、理解できた」

簡単に言えば【要注意人物】と言うことですか。

なんか納得した。

「さて、帰るか…流って家は何処なんだ？」

「マンションなんだけど……一人暮らしだし今日は外食確定かな」

まだ荷物をといていない状態だし、冷蔵庫の中も何も無いし、食事してから買い物して帰るか。

「そっか…では、また明日な」

五人は帰っていった。

俺は、それを確認した後ポケットから指輪を取り出した。

「とりあえず、緊急で作ったけど上手く作動するか」

指輪を右手の人指し指に嵌めた。

「アウエイクン!!!」

すると、召喚フィールドを形成することが成功した。

「…暴走は無し、何とか自分用には作る事は出来たけど…これを取

られたらなんとも言えないしな」

解除した後、指輪をポケットに仕舞い込んだ。

俺が靴箱に行くと、一人の女子が帰ろうとしていた。

「あの靴箱はAクラスの靴箱だよな」

覗きたいんだが、なんか嫌味が飛んできそうなんだが。

「けど、あの後姿、木下君にそっくりだな…二卵性双生児かなんかな？」

一卵性は性別までが同じだからたぶん合ってるだろうな。

「バカな考えはやめて帰るか」

帰ろうとした時

「おいお前!!」

振り返ると、三人の男子生徒が立っていた。

「な、なに……」

「あの試召戦争時はまぐれだ……だから、お前に模擬試召を申し込む!!」

Dクラスの男子が模擬試召戦争を仕掛けてきた。

半ばやけくそに見えてきたが。

「は、はい!？」

いやいや、今日は帰らしてくれよ。

そんな事を言っても無理だろうな。

「数学を申し込みます」

「承認します!!」

数学の教師が承認許可をした瞬間、空間が変わった。

「『試験召喚【サモン】』」

『疲れてると思うけどもう少しだけ頑張ってくれ……』

三人と教師には聞こえないぐらい小さな声で呟いた。

「試験召喚【サモン】」

そして、相手の召喚獣は250〜280点の威力だった。

「始め!!」

先生の声と同時に3人が一気に突っ込んできた。

避ける事が出来ず、三人の攻撃を受け止めてしまった。

「ぐうっ……」

攻撃がダイレクトに伝わり、一瞬だけ気が遠のきそうになった。

「……まだまだ……!!」

「……………能力リンク……!!」

次の瞬間、流の召喚獣が姿が消えた。

『崩練拳二式【九連剛撃】』

三匹の召喚獣の後ろに出た瞬間、召喚獣の点数が一気に0点になった。

そして、三人は点数を見て唖然となっていた。

「481点!？」

次の瞬間、三人は鉄人に連行され地獄の補習室に連れて行かれた。

「……ありがとう」

次の瞬間、その召喚獣は消えた。

そして、小さく溜息を吐いた。

「いつっ……」

右腕を見ると腕は内出血をしていた。

シップして休むしかないな。

俺は、鞆を持ちそのまま家路に着いた。

次の日、俺は教室に向かった。

「あれ？」

女子が一人教室の外に居た。

「あれって昨日、靴箱で見た人だよな」

たぶん、木下さんの身内の人だと思うけど。

「すいません、教室には入れないんですけど」

「きゃ!？」

驚いて教室に流れ込んだ。

「あ、姉上!？」

やっぱり木下君の身内だったか。

「桜内さん、おはよう御座います」

「おはよう、桜内くん」

島田さんと姫路さんが挨拶して来た。

その他の人たちも挨拶を返してくれた。

「あれ、桜内くん…その腕？」

右手の包帯してるのを島田さんが気がついた。

「明け方に寝相悪くベッドから落ちちゃって…酷くは無いから気にしないでいいから」

「無理はしないでくださいね」

「了解」

実は嘘なんだけど…

「それは嘘よ」

今まで倒れていた木下（姉）が急に起きてきた。

「昨日の放課後に、負けたDクラスの男子三人と模擬試召戦をして居たんだから」

その言葉で、雄二たちは驚いていた。

「それでどうだったの？」

「取り敢えずは勝ったよ…そのまま片付けもしないまま寝ちゃったけど」

「しかも、相手は250点以上の男子だからね」

しっかりと見られていたんだね。

「その点数…Bクラス並じゃないか」

「この人はその二倍近く…481点だったのよ」

その言葉にその場に居た全員が驚きを隠せないで居た。

「さて、その点数は回復試験を受けた時の点数だよな!？」

「しかもあの時のエリアが古典だったんだぞ?!」

その言葉に次は木下（姉）が驚きを隠せていなかった。

「回復試験を15分に戻ってきたんだよな」

その場に居た全員が頷いて居た。

「その2教科とも400点以上の点数」

「本当ならAクラス並の人材」

「【観察処分者】だからそれは無いな……このクラスの人を貶しに来ただけなら帰ってくれますか？」

俺は、木下（姉）を睨みつけた。

「くっ……」

そしてそのまま教室に帰っていった。

「何とかなったか……」

はったりが通用してよかった。

そして、一日が始まった。

第38話：バカとテストは使い様？（後書き）

閲覧していただき有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3239p/>

D.C.?&なのは ~時を越えし者の物語~

2012年1月1日01時49分発行